

僕の亀仙流アカデミア

怪獣馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢を諦めかけてた僕に希望をくれたのは、最高のヒーローと最高の師匠だった。

僕のヒーローアカデミアとドラゴンボールのクロスオーバーです。

オリ主無しで転生もなし、チートもなしです。

ドラゴンボールは超からヒーローアカデミアは原作前からのスタートになります。

2月19日、タグを更新しました。

???は物語上で明確にした後に変えます。

因みにドラゴンボールは既読推奨（特に無印編）です。
→タグに入りきりませんでした。

2020年4月16日、スランプに陥りました。

回復を兼ねて暫くは別作品の方に集中します。

少なくとも半年間は休止致します。

無事に復活したので再開します。

目次

番外編

番外編 恋する上鳴電気（TSネタで

す）

1

亀仙流修行編

第一幕 僕は緑谷出久。ダメダメ少年

です。

18

めちやくちや！きつすぎる修行！

29

出久のライバル登場？

49

己を信じよ！出久の悪夢！

58

個性の呪い!? 上鳴電気の新妻！

75

二人の未熟者

93

二人の戦い！亀仙人vs出久&電気

106

雄英高校入学編

オールマイト

132

雄英入学試験……まさかの瞬殺!!?

162

見せつける超パワー！個性把握体力テ

スト

182

始まる寮生活……管理人は●●●

218

因縁の決戦！出久vs勝己

265

絶望と夢と絆編

完全なる敗北！世界最強の殺し屋

294

燃えよ！若き亀仙流の弟子達

342

出久の悪夢、再び！

377

友情の絆！出久&電気vs1年生ヒ

ロー科

414

亀仙流短編集

448

雄英体育祭編

迫る、雄英体育祭！そしてやってくる

強き二人。

465

雄英体育祭、開幕！

490

激闘 騎馬大合戦！

512

選ばれた16人！

533

激動！雄英体育祭！！

553

まさかの敗北？上鳴電気VS骨拔柔造

571

激闘！緑谷出久VS切島鋭児郎

589

最速王決定戦！そして轟家大作戦！

614

轟け熱き焰、轟焦凍VS緑谷出久！

638

激突！準決勝

663

友情の決勝戦 前編

678

友情の決勝戦 中編

689

友情の決勝戦 後編

702

ブルマの買い物	—	728
煩惱3人組の奮闘	—	738
出久の葛藤とお茶子とチチ	—	748
出久と響香のデート!?	part 1	
恋愛道中	—	769
出久と響香のデート!?	part 2	
DEKU:ZERO	—	782
ステインVS インゲニウムズfeat		
ザ・クロウラー		
来たれ!ヒーローネーム!!	—	808
天晴と天哉	—	822
空から堕ちて	—	843
インゲニウム2号	—	858

ステインVSインゲニウム&ザ・クロウラー
—
880

番外編

番外編 恋する上鳴電気（TSネタです）

雄英体育祭が終わり、これから職業体験が始まるうとしていた矢先に敵が学校内に侵入した。

これはそんな敵がとんでもない置き土産をしたから始まった出久の波乱万丈な1日である。

出久は今日も元気に頑張ろうと寮から学校に行く。

いつもは電気も一緒であるが、今日は電気が少し寝不足な為に出久はさつさと校舎に来たのだ。

教室に入り、皆も入ってくるが電気だけ入ってこない。

出久は流石に休みはいくらなんでもしなくとも思おうが何故に来ないのか気になり、メー

ルを送ったが返信は来なかった。

すると突然アラームがなった。

A組だけでなく、B組も何事かと廊下に出る。

すると、消太とブラドがやってくる。

「先生方、どうかされたのですか？」

皆の学級委員長天哉が先生に聞く。

「敵が侵入した！」

「どうやら寮にいるらしい、幸いにも武天老師さん達がすぐさま取り押さえたが……」

「どうかしたんですか？」

「上鳴が敵の個性で……」

その言葉を聞くと出久はすぐさま飛び出した。

大事な親友が敵の個性でやられたのだ。

心配して当然だ。

すぐに校舎を飛び出て寮に戻った。

他の生徒達も寮に向かった。

因みにこの日は敵が堂々と侵入した為に臨時休校となった。

全力で駆ける出久。

そして寮に急いで入る。

「電気、大丈夫!？」

出久が寮に入るとすぐさま制服姿の電気が出久に抱きつく。

「出久〜!!」

大泣きして出久に抱きつく電気。

しかし、声が妙に高くなり、身長も出久に比べて小さくなっていた。

「え?・え?・え?」

「私、女になっちゃった!!」

電気がそう言うとお出久の体に妙に柔らかい物が当たる。

出久はその感触がなんなのかすぐにはわかり、

「えええええええ〜?!!?!!」

大声でその事実を驚いた。



あれから10分経って、他のヒーロー科の生徒も戻ってきて、敵を取り押さえて先生に引き渡した悟空達も戻ってきた。

談話スペースのソファに座りながら電気は出久の隣で膝を抱え込んでいた。

「つまり、朝起きて着替えて終わったら敵とばったり出くわして個性を受けた所を悟空さん達に見つけて貰って取り押さえて貰って気付いたらそうなってたって事？」

「うん」

出久の腕に抱きつきながら頷く電気。

いつもの明るい電気はそこにいなかった。

「しかし、上鳴のそれはいつ戻るんだ？」

「何でも1日経てば戻るらしい」

皆の疑問に天津飯が答える。

皆は1日経てば戻ることに安心した。

「そうだ電気、亀仙豆は？」

「じいちゃん達が敵を引き渡してる間にもう試した」

どうやら効果がなかったらしい。

「まあこれも修業だと思え・・・しかしボンキュボンのナイスバディじゃな」

「なあ上鳴、俺達友達だろ？」

エロ魔人の二人が電気を最低な目で見ると。

電気は二人の目に怯える。

実際に今の電気の体型はたぶんヒーロー科の一年の中では一番良い。

ナイスバディであるが変に出ている分けでも括れてる分けでもない。

そして声も可愛くなり、ヒーロー科一の美少女と化したのだ。

出久は怯えてる電気に抱きつきながら庇う。

大切な親友が邪な最低コンビから守る為である。

「何だよ!?!緑谷!?!」

「そうじゃ、そんな羨ましい事をしよって!」

「電気には指一本触れさせない!」

出久は二人を睨む。

二人は出久の目を見て思わず身震いしてしまう。

無茶苦茶怖いのだ。

しかも、電気を抱き締めが強くなっていった。

その姿に心を打たれたのか、ヒーロー科女子達も二人を守ろうと亀仙人や実の前に立つ。

流石のエロ魔人二人もこうなってはどうにもならないので一先ず諦める事にした。

「大丈夫だよ、電気」

「出久」

抱きつき会う二人。

端から見れば恋人に見えるが出久にその感情はない。



あれから、消太がすぐにやって来て電気を見たが治らなかつた。

敵が言うにはどんな個性でも治すのは不可能との事で一日経たないと戻らないらしい。

消太は実のように見ても効果がない個性も知っているため、では言われた通りに待つことにした。

” 因みにやった理由が 男だったら反転させれば女になりやれると思つてやったの事

最低下劣な犯罪者はすぐさまに警察に引き渡されたが、道徳倫理を教えるミッドナイトが犯罪者で遊びまくつた後に引き渡した。

かなり、怯えていて不気味だったが、誰もミッドナイトに何をやったか聞かなかつた。

電気は一日経てば戻ると信じて談話スペースにいた。

エロ魔人二人がいつ襲って来るか分からない為、出久から離れなかった。

出久も電気は今まで支えられてきた借りを返すためにずっと一緒にいることにした。

端から見ればただの恋人である。

実が出久に対して血の涙を流していた。

臨時休校になった為に昼食は亀仙人がチャーハンを作った。

出久と電気は何時でも食べる時は二人の間に亀仙人が入るが、今日は亀仙人は出久の右隣にいた。電気は出久の左隣である。

「しかし、じいちゃんの手料理は相変わらず美味しい！」

笑顔で食べる電気。

亀仙人は純粹に誉めてくれた事に対して嬉しく思った。

「お礼をしてくれてもエエんじゃがの〜」

手をワキワキと動かす亀仙人。

やっつてることが最低である。

流石は煩惱の妖怪爺である。

「師匠、ダメです」

出久が亀仙人を睨み、何処から取り出したのかフライパンで亀仙人の頭を叩く。
とてつもない大きな音が響く。

そして亀仙人はそのまま気を失った。

「よしー」

「容赦ねえ・・・」

出久の容赦の無さにクリリンが唾然とする。

ここまで強烈な攻撃はチチとブルマ以外やっていなかったが、どうやら二人から学んだらしい。

「出久、ありがとう」

「良いよ、電気は安心してて守るから」

出久は電気を口説いているのかと思うくらいに甘い言葉を言う。

電気もそれに対して笑顔で答える。

「あ、おべんとついてる」

「え？」

「ほい」

電気が出久の頬についてたおべんとを食べる。

何処となく二人の間にピンクのオーラが溢れる。

((((昼間っからイチャイチャするな!))))

(仲良いな)

それを見ていた全員(悟空以外)は昼間からイチャイチャしまくってる二人に文句を言いたいが二人のそんな雰囲気と言う気も起こらず、さつさとチャーハンを食べることにした。

砂糖を食べているかのような異様に甘いチャーハンだった。

全員(悟空以外)食後に、コーヒーを飲んだが砂糖を入れてないのに甘かったのには驚いた。

因みにピッコロも産まれて初めてコーヒーを飲んだが異様な甘さを感じたのでそれ以降の人生では決して飲まなかった。

絶対にナメック星人の味覚の問題ではないと思う。



電気は談話スペースで勉強していた。

本なら部屋でやった方が良いが、いつ邪なエロ魔人が来るか分からないので、談話スペースでやることになったのだが、出久と電気以外誰もいなかった。

理由は至極単純で

「出久、この問題教えて〜」

「教えてって、この問題なら電気一人で行けるよ」

「えー嘘ー」

「ホントだよ、昨日の授業で教えて貰った式を応用すれば・・・あ、違う。別の公式が必要引っかけだ」

「ホラホラホラ」

頬を膨らませて抗議する電気。

「でもその公式も習ったよ、この前の関数の公式を・・・」

「あつなるほど、サンキュー」

こんな風は無自覚にイチャイチャしているからやっているのだ。

全員、コーヒーを飲み過ぎてトイレに何回か行ったら、もう手遅れだと思つて部屋に戻つたのだ。

悟空は全然平気で亀仙人も残ろうとしたが、クリリンを始めとするZ戦士に連れられ

て、外に行った。

実は血の涙を流しすぎてリカバリーガールの保健室行きになった。亀仙豆を食べようとしたらベジータが「下らん事に使うな」と言つて食べさせなかった。

「皆、部屋に行ったね。電気も今なら部屋で・・・」

「やだ！」

出久が今なら部屋に戻つても誰にもばれないから戻ろうとしたが、電気は出久の腕に抱きついて止めた。

「出久〜」

絶対に目からキラキラビームを出してるとしか思えないほどの涙目？で出久を見る電気。

出久はその姿に顔を赤くした。

「出久？」

「ごめん、ちょっとトイレ」

出久はトイレに行った。



（何でキュンつてなるんだよ!?!）

ブツブツ考えながら電気の元に戻る出久。

明らかに動揺していた。

電気の元に戻ると電気は座りながら体を伸ばしていた。

体育祭も終わって本格的に暑くなり始めたから半袖に私服が変わって来たが、伸びる手に生腕、そして半袖からチラリと見える脇。

また電気は髪を結んでいるために首もとが見えやすくなっていた。

男の時に比べて細くて綺麗な首。

どれも男を惑わすには破壊力充分だった。

出久はどきまぎしながら、戻って勉強を続けた。



午後8時、晩飯を食べて個人でやる勉強も終わり、部屋でのんびりしていた出久。

何時もは電気と軽い組手でもやるんだが、今日はとてもそんな気に二人ともなれなかった。

何時もの100キロの重りを着けて軽くストレッチをしていると突然ドアがノックされる。

「はい？」

「出久、私だ」

出久は電氣の声を聞くと急いで扉を開けた。

出久の部屋の隣はエロ魔人が一人の実だから、絶対に来たら危ないのにわざわざ来た電氣。

実に見つかりとヤバイと思つて出久は電氣をすぐに部屋に入れた。

「サンキュー」

「何やってんの？隣は峰田君だよ？」

「だからだよ。隣ならまさかいるとは思わねえだろ？」

電氣はサムズアップをしながら答える。

出久はため息を吐く。

「で、どうしたの？」

「今は自由時間。何処に居ようが良いじゃん」

「いや、僕の部屋」

「ダメ？」

電氣はまた出久を見る。

出久は強く言えずに部屋でいて良いと言つた。

「全く・・・」

出久は胡座を欠いて座る。

そしたら電気は出久の胡座の上に座ったのだ。

「ちよつと!？」

「良いじゃん、減るもんじゃ無いし」

「いや、僕は男で電気は今、女の子だよ!？」

出久は思っていた事を言った。

実際に女になった電気の柔らかい尻に反応して出久の息子が大きくなる。

電気は笑いながら、何とズボンの上から出久の息子を触る。

「ちよつと、待って!」

出久は焦って電気の肩を掴んで離れさせる。

出久は立って電気から離れるようにベットの近くに行く。

「何?」

「何考えてんの?・・・僕には好きな子がいるって」

「知ってるよ」

電気は出久をベットの寝転がす。

そして仰向けに倒れてる出久の体を股に挟むようにして座る。

「正直、出久の好きな子が羨ましい」

「え？」

「私は出久の事、小五から知ってて一緒に頑張ってきたから何でも知ってるのに・・・私の出久を奪おうとするその子が羨ましい」

電気は涙を静かに流しながら、肩で息をしながら話す。

出久はその状況に対して困惑していた。

「今は女の子、これで一つになっても良いよね？」

「ちよ、ちよつと待って！」

「私は出久なら良いよ」

電気はそう言いながら、出久に顔を近づける。

「出久の初めて全部頂戴・・・」

二人の唇が近づいてやがて・・・



「あー!!!・・・夢か？」

夜中に一人、三奈が出久と電気の「アー！」な夢を見て冷や汗を掻きながら起きた。何時も何時もキュンキュンした恋愛話をしたいとは思っていたが、まさかこんな夢を見るはめになるとは思ってもいなかった。

「もー何?!緑谷と上鳴がそんな事をする夢なんて誰に需要があるの!?!もーワケわかんないよー!」

三奈はそう言ってもう一回寝た。

因みに後日、出久と電気を見て夢を覚えていたのか少しビックリしていたが、現実の二人にそんな展開はドラゴンボールで願われてもありませんので安心した三奈はその夢を忘れたのであった。

亀仙流修行編

第一幕 僕は緑谷出久。ダメダメ少年です。

この世は、生まれながらにして平等ではない。

年齢四歳で、嫌でもわかる現実だ。

「止めろ、かつ、かつちゃん！これ以上は、ぼ、僕が許さないぞ」

「はっ！、無個性の癖に何、ヒーロー気取ってんだよ？デク!!」

大勢で、小さな子供をいじめてたから助けに入った。でも僕はそれだけしか出来ない。ここから大逆転みたいな事をできる『個性』がない。

そう、僕は人口の80%が何らかの超能力『個性』を持っている世界で、『無個性』で生まれた。

どう考えても、主人公じゃない、「戦闘力、たったの5か、ゴミめ」って言われて無惨に殺されるだけの人間だ。

そう、この時僕はいやほと思いきらされた。

力なき者は無力であると、でもそんな僕でも憧れてしまったんだ【ヒーロー】に



あれから、成長して僕は今、12歳。でも何も変わらない。変わってない。

あの頃と同じ弱いまま、あの時と似たような事が起こった。あの時、大勢で子供（たぶん9才）をいじめてた僕の幼なじみの爆豪勝己……かつちゃんがまた自分の取り巻きと一緒に小さな子供をいじめてたから、僕は子供を助けなきやつて思つて、助けにいつて、ボコられた。

皆の個性で徹底的に殴られて蹴られた。

どこも折れてないと思う、でもたくさん怪我をしている。痛い……痛いよ。それで、あの子が逃げられるならつて思つた。

でも、僕が殴られて蹴られる度にあの子は、顔を歪めた。誰かを救うのがヒーローなのに、何で僕は誰かを苦しめるのだろう？

結局、かつちゃんらは僕をやってて気がすんだのか？

その子には何もしなかった。

僕は、その子と別れて、ボロボロの神社の裏で座つて泣いている。

ここは僕のお気に入りの場所だ。

それに今日は凄いい曇り空だから、暗くて分かりにくい。

ここで泣いてたら、誰も気がつかないから、思いつき泣けるから。

「もう嫌だよ」

もう嫌だ、もう嫌だ、もう嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌嫌嫌嫌嫌嫌!!

もうこんな力がない体なんか、大嫌いだ!!

そんな時だった。

「どうしたんじゃ少年?」

そんな幻聴が聞こえてきた。

僕は、遂に頭がおかしくなったんだ。

だって、誰も周りにいないのにこんな声が聞こえてるんだもの、

「どうしたんじゃ?」

「誰？」

「わしの名は、武天老師。にして少年よ、何があつたのじや？」

僕は、その謎の声に全部話した。

自分の事を

なぜ泣いてるかを話した。

苦しかったから。

気が楽になると思つたんだ。

でも、言えば言うほどどんどん苦しくなつてきて、

惨めになつてきて、

話してる最中なのに

また、鼻をずるずる鳴らした。

「さぞ、辛かったのじやろう」

声が僕を慰めてくれる。

何でこんなに暖かいんだろう？

「主は、優しい心を持つているんじゃない。よく頑張つた」

僕は、その言葉を聞いて、完全に涙腺が崩壊した。

ずっと、誰かに言つて欲しかった。

僕は、弱いから、誰かに支えてもらえないと生きていけないほど弱く、脆く、幼稚な存在だから、

今も、こんな感情を出して情けない。

「どうしたんじゃ？」

「すみません。嬉しくなつて、」

「そうか・・・」



あれから、少したち、僕はやっと泣き止んだ。

声は僕を待っていてくれたみたいだ。

迷惑をかけてかけてばかりだな。

「少年よ、お主は力はないと言つたな」

「はい、僕は無個性で」

「わしが思うに、主は誰よりも凄い力を持っていると思うぞ」

「えっ？、それって・・・」

「その答えは自分で探すんじゃ」

声が、僕に提示した宿題。

こんな無力な僕に何の力があるんだろう？

「わしの力を見せてやる」

「えっ？、ど、どうやって？だつてあなたは声だけしか、聞こえないのに」

「よく見るんじゃない、近くにおるぞ」

急に声が近くなった。

後ろからまるで、最初から居たみたいな。

一瞬の恐怖を感じたが、好奇心が遙かに上回り、僕は後ろを振り向いた。

「ほら、いたじゃろ？」

何てことない、気の合う友達に話しかけるみたいにしてのお爺ちゃんは、僕に話しかけた。

髪の毛はなく、長い髭があり、アロハシャツに焦げ茶色の長ズボン、草履を履いていて、どういうわけか亀の甲羅と仙人が持っているような杖を持っている。

「あ、あ、あ、あ、」

「これこれ、会つてそうそうそんなに緊張するでない、少しばかり傷つくぞ」

「あ、あ、す、すみました！」

何てことを、知らない人に会つてそうそう失礼な事をしてしまった。

急いで立ち上がり、頭を下げた。

「はは、冗談じゃ。そんなに畏まらんでよろしい」

「あ、ありがとうございます？」

はて、僕は知らない人なのに何でこんなに打ち解けて話してるんだ？

「それは、主が善人だからじゃ」

「えっ？こ、心を？」

「完全じゃないがある程度は読めるぞ」

「す、凄い個性ですね」

「まあ、ある種の技術の延長線上にあるものなんじゃが、その方がいいか」

何を言っているのか、あまりわからないけどどうやらこの人の個性は、心を読む個性みたいだ。

「でも、凄い個性ですよ」

「そうかの？」

「ええ、もしも人質をとった犯人がいたら、犯人の心理がわかるし、普段のカウンセリングでも心を閉ざした人の心理を読み取って解決策を練られるし、いや、そこはあえて読んでしまったら並の精神力じゃ、潰れてしまうのでは？・・・」

「これこれ、そんなに分析する必要はないぞ」

「す、すみません、いつもの癖で」

また、やつちやった！この癖はなかなか直らないな。

「その癖は、いずれお主の役に立つじやろう、じゃが深読みしすぎて、目の前の事が疎かになってはいかんぞ」

「は、はい、あのそれで、さつき言っていた・・・」

「おお、忘れてた。お主の名は？」

「み、緑谷出久です」

「よし、出久よ、お主、わしの元で修行でもしてみんか？」

「しゅ、修行ですか？」

「そうじゃ？」

「で、でも一体どうして？」

「何、お主に興味が引かれたんじや」

「で、でも僕には個性がなくて・・・」

「個性何てものはたかが自分を作る上の一部分でしかないわ。大事なものは、それを使うものの心じや。主は力が無いものは無力と思ってるじやろうが、それにある続きを忘れておる。正義なき力は暴力なり、それを忘れてさえいなければ、後は力をつけるだけで良い」

この人の言った言葉に僕は目から鱗が落ちた。

何で、忘れてたんだろう。

オールマイトも言つてたじゃないか、大事なものは個性じゃなくて心だつて、僕は何でこれを忘れてたんだろう？

「あ、あの、僕は本当に鍛えたら強くなりましたか？誰かを守れるヒーローになれますか？」

「それは、わしにもわからぬ。じゃが、ヒーローの定義なぞ曖昧じゃが、もしもヒーローになる条件があるとするとするなら、それは恐らく自分が無力なのをわかつた上で立ち向かわなくてはいけない時に立ち向かう覚悟だと思ふぞ。主の努力しだいじゃ、本当に救う事は出来ないかも知れない。じゃが、少なくともそこに救いに行ける力は得られる」

重い言葉だ。

本当に重く、そして重圧が凄い。

でも、それでも憧れたんだ。

「お願いします。僕に修行をつけて下さい」

お爺ちゃんは僕をただただ真つ直ぐ見て、うなずいた。

「いい目しておる。その目をしている者を見るのは、わしの弟子達以外じゃ何十年ぶりじゃろうな、いいものを見せよう」

すると、お爺ちゃんは僕に背を向けて一、二歩、歩いて杖と甲羅を置き、一呼吸する。

「よく、見ておきなさい」

お爺ちゃんは、中腰になって、力をためた。

ためてる感じ何て、実際に見ても何もわからないが、確かにそう見えたとしか言い表す事が出来ない。

そしたら、お爺ちゃんの体が急に大きくなった。

比喩ではなく、本当に急に大きくなったのだ。

さつきまでは、至って普通のお爺ちゃんに見えたが、今は筋骨隆々のマツチヨになったんだ。

その大きさは、オールマイト以上に大きい。

「出久よ、これは修行の成果の片鱗じゃ、そしてこれがわしの代名詞」

かゝめゝはゝめゝ波!!!

かめはめ波と叫びながら、空に向かって手を突き上げた。

すると、どういう訳か、手からビームが飛び出し、そのビームは、延々と空に上昇し、曇り空を晴天に変えた。

急に眩しい光が降り注ぎ、僕は目を閉じて手で光を遮る。

「これ、よく見てみなさい。良い天気じゃ」

僕は、手を戻し、目を開けると、元の体型に戻っていたお爺ちゃんがいた。

「どうじゃ？これで、修行に励めるぞ」

「ぼ、僕はこのような力を得られるでしょうか？」

「わからぬ。それは結局、お主の努力しだいじゃ。じゃが、この片鱗に行くまでには誰も苦痛といえる努力をしておる。少なくともその片鱗までは行けると約束できる」

僕みたいな夢を諦めてた人間でも、力を得られる。

その提示だけしてくれただけでも嬉しい。

「よろしく、お願いします」

「よし、ついてきなさい。出久よ」

「はいー」

もう一度、僕は夢を目指したい。

これは僕が最高に最強なヒーローになるまでの物語だ。

めちゃくちゃ!きつすぎる修行!

あれから、僕と師匠はどうしたかと言うと、

全然、修行をしてない。

理由は、師匠が言うには2つ。

一つは僕の私生活を知らないのと修行の献立が出来ないから、僕の私生活の観察。

もう一つが今、一番手間が掛かってるお母さんの説得だ。

あの後、師匠はすぐに僕のお母さんに事情の説明をしようとしたが、住所不特定の無職な師匠の言うことをすぐに信じろと言うのが無理な話で、僕が説得しようとしたけど、お母さんは無理だと言いだ。

一先ず、師匠はまたあの神社に戻った。

その後、僕とお母さんと話し合いをして、その翌日に師匠も一緒になって話し合いをして、お母さんが出した条件は2つ。

一つは、この一週間でお母さんが師匠の私生活を見て、判断するというもの。

もう一つが学業に支障をきたさないことの2つ。

最初の数日はとにかく大変だったよ。

お母さんが師匠の今の生活場所の神社に行ったら、あの・・・言葉にするのは凄いい恥ずかしいけど・・・大量の工、エロ本があつたらしく、もうその日の晩に即刻、会議で2日目も、いわゆる師匠の自堕落でダメダメな部分が目立った。3日目になると、お母さんの師匠に対する印象がどういいうわけか逆転してた。

理由を聞いたら、師匠がヴィランを撃退したところを目撃したらしい。僕と同じくらいの子供を守るために。

師匠は、その後、警察から事情聴取を受けたが、正当防衛と認められたのでなんとかなったようだ。

戸籍はどうしたんだろう？

それを師匠に聞いたら、内緒と言われて、無理に聞く気はなくなつた。

それから、更に4日がたち、師匠の元で修行をしていいのかどうか今、お母さんと師匠が話し合いをしている。

当事者の僕は、自分の部屋の中だ。

お母さんがどうしても師匠に聞きたいことがあると言ひ。僕を部屋に行くように話したのだ。

お母さんの言ってる事も正しいし、間違つてない。

でも、僕はそれでも強くなりたい。

???

私、緑谷引子は今、武天老師さんと話し合いをしている。最初、この人と会ったとき、私は今までにないくらい恐怖を感じていた。相手の心を読むことができる個性で、出久の師匠になると言っている。

私はあの子に個性を与える事が出来なかった、今でもあの子はそれで苦しんでいる。無個性と知ったとき、パソコンの前で泣いていたあの子に私は謝る事しか出来なかった。

私は出久の事が何よりも大切だし、愛している。だからあの子がやりたいって言った我が儘には付き合おうし、その覚悟はできているつもりだ。

だからこそ、この人を私は冷静に判断しないとイケない。私も含めた皆が、個性がないと言うだけであの子をずっと苦しめていたから、もしもこの人がそんな人なら、例え出久がこの人の元で修行したいと言っても私はそれを許可できない。

「それで、聞きたいのですがわしはあなたの出した条件を満たしているのでしょうか?」「はい、最初はすぐにダメと言いたかったです。今では大丈夫と私は判断しています。」

「それは何より」

「一つ、聞きたいのですが、なぜ、出久を鍛えようど?」

「失礼ながら、率直にわしの主観が入りますが、言わせてもらいます」

「どうぞで」

「わしは、最初、あの子が泣いているのを見て、年寄りの老婆心が働いたのでしようかな? あの子の話し相手になろうと思ひ、あの子と話をしました。話をしている内にわしの個性もあり、あの子の何よりも純粹な正義感に突き動かされたのです。わしには五人の弟子がいます。今は遠いところにおりますが、皆、あの子と同じ目をしておりました。だから、彼に知ってほしいのです。努力で才能は凌駕できると」

私はその言葉を聞いて、少し涙腺が緩んだ。

全然、この人の事は知らないし、まだ信用しきれてない部分もある。でも、信じてみよう。

「息子をよろしくお願ひします。ですが、もしも息子の思ひを踏みにじるのであつたら」

「わかつております。その時は、罰を受けます」

出久、あの時、ごめんしか言えなくてごめんね。

お母さんにもう一度、チャンスを下さい。

???

わしは、なぜ、この世界に来てしまったのだろう。

力の大会が終わって、暫くはのんびりしようと思つたのに、なぜか布団に寝て起きたら、全く知らんところにおるとは、不老となつて何百年も生きておるが初めての経験じゃつた。

わしの世界に似た雰囲気を持つておつたから、慣れるのにそこまで時間が掛からなかったのは幸いじゃつた。

あまり人が入らん山が都会にあつたのが幸いか、わしが持つておるカプセル入れに大分前のビンゴ大会でもらつた古い神社が会つて山の中にそれを出した。

それから、2ヶ月。

不老のわしにとつては案外短い時間じゃつた。色々あつたものの何とか不自由なく暮らしておる。

これも優しき人々のおかげじゃ。

まあ、昔、ブルマからもらつたダイヤがあつたおかげじゃけど、勿体なくて売らずにカプセルに入れといつて良かったわい。

人生を面白おかしく楽しく過ごす。

わしの生き方を変えずにすんだのは良かったわい。

そんなおりじやった

出久と出会ったのは

最初は、傍観と決めておった。わしは、世界の危機とかなら、助けられる。牛魔王のフライパン山のような事でも何とかできる。水に困ってたナムという青年も助けられた。心を読むという技を使つてな。じゃがこの子の抱えている傷や問題はわしには治せない。

心の傷は、結局本人の気の持ちようではか治せないから、わしにあの子を助ける事は出来ない。

そう思つてた。

じゃが、何回もあの子の心を読んで、わしは助けようと思つた。

なぜ、そうしたのかわからない。

じゃが、悟空もクリリンもヤムチャも悟飯もそして牛魔王も似たような心を持つてる。

欲に負けることもたくさんあるが、何より心が強い事。

わしより若い者達は、皆正しき道に進んだ。

だから、わしは出久の目の前ではめ波をやつた。

もしも、これを見ても目が変わらぬようなら、二度と姿を見せぬつもりじゃったが、目が変わった。

その目は、クリリンに似ておった。

だから、わしはその目を信じようと思った。

才能は、はつきり言ってない。

精神も弱い。

じゃが、誰よりも強い物を持つておる。

この老いぼれにできる事をする。

出久を導く。

人生を面白おかしく楽しく過ぐすことがどれ程救いになるか、この子から系譜していけばいい。

これが亀仙流じゃから

???

師匠のところまで修行をしても良いとお母さんの許可が降りた。

嬉しかった。

ただ、お母さんと約束した。

心配は掛けさせない。

僕は雄英に入る。

だから、僕は頑張るんだ。オールマイトのようなヒーローになるために。

だから、どんな修行にも耐えてやる。

???

朝の午前3時。

普通に平日なこの日から修行が始まった。

「出久よ、修行が始まる前に修行とは何なのかを説明する。修行し強くなるとはただ、相手を倒すためでもなく、ピチピチギヤルにあらやだー強いねーんカツコいいーと言われ
るためでもない。己に負けぬ為にするのじゃ。ここでの経験は例えヒーローに成れず
とも己の精神を鍛え、そして良き人間になるためにするのじゃ。わかったか？」

「難しいです。元々僕は己に負けている人間ですし、そもそも何かをやるってなつても
自分の気分次第で結構ズボラですし、色々と・・・」

「若い内から、そんなに難しく考えるんじゃない。大切なのは、己を信じる事じゃ。己を
信じた者だけが常に限界以上の力を出すのじゃ。自分を信じる。」

自分を信じろってどうやって信じれば良いんだろ?

「まあ、実際にやればわかるわい。それじゃまずは軽く目的地まで約一キロのランニングじゃ」

師匠が先に走った後を僕は追いかけた。

はつきり言つて、全然体を鍛えた事がなかったから、結構しんどい。

何とか一キロ走つたが、体力が全くない僕はすでにこの時点でぜえぜえいつてる。

「こんなんじゃ、先が思いやられるぞ」

「す、すみません」

「それじゃ、最初の修行じゃ、牛乳配達をしてもらう」

「ぎゅ、牛乳配達?」

「そうじゃ、個性牛乳の配達じゃ」

「個性牛乳?!」

【説明しよう。個性がこの世に出て、メリットだけではなく当然デメリットも存在する。中には、辺境な所に住まないと生きていけないような個性も平然とある。勿論医療の発展でサポートアイテムをつければ問題はないが、中には自然の姿で一生を終えたい人もいる。個性牛乳とはすなわち、辺境な所に住んでいる人限定の牛乳配達便なのである】
「勿論、一件一件が凄く遠いから、全部をやる訳ではない。じゃが5件は回るぞ。」

一件一件が、ヘリを使わないといけないほど遠いのに!?
師匠は混乱している僕に牛乳袋を着けた。

「それじゃ、行くぞ。まずは最初の家まで三キロスキップじゃ」

先に行く師匠に追い付く為に僕は師匠の後を追う。

スキップで

ここからはダイジエストでどうぞ。

一件目が終わる。

「ぜえぜえ」

「全く、遅いぞ。牛乳が腐ってしまうわい」

「すみません」

あ、足が重い

「二件目は二キロ先じゃ、そこまでこの並木道の並木をジグザグに行くぞ」

「ちよつ、ちよつと」

「ほれジグザグジグザグ」

必死で追いかけるが、追い付かない。

無茶苦茶苦しい。

二件目が終わる。

「ほっほっほ、どうした?そんなんじやったら、牛乳が本当に腐ってしまうぞ」

「ぜえぜえ」

「まあ、次は比較的楽じゃ、階段を上るだけでいい」

安心したが、次の瞬間に僕の心は完全に打ち砕かれた。

「上るのは(ハハ)じゃ」

日本で一番高いマンションの屋上にあるペントハウスに階段で上らないといけなから、段数は五千。死ぬー!!!

三件目が終わり、また階段を下りる。

もうすでに限界は越えてるって自信があるぞ。

「後、一時間しかないのにまだ二件もあるぞ。早く行かねば」

い、一時間で後二件も!?

「次の所は、一キロ先じゃから、全力疾走じゃ」

「む、無理です!もう走れませんか!」

「走れるとも」

師匠は懐から何かカプセルみたいなものを出して、放り投げた。

Booom!!

そんな音を出して、煙を出したら、小さな球体のものが10個位出てきた。「ハイテク化は乗らぬとな」

師匠は球体全部を触り、カチツつと何かのスイッチを入れた。すると球体に棘が生えた。

しかも、高速で回転し始めたし、絶対あれ痛いよ。

なんか、僕の周りをぐるぐる飛んでるけど、あまりの疲れでまともに頭が働かない。「出久よ、右に避けるのじゃ」

えっ？

球体の一つが、僕の左頬目掛けて高速で飛んできて、僕は恐怖で右に避けた。

球体は、避けるとそのまま空中停止をした。

僕は左頬から流れる血を手で拭って、球体を呆然と見ていた。

「ほれ、全力で走らねば、危ないぞ」

全ての球体が僕目掛けて、飛んでくる。

たまらず、僕は全力で走る。

もう、走れないと思ったのにまだ走れるって、人間の体って凄いや。

四件目、終了。

もう、もう、体が壊れる。

「よし、最後の所は二キロ先じゃ、軽く流しながら行くぞ」

師匠は、そう言っただけで、前をジョギングするが、僕はもう足が動きそうにない。そしたら、後ろから、ギョルルルルと嫌な音が聞こえてくる。

振り向きたくないのに、振り向かないと余計に怖いから、振り返って見てみると、また、球体が今度はゆっくりと近寄ってくる。

ゆっくりだから、余計に怖い!!

僕は、死にたくないただ、それだけを考えながら、前に進んだ。

五件目、終了。

「うむ、早朝の修行は終了じゃ、10分休憩したら、朝の修行に行くぞ」

「は、はい」

僕は、強くなれるのだろうか?それ以前に生き残れるだろうか?

???

僕と師匠はあの後、十分休憩したら、今度は近くの山の崖まで来た。

「朝の修行は、崖登りじゃ。ホントは農作業がベストなんじゃが、近くに農家がなかったので、崖登りに変更する」

「質問です。なぜ、農作業なのでしょうか?」

「うむ、武道家にとって大切なのは手じゃ、それを鍛えるには、畑を素手で耕すのが一番

なんじゃが、近くに農家がないのと、主の学業の事を考えるとこつちの方が、都合が良
いからの・・・まあ、かなりきつくするが」

うわゝ、そんな物騒な

「出久よ、朝のシャワーと朝めし、そして登校を考えたら、後一時間しか猶予はないぞ、
早くこの崖を三往復するのじゃ」

「さ、三往復なんて、無理ですよ!!」

師匠は僕のこの言葉を聞くと、無言でさっきの球体を起動する。

ホントに勘弁してくれゝ

「出久よ、己の限界を越えるのじゃ」

球体はまた、僕を殺す気で追いかけてくる。

僕は死にたくない一心で崖を意地で登り下りる。

そんなのを繰り返すと僕は知らない間に三往復を終わらせた。たった40分で

「農作業の方が身に入るから、農作業にしたいが致し方ないな、これにて朝の修行は終わ
りじゃ」

「手、手が痛いです」

結構、擦りむいたから、血だらけの手を師匠が見ると、師匠は、懐から軟膏を出して、

僕の手塗りに塗り、上からテーピングをする。

「わし特製の軟膏じゃ、明日までには回復しとる」

「あ、ありがとうございます」

「ほれ、学業に遅れてしまいうぞ」

「あ、あー!!!」

僕は、急いで学校に向かうための準備をする。

ちなみに、遅刻はしなかったが、あまりの疲れで昼は結構居眠りをしてしまった。

???

学校が終わってつかの間、僕と師匠は、近くにある海岸に来ていた。

「さて、次はこの海岸のゴミ拾いじゃ」

「ゴミ拾いですか?」

「そうじゃ、人々の助けになり、そして人々の意識の改善に繋がられる立派な事じゃ」

僕は、海岸に大量にある粗大ゴミを見て、意識が遠のく。

ここは、海流の影響で、不法投棄されたゴミが来るから、本当に治らないのに。

「どんなに強大な壁があっても人は乗り越ええられる。出久の弱点は、考えすぎてしまうところじゃな」

「うっ!」

また、僕は勝手に諦めてた。

師匠に教えられたじゃないか、修行は自分に負けなためだって、だつたら馬鹿にでも何にでも成つて勝つてやる！

「その意気じゃ」

すみません。ナチュラルに心を読むのはやっぱり止めてください。

僕は、ただガムシヤラにゴミを運ぶ。

運び続ける。

途中で何回か自分なりにバランス良く鍛えようと、考えて持つてみたら、師匠からさらにキツイ物を持つていくように言われて、鍛え方を考える余裕すらなかった。

ホントにただ鍛えるだけで強くなるのだろうか？

いや、自分にチャンスを与えている師匠を信じなくて強くなれるか!?

馬鹿になるんだろ!?

このまま、一直線に愚直に進んじまえ!!

そうして、僕は一時間でかなりの粗大ゴミを運んだ。

???

粗大ゴミを運ぶ作業を一時間ぐらいした後。

「よし、出久よ！今日の修行は次の修行で最後とする」

な、長かった〜!まだ、1日しかしてないのに今までにない疲労感で、もうボロボロだ。

「本日、最後の修行は水泳じゃ」

え?

「向こうにある岩まで往復一回!距離はだいたい一キロじゃ」

師匠は、水平線にある岩に杖を向けて話すが、冗談だろ!?

「し、師匠!この体の状態じゃ死んでしまいます!!」

「安心せよ!」

師匠は、また球体を起動しようとする。

そう何度も馬鹿正直にやられてたまるか!!

「させるか〜!!」

「甘い!!」

僕は突進して、球体を奪おうとしたが、師匠は軽々とよけて球体を起動する。

球体の方も意識でもあるのか、起動して、赤く光ると今まで以上に音を出す(たぶん、僕を本気で殺す気だと思う)

僕は、今日何度目かの本気で全力で走って逃げようとするも、僕の走る行く手を球体が塞ぎ、結果的に泳いで逃げる。

頑張つて一往復して、僕は倒れた。

もう本気で死にそう。

「出久よ、これを食べてみなさい」

師匠はエンドウ豆みたいなものを手に出すが、はっきり言つて、今日はめちやくちややつた人の言葉だから、何か変なオーラも見えるし、純粹に怖い

「良いから、食べなさい」

師匠は無理やり豆を僕の胃に入れ込む。

すると、不思議な事に、あんなに強烈で過労死するんじゃないかと思つていた程の体の疲れが一気にとれた。

「わしが2ヶ月かけて作った仙豆という特別な豆の劣化版じゃ、大ケガや瀕死状態からは治せないが、疲労や筋肉痛、あとは軽い怪我ならこれで治せるわい。手を見ているがよこ」

僕は、朝に師匠に巻いてもらった手の包帯を取ると、僕のボロボロだった手が完全に治っていた。

あれ？てことは、最初からこの豆を僕に食べさせていれば

「それは、ダメじゃ」

「何ですか？そつちの方が効率が良いのに」

「理由はいくつかあり、お前は要するにハンデを背負っているわけじゃ、無個性というな。だから否が応でも人より何倍も鍛えないといけない、限界を越え続けねばならぬ、実際に今日の修行でも自分の限界はある程度は越えたはずじゃ」

た、確かに

「火事場の馬鹿力は、こういう事をせねば発揮できぬからのう。ゴミを掃除していると、自分で鍛え方を考えたじやろう?」

「は、はい!自分で何処を鍛えるか理解しないと身に付かないと思って」

「その思考は正しいが、もつと自分に厳しくならねばただの怠け者になってしまうからの、鍛える箇所を決めていて他の場所が疎かになるしの、故に余裕すら与えなかったのじゃ、それとこの豆はまだまだ数が少なくてな、あまりないのじゃ、じゃから無駄遣いできぬ」

い、意外に現金な理由だった。

あ、それより!

「あ、あの、師匠に聞きたいのですが」

「なんじゃ?」

「これからもこのような地獄の特訓が続くのですか?」

「何を言うておる」

よ、良かった！

さすがにこれを毎日

「これより、どんどん厳しくなっていくに決まっておろう」

僕は、この世の絶望を感じてうつ伏せに倒れた

「これから、一年はこれをつけてもらおうぞ」

師匠は、僕にトレーニングリストバンドを4つ、倒れてる僕の目の前に置く。

ズン

と、重い音がする。

「明日からは、寝るとき以外に、この合計20キロバンドを着けて貰う」

この言葉を聞いて僕はヒーローになる前に生き残れるだろうか？

僕のヒーローアカデミアの前に僕は死んでしまうかも？

「死なない、死なない」

「心を読まないで〜！」

出久のライバル登場？

あれから、1ヶ月がたち、亀仙人の元で修行をしている緑谷出久は、厳しい修行に耐えながらも何とか頑張って生き残っていた。

???

あれから、1ヶ月。

何とか僕は毎日、毎日体と心をボロボロにしながら生き残っている。

ここまでの道のりは地獄そのものだった。

例えるなら、高さ何百メートルクラスのビルとビルの間を細いワイヤーで綱渡りをしているような神経的なストレスをもろに味わっていて、肉体的には毎日半ば疲れからくる睡眠、食事と亀仙豆のお陰で大丈夫だが、精神的にはボロボロの死にかけに近いよ。

そもそも、僕が鍛えてなかったのが原因だから自業自得だけど、師匠に会うまで、肉体を鍛えた所で個性には勝てないと浅はかだった自分が怨めしい。

でも、実際にそうなんだ。

個性が現れる前と後ではスポーツも格闘技も全てが変わったんだ。

皆が皆、それぞれマイノリティーを武器にするため、チームワークが重要視されるス

ポーツは学校の授業以外じゃ、一部のマニアしかやらなくなり、更に個人種目でも、個性によって不平等が出るため形骸化していき、結果的に人々のいわゆるスポーツや格闘技等のルールの上に成り立つ肉体を使う競技は形骸化していき、UFCとか、始まった時は野蛮と称されたが、危険な攻撃以外はほとんどOKなルールだったから、個性が出た今でも大人気だし、ヒーローという職業ができた為、それが今の娯楽になっている。

個性の使用が禁止されている警察もそれを盛り上げている。最初は警察も個性をしようというのが世界中の世論だった。でもメキシコやアメリカを初めとする各国の警察の汚職問題から始まった反社会勢力の個性犯罪の暴走。更に深刻に苛烈した差別。何よりイスラエルのモサドが世界初の個性による暗殺をした結果、世論は完全に逆転。

国家権力が個性を使用していいのかいけないのか、二極化してしまい、当時は全人類に関わる事だから、人類全てで投票した結果、僅か1000票という差で国家権力が個性を使用するのが禁止になった。

今でも内乱や紛争、治安が悪い所では個性を使ってる国家権力が存在する。

話が大幅ぶれちゃったな、要するに個性なくして個性には対抗できないと思っていたんだ。

何故なら、もしそれが可能なら、ヒーローなんて要らないから、でも師匠が僕の知識を広げてくれたんだ。

まあ、新しい発見と毎日倒れる直前にギリギリ観ることが出来てるオールマイトの最新情報とヒーローNEWSだけが心の支えになってる。

因みに僕は今、崖を絶賛登ってる途中だ。

また、あの球体に追われながら・・・

本場に1ヶ月もこんな修行をしていると否が応でもなれてしまう。

人間の慣れって恐ろしいな。

そうこうしている間に僕は、崖登りの修行を終えた。

まだゼエゼエ言ってるが1ヶ月前に比べたら大分体力がついてきたと思う。

「出久よ、大分慣れてきたな」

「そりゃ、こんだけやってるんですよ。慣れますよ」

「予想より早いがい傾向じゃ、これより修行の量を更に厳しくする」

ええー!?

「明日からは、この更に重くなった特製バンドを使うのじゃ」

ズシッ!!

僕が今使ってるやつよりも更に重いぞと言わんばかりのバンドが、師匠の手から落ち

て地面にめり込む。

「重さは全部合わせて三十キロじゃ」

「師匠！一年は二十キロって言いましたよね!？」

「何を言ってる？わしは、一年はこれをつけてもらおうと言っただけで、二十キロを一年とは言うておらんぞ」

「で、でも僕の体つきの問題も・・・」

「じゃから、予想以上に早い段階でついたのじゃ！恐らくは亀仙豆を毎日食べておったから、次の日に疲労することなく、毎日徹底して鍛えられたからのう。さあ、早くつけるんじゃ」

僕は、流星に1ヶ月も師匠の元で修行をしたから、この程度の無茶にははつきり言つて、諦めがつくようになり、重りが重くなる所で、全く気に止めなくなった。

僕は、バンドを全て新しいのに変える。

「師匠、替え終わりました」

「うむ、早朝の修行は終わりじゃ。はよう朝飯を食べて学校に行きなさい」

はい！

僕は慣れたお陰で早朝は何とか元気に過ごせるようになってきたので、僕は、ゆっくりと家に戻る。

???

俺は、1ヶ月間前に人生で一番の衝撃を喰らった。

来年から中学に上がるから、何となく服を買いに行こうと町中を母さんと歩いていたら、敵が出て来て、逃げてる時に母さんとはぐれちゃって、一人で不安で、腰が抜けちゃって、その場に座り込んだんだ。じつとしてれば安全だと思って、

でも、敵が襲ってきて、俺は逃げることも出来なくて、そしたら通りすがりのじつちやんが、助けてくれた。

敵を拳一発で倒しちゃったんだ。

すげえって思った。

オールマイイト以外でこんなのできる人がいるなんて、カッコいいって思った。

その後は、事情聴取をされたが、ほとんど覚えてない。

じつちゃんの衝撃が凄すぎたんだ。

また、会おうとして、んで俺もヒーローになりたいから、強くなりたいたいから、簡単な強くなる方法でも教えてもらおうかなって思って、学校が休みだったから今日もあちこち早朝から探してて、ようやく見つけた。

何か、俺と同一年のやつもいたけど、そいつがいなくなってるから、俺は、そのじつちやんの所に行った。

???

僕は、学校が終わると直ぐに修行を再開しようと、海岸に行ったら、見知らぬ同い年の子がいた。

僕は、その子が誰だろうと思いつながら、師匠に近づく。

「出久よ、戻ったのか？」

「はい！あの師匠、聞きたいことがあるのですが？」

「おお、そうじゃった。出久に紹介しよう。電気！ちよつとこつちに來なさい」

謎の男の子・電気がくる。

ただし、例の球体に追われてるけど？

言い方、おかしいかな？

「なんだよ、じつちゃん?!てか、これを止めてくれ！」

「しようがないの」

師匠は、圧倒的な早業で球体を止める。

最近、人間じゃないように思えてきた。

「出久？何を考えているのじゃ？」

「げっ!？」

「お仕置きは後で考えるところとして……電気よ、こやつがわしの弟子の一人の緑谷出久じゃ」
電気と呼ばれた少年はまじまじと僕を見る。

「何か、思ってたよりもひよろひよろしてる」

「ひ、ひどいー!」

この1ヶ月でマシになったのに……

しかも初対面なのに

師匠は、男の子の頭を杖で叩く。

「いてっ」

「失礼な事は言っではないかん」

男の子は、こつちを睨みながら頭を下げる。

僕も睨まれたから、睨み返す。

火花が飛び散ってるみたいに、僕たちの視点は交差する。

「出久よ、新しい弟子の上鳴電気じゃ」

あ、新しい弟子!?

弟子は普通取らない主義じゃ!!?

「主義を曲げるほどの信念が見えたんじゃ」

僕の心を読み、カッコいい事を言っている師匠だが、その時、背中から何かを落とす。

慌てて拾おうとするが、その前に僕はそれが何か分かった。

エロ本だ

「師匠、買収されましたね？」

師匠は、エロ本を隠して、咳払いをする。

「出久よ、時には柔軟さも必要なのじゃ」

「カッコつけて言う台詞と状況じゃないでしょ!？」

何て、師匠だ？

「まあ、とにかくこれから電気も加わるのじゃ、はよう挨拶を互いにせい」

僕と上鳴君は、互いに互いを睨んだまま、お辞儀をする。

「緑谷出久です」

「上鳴電気です」

僕たち二人の出会い結構アバウトな感じだ。

でも、これからが本当の始まりだったんだと今では思う。

己を信じよ！出久の悪夢！

2ヶ月、僕と上鳴君は、師匠のきつい修行に耐えていた。

初日に上鳴君は僕と同じ修行を全部浴びて死にかけていたが、死者すら生き返りそう
な豆で強制的に回復させられ、あれから、一緒に修行している。

今は1日の修行が終わって、これからぐっすり寝ようとして、ベットの
中だ。
はつきり言つて、僕は上鳴君が好きではない。

かつちゃんよりもマシではあるが、好意的に見ていない。

修行の最中に常に軽口を叩くあの癖など、僕とは全てにおいての正反対。

性格・・・そして個性

個性『帯電』

とてつもなく恵まれ過ぎているとしか言い様のないほどの良い個性だ。

個性を伸ばし続けければ最強に成るんじゃないか？

スタンガンな使い方だけじゃない、例えば雷を纏う個性だから、雷が進む速さに自分
を乗せれるのかも知れない。

簡単に言えば、雷に近い速さでの高速移動。

まさに漫画上の業だ。

確か握力×体重×スピード∥破壊力って考えがあったと思う。

握力と体重はわからないがスピードに関しては、最強になるから、破壊力も極限になると思う。

自分で仮定すると、5段階にして、

握力が3、体重は2、スピードは3だ。

$3 \times 2 \times 3 \parallel 18$

上鳴君は、握力が2、体重は3、スピードが4だ。

$2 \times 3 \times 4 \parallel 24$

僕より破壊力が上だ。

結局は仮定と推測の域を出ていないが、もしそうだったら、僕は彼に対して死ぬほど嫉妬して、自分がワケわからなくなるくらいに……

今、こうして考えている事すら駄目なんだ。

でも、彼を見てると思うんだ。

僕に着々と近づいてくる彼を見てるとホントに思うんだ。

自分は、無個性でも強くなれるのかと、強くなって個性を使ってるヒーロー達と並べるのか？

敵から皆を守れるのか？

最近は、そんな事をずっと考えてしまう。

実際に1ヶ月のうちにあつた、僕と上鳴君の身体能力の差はほとんどない。

このままだったら・・・

「出久の夢」

暗い、夜とか暗闇とかそんなレベルじゃないってほどに暗い中で、師匠と上鳴君の前に座っている僕。

「じつちゃん、こいつ俺より先に弟子になったのに、今や俺よりも遥かに劣ってるぜ」

上鳴君、そんな事を言わないでよ。

僕がそんなの一番理解してんだから、言わないでよ。

「そうじゃのう・・・電気よ、ワシの心を1発で掴んだ処世術だけでなく、今までの弟子でもっとも早熟なお主の才能！これからは、主だけに集中しよう」

そんな!?

自分が本当に嫌になってくる。

上鳴君は、全く悪くないのに・・・僕は本当に駄目だな。

何をしてても、結局は誰かを妬んでしまう。

これは、僕の性分なのか？はたまた師匠がずっと言ってるように自分を信じてないから、人と比べてしまうのか？

僕にも何だかわからない。

とにかく、こんなんじや明日の修行に身が入らない。

今日はもう寝よう。

明日は学校がないから、思いっきり修行に専念できるし、師匠が新しい修行をするって言ってるんだ。

さっさと、寝ないと・・・

意識を手放して、僕は暗い眠りにつく。

悪夢すらみない暗い夢だ。



燦々と照される太陽にとてつもなく青い空。

雲一つない、見事な青。

ここままで、青いのはなかなかない。

今は、3月。

出久も電気も二人とも4月から中学生に上がり、3年間を修行と雄英合格の為に全てを捧げるに近い3年を過ごす。

その為の足掛かり的な1日が始まる。

出久と電気、亀仙人の三人は、ある程度片付いている砂浜にいた。

二人とも以前とは比べ物にならない位に絞りこまれている体型になっており、無駄がほとんどない。

そんな二人に亀仙人は、サングラスをキラんと耀かせて、二人を見る。

「出久と電気よ。二人ともこれまでの修行をよく頑張った。これより、修行は新しい段階に進むぞ。覚悟は良いな!」

「はい!」

「おう!何でもかかってきて良いぜ!」

「では、電気には地獄が生ぬるい・すみません、調子にのりました」・全く・」

「上鳴君・」

調子に乗る電気に呆れる出久。

この二人は2ヶ月一緒に修行してきたが、だいたいこんな感じだ。ウマもそりもなかなか合わない。

亀仙人は二人を見ながら、口元を一瞬緩ますも、直ぐに元の険しい顔つきに戻す。

「二人とも、今日からの修行は、今までの修行に新たな修行を足すから、それまではいつもと同じじゃ、それじゃ行くぞ！」

三人はいつもの修行をする。

特に変わった事はないが、一つだけ違うのがある。

それは、出久が隣にいる電気を時々、焦っている目で見ている事だろう。

亀仙人もそれを見ながら、髭を撫でていた。



上鳴君と共に修行を終えて今は午後3時。

互いに学校がないと、最近はこの時間になっている。

昨日までは、これで修行が終わり、亀仙豆を食べて体を休めていたが、これからはど
んどんきつくなると思う。

今は、体を休めて座って、海を見ていた。

師匠も上鳴君も近くにはいない。

多分トイレだと思いが、

これからの考えるよりも僕は別の事を考えてしまう。

僕の隣をずっと走っていた上鳴君。

間違はなく、僕より速くなっていた。

僕は彼より早く早くに鍛えていたのに何でなんだ?

体の動かしかたがまだ違うのか?

一体何で追いつかれたんだ?

考えても考えてもわからない。

どうして?

「悩んでおるようじゃの?」

僕は、慌てて後ろにいる師匠を見る。

何で？

さつきまでは人の気配が全くしなかつたのに……

「お主ぐらいでワシの気配を気づくようになるにはまだまだ修行が足りん」

「す、すみません」

「で、何を悩んでおる？」

師匠にこの事は知られたくないな、人に対して嫉妬してるなんて事は知られたくない。

「ワシをなめるんじゃないぞ、お主の考えなんて手に取るようにわかる。話してみなさい」

げっ!?

何で詠むんだよ。

知られたくないのに……

「お主は今、自己否定に近いことをしておるからの。弟子のそのような事を止めるのも師匠の務めじゃ」

ああ、もうどうにでもなれ！

上鳴君はいないよな？

「電気はもう少しかかるぞ」

ちよつと安心・・・よし!

「上鳴君に対して嫉妬してます」

「それで?」

「焦りを感じております」

「そうか・・・」

「今日の修行で、上鳴君は僕の隣をいました。ずっと・・・僕は上鳴君よりも早くに鍛えていたのに追いつかれて・・・鍛え方が足りなかつたのでしょうか?・・・それとも・・・それ以上の悲観は、二度と戻れなくなるぞ」・・・すみません」

「人に対して嫉妬するなどは言わんが、嫉妬しすぎるのも自分を腐らせるだけじゃぞ・・・」

「はい」

「そして、自分を信じないのも駄目な事じゃ、それは業を鈍らせて本来の力を失わせる」

「はい・・・」

「自分を信じるのじゃ」

自分を信じるってどうすれば良いんだ?

どうしたら良いんだっけ?

「ワシが良いものをみせよう」

●●●
僕と電気君は、師匠に言われて、100M走の準備をしている。

何故か、師匠に自分の感情を暴露したあとにこうなってしまった。

何でも僕たち二人の地力を測るためって言ったけど、彼は僕よりも早い。

荷物の持ち方とか、そんなんで今まで僕は隣にいたけど・・・これで僕より速かったら、あの夢とおんなじになるかも・・・

そしたら、僕は立ち直れるかな？

明日も修行出来るのか？

「いやー、楽しみだな!?緑谷!」

「そうだね・・・」

相変わらず、元気だな。

ホントに根暗な僕とは正反対だな。

でも、僕だって今まで決して怠けていた訳じゃない。
必死に頑張つて来たんだ。

意地でも敗けない!

「二人とも用意は良いか?」

師匠が、100M先にいる。

あそこまで、全力疾走。

頑張る。

僕にだって意地はある!

「よーい、どんー!」

僕たちは、全力疾走で進む。

互いに互いを見る余裕なんて物はない。

敗けない!

そんな意地で、必死に走った。

そして、僕は上鳴君よりも先にゴールに着いた。

「8秒6」

師匠の声を聞いて、止まると

「10秒1」

「ぜえぜえぜえ」

上鳴君が到着した。

「速いな、緑谷」

「あ、ありがとう」

上鳴君に褒められるとなんかむず痒いな。

僕は、思わず視線をそらすと、師匠がこつちに歩いてくるのが見える。

「よし、二人とも速いぞ」

「はい」

「やり〜」

「ほっほっ、二人とも何故差が出来たのかわかるかの？」

「じっちゃん、教えて〜」

「早すぎるぞ！電気！もつと頭を使わんか！」

「えー、まどろっこしいな」

「全く・・・出久は？」

え？足場が砂浜なのが影響してるのか？

でも、それがなんか影響しているのか？

「考えは近くなつたぞ」

「だから、心を詠まないで下さい」

「じつちゃん!個性の無断使用はダメだぞ」

師匠は目をそらす、直ぐに戻して、

「出久が、電気より速かつた理由は、下半身じゃ」

「カハンシン?」

「下半身・・・ですか?」

「そうじゃ、全ての武術の基礎は下半身にある。何故なら人は昔から二足歩行じゃから、武術も自然に下半身が重要になつてくるのじゃ・・・主たちの下半身は、常人よりも強靱になつてきているが、出久は電気より1月早くに鍛えていたその成果が出たのじゃ・・・このような砂場はそれを測るにもつてこいじゃしいう」

成果がでた

出ないと思つていたのに・・・

「予想もせぬところで成果が出る・・・これが修行じゃぞ・・・出久」

「・・・はい・・・」

もう、僕は迷わない!

僕は自分を信じる。

上鳴君が何だ！
僕は僕なんだ！

●●

どうやら、殻を破ったようじゃのう。

出久よ、他人は結局、どこまで行っても他人なのじゃ。

悟空とクリリンのような友でも己の道を歩み続けておる。

他人と比べるのは決して悪いことではない。

そうすることで実力以上の力を出す者もおる。

じゃが比べすぎるのも己を見失うのじゃ、確固たる自分を信じた上で比べないと、己が崩壊するからの・・・

しかし、出久はともかく電気はかなり速かったのう

●●

砂浜にいる三人。

出久と電気は座り、亀仙人は二人の前に立っている。

出久はノートをいつでもとれる体制で、電気はリラックスした状態でだらんと座っている。

「お主達にこれから教えるのは、自らの力を引き出す術とでも言おう。その技術があれば、人よりもさらに強靱になる。また拳や蹴りに載せれば、とてつもなく強い。ワシの知っている者達は、長い年月をかけてこれを無意識のうちに至るようになる。ワシであり、ワシの他の弟子達にも長い年月をかけて、そのようになつたがお主達には時間がない。戦っている最中に出きるようになる可能性はあるが、一つ間違えれば死を招く生き方には向いておらん。よつて、ワシがこの三年でお主達を徹底的に鍛える!覚悟は良いな!」

出久と電気は、それぞれ正座に座り直して

「はい!」

勢いよく返事をする。

「よし!…二人とも、とりあえずは楽な姿勢になりなさい。これから行うのはかなり、辛いのでう」

出久と電気は、正座から胡座にして、深呼吸したあとに亀仙人を見る。

亀仙人は、亀の甲羅を脱ぎ、二人の前に胡座をかき、両手を出す。

「よく見るのじゃ」

亀仙人の出した両手から、光が出て、それが徐々に輝きが大きくなる。

この不可思議現象に出久も電気も言葉を失う。

「これは氣じゃ」

「キ？」

「キって木か？」

「上鳴君、何考えてるかわからないけど、とりあえずそれは違うと思うよ」

「この光は己の生命力を表しておる。光が大きく強く輝けば輝くほど、己の力を引き出す」

亀仙人は、そういい、両手の中にあつた輝きを消し、二人を見た。

「これからが本当の始まりじゃぞ」

「はいー！」

「（もう僕は迷わない！）」

出久は亀仙人に対して今まで以上に決意のある目で彼を見るが、電気はそんな出久に対して、拳を握りしめていた。

個性の呪い!?!上鳴電気の稲妻!

気の修行を始めてから、3ヶ月。

出久と電気は、中学生になり、それぞれ修行も学校生活も頑張っていた。

そんな彼らが今、何をしているかと言うと、二人とも出久の部屋で勉強をしていた。

亀仙人は、そんな二人を見守っていた。

事の発端は3日前。

気の修行をする前の今までの修行をしていた時の事だ。

出久と電気は、中学生になってから毎日、帰宅をせずに修行場に直行する。勿論、親の了承は取つてあるが、亀仙人としては、修行に専念できる事のメリットもあるがデメリットも勿論ある。

それは、二人の勉強である。

亀仙流はよく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休むがモットー。故に悟空やクリリンの時もある程度の読み書きや算術、金銭面の価値などを行った。

クリリンは元々そこら辺も鍛えられていたから良かったが、亀仙人は今でも悟空を勉強させといて良かったと思っている。でない悟空の嫁のチチが大変だったと感じて

いる。

金関係はチチが全面的に手を握っているが、例えば野菜の売り買いの時に八百屋から金を受け取ってくるのは基本的に悟空だ、金の価値を知らないと今頃チチが泣いていたと思う、まあ、他の人も人柄が良いのも理由ではある。

しかし、この世界は違う。

完全に頭も良くないと苦勞する世界だ。

だから、二人の勉強の具合が心配なのである。



二人の勉強関係の状況が気になり、わしはそれとなく、二人に聞いてみた。

「二人とも、少し聞きたい事があるんじゃないか？」

二人はわしの声を聞くと修行を止め、こっちに顔や体を向ける。

「二人とも勉強の方は大丈夫なのか？何しろ勉強に関しては、簡単な事しか教えられんのでう」

出久も電気もわしの言葉に思う所があつたのか、顔を下に向ける。

「実を言うと、少し悪くて・・・」

「修行がきつかったし・・・」

「馬鹿者!!修行を勉強の妨げと言うんじゃない、それは自分の管理が出来ていない主ら

のせいじゃ」

わしが二人を睨むと二人は更に静かになった。

全く、勉強が励まない理由に修行を使うとは・・・

「出久に電気をこの前、テストがあつたと聞いたぞ」

「はい」

「今日の修行はこれまでじゃ!!今すぐ、そのテストを持ってきなさい!!もしも、勉強が必要と判断したら、それも今後の修行に組むからの!!」

「は、はい!!」

この世界は、完全に教育熱心と知っておったから、大丈夫かと思つたが、やっぱりか・・・

明日からは勉強の時間も考えねば



僕と上鳴君は、師匠に言われた通りにすぐに家に帰り、テストを持ってきて、修行場

に行く途中に合流した。

修行場の気の修行は今は裏山でやっている。

人目につきにくいからね。

「しつかし、じつちゃんも急に酷えよな？急にテストを持ってこいだなんて」

「しょうがないよ、学生の自分は勉強なんだし・・・」

「でもよ、勉強はその気になればすぐに出来んじゃない」

「勉強も時間をかけないと、頭に入らないよ？」

上鳴君は嫌な顔をしながら、耳をふさぐ。

「どうやら、耳に痛いようだ。」

まあ、僕もだいぶ耳が痛いんだけど、しょうがないか・・・

そんなこんなで・・・

僕たちは、互いのテストを師匠に見せていた。

師匠は、詳しい事がわからないからと言って、平均点と赤点のラインを知りたいと言
い、今は僕のテストを見ている。

因みに僕の所はかつちゃんが毎度お馴染みの全教科95以上でぶつちぎり。

僕は修行も忙しかったから5位だ。

小学生の時は2位だったんだけどな。

平均は総合で388点。

一応、平均点以上で問題なかったけど、落ちたんだよね

赤点のラインは1教科30点。

そんなこんなで師匠が僕のテストを見終わったのか？

纏めていた。

「出久は問題なさそうじゃな」

「ありがとうございます」

「この調子で、無理をせずに焦らずに頑張るが良い」

「はい!」

「さてと、次は電気か?」

上鳴君は、なんだか顔面が青白くなっていた。

もしかして相当ダメだったのかな?



俺は、じつちゃんに自分のテストを見せてたけど、実を言うと、本当に悪いんだ。

まじで総合点は平均点まんまの350点で、赤点の40点ギリギリの教科もある。

じつちゃんのウナリ声が聴こえてくるぜ。

「電気よ、一先ず赤点がないことは嬉しく思うが、これでは主の夢は遠くなるぞ」

グサ！

気にしてる事を・・・

「電気よ、出久よ。一言言っておくが、ワシはあくまでも手助けしか出来ぬが、全力で手助けをするのがポリシーじゃ、故に修行も厳しい」

「当たり前じゃねーか、だから必死で・・・」

「電気よ、当たり前じゃが、勉学を疎かにしろとは言っておらぬぞ」

「心を読むんじゃねえ」

「主らには今日から毎日二時間の勉学の修行もつける！勿論、ワシはわからぬから見ただけになるが、全ての修行の終わりに勉学をせねば今の主たちの根性では、とても夢の入り口にも行けぬわ！」

「勉強なんて、3年から始めてもどうとでも・・・」

「どのみち、主らが3年の時は総仕上げの段階に無理矢理でも入るからの、勉学の時間はほとんど無い」

ズーン

とてつもなく重てえ絶望が俺の精神に来る！

一体どんな地獄を!?

「今日の修行はこれまでじゃ!!今すぐ勉強をして互いをサポートし合うように!」
じつちやんの一言で強制的に勉強になった。

それよりも気について教えて欲しいのに



冒頭に戻り、出久と電気は共に勉強をしていたのだ。

そんな中、電気は背を思いつきり伸ばし、ペンを置く。

「ちよつと疲れたな緑谷」

「もう二時間はやってるからね」

出久もペンを置く。

亀仙人も首をコキコキ鳴らしながら二人に近づく。

「二人とも今日の勉強はこれまで、電気も帰ってゆつくりしなさい。わしが送っていい」

「おっ?じつちゃんサンキュー」

電気は直ぐに帰りの支度をして、出久の家を亀仙人と共に出る。

夜の道でまだ肌寒い風が流れる。

「じつちゃん、聞いてもいいか?」

「なんじゃ?電気?」

「明日の修行ってまたいつも通りか?」

亀仙人は髭を触る。

「いや、明日は気の修行だけでやるつもりじゃ。二人とも体はだいぶ付いてきたからの、明日は朝昼晩全て気の修行にあてがうつもりじゃ、亀仙豆は無しでの、体力と回復力を更へ上げなければ成らぬからの」

そう、二人とも亀仙豆のお陰で筋肉や体つきは無駄がなく、超人的になってきたが、体

力が上がったのかと聴かれれば少し答えが困ると言った所だ。

勿論上がってるし、回復力も今までに比べたら桁違いに上がってはいる。しかし、亀豆を使いすぎで、少し比例が取れていないのが正直な所だ。

こういう比例はきちんと取れていないと後々苦勞する。

実際に簡単な例えを出すと、悟空やベジータ、トランクスがセルの時にやった極限的なパワーの底上げがこの問題の果ての結果である。

故に亀仙人も気の反復の修行で体力と回復力を底上げしようと言うのが魂胆だ。

「よしー」

喜ぶ電気に、亀仙人は笑みを浮かべる。

知らない第三者から見たら、きっと祖父と孫を答えるであろう。

こうして、二人は夜の道を歩いていく。

しかし、その先は深い崖があることも知らずに



日曜の早朝4時。

まだ、薄暗い朝の浜辺。

今日も厳しい修行を越えていくため、僕と上鳴君は、師匠の前に体育座りしていた。「よし、二人とも今日の修行は全て気の反復の修行とする。電気は光を出すように、出久は今日は光を五時間は出し続けるように、始め！」

よし！やっつてやる。



気の修行を始めてから、3ヶ月。

大体の二人の近況は、

緑谷出久……光を出せるようになり、徐々に時間を延ばせるようになってる

上鳴電気……気の修行を始めているのにどういう理由か、稲妻が光る。



くそ!どうなってんだよ!

何で全く、光が出ねえんだよ!!

くそっ!!

あんなに必死で修行してるのにどうして!?

そんな事を考えてる。

だって同じ時期に始めた緑谷はもうすでに五時間以上続けるところまで言っていて、俺は全くの駄目だ。

何でなんだよ!!

どうして!?

何で!?

今、人生で一番暗いことを考えてんなあ。

俺の心を詠んだのかどうかはわからないが、俺は内心焦りまくっていたから、じつちやんが近づいている事にすら気づかなかった。

「電気よ、どうしたのじゃ?」

「じつちやん……」

「焦らずにじつくりすれば良い」

「でもよ……」

「大丈夫じゃ、主なら出来る」

そんな事言つたつてよ、結果が出ねえと信じられねえよ。

俺は、一先ず水を飲みにもその場を離れた。

近くのトイレの水道で、頭を冷やしてたら、緑谷が来た。

「上鳴君、大丈夫?」

「大丈夫だぜ、緑谷……俺は……」

「それなら、良かった」

緑谷の野郎、何だよ?その余裕は?

あー、駄目だ。ヒーローになるのにこんなくだらない八つ当たりは駄目だ!

話を切り出して、冷静にならないと……

「なあ、緑谷。気の持続ってやっぱり疲れるか?」

「うん、結構……」

「俺も早く出してえよ」

「大丈夫だよ!上鳴君なら出来るよ」

何だよ、その根拠のねえ言葉は……

「だって、僕よりも凄いんだから……」

ブチッ!!

何かがキレた。

今思えば、色々とストレスが自分の知らない内に溜まってたんだと思う。

だから、俺は冷静になってない頭で動いて、緑谷の胸ぐらを掴んだ。

「僕よりも凄いつて!!本気で言ってるのかよ!!こんなにバカにされたら、誰だって怒るぞ!!」

ぞ!!」

「そんな、僕は純粹に……」

「ふざけんな!俺よりも……俺よりも……」

頭にきたから、俺自身何を考えたのかよく分からない。

でも、これがなかったら、今はこうならなかったと心から思う。

「俺よりも才能が有るくせに勝手なこと言うな!! お前に何も出来ない俺の何がわかる!!?」

緑谷は、この時始めて俺に対してキレた。

「ふざけんよ! 何も出来ないだつて!?! 君こそ勝手なこと言うな!!」

「んだと!?!」

緑谷と俺は取っ組み合いをする。

互いに力が強くなったが、武術なんてまだ教えて貰ってねえから、互いに掴み合って押すぐらいしか出来ない。

でも俺たちの体は思ってる以上に強くなった。

壁に相手をぶつけたら、壁が少し崩れるんだから、かなりの物だよ。

俺も緑谷も互いにこんな風に力を使うのは始めてだったけど、俺達は冷静になれなかった。

だから、思いっきりやってた。

「何をしておるのじゃ!!!」

じつちゃんが、俺達をぶん殴って止めた。

俺はまだやろうとしてた。緑谷もだ。

でもじつちゃんか間に入り、止めた。

「武術を喧嘩なんぞに使うんじゃない!お主たちの力は、こんなことの為にあるのか!」
その言葉を聞き、俺達は修行場に戻った。



思いっきり、喧嘩をした。

僕の人生で始めてだ。

師匠に止められて、僕たちは修行場に戻って今、師匠の説教を受けてる。

だが

「お主たちは、それが人を導く人間になろうとする者のあり方か!」

「うるせえよ!じつちゃんは黙ってる!!」

「お主が黙れ!」

上鳴君は、師匠と思いつき喧嘩をしている。

「大体、お主の問題を出久に八つ当たりしたのがそもその問題じゃ!!」

「こつちだつて一杯一杯なんだよ!!何で?こいつは出来て俺は一向に光の欠片すら出ねえんだよ!?!個性はずつと出るのに!?!教えてくれよ!?!」

師匠は顔を下に向けて髭を触る。

上鳴君は、よつぼど焦ってるのか、師匠に近づく。

「頼むよ。じつちゃん……」

師匠はその言葉を聞いて、上鳴君の方を見る。

「お主の個性じゃ……」

「えっ？」

「お主の個性が、氣の流れを邪魔しておるのじゃ……どうやら、個性を持つ者は氣の発現や大きさが小さいらしい」

「そんな……じゃ、緑谷は……」

「お主に言っていないが、出久は無個性じゃ……」

そう、僕は上鳴君に無個性だと言うのを言っていないかった。何故かって今までの経験が全てだ。

この世は、無個性だと差別をされる。教えたくはなかったんだ。

上鳴君は僕の方を一度見て、また戻る。

「じつちゃん……」

「じゃが、お主の個性を上手く使いこなせば、良いのじゃ！ワシの亀仙流が全てではない！」

「で、でもじつちゃん。俺はじつちゃんに憧れて来てるんだよ……じつちゃんみたいに
なりてえから……」

「……電気……」

「……こんな自由に操れねえ個性なんていら……こんなだったら、俺は無個性が
良かった!!」

ブチツ!!

その言葉を聞いた瞬間、僕は頭が真っ白になり、気がついたら、上鳴君をぶん殴つて
た。

上鳴君が、宙を舞い、倒れて、頬を手で押さえて僕を睨む。

けど、僕だって、頭にキてるんだ!!

「君に無個性の苦しみの何がわかる!!?……そんな力を持つてるのに何で!」

上鳴君は呆然としている。

師匠は僕の前に来て、僕にビンタをした。

「怒りに任せて力を使うなど言っただばかりじゃろうが!!」

「すみません……」

「電気も、出久も、互いの問題を互いに押し付けてばかりじゃ!!そんなんでヒーローにな
れるのか!」

僕たちは互いに何も声を出せない。

「お主達にある課題を出そう」

「課題ですか？」

「一週間後、ワシとお主達で勝負をする・・・ルールは五時間以内にワシの物を取れば良い・・・もしも取れなければお主達は破門じゃ」

「そんな!？」

師匠はそう言うと、消えた。

僕たちは、朝の陽射しの明るい景色の中で暗く沈んだ。

二人の未熟者

太陽が照らされている海岸に出久と電気は、互いに向き合っていた。

亀仙人の突然の宣告に二人とも頭が追いついていなかったのだ。

互いに互いの傷を自覚無しに抉りあつた結果がこれである。

当たり前だ。

亀仙人は、確かに最低な部分もある。

しかし、根本にある信念は誰よりも強靱である。

どんな強い敵にも折れず。

どんな苦難にもめげず。

武道を育て上げた立派な人間である。

出久も電気もヒーローに成りたい。

しかし、ヒーローとは聖人君子の象徴である。

どんな苦難にもめげず。

例え勝てないとわかっていても立ち向かわなくてはいけない。

人々の前に立ち、人々の希望になり、救世主に近い存在になる、なってしまうのだ。

二人は、お互いの問題を他人に八つ当たりをしてしまった。

出久は、己の無個性の問題を電気に当たってしまった。

電気は、己の気の問題を出久に当たってしまった。

勿論、互いに互いが傷に塩を塗りあつたから、納得はできる。

しかし、彼らはヒーローになろうとしている武道家になつたのだ。

ヒーローに憧れ、亀仙人の元で修行を決意したその時から、彼らは武道家なのだ。

そしたら、もう自分の体でも自由には使えない。

その手足は、人を救うために・・・

その心は人を導くために存在するのである。

まだ、子供とか言うのは通用しない。

出久も電気もそれをわかっていないのだ。

出久は、電気に近づき、止まる。

どう声を掛ければいいのかわからない。

生まれて初めての喧嘩で友達もいなかったから仲直りの仕方がわからないのだ。

いや、知ってはいる。

ごめんなさいと言うだけだ。

でも、どんな時に言えばいいのかわからないのだ。

電気は、出久を見る。

一緒に修行して5ヶ月、これが始めての喧嘩である。

彼も謝る時がわからない。

出久よりもわかつてはいる。

しかし、彼にとつてみれば今回は出久から始めたと思つている。

頭では自分も悪いと理解しているが、心が納得していないのだ。

故に、これからどうすれば良いのかわからないのだ。

沈黙の時は永い。

電気は、立ち上がり、出久に肩をぶつけて、その場を去る。

出久は電気を追いかける。

「来るな！」

電気は出久の方を向き、吼える。

自分でもらしくはないと考えているが、それほどまでに電気は冷静ではないのだ。

「お前なんか、大っ嫌いだ!!」

電気は、そのまま去っていく。

出久は、その場で立ち止まる。

●●●
家に帰った電気は、風呂を浴びて部屋に入ると、ベットに潜った。
考えているのは、自分の個性。

『帯電』

この自由に使うことが出来ない個性で大分苦しめられた。
ただ、纏うだけ。

それで、小学生三年まで人から避けられた。

理由は、上手く操れない個性だ。

大怪我をさせたことはないが静電気はドンドン溢れるように出てしまうから、操るのに苦労した。

人間関係は自分なりに明るく振る舞って、何とか人に好かれるようになったし、昨日まではこの個性も自分なんだなって考えていたが、それも昨日まで・・・

今は、またこの個性・・・そして出久に対しての怒りで、頭が一杯になってる。

そもそも、電気は出久が少し苦手だった。

自分よりも強いのに、異様なまでの低い自己評価と腹が立つぐらいの謙遜、称賛。持ち前の明るさで何とかしようにも、壁がある感じで苦手だった。

ベッドで泣いている。

長いこと泣いてる。

家族がご飯だと呼んでも、彼はベッドに入り、苦しんでいた。

暗い夜になり、電気は、自分の部屋にある父親から貰ったお古のパソコンを見て、起動する。

古い型なためか、いささか遅いが気になるほどではない。

起動されたパソコンでインターネットを始める電気。

調べるのは、無個性に関することだ。

幾つか、無個性に関して、記事がある。

『南米で、無個性の人間を隔離する無個性安全法が施行、世界中で非難の的に』

『アメリカで13歳の少年が死亡。理由は無個性でいじめられて?』

『ロシアで無個性の人間が自爆テロ!』

『フランスで無個性の人間達が大規模なデモを! スローガンに「無個性に平等を!」』

『無個性至上主義者であり、イギリス至上最悪の殺人鬼、通称皆殺しジャックが脱獄！』
『オーストリアで個性至上主義の二人の少年が無個性の一家を惨殺！』

e t c

電気は、その大量の記事を見る。

世界で今、問題になっている無個性問題！

今まで、自分の周りには個性持ちしかいなかったし、自分には関係ないなって思っていた。

電気は、アメリカの無個性の少年の自殺記事を見る。

アメリカの田舎で起きた事件で、周りは個性持ち。

少年の両親や、兄弟すらも個性持ちで、居場所が無くなったようだ。

電気は、その記事を見ながら、固まっていた。



今まで、個性を持っているのが普通だと思っていた。

でも、一緒に何カ月も修行を共にしたやつは無個性だった。

だから、あいつ……あんなに怒ったんだらうなあ。

俺の個性。

好きじゃないし、便利じゃないけど、有るからなあ。

思えば、あいつの自分の過小評価もネガティブな所も全部、そこからじゃないのか？俺、なんで、あんな馬鹿な事、言ったんだ？

あいつに対して申し訳ねえ。

そう考えたら、涙が出てきた。

「すまねえ、すまない緑谷……」

後は、鼻をすする音だけしか、俺の耳には聞こえなかった。



出久は、家に帰ってきて、玄関の部屋を開ける。

「出久？もう帰ってきたの？」

母親の引子が、玄関に来る。

「どうしたの？」

明らかに暗い表情の息子に聞く引子。

「お母さん、ちよつと上鳴君と喧嘩しちゃって……それで師匠に怒られて……」

その言葉を聞いた引子は、手を口に当てる。

明らかに驚いている。

無理もない、出久はどんな事でも今まで溜め込む方の人間だったのに、こんな状態で言ったのは引子の記憶にはなかった。

「だ、大丈夫なの？」

「上鳴君は大丈夫だ「出久は？」」

「お互いに怪我をしなくてすんだから、大丈夫！」

「後で仲直りしなさいよ」

「わかってるよ・・・」

出久は、引子の横を通り、部屋に入る。

ベットに寝転がり、暫く天井を見る。

初めての喧嘩。

腐れ縁のかつちやんとは違って妙に意地をはってしまっていた。

出久の頭にあるのは、その事だった。

上鳴の言葉は理解できる。

無個性だと知った時から、個性について勉強し続けてきた、そして個性を上手く使えなくて事故を起こしてしまった、個性被害者についても・・・

出久は、自分の本棚の中に入れてあるノートを一つ取り出す。

タイトルは『個性による事故』

色んな個性による事件を纏めたノートで、出久はそれを一枚一枚めくる。

『アメリカでサイコネシスの少女、個性を上手く操れず、車の事故を起こしてしまおう。両親が死亡』

『個性黎明期から生きてきた、ジェームズ・ハウレット氏が自殺。自らの超回復が原因か？首には個性封じの首輪が』

『23の人格が入れ替わる個性のケビン・クラム氏が死亡。自らの個性の暴走か？』

『アメリカで、突然200人が緊急搬送。世界最高のサイコネシスの持ち主で現在認知症のチャールズ・アイゼンハート氏が関与か？』

e t c

個性が発現されてから今の今までずっと続いている個性の暴走。

年々、酷くなり増え続けていくと言う学説まで唱えるほどで、出久は現実を知っていた。

でも、目を背けてきた。

そんな事は、今までただの力を持つ人間の戯言だと思っていたからだ。

でも、電気と出会い、電気と喧嘩して、出久の心にあつたもの（偏見）は、完全にとは言わないが確かに壊れたのである。

（謝らないと・・・）

玄関に行く出久。

引子が、外に出ようとする出久に近づく。

「出久、どうしたの？」

「ごめん、お母さん！ちよつと行かないと・・・」

出久は、玄関を出る。

すると外は真つ暗だった。

「もう、夜よ」

そう、調べてたりしている内に夜になってしまったのだ。

「それでも行くー！」

飛び出す出久。

引子は、その後ろ姿を見ながら笑っていた。

夜道を走り続ける出久。

前の方から誰かが来る。

ぶつからないように避けようと、右側に行く出久は、向かいから走ってきた人物を見て立ち止まる。

それは、肩で息を切らしながら走ってきた電気だった。

「緑谷……」

「上鳴君……」



夜の浜辺にいる出久と電気。

互いに謝ろうと家を飛び出して来たのは良いものの、まさか、互いの家に行く道中で会うとは思っておらず、また、急に会った為に気ままずくなり、いつもの修行場の浜辺へと来た。

長い沈黙

二人とも、言い出す切っ掛けがないのだ。

(・・・でも、謝らないと！・・・)

互いに互いが同じ事を考えていたのは互いに優しい人間だからであろう。

「緑「上鳴君！ゴメン！」・・・」

電気の言葉を遮って、腰を曲げて謝る出久。

「本当に「緑谷！ゴメン！」・・・上鳴君・・・」

電気は、土下座の体制になっていた。

「俺、自分が上手くできなくて・・・隣で上達してたお前に嫉妬してた・・・いつも・・・いつも・・・毎日・・・何をやっても俺より凄かったから・・・でも、俺・・・あんなこと言つて・・・本当にごめんなさい！」

「上鳴君・・・僕の方こそ、君にずっと嫉妬してたんだ・・・僕は無個性で・・・君の個性が凄く眩しく見えたんだ・・・だから、君に負けたくなくて・・・僕は本当に無神経の最低な男なんだ・・・」

出久も土下座の体制になった。

長いこと、頭を互いに下げている。

すると、二人とも笑いだした。

緊張の糸が解けたのか、それともこの状況が馬鹿馬鹿しくなったのか？

何はともあれ、二人には朝にあつた嫉妬の感情は存在しなかつた。

互いに同時に立ち上がり、目線を交わす二人。

出久が右手を出し、電気も右手を出し、互いに握手をする二人。

「俺は、絶対にこのまま終わりたいかねえ」

「僕もだよ」

「これからもよろしくな・・・緑谷」

「うん・・・上鳴君」

二人は、同門から友人になつた瞬間である。

そして物語は、一週間後に進む。

二人の戦い！ 亀仙人 v s 出久&電気

出久と電気の誓いから1週間。

泣いても笑っても運命の日が来た。

海岸で亀仙人が仙人杖を持ちながらパイプを吹かしている。

考えているのは、出久と電気の事だ。

この1週間、亀仙人は全く二人に関わらなかった。

理由は色々あるが、一番の理由は二人に対して、最初の頃に比べたら、興味自体が無くなりかけているからだろう。

1週間前の喧嘩で二人がやったのは、自分の力を暴力に使ったことだ。

それが悪いのではない。

ヒーローだからとか正義だからとかで、実行行使すること自体が暴力だ。

しかし、それでも守りたいものの為に自分に負けないために立ち向かう時が生きていれば誰にでも絶対にある。

その為の1つの武器が武術だ。

決して八つ当たりをするためではない。

亀仙人の中で渦巻く考えは彼を武術の神にのしあがらせた信念そのものだ。

故に間違っているとは思っていない。

そもそも、今回の件は完全に二人に責任がある。

亀仙人が頭で考えているのは、悟空やクリリン達とは違って全てが未熟すぎる。故に弟子にしたのは間違いではないのか？

と考え始めてる。

カラスの鳴き声が鳴く。

不吉そのものである。

そんな中、亀仙人の元に、二人が歩いて来た。

亀仙人はパイプをしまい、二人と向き合う。

二人は亀仙人のそれを見て足を止める。

互いの距離は5メートルと言った所だ。

「来よったか、バカタレ共が」

亀仙人の会って早々の暴言に二人とも歯を食い縛る。

「さてと、それではこのわしと勝負して貰うぞ」

「はい！」

「おう！」

亀仙人は自らの甲羅を卸して、背中の部分を二人に見せる。

背中には、赤色と青色の紐が着いてた。

「主らには、この2つの紐を五時間以内に取りつて貰う。それが出来なければ、主らは破門じゃ。」

「師匠！他のルールは？」

亀仙人は甲羅を背負って、半径3メートルぐらい円を作り、中心に立つ。

「ワシはこの円から出ない。ただし空中は地面に足をついてない限りでは出るぞ。後、主らはどんな攻撃をしても構わん。ワシはこの杖しか使わん」

その内容に出久は良し！と思った。

単純にこれならなんとかなると思ったからだ。

電気は不満に思った。

明らかに侮られてるからだ。

「何じゃ、電気？不満そうな顔をして」

「俺達を舐めんなよ」

「だったら、勝ってみる事じゃな。勝たなければ全てに意味がない」

亀仙人は構える。

出久と電気も前のめりな姿勢になる。

三人とも戦闘体勢になり、今か今かと一瞬の時を待つ。

大きな波のさざめきと同時に二人は亀仙人に突進する。

亀仙人は、特に慌てる様子もなく冷静に猪のように突進してくる二人にデコピンしてぶっ飛ばした。

(デコピンでこれ!?)

(冗談だろ!?)

二人は吹き飛ばされながらも体勢を立て直す。

「ほれほれ、どうしたのじゃ?」

亀仙人の挑発に電気は最速で突っ込む。

出久は亀仙人を中心に回る。

亀仙人は電気の突進をまた軽々とデコピンで吹き飛ばすとその先には出久がいた。

二人はぶつかり、今度は倒れた。

「くそ!」

「上鳴君! 落ち着いて、まだまだこれからだよ」

「わかってる!」

電気は出久の言葉を聞くと、大きく深呼吸をして落ち着く。

出久は両手に砂を掴むと全力で亀仙人に向かって投げた。人智を越えた修行によって培われた力によって投げられた砂は超高速で亀仙人の所まで突き進む。

亀仙人は杖を使い回転させて砂を全て弾く。

しかし、弾いてる隙に電気は亀仙人に突っ込んでいた。

突然、現れた電気に出久もやってる本人もこれは行けるだろと思った。

だが、亀仙人は慌てる様子すら見せずに電気の額にデコピンをしてふっ飛ばした。

(くそー！)

(なんて反応速度なんだ!?)

その後も二人は果敢に向かっていったが、突っ込んでではデコピンで対処されて、砂だけでなく石を投げてでも冷静に対処されて、二人同時に突っ込んででも避けられて、三時間たっても亀仙人に冷や汗を掻かせる処か亀仙人本人が制限した円の全てを使わせることすらできず、結果的にたかだか一步二歩進んだ距離の中で対処されている。

この圧倒的な状況に加えて出久と電気は様々な策をやっても尽く潰される事による精神的な絶望に体力すらも無くなりつつあった。

「どうした？二人とも・・・これで終わりなのか？」

「まだだ、俺達はまだ敗けてない」

「僕らはヒーローになるんだ!」

亀仙人の煽りに真つ向から反発する二人。

ぼろぼろの二人を見ながら、亀仙人はあくびをする。

「じゃが、もうお前達も倒れそうじゃぞ?」

確かに二人とも倒れそうなほどフラフラだ。

「俺達は（僕達は）倒れない!」

そう叫び、足に力を入れて踏ん張る二人。

恐らく、知らない誰かが見たら二人の事を根性のある人間と言うだろうが、二人にはそんなものはない。

この二人がこんな事になった原因は二人が互いに八つ当たりをしただけであり、そこに素晴らしいと思えるような感情はない。

ただの八つ当たりをしたガキがチャンスを貰うために意地を張っているただ其だけである。

誰もが生きてたらやる当たり前の事である。

亀仙人は二人を見ながら、そう非常にドライな感情を抱いていた。

出久と電気は、亀仙人を中心に互いに逆回転で廻り始める。

それはだんだんと速くなり、一人また一人と残像を生み出す。

二人とも三人ずつの残像を生み出し、計六人が亀仙人を囲んだ。

この策は二人の取っておきの策で1週間かけて編み出した。



1週間前1

仲直りをし、二人で1週間後の試練まで一緒に特訓するがやっていることはいつもの事、そのものである。

亀仙人は五時間以内に自分の物を奪えと言った。

試練の内容が出されているなら、対策は立てやすい。

二人はいつもの修行をしながら、あーでもないこーでもないと言った案を出していつては1考し、案を消していった。

出久は最初、素早く罫を作り出して追い込む案を出したが電気は却下した。

人から物を奪う試練と自ら言った亀仙人がそんな事を考えていないとは到底思えな
いと言い、出久はその却下を受け止めた。

電気は、物を投げるつて案を出したが今度は出久が却下した。奪うつて事は亀仙人は恐らく逃げる。それこそ二人が追い付けない程に動く可能性が高い。命中率か100%つて断言出来ないものに頼るのは危険すぎると言い、電気もまたその却下を受け止め

た。

互いに互いが思い悩んでいると電気が出久に本気で鬼ごっこをしようと言った。

1週間後の試練に対するトレーニングとして出久もOKと言い、始めた。

それをやって20分後ぐらいにとある事が起こった。

電気が鬼をやって出久を捕まえた。

何の変鉄もない結果だが、過程が違った。

出久が逃げている時に後ろに追ってきていた電気を見て、逃げようとしたら目の前に電気がいて捕まったのだ。

要するに電気が残像を残すほどのスピードで出久の前に回り込んだのである。

捕まった出久も捕まえた電気もこの事実に興奮した。

それこそ、興奮のあまり端から聞けば会話をすらない会話になるほど、

そこから二人は全力で特訓した。

足のマメが潰れてタコになっているが、それすらも潰すほど新品の靴がボロボロになるほど二人は走りまくり、特訓した。

そうして二人は根性で3つの残像を残せるほどになった。



根性で出した切り札。

二人にとってはこれ以上ない最高の作戦だ。

しかし、最悪な事を知らない。

残像を残すなんて、亀仙人・・・いや、亀仙人の住んでいた戦士達にしてみれば朝飯前の基本の技もとい使い古された技だと言うことを知らない。

全ての残像と共に亀仙人に突っ込んでいく。

残像と実体が混じり、どれがなんだかわからなくなる。

二人が抱いた淡い希望。

亀仙人は何の動揺もせずに実体だけを拳で砂浜に叩き伏せた。

「そ、そんな・・・」

「嘘だろ・・・」

切り札とも言える技すら、叩き伏せられた二人の顔は絶望に染まっていた。

事実、今まで何度も立ち上がっていたのが倒れたまま動けなかった。

「この程度でワシに勝てると思っていたのか？主らが今やった事などワシの知る者達はもつと多く、もつとはつきりと、もつと上手く使える。ワシの世界において残像拳は単純な基本の技だ」

亀仙人からの事実に出久も電気も涙を流した。

圧倒的な力の差に1週間かけて手に入れた切り札も全て通用する処か単純な技と言われ、二人のなけなしな自信も何もかも全てが吹き飛んだのだ。

「いつまでそうして寝ておる。それで誰かを守れると思つたのか? 誰かを救えると思つたのか? その涙は何だ!?! それを流せば何とかして貰えると思つたのか!?! 甘えるでない!!」

亀仙人の言葉に二人は立ち上がるが、そこはまだ亀仙人の円の中。亀仙人は容赦なく立ち上がった二人を蹴り飛ばす。

また倒れる二人。

「終わったのか?」

「まだだ!」

出久は立ち上がり、亀仙人に向かっていく。

電気はまだ立ち上がる事すら出来ていなかった。



くそ! 動けよ! 動いてくれよ!

緑谷が必死で動いてあがいてんのにも出来ないなんて、そんなの嫌だ！

動け！俺の体！

そう自分の体に言い聞かせる。

動いて欲しい。

動いて欲しいんだ。

緑谷とじいちゃんを見ると緑谷が簡単に遊ばれてる。

デコピンじゃなくて、本気で叩き伏せられてる。

いくらなんでもやりすぎだ。

いや、全部俺のせいだ。

俺が下らない嫉妬して緑谷を怒らして喧嘩してじいちゃんを怒らしてこうなったんだ。

全部俺のせいだ。

だから、助けるんだ。

助けて一緒に三人でもう一回修行するんだ！

動いてくれ俺の体！



電気はそう思いながら立ち上がった。

しかし、全くその場から動けずにいた。

体が言うことを聞かないのだ。

出久の顔面に亀仙人の拳が迫る。

それを必死で何とか動いて助けようとする電気。

しかし、体は動かない。

(動いてくれ! 俺の体だったら言うことを聞け!!)

そう心で叫ぶと電気の体から稲妻が走る。

電気は走る体制になり、亀仙人と出久に向かつて脚に力を入れる。

すると電気の姿は消えて顔面に拳が迫っていた出久はどういうわけか首根っこを電

気に掴まれながら、円の外に出られた。

わけのわからない状況に出久は目を張り、亀仙人もまた今の出来事に冷や汗を流す。

そしてやった電気は微笑かに笑う。

電気は出久を放すとまた消えて今度は亀仙人の真後ろに現れる。

その手には二本の内の一本。

赤色の紐があった。

「よっしやあああ!!!」

紐を掲げて叫ぶ電気。

亀仙人が本気で電気に詰め寄るが電気は円の外に紐を持ったまま出る。

「どうだ! じいちゃん!!」

「まだ後、一本残つておるぞ! その紐は腕に巻いておくと良い。ワシは取りはしない」

亀仙人は深呼吸してそう言うのと、電気は言われた通りに腕に紐を巻いた。

そしてまた体に稲妻を走らせる。

(なんて速さじゃ、全く見えなかった)

そう、電気はただ走って奪い取っただけである。

ただし、残像を残さないほどに亀仙人にすら見えないほど速く走ったのである。

1週間前に亀仙人は電気に言った。個性を上手く使いこなせばいいと電気の個性は『帯電』

電気を纏う個性である。

しかし、電気を吐き出す事もできる。

吐き出しと纏う事。

その両方をやったのだ。

限界を超えて新たな力いや技を生み出すことが出来たのだ。元々、電気は出久よりも速い。

無意識の内にその領域に達しつつあったのが今回の試練で殻を強引に破ったのだ。

電気は亀仙人に超高速で迫り続ける。

しかし、超高速だけで上手くいくほど甘くない。

どんなに電気が速く動いても音の壁は越えられない。

亀仙人は電気を見るのではなく、踏み込み音を聞き、何処から来るのかを予測して防いでいく。

デコピンをする余裕は無くなったが、腕だけで電気の猛攻を凌いでいく亀仙人はまさに武術の神と言える存在であろう。

それを出久は眺めていた。

ただ眺めているだけではない。殻を破った電気に驚きながら見ていた。



凄いい、師匠が見えないほどの速さに成るなんて稲妻が走ってるから、個性を応用したのか？

速い、これが個性を持つ人間の力？

無理なのか？

僕には個性がある人間を守れるほどのヒーローになんてなれるのか？

そう感じながら、僕は自分の手を見る。

デコボコした手。

無個性だつてことに嘆いていた手じゃない。

そんなのを越えていくつて誓つて修行した手だ。

『自分の個性が強いからヒーローになるわけではありません。その自分の全てを受け入れて限界を超えて行き、それを人の為に自分の為に道しるべとして使うからヒーローになるのです』

何年前前にオールマイイトがバラエティー番組で話していた事を思い出した。

ご都合的な思っただけで、ご都合でも何でも良かった。

吹っ切れた。

僕は無個性。

でもヒーローになる。

師匠とそして親友と一緒に！

気を手に溜める。

出来るか出来ないかは考えない。
自分を信じて限界を越える。

// Plus Ultra"だ



出久の手に気が溜まる。

青い光の球体になつていく。

そして上手く行くように祈るようにあの技の名前を叫ぶ。

「かゝ．．．めゝ．．．」

電気と亀仙人はこの言葉を聞く。

動揺と驚愕の二つの感情が走る。

電気は捲き込まれないように離れる。

亀仙人は自ら制限したルールに縛られて動けない。

彼の目はとてつもなく開いていた。

そう、悟空が初めてかめはめ波を撃った時のように

クリリンが初めてかめはめ波を撃った時のように

ヤムチャが初めてかめはめ波を撃った時のように

孫悟飯が1日だけ現世に出てかめはめ波を撃った時のように

自分がかめはめ波を撃つてフライパン山を吹き飛ばした時の驚いた牛魔王みたいに

驚きと名前のつけようがないある種の興奮。

「はゝ．．．．めゝ．．．．」

亀仙人も手に気を溜める。

かめはめ波ではない。

最早、そんな溜めてる時間はない。

掌サイズの球体が出来る。

「波!!!」

!!!

かめはめ波を放つ出久。

そのかめはめ波は亀仙人が放った物よりも遥かに小さく、遥かに輝きながら砂浜を突き進む。

だが亀仙人が放った球体と激突すると大量の砂埃を上げて消えた。

出久の顔が絶望に “染まっていけない”
その顔は希望に満ち溢れていた。

しかし、大量の気を放ち、膝をつく。

出久の元に電気が来る。

「凄えな!! 緑谷!! じいちゃんの技を使えるなんて」

「上鳴君……」

「でも、あれも塞がれちつ待ったなあ」

出久は電気の脚を見る。

プルプルと震えていて恐らくもう立ってるのもやつとだろう。

「上鳴君、最後の作戦がある」

出久は膝をつきながら、電気に提案し、電気も顔を出久に向ける。

消え入りそうな声で「作戦」を話すと電気は笑った。

出久も笑った。

「やるぞ、その作戦」

電気は出久に手を差ししのべ、出久も電気の手を取り、立ち上がる。

「これが失敗したら、確実に負けだよ」

「大丈夫だ。お前と俺なら出来る。亀仙流の弟子の上鳴電気と緑谷出久なら出来る」

二人は亀仙人に向かい合う。

その顔はあり得ないほど希望に満ちており、何処か清々しさも感じさせた。

出久はまたかめはめ波の体制になり、電気も稲妻を走らせて突っ込む体制になる。

“気”と“稲妻”が膨らんでいく。

恐らく最後の攻撃だ。

亀仙人は円の外に出られない。

しかし、これを見ている亀仙人は円の中心にわざわざ行つた。まるで正面から受け止めるように、そして自分もまた先程と同じように球体を作る。

かめはめ波ではないのは先程の攻撃でこれで充分だと分かったからだ。体力が消耗して二人がむやみやたらに力を入れたって先程に比べたら落ちてる。

命を掛けるかのように力を入れる二人。

「頼むよ、上鳴君！」

「頼むぜ、緑谷！」

“かめはめ波!!!!!!”

先程とは明らかに大きさが違うかめはめ波を放つ出久。

更に大きく、そして速かった。

亀仙人は素早く球体を放ち、また激突する。

先程よりも多い砂埃が互いの間に起こる。

何も見えない状況の中、亀仙人は踏み込み音を聴く。

今まで以上に大きな音を真正面から聴こえる稲妻の音と共に、亀仙人が現状できる最速の速さで両手を防御クロスする。

僅かコンマ一秒にも満たないほどの刹那的な時間後に電気が超高速で飛び蹴りを亀仙人に放つ。

二三センチ後退りしてしまうが亀仙人は確かに電気の最速の攻撃を止めた。

「惜しかったぞ、電気!!」

「いゝや、こゝれで良いゝぜえウエイ」

「何!?!」

馬鹿になりながらも闘志を失わない電気。

すると後ろから物音がする。

亀仙人が後ろを振り向くとそこには青い紐を取った出久がいた。

出久が考えた作戦とは、殻を破った二人の現段階の最大の攻撃を囿にする事だった。出久はかめはめ波をした後、なけなしの体力で砂埃の中、亀仙人の後ろを取ったのだ。勿論、普段の亀仙人ならこんな失敗はしない。

しかし、今回は電気の超高速と出久のかめはめ波。

2つの限界を越えた攻撃に対処できなかつたのだ。

もう2度と通じない連携。

一発勝負の博打を二人は勝つたのだ。

「見事じゃ、出久」

出久と電気はその言葉を聞くと倒れた。

「師匠!!」

暫くして、砂浜で寝ていた出久が起きた。

そんな言葉を叫びながら起きる出久を電気と亀仙人は笑った。

出久もつられるように笑った。

三人で笑った。

暫く笑っていると亀仙人がわざとらしく咳をして、出久と電気は静かになる。

「良く頑張った二人とも・・・己の限界を見事に越えた・・・じゃが武術を暴力にした事は何かあっても赦さん。この事を胆に命じなさい」

「はい!」

亀仙人の言葉に元気良く返事をする二人。

それを見ると亀仙人は歩き始める。

「さてと、明日からまた修行じやが、今日は二人に何か御馳走しよう」

「マジで!? 良いのか? じいちゃん」

「構わぬ。明日も頑張るなら・・・」

「頑張るぞ! じいちゃん!!」

亀仙人は出久の方を見る。

出久は電気のように返事はしなかったが穏やかな顔で頷いた。

先を歩く亀仙人。

電気は亀仙人に着いていこうと座ったままの出久に手を差しのべる。

出久もそれを手に取り、立ち上がる。

「これからも宜しくな」

「僕も宜しくお願ひします」

手を放し、先を歩く電気。

出久は先程まで戦つてた場所を見る。

かめはめ波と気弾の激突でクレーターが出来ていた。

そして自分の手を交互に見る。

「早く行こうぜ。出久」

出久は電気の方を見る。

苗字呼びではなくて名前呼び。

出久にとつては久しぶりでむず痒いものだ。

照れ臭そうに電気の横に行き、並ぶ出久。

「これからも宜しく。電気」

改めて出久も電気に話す。

そう二人はもうただの同門ではない。

親友になった。

共に笑つて、共に喧嘩して、共に怒られ、共に嘆いて、共に修行する親友。

彼らの亀仙流はここから始まる。

雄英高校入学編

オールマイト

あれから2年以上経ち、出久と電気は中学三年生になっていた。

相も変わらず、修行の日々を送っていた。

毎日、毎日地獄の修行の積み重ねに出久と電気の体は以前と比べてかなり変わっていた。

ほぼもやしっ子のような体つきの二人だったが今ではバランスの整った素晴らしい肉体になっている。

だが、ガチガチのムチムチのキン肉マンになっていないのは亀仙人からの教えである。

“ パワーを上げたところで当てなくては意味がない ”

との事、故に二人にはパワーを上げる修行ではなく当てる為に速さを鍛えていった。

こうして二人の雄英高校の試験まで後1年だった。



折寺中学

喧騒な教室の中に教師が入ってくる。

「えー、お前らも3年と言うことでそろそろ本格的に将来を考える時期だ。今から進路希望の紙を配るが・・・皆ヒーロー志望だよね！」

『ハーン!!』

「センセー！皆とか一緒にすんなよ。俺はこんな没個性共と仲良く底辺なんかに行かぬーよ!!」

いかにも昭和のチンピラを絵に描いたような性格の男。

爆豪勝己がメンチをきっていた。

話してる事はやれナンバーワンヒーローになるとかトップ納税者ランキングに名を連ねるとか俗物的な内容だ。

出久は後ろの席でそれを眺めていた。

確かに彼の個性は強力。

個性“爆破”

凄まじい威力を出せる個性。能力は名前の通り、掌から爆破を出せる。しかも起爆剤

は自分の掌から出るニトログリセリンのような汗であり、汗腺が拡がれば拡がるほど強力になってくる。

性格も相まって出久とは180度違う存在である。

「そーいや、緑谷も雄英志望だったよな〜」

クラスメイトの誰かが呟いた台詞にクラスが静まり返る。そして爆豪が凄い目付きで出久を睨む。

「おいこら！デク！何で無個性のてめえが俺と同じ土俵に立てるんだあ!？」

明らかにヒーローになるような人間の行動ではない。

ただのチンピラである。

しかし、出久はそんなチンピラに対して特にビビることなく目を会わせる。

「何でって・・・志望してるから・・・」

「だから、何で志望してんだよ!」

「ヒーローになりたいから・・・」

出久の言葉にクラス中が大爆笑になった。

当然、チンピラ本人も大爆笑である。

「なんで無個性のお前がヒーローになれるんだよ!？」

「別になれないなんて理由もないじゃん。前例がない＝無理じゃないよ」

出久の物言いにクラスが静まり返る。

いや、驚きのあまりに口が止まったのだ。

そもそも爆豪に対してクラスでも穏健な出久がここまで反論したのは初めての事だ。

まあ、出久からしてみれば亀仙人の方が百倍怖いし、修行の地獄さに比べれば爆豪との気まずい雰囲気からのプレッシャーなんてのは風の前の塵と同じである。

放課後

出久は座りながら、いそいそと自らのノートに最新のヒーローを更新していると横から爆豪が取り巻きを連れてやって来た。

「アークウ・・・まだ話しは終わってねえぞ」

爆豪は出久のノートを取ろうとするが、出久は素早く動きノートを取られないようにする。

手は空を切り、啞然とする爆豪。

酷く滑稽に見える。

何回かノートを取ろうとするも出久からすればもつと速い電気を知っているので、そ

れに比べれば遅い。

止まっていると勘違いするほどに遅い。

「デクの分際で〜」

恨み言を言ってるが出久は何も言わずに見ている。

「爆豪……もう行こうぜ……」

「そうだよ……な？」

身内に言われれば無理矢理に去っていく爆豪を出久は見ていた。

出久は荷物を鞆に入れて教室を出た。

階段を降りて下駄箱で靴を履き替えて学校を出た。

いつもならこれから亀仙人の修行が始まるが、今日は違う。

何でも亀仙人に外せない用事があり、放課後からの修行が無くなったのだ。

勿論、出久と電気はいつも通り修行をしようとしたが、亀仙人から1日ゆっくり休め

と言われたので二人とも休むことにした。



高架線の下を歩く出久。

薄暗くてうるさい所を歩いている理由は様々ある。

単純に近道だから、人がいなくて静かだから、まあ色々ある。

自分の少し落ち込んだ空気も癒される。

出久は落ち込んでいる。

別にヒーローになれないと言われるのはこれが最初ではない。

特に爆豪もといチンピラからは毎日毎日毎日、言われ続けてきた言葉である。

慣れたし、亀仙人の修行であまり気にしなくなった。

だが、それは言われて落ち込むのを克服したわけではない。

誰だつて褒められれば喜ぶ。

貶させれば腹が立つ。

嗤われれば落ち込む。

喜んでくれれば楽しくなるものである。

喜怒哀楽の単純な理論である。

出久のこの気持ちの発散は恐らく明日の修行で発散されるだろう。

そんな時、後ろのマンホールから突然何かの液体が、出久に纏まり憑こうとしたが、出

久は即座にその事に気がつき、避けた。

「勘がいいなあ」

液体が不気味な声を出す。

敵だ。

出久は直感した。

「よっせ、隠れ蓑!!」

敵が襲ってくるが出久は気弾を放った。

違法な個性の使用に該当すると思うがこの状況だ。

無断使用も糞もない。

出久は二三発放つが敵には全く効かなかった。

「嘘だろ?」

「そんなのが効くか!!」

敵は出久を呑み込もうと纏わりついた。

出久は手を素早く動かしたりして抜け出そうとするが抜け出せない。

何故ならこの敵は液体でそんな力任せでは絶対に抜け出せないからだ。

抜け出すには弱点を付くか、圧倒的なパワーで吹き飛ばすかしかない。

しかし、出久にはその両方とも無かった。

2年たった修行の成果は素晴らしくそこから辺の敵ですら諸ともしない程に出久も電気も強くなったが、相性の悪さは克服出来ないでいた。

「何で、この街にいつがいているんだよ？ ついてねえ」

（あいつって誰だ？）

「よこせ、隠れ蓑になれば、苦しいのは少しだけだ」

（絶対に嘘だ）

出久はもうだめだと思ったその時、後ろのマンホールが突然ぶつ飛んだ。

敵も出久もマンホールの方を見るとマンホールから大男が出てきた。

金髪で筋骨粒々の大男だ。

そう、彼の名は“オールマイト”

史上最高のヒーロー

「もう大丈夫だ少年！ 何故かって？ 私が来た!!」

オールマイトは思いつき力を溜めて・・・

「TAXES SMASH!!!」

強烈なパンチを解き放った。

液体の敵は吹き飛び、出久は意識を喪いそうになるも気合いと根性で耐えた。

周りにはのびてる敵の残骸が大量に散らばり、出久は荒い息をしながらも立ち上がった。

「いやー、いつもはこんなミスしないのだが、オフだったのと慣れない土地で浮かれ

ちやつたかなあ！」

爽やかに話すオールマイトに出久は固まったた。た。

そりやそうだ。

憧れのヒーローが目の前にいるんだから、固まらない方がおかしい。

「助けてくれて、ありがとうございます！」

90度腰をきつちりかつちり曲げてお辞儀をする出久。

オールマイトは少しばかり引いてる。

「何はともあれ、あとはプロに任せて君は離れなさい。いつ敵が起きるかわからないから」

「あ、あの少し聞いても良いですか？」

「なんだい？」

「個性が無くても貴方のようなヒーローに成れますか？無個性でもヒーローに成れますか？」

出久の言葉にオールマイトが何か言おうとするが、オールマイトの体から蒸気が溢れ

でる。

「だ、大丈夫ですか？」

「なんで、こんなに早く・・・」

オールマイトを中心に辺り一面に大量の蒸気が溢れる。

出久はその蒸気に思わず顔を手で隠す。

蒸気が収まり、オールマイトの方を見る出久。

そこには筋骨粒々の大男ではなく、ガリガリ鶏ガラな人間がいた。

「しぼんでる〜！えっ 偽物!？」

突如現れた謎の人物に驚く出久。

「私はオールマイト…」

謎の人物「オールマイト」は血を吐きながら話す。

見えていて痛々しい。

「プールで腹筋を力み続ける人がいるでしょ、あれと一緒さ」

「嘘だ!!」

何とも訳のわからない理屈にツッコミを入れる出久。

オールマイトはそのまま壁に背中を預けて座る。

「見られたついでだ少年。間違ってもネットには書き込むな」

オールマイトは自分のシャツを捲り、脇腹を出久に見せる。

その脇腹は酷い傷痕がまるで呪いのように痛々しく重く残酷に存在していた。

出久はその傷に思わず口を手で覆う。

「5年前の闘いの時に受けた傷さ」

「5年前って毒々チエーンソーの時に？」

「詳しいな、だがあんなチンピラにはやられはしないさ」

シャツを戻して笑顔を出久に見せるオールマイト。

「これは世間には公表していい事だ。平和の象徴は決して悪に屈してはいけないんだ」

オールマイトの言葉の重さに出久は黙って聞いていることしか出来ない。

「プロは何時だって命懸けだよ。とても個性が無くてもヒーローが出来るなんて言えないね」

明らかな拒絶。

それはオールマイトがプロであるゆえの言葉だろう。

「人の役に立ちたいなら警察って言うのもある。敵受け取り人なんて批判もあるがあれも立派な職業だし、ヒーローとの連携もキチンと考えられてるしね」

出久に夢を諦めろと言うオールマイト。

勿論、出久の夢は亀仙人によって鍛えられた為に最早頑として変わるなんてあり得ない。

しかし、憧れの人の言葉はある種、親や友人の言葉よりも遥かに重い。

それこそ天秤で測るのが馬鹿馬鹿しい程に重い。

「夢を見ることは悪いことじゃないが、現実も相応に見ないと」

オールマイトは立ち上がり、延びてる敵を一つ一つ丁寧にペットボトルに入れ始めた。

出久はその場を離れた。

出久の目からは涙が静かに流れていた。



ペットボトルに敵を入れたオールマイトは去っていった出久について少しだけ考えていた。

悪いことをしたとは微塵も思っていない。

どんなにヒーローを目指していても無理なものもある。

そう、自分がそうだった。

オールマイトも無個性の頃を思い出した。

7代目「ワンフオーオール継承者」の師匠に出会わなければずっと無個性のまま

だつたらう。

勿論、出久に対して何も思わないわけではない。

しかし、5年前の闘いとそれに伴う代償のせいで夢物語にはほとほと疲れたのだ。

平和の象徴を辞めるわけでも力を継承させないわけでもない。

しかし、無個性だった自分を重ねて出久に無責任にヒーローに成れると言つても彼の人生を壊すだけだと思つたのだ。

ペットボトルに敵を全て入れるとオールマイトはその場を後にした。

しかし、彼は気づかなかつた。

たったホントに一ミリリットルにも満たない程の敵の体が道路脇にある用水路に流れていた事を

これはオールマイトのせいでも出久のせいでもない。

不運なだけだ。

しかし、この不運は必ず返ってくる。



一人、道を歩く出久。

先程のオールマイトの一言が強烈に心に來たんだろう。
別に否定されるのは慣れてる。

しかし、憧れからの否定と知ってる人間からの否定は根本的に違う。

一人、涙を流しながら歩く出久。

その足取りは重い。

そんな出久に近づくと人間がいた。

上鳴電気だ。

肩を叩き、明るく接触してきた電気に出久も少し驚く。

「電気、どうしたの？」

「帰りがてらブラブラ遊んでたんだよ。折角の休みだしな」

「そう・・・」

「どうしたんだよ？そんなに暗くなって・・・何時もの事だけど・・・」

「ちよつと!？」

電気からのまさかのカミングアウトに驚く出久。

顔には心外と書いてる程の反応である。

「僕はそんなに暗くないよ!」

「いやいや、毎日ブツブツ言ってるから!あれは見てて暗いと思わねえから!」

「僕は電気と違って無駄に明るく無いだけだよ!!」

「無駄とはなんだ!?!無駄とは!？」

少し、言い争う二人。

互いに互いを弄くりあう、その時の出久の顔は先程の暗さは薄れていた。

「真面目な話、何があつたんだよ？」

「電気はさ、誰かから夢を否定されたことはある？」

電気に話す出久。

そこにはキチンと話して欲しいと言う出久からのプレッシャーもあり、電気も真面目に考える。

「あるぞ、それは多分誰でもあると思うぞ」

「そうだよね・・・ごめん、変な事聞いちゃって・・・」

「もしかして、ヒーローの誰かから言われたのか？」

「へ？」

電気の推論に思わず変な声を出す出久。

そりゃそうだ。

こんな推論になんて聞いてても達する人間はそういない。

「どうして？」

「だって、ほら、出久がいつも言われてるって勉強してる時に良く言うから、ここまで落ち込むってヒーローに言われるぐらいじゃないかと思つて・・・」

電気の推理は物の見事に的中していた。

出久はそれに対して沈黙していた。

電気は出久の沈黙に対してこれから話を切り出すなんて出来なかつた。

必然的に沈黙が長く続く状態の最中、近くの商店街から爆発音がした。

出久と電気はあくまでもヒーロー活動の見物として現場に行った。そこには先程の液体敵に纏まり憑かれてるチンピラもとい爆豪の姿があった。



出久が電気と話してる間。

液体敵はどうやってオールライトから完全に逃げるかを考えていた。

そんな事を下水道で考えながら、自分の体を回復していった。

そんな時に下水道に足音が響き渡る。

液体敵はその足音のする方向を見ると、変な奴が立っていた。

「白くて不気味な奴」だ。

だが、自分とは明らかに違う存在に液体敵は全力で逃げまくり、たまたま道に出た時にたまたま近くを歩いていた爆豪に取り憑こうとしたのだ。

「おやおや、急に逃げるとは失礼ですね。まあいささか推薦するにはお粗末でしたから良いでしょう」

「白くて不気味な存在」は一人、下水道を後にした。



出久は電気と共に液体敵に取り憑かれてる爆豪を見ていた。

必死に抵抗しようと思われまくる爆豪の二次災害でドンドンと現場は混沌と化している。

「そんな、何であれが？」

「あれを知ってるのか？」

電気からの問いに出久は先程の事を全て答えた。

ただし、オールマイトの傷の事は伏せて

暴れる爆豪の目を見てとっさに足が動く出久。

電気は出久の手を掴み止めた。

「離して、電気！行かないと助けを求めてる！」

「バカ！お前が行っても役に立たねえだろ！」

「それでも行かないと、誰かを助けるのがヒーローだから……」

出久の言葉に電気は手を緩めなかった。

しかし、出久に顔を近づけた。

「なら、俺も行く！俺だってヒーローになる！無茶するお前を助ける！」
電気の強い言葉に出久も頷いた。

出久はまず気弾を液体敵の目に目掛けて放った。

目を潰して視界を奪う。

しかし、相手は液体だからもって数秒だ。

当然、たかが数秒で事態は好転しない。

上鳴電気がいなければ

電気の超高速で一瞬緩んだ液体敵の拘束から爆豪を引っ剥がす。

それは電気でないと恐らく出来なかつただろう。

刹那的な時間で動ける電気の十八番の技だ。

爆豪を引っ剥がした電気はそのまま爆豪を近くにいたヒーローに渡す。

出久はそれを確認したら、戦線離脱をしようとした。

しかし、液体敵も直ぐ様に回復をして、出久の腕を取り込んだ。

出久の攻撃そのものが液体敵に効かないのは先程証明された。

肘まで取り込まれ、電気を含めた他のヒーローが突っ込みに行く。

しかし、どんなヒーローよりも早く突っ込んだヒーローがいた。

オールマイトだ。

出久の手を掴み、地面に思いつきり、最大限のパワーを持って拳を撃ち込んだ。

「DETROIT SMASH!!」

液体敵はまたもや四方八方に飛び散り、今度こそ完全に縄を頂戴することになった。



一時間ぐらいの間、出久と電気はプロヒーローからありがたい説教を受けていた。

下手をすれば更に被害を拡大する所だったので勿論それは二人とも甘んじて受けた。

ただし、それと同時にあることも言ってくれた。

一番、最後までできつく言ってたプロヒーロー「デステゴロ」からの言葉だ。

「君達が今回やった事は決して許される事ではない。危うく自分の身も危険に晒すところだったんだぞ！・・・次はキチンと訓練を受けたプロになってからやるんだ！」

出久も電気もこの言葉に嬉しくなった。

プロヒーローからの激励だ嬉しくないわけではない。

まあ、笑顔を見せたとたんに拳骨まで貰ったのは痛かったが二人とも親身になって怒ってくれたヒーローには感謝こそあれ、怒りなんて感情は全く無かった。

二人で帰り道を歩いている最中、爆豪が二人の前にやって来た。

語る言葉はやれ何で助けたとか、お前の助けなんか無くても良かったとか、俺を見下そうとか、何とも一体どういう教育をされたらこんな酷い人間になるのかと言うような内容だった。

電気と爆豪はこれが初対面だったから、電気も爆豪に対して話そうとしたら、金髪モブと暴言を受けた。

結局、言いたい放題言った爆豪はそのまま去っていったが二人、特に電気は爆豪に対してキレていた。

「何だ？あの糞を下水で煮込んだ性格は！？良くあんなチンピラと付き合えるな出久」
「僕もそろそろ辞めたいけど、家が近くだから否応なしに係わっちゃうんだよね」

「家に塩を撒いて、お祓いして貰えー！」

電気の怒りの言葉に出久は黙って聞いていた。

別に思うところが無いわけではない。

ただ、それほどもでに爆豪のやって来た事は重いのだ。

そんな中、オールマイトが筋骨粒々の姿でやって来た。

「いたいた！少年たち!!先程はプロヒーローとして礼を言いたいありがとう！」

「お、お、オールマイト!!？」

オールマイトの登場に驚く電気。

出久はさつき個人的な話もしたから現れた事に関してはあまりだった。

「君達、二人には色々と思ひ出させて貰ったよ。危うくヒーローとは名ばかりの木偶の坊になっていたよ」

「でも、僕達は結局、迷惑を掛けました」

「俺達、体が動いて……」

二人の言葉にオールマイトは待っていたとばかりに答える。

「そうだ！二人とも体が動いてたんだろ？多くのヒーロー達の中でも伝説となっている人達は免許なんて物が無かった時から逸話を多く残してる。『体が勝手に動いていた』

とね。君達もそうだったんだろ？……君達はヒーローに成れる」

現在の日本最高のヒーローからの激励は二人の涙腺を崩壊させた。

それほどまでにこのヒーローからの言葉は優しく大きいのだ。

オールマイトは筋骨粒々の姿から鷄ガラの姿になった。

電気は驚いていたが、オールマイトは出久にやった説明と同じ説明を電気にもやった。

傷の事も含めて……

「緑谷少年、君に私からの提案があるんだが？」

「何でしようか？」

「私の個性を引き継ぐ気はないか？」

「え？」

オールマイトの説明は常軌を逸していた。

個性を引き継ぐなんてそんなぶっ飛んだ話はない。

しかもそれがまるで聖火の如く引き継がれてきたなんてのは個性史始まって以来の
大事件だ。

出久は驚き、電気も驚いた。

「何で、僕なんですか？力や飛び出したなら電気でも……」

「俺は要らねえぞ」

「へ？」

出久の疑心に電気が率直に答える。

「な、何で？」

「だって俺、個性あるし、亀仙流あるし、もう要らねえよ。宝の持ち腐れはごめんだよ」
電気は要らないのだ。

彼にとつて力とは身近な物である。

自らの個性と亀仙流。

この2つで電気はやっていくと誓ったのだ。

今さら、新しい個性なんてのは興味はあるが欲しくはない。

「緑谷少年、今は整理する時間が欲しいだろうと思うから3日後に返事が欲しい、出来るか？」

「わ、わかりました」

オールマイトはその場から去っていた。

残った出久と電気は互いに顔を見合わせた。

「すげえじゃねえか！出久！オールマイトの個性だぜ！貫つとけよ！」

電気の言葉に出久は戸惑う。

「なんだよ？」

「僕で良いのかなって、それに電気だつてあの時一緒に……」

「俺は要らないって……だつて俺の憧れはじいちゃんだからな。亀仙流と自分の個性でヒーローになつてやる」

出久にとつて電気という言葉は眩しかった。

自分の人生をきつぱりと決められる電気は文字通り眩しかった。



あれから、互いに別れて家に帰り、出久は柔軟を終え、オールマイトの事を考えてた。オールマイトからの誘いは嬉しかった。

自分の憧れてきた人からの誘いだし、自分の無個性をどうにか出来る。

きつぱりと直ぐに受け継ぎますと言いたいのと言いたくない自分が出久は戸惑っている。

悩んでも答えが出てこず、出久はとある人に電話を入れて海岸に向かった。

●●●
海岸の浜辺の街頭の下のベンチでエロ本を読みながら、情けない顔を晒してる亀仙人。

いつも通りの平常運転にやって来た出久はどこか安心した。

「師匠！」

「おお、来よったか？」

出久は今日会った事全てを話せなかった。

オールマイトの秘密はかなり重大でとても気軽に師匠とは言え話せる内容ではなかった。

必死に自分の中で掻い摘みながら、話した。

亀仙人も読心術が使ってそれを理解した上で出久の話を聞いていた。

「ようはそのテレビゲームの主人公が力を引き継ぐことが出来て何も問題がないのに引き継ぎたくないと言ってる。そんな事があるのか？と言う事じゃな？」

「そうです」

亀仙人はエロ本を懐に入れて、財布を出した。

財布を開いて中からあるものを取り出した。

一枚の写真だ。

そこには、力の大会で一緒に戦ったメンバー（フリーザを除いた）全員と撮った写真だ。

「これは初めて見せるな」

亀仙人はその写真を出久に渡した。

出久は初めて見る写真をマジマジと見ていた。

「師匠、この人達は？」

「ワシの大事な仲間達じゃ、今は離れて違う場所にいるが、その内の山吹色の胴着を来た三人の内、二人はワシの弟子で、もう一人はその弟子の息子じゃ」

出久は山吹色の胴着の三人

// 悟空 //

// クリリン //

// 悟飯 //

を見た。

「じゃが、その二人はワシの流派ではあるがワシの流派を広めてはおらん」

出久はその言葉を聞いて疑問に思った。

どうして亀仙流なのに自分の流派を広めないのか？

心の底から疑問に思った。

「どうしてなんですか？」

「必要ないからじゃ、ワシの大事な教えはキチンと弟子達の中にある。これからもあり続ける。ワシのような古い人間の教えなんて永遠に続くべきではない、弟子達には弟子達のやり方がある、ワシはそつちをこれからの世代に教えて欲しいのじゃ」

出久は言葉の意味が分からなかった。

継承とは全てを継承するから継承なのだと思った。

今もそう思っている。

「出久よ、大事なものは力ではない。何を受け継ぐかじゃ、そしてそれを決めるのは出久自身じゃ」

亀仙人の言葉に出久は答えが出たのか、爽やかな表情で亀仙人を見ていた。

亀仙人も出久の表情に満足したのか、再びエロ本を読み始めた。



三日後の浜辺に出久とオールマイトはいた。

今日は亀仙流の修業があるが、亀仙人に話して特別に今は休憩を貰っている。

因みに亀仙人と電気は互いにこの事を自分なりの方法で知ってるので離れた。

「それでは緑谷少年、答えを聞かせてくれるかい？」

「はい！」

「私の個性を引き継ぐ話なのだが？」

「僕は『引き継ぎません』」

出久の言葉にオールマイトは極めて平常にそれを受け入れる。

「そうか、理由を聞いても良いかな？」

「最初は分からなかったんです。継承するの意味が……でもある人から教わったんです。

大事なのは力だけじゃないって、それを選ぶのは僕自身だって」

「そうか……」

「僕は自分の力でヒーローになります。ヒーローになって『貴方の意思』を継ぎます。

それが僕の『継承』です」

出久の言葉にオールマイトは感慨深い物を感じた。

それは、自分が三日前に勝手にそうだと思い込んでいたヒーローを目指す若者の言葉

ではなく、若者のヒーローの言葉だったからだ。

「君は雄英に入るのかな？それとも士傑かな？」

「雄英を目指してます！」

「そうか、来年からは私も雄英の教師として勉を振るう事になっている。君も……上鳴少年も二人とも待つてるよ」

「はい！」

オールマイトは去っていった。

浜辺に立つ出久の姿は誰よりも眩しかった。

〃無個性 〃でもヒーローを目指す姿は 〃個性 〃飽和社会に置いて誰よりも気高く見えるだろう。

ここからが出久の本当の苦難の道である。

けど大丈夫であろう。

それは出久が亀仙流で平和の象徴を継承すると誓ったから……

雄英入学試験・・・まさかの瞬殺!!?

オールマイトの出会いから1年間。

出久と電気は毎日毎日地獄の修業を乗り越えて強くなり続けた。

具体的にどんなに強くなったかと言うと、

緑谷出久

力と業で闘うオールラウンダーな戦闘スタイルにかめはめ波等の多彩な気弾を操れる。

上鳴電気

超高速とそれに伴う圧倒的な力で闘うスピード特化型な戦闘スタイルになり、超高速の最高速度は亀仙人ですら見えない。

とまあ確かに二人とも桁が違うほどに強くなっていった。

はつきり言って下手なプロでは敵わないほどに強くなっていった。

そして、二人の修業も日に日に激化していた。

四肢につける重りは合計80キロになり、日常生活ですら風呂に入る時と寝る時以外

は着用。

また、こんだけ強くなると普通は中学校時代の体育祭とかマラソン大会で目立つ物だが修業の鬼でもある亀仙人はその時でさえ重りを外させなかった。

しかもそれを勝手に外さないように当日は観客として監視しているほどに・・・
結果的にだが、一般平均とそこまで差を出すことは無く、二人は無茶苦茶強くなった。

更には元々修業の一環で始めた海岸のゴミの処理も殆ど終わらせていた。

殆どなのは主にこの作業は地獄の修業の一環でしかなく、それをメインでやってる日が無いからである。

また気の修業が始まったら、さらにゴミの処理の量も相対的に減っていた。

そして、入学試験2日前。

全ての修業を終えた二人は亀仙人と話をしていた。

「主ら、良くこのワシの修業を全て耐えて乗り越えた！素晴らしいことだ、明後日の入学試験でどのような結果になるうともワシは主らの夢を応援し続けさせて貰うぞ！」

「つまり、それって・・・」

「もう、ワシの修業は終わったのじゃ」

亀仙人の言葉に出久も電気も何とも言えない感覚になる。

修業が終わったこと事態は嬉しいが、いざ終わると不安が残るのが人間の性。

「ワシからの修業は終わったが、お主達にはこれから苦難が多く待っている。これからの日々の修業は自分で始めるのだ！そしていつかお主達にしか出来ない亀仙流を越えた存在になるのだ！」

「師匠……」

「じいちゃん……」

「よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休め、人生を面白おかしくはりきつて過ごせ、亀仙流はお前達と共にある」

亀仙人から教えられた亀仙流の極意。

二人はそれを自分の脳に焼き付けた。

何年もかけて互いに必死に高めあってきた二人。

彼らはこの教えさえ忘れなければ道を間違えないだろう。

何故なら、それは彼らが亀仙流だから……



2日後、遂に始まった雄英高校入学試験。

たくさんの中学生が雄英に集まる。

黒い髪の男、眼鏡をかけた男、触手を持った大男、カラスのような顔の男、尻尾の生えた男、キラキラしてる男、ガタイの良い大男、気弱そうな大男、ブドウ頭の小さい男、肘がテープになってる男、丸っこい女、耳たぶがイヤホンの女、マゼンタ肌な女、蛙のような女、透明な女、爆発マンこと爆豪。

そして我らが二人、

緑谷出久と上鳴電気。

まだまだ生徒は恐ろしく多くいる。

この中の何名かしか、通れない狭き門。

それが雄英入学試験である。



雄英高校の筆記試験が終わった。

次の実技の説明まで20分間ある。

出久と電気は互いに試験会場の外に行き、お互いの出来について話し合っていた。

「出久、どうだった？」

「自己採点をもう一回キチンとやらないといけないから、詳しい事は分からないけど手応えはあった・・・」

「マズイよ、俺、ダメかも・・・」

いつも無駄に明るく、無駄にポジティブが売りの電気の言葉とは思えないほどの暗い発言はさすがの出久もちよつと引く。

「大丈夫だよ、電気！昨日一緒に最後の確認をしたじゃないか、絶対に大丈夫だよ！」

「出久〜!!」

出久に抱きつく電気。
急な事により、バランスを崩して倒れそうになるがとある女が二人を触ると二人は少しだけ浮いて、体勢を立て直した。

「良かった〜」

丸っこい女が自分の個性を使って体勢を立て直させてくれたのを二人は理解した。

「ありがとうございます！」

はもってお礼を言う二人に女は笑顔を見せる。

「いいよ、転んだら縁起悪いもんね」

出久と電気は女の健気さに思わず不細工な面をしてしまう。

これには流石に少女も啞然する。

「ちよつと大丈夫？二人とも・・・」

「すみません・・・」

「大丈夫・・・です・・・」

「それじゃ、二人とも実技も一緒に頑張ろうね」

去っていく少女に二人は見惚れていた。

「女の子と話しちゃった・・・」

「すげー、綺麗だった・・・可愛かった・・・」

出久と電気は中々ない体験に内心興奮しながらも、共に実技試験の準備を始めるために更衣室に向かった。

●●●
更衣室では多く受験生が動きやすい服装に着替えていた。ジャージだったり、トレーナーだったり、胴着だったり、自由が売りの学校らしく全員多種多様な格好だった。

出久と電気はとある服に着替えていた。

それは山吹色で背中と左脇腹に亀のマークがある胴着。

亀仙流の胴着を着た。

中々派手な服装になったので二人ともかなり目立つ。

しかも同じ胴着だから余計に・・・

「派手だね・・・」

「良いじゃねえか・・・格好いいじゃん！」

恥ずかしがる出久と喜ぶ電気。

正反対の二人の反応は亀のマークを背負いながら実技試験の説明会場に行った。



説明会ではプロヒーロー プレゼント・マイク が何ともまあ目立つ説明をしていた。
た。

制限時間 15分

倒すべき仮想敵は4種類

内の一種類は0ポイント

それ以外の目立ったルールがないシンプルな試験だ。

会場に向かう受験生達は同校の知り合いが被らないように別々に別れるように決められていたが、同門である出久と電気はまさかの同じ会場になっていた。

「マジかよ・・・」

「お互い、変な誤解を産まないように離れておこう」

「賛成」

出久は会場のゲートの左端に、電気はゲートの右端に行った。

「スタート!!」

雄英側が何とも急に始めるが、反応できなかつた人間は極僅かである。

その中に出久も電気も入っていない。

二人は誰よりも先に飛び出し、互いに向かってくる仮想敵を一体ずつ瞬殺した。

倒した後、一瞬だけ目を合わすと互いに別方向に向かつていった。

出久は左に電気は右に

そして、出久は気弾を使って10体の仮想敵を葬り去り、電気は持ち前の超高速を

使つて8体を再び瞬殺。

8分後

出久は持ち前の気のコントロールと力で仮想敵を既に80体破壊していた。電気も負けておらず、超高速の一撃必殺と電撃で同じ80体破壊していた。

互いに互い、離れていても同じ数になってしまふのは何とも息があつてると言うか縁が深いと言うか非常に反応に困る物だった。

しかも、この時点で既に二人とも同率一位の雄英始まって以来の快挙である。

因みにここままでやると他の受験生はどうなるんだと思うが雄英は二人が互いに左と右に別れた瞬間に中央、左、右に仮想敵を雪崩れ込ませて決して出久と電気が理不尽な大量得点をしないようにしていた。

まあもう既に理不尽な程の得点ではあるが・・・

更に驚くのは二人とも人を助けながら行っているのだ。

出久は持ち前の気弾を使いながら、眼鏡の男や黒髪の男を後ろから襲おうとした仮想敵を撃退。

電気は持ち前の超高速をいかして、仮想敵に囲まれていた耳たぶが長い女を助けていた。

この入試には受験生に教えていないもう一つの採点がある。

それは救助ポイントと言う物だ。

大きなお世話をして人を助けるのがヒーローの本望であり、またそれは打算でやってはいけないと言うのもヒーローの本望である。

故にこの救助ポイントは公にせずまたそれを採点してるのは雄英教師のプロヒー

ローのノリと判断で決まっている。

この事を加味すると、

緑谷出久 合計ポイント95点

上鳴電気 合計ポイント98点

である。

因みに何故、電気が3点高いかと言えば女性を助けた時にこういう青臭い感じの事が好きなヒーローが何故か多目に付けたと言うのが理由だ。

まあ、二人とも別に点数を競ってる訳でもないし、そもそも二人とも救助ポイントなんてのは全く知らずに人を助けながら稼いでるため、あんまりそこに意味はない。

ともかく桁外れな二人だけでなく、77ポイントを稼いだ別の会場にいる爆豪も本来は強烈な印象を与える筈だったのだろうが、この二人に比べればいくらか見劣りしてしまう。

これは決して爆豪が弱かったわけではない。

二人が化け物すぎたのだ。

そして残り、3分

0ポイントの怪物が会場に現れる。

有に20メートルは越えるロボットは辺り一面を破壊しながら、受験生目掛けて進

む。

受験生達は0ポイントから逃げ、出久と電気も一緒に殿として周りを見ながら逃げる。

そんな中、二人は受験生の中で一人足りないことに気づいた。正確には先に逃げた受験生の一人が残された一人に向かって叫んだのを聞いたからだ。

出久と電気が後ろを見るとそこにはさつき転ぶのを助けてくれた女がいた。

出久と電気は咄嗟に体が動いた。

自分の体から稲妻をバチバチと走らせてその稲妻を手に集中する電気。

自分の体から気をゴウゴウと唸らせてその気を手に集中する出久。

二人は互いに左右対称のかめはめ波を撃つ体勢になっていた。

「雷豪・かめはめ波!!」

「豪龍・かめはめ波!!」

大きな稲妻のビームと螺旋回転をする気的光線が巨大な0ポイントの仮想敵に直撃

し、風穴を開けた。

二人が出した業はかめはめ波を元に二人が独自の方法で作った新しい業だ。

出久の豪龍・かめはめ波は気を多彩に操る出久が螺旋回転をさせて、威力その物をかめはめ波より更に上げた物。

電気の雷豪・かめはめ波は稲妻を手に集中させてなけなしの気の操作をして一直線に稲妻を放つ物。

両方とも亀仙人からは「かめはめ波」の名前は付けなくて良いと言われているが、二人はあくまでもリスペクトの意思として付けた。

性質も効果も全てが違う。

正しくオリジナルのかめはめ波。

未だに両方とも亀仙人のかめはめ波には敵わないが、取って置きの二人の切り札である。

そして、その切り札を受けた0ポイントは倒れた。

周りの受験生はとんでもない事をした二人に無茶苦茶ドン引きしている。

そして話の中心の二人は、切り札の予想外の消費にその場に座り込み、動けなくなっ

た。

●●●
あれから30分後。

漸く動けるようになった二人は雄英教師の誘導の元に雄英高校から出た。

「出久、俺達大丈夫だよな？」

「仮想敵のポイントなら大丈夫な筈だ。僕は85体は最低でも倒してる。電気は？」

「80越えた辺りから数えてねえ・・・」

二人とも実技試験の事は考えていたが、まさか数を後半になったら数え忘れる事になるとは思っても見なかった。

確かに80を越えたら大丈夫かと思うがそういう油断をすると落ちるのが世の常である。

出久と電気はこの自分達がやってしまった怠慢に嫌な予感を感じていた。



1週間後

出久はリビングで柔軟をしていた。

あれから1週間経ち、出久も電気も互いに合格発表を待っている。

その後、亀仙人の元に報告に行き、80を越えたら数え忘れた事も含めてありのままを話したら、恐ろしいくらい激怒された。

勝負の最中に気を抜く馬鹿者がおるかと言うことで、読者に取ってみれば5話ぶりの殺人ボールに死ぬほど追われた。

しかも最悪なのが亀仙人が浜辺から出ないようにガードしていた為、二人はその日ホントにベットに倒れ込むはめになった。

「雄英受けるっただけでもすごいことだと思うよ母さん」

リビングで作業をしている母親の言葉が何気に落ちときのように聞こえるが、筆記試験の自己採点はギリギリ合格で実技も手応えありだ。

まあ、試験日の夜に怒られた地獄を見たら、誰だっって不合格になったんだと思うのも必然である。

「いずずずずずず．．．出久！郵便来てた！」

突然、母親からの言われた雄英高校からの合格通知に出久は一先ず、部屋の中で開け

ることにした。

部屋の机の前で手紙を開けると中から3D液晶パネルが出てきた。

スイッチを入れる出久。

すると黄色スーツのオールマイトが投影された。

「私が放映された!!」

ドアップなオールマイトの顔に少しビビる出久。

「ハハハ!!私も教師になって君達に教えるからね。緑谷少年!なんたつて君は……え?……何?……巻きでお願いつて……スケジュール合ってるよね?……今日の内にはやるの!?!……マジか……」

オールマイトの何とも締まらない言葉に出久の緊張は溶ける。

「んん!それでは結果発表と行こう!緑谷出久少年!筆記試験はギリギリ合格!そして実技試験は何と敵撃破ポイントを2位で通過!!」

オールマイトの言葉に思わず手を挙げる出久。

「更に君は実技試験の最中に様々な人を助け、最後は上鳴少年との見事な連携!素晴らしかったよ!我々が見ていたのは敵撃破ポイントだけでなく、人を助ける救助ポイントも見ていた!しかもそれは審査制のね。君の救助ポイントは何と45ポイント、敵撃破ポイントと合わさって、君の総合ポイントは140ポイント!惜しくも2位のままであ

るが、それでもこれは雄英始まって以来の快挙だよ！おめでとう緑谷少年！」

オールマイトの絶賛に出久はもう滝のように涙を流していた。

「……が君の『ヒーローアカデミア』だ」

オールマイトはその言葉を言うとホログラムが消えた。

出久は涙を流しながら、母親にそれを報告。

二人揃って滝のように泣いた。

暫くして、涙も収まった出久は再び柔軟を始めようとしたら、電話がなり母親が手に取った。

そして、出久に渡してきた。

「もしもし?」

「出久か?」

「電気、どうしたの?」

「お前は受かったか?」

「受かったよ。電気は?」

沈黙が流れ、出久は最悪の結末を想像する。

「まさか?」

「『首席』で合格だって!!!!」

「えええええー!?!?!」

「じゃあ、一位通過って電気なの!?おめでどう!!」

「ありがとう出久!」

まさかの予想外の展開に出久も電気も興奮が覚めない。

正確には言うなら、二人ともこれを大声で話してるせいで互いの家族に知られていて、互いの家族も大喜び中だ!

「俺はヒーローになるぞ!ナンバーワンのヒーローに!」

「僕だつてなるよ!最高のヒーローに!!」

「よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休め、人生を面白おかしくはりきつて過ごせ、亀仙流は(僕/俺)達と共にある!」

互いに亀仙流の大事な教えを言い合いそして、二人とも笑った。

その次の日、お互いの家族が亀仙人も交えて親睦会と合格祝いをやった。

互いの親が自分の息子達を誇りに思ってくれ、亀仙人もまた二人を誇りに思い、祝いの品をやった。

まあ、それがエロ本で互いの母親からプロレス技を掛けられてたのを出久と電気は楽

しく見ていた。

見せつける超パワー！個性把握体力テスト

雄英高校。

様々なヒーローを選出して言った日本のヒーロー名門の学校。教師は全員プロヒーローとしての免許を持ち、様々な面で生徒に苦難とケアを同時に与える。

また卒業したら一人前に成れるわけではなく、サイドキックを経験したり、海外ボランティアをしたり、または違う国に行つてそこでヒーロー活動をしてから日本に戻つてくる人もいる。

ここ最近ではルーマニアが多い。

現に雄英高校生徒には様々な留学生がいて、今年のヒーロー科で二人、二学年、三学年は更にいる。

海外で活動するところを視野どころか何時何処にも行つて良いように学年が上がればもう海外の活動を前提にしてる授業も多々ある。

お陰でヒーローに成れなくてもビジネスマン、職人、経営者など様々な分野での漬しが効きやすい学校としても有名である。

そして今年からあることが加わった。

それは全生徒が寮生活をするのである。

これは、校長がこれからの時代の為に互いを知り、尊敬し、何時以下なる時も知らない相手と連携して解決していけないといけないと言いう意思から来たものだ。



とある雄英高校の中にある会議室では先日の合格者達をもう一度教師全員で見ているた。

「しかし、今年は随分と豊作だな」

「ああ、1位と2位がずば抜けて高いが寧ろ3位も例年から考えると充分驚異的だ」

「敵ポイントだけで77ポイントだろ? トンでもねえタフさだぜ」

「けど、やっぱり1位と2位は桁が外れすぎてる」

「過去最高の140オーバーで僅か3ポイント差。希に見る大接戦だったな」

「しかもあの0ポイントに向かっていったからな」

「毎年、向かうやつがいるが、あんなことをするやつは暫く見てなかったな」

「推薦入試もレベルが高かったですよ」

「過去最速の記録を出した奴がいるんだろ?」

「ええ、士傑を選びましたが・・・」

「まあ、大事な事だし、本人の意志が最優先だ」

一人の教師が出久と電気が0ポイントを倒した時の映像にする。

「同じ胴着ね」

「同門なのか？」

「下手に協力はしてないんだろ？してたら何のために不合理に会場をたくさん作ったのか分からなくなるぞ」

「それは大丈夫だよ。試験官だったマイクも流石に同じ胴着の二人が現れた時に監視はしてくれてたしね」

「どうなんだ、マイク？」

「コイツらは開始して直ぐ様、互いに別方向に行つて最後の最後まで絶対に交わろうとすらしていないかった。明らかに協力はしてない、してたら俺はヒーローを辞めたつて良い」

プロヒーロー達はその言葉に少し安堵した。

折角色々個人成績を見ようとあれこれ苦心してきたのが無駄になる恐れだったからだ。

「0ポイントをワザワザ倒したのは個人的には減点ですね」

「と言つて？」

「別にどんだけ派手にやろうがその後も動けばいい、自分から動けなくなるほどの大火力を放ったコイツらは減点です」

「相変わらず、キツイね。相澤くん」

「オールマイトさん」

「助ける人に希望を与えるのがヒーローだよ?」

「ヒーローが動けなくなったら絶望しかないでしょ」

オールマイトと相澤と呼ばれた男の静かな視線の交わし合いは部屋を重くする。

「一まず、これで会議は終わったが二人には苦難が待っていると言うことが確定された。」



出久は荷物を持ち、靴を履く。

「出久、格好いいよ」

「ありがとう」

母親からのエールに出久は雄英を目指す。

途中で電気と合流し、互いに少し、駆け足になりながらも楽しく雄英に向かっていった。雄英の門をくぐる二人。

「あー、その二人！」

突然、用務員の人に呼ばれ、二人はそつちの方を見る。

「これからの寮生活をする為の荷物はここで預かる事になってるんだ。渡してくれないか？」

「わかりました！」

「ありがとうございます！」

大荷物を渡し、教室に向かう二人。

まだ8時を過ぎたぐらいで一時間以上前だ。

二人とも1年A組教室に一番乗りするために結構駆け足で行く。



巨大な教室の扉。

どんな個性の持ち主でも不自由が無いように雄英が配慮した扉。

大きすぎて重いと言う印象がありそうだが、材質が軽い為かそこまで重くはない。

出久と電気は扉を開けて

「一番!!」

と大声で言った。

電気はともかく出久もこんな事を言うのは珍しいが明らかに早い登校と親友がいるという安心感で気が大きくなっていた。

そして二人が教室に入ると、

耳たぶの長い女が二人を見ていた。

一番乗りではなかった。

彼女が本当の一番乗りだ。

高校デビュー初日にこの失敗は大きく、二人とも顔が赤くなった。

耳たぶの長い女・・・どっから見ても耳たぶがイヤホンになつてる女はこつちを見る。

「おはようございます」

緊張からか、羞恥からか、はもって挨拶をする二人に女は口元を隠しながら、笑う。

「ごめん、笑っちゃって・・・ウチの名前は耳郎響香。よろしく」

気軽に話しかけてくれた響香に出久も電気も顔の赤さが薄れる。

「俺の名前は上鳴電気……よろしくな耳郎さん！」

「僕は緑谷出久……よろしくね耳郎さん！」

「さん付けはしなくて良いよ」

「そっかなら、よろしくな耳郎！」

「よろしく、上鳴」

「よろしく……耳郎……さん」

電気は直ぐに名字だけで呼べたが、出久はさん付けのままだった。

まあ人の性格は違うから、こうなるのも無理はない。

響香も別に気にしてない。

出久と電気は自分の充てられた席に荷物を置く。

因みに電気の席は響香の隣だった。

「上鳴って……首席合格だった？」

「お、俺ってそんなに有名？」

響香の言葉に思わず何処から取り出したのかヘアブラシで髪を決める。

出久はそのいつもの調子ノリの姿に呆れながら電気達の席に来る。

響香は電気のキャラに引いていた。

「ああー、そういうタイプ?」

電気のキャラが響香の中で決まったようだ。

「そりゃ、首席だからね、緑谷も2位通過の?」

「うん、よく知ってるね」

「話題になるからさ、こういう成績は」

響香が話題をふってくれた事により、出久も電気も気さくに話すことが出来た。

3人で話していると続々と色んな生徒が入ってくる。

その生徒達とも話していく出久と電気。

そして8時30分頃に二人にとつての知り合いが来た。

入試の時に助けてくれた丸っこい女だ。

「そのモサモサ頭とキンキラ頭は受験の時の!」

「あー!助けてくれた・・・」

「受験の時のいい人!」

(制服姿が超可愛い!!)

「助けて貰ったのは此方だよ!ありがとうございます!!私、麗日お茶子!」

「緑谷出久です」

「上鳴電気だ!」

「よろしくね！上鳴君！緑谷君！」

邪な事を考えてる男二人とは違って丸っこい女はまたもや健気に明るくお礼を言う。

その姿にまた不細工になったのは言うまでもない。邪な事を考えてたから五割増しだが……

「先生ってどんな人なんだろうね？楽しみだね！」

(ち、近い!!)

出久に素で近づいて話すお茶子。

出久のザ・草食な雰囲気は話しやすいのだろう。

(出久の野郎!!)

一人、キンキラ頭な電気は思いつきり、それを見て嫉妬しているが……

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け。ここはヒーロー科だぞ」

突然教室に響く声に驚く生徒達。

黒ずくめの学校をして、首には長いターバンのような物を巻いた男がどういふ訳か寝袋とゼリー飲料を持って教室に入る。

「ハイ、君達は静かになるまでに8秒かかりました。合理性に欠けるね」

「先生!?!」

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

何とも予想外な先生の登場に驚く生徒達。

「今からこれに着替えてグラウンドに集合」

消太は何故か寝袋から学校指定の体操服を出してそう言い。

そのまま去っていった。

生徒達はそれぞれ更衣室で着替えてグラウンドに行った。



グラウンドに着いて集合するやいなや、消太から驚きの事を言われる。

「「「個性を把握体力テスト!?!?!」」」

消太から突然言われた内容に驚く生徒達。

「ガイドダンスは?」

「入学式は!?!」

「いくらなんでも!?!」

「ヒーローになるのに悠長な事は言つてられないよ。雄英は自由な校風が売り、それは教師にも同じ事。君達も中学校の時に受けてるだろ?個性禁止の体力テスト、あれを自

分なりに個性を使ってやればいい。他人の妨害と個性を使わずに機械を弄る以外なら何をどうやっても構わない」

消太は携帯を出して画面を生徒達に向けた。

そこには、体力テストの8つの競技が載っていた。

「首席は上鳴だったな、中学のソフトボール投げの記録は？」

「57メートルです」

「じゃあ、個性を使ってやってみろ」

「はいー！」

ソフトボール投げの場所に行く電気。

軽く体をほぐして投げようとする。

「ちよつと待て、上鳴」

「はい？」

「その手足の重りは外してやれ、入試の時もつけてないだろう」

消太からの鋭い目線にたじろう電気。

そうあのいつも四肢に付けてる重りを付けたままやろうとしたのだ。

いつもの癖と習慣になっていた為だ。

「それから緑谷もだ、記録を知りたいのにそんな事をされたら二度手間だ。直ぐに外せ」

「はい!!」

電気と出久は急いで外す。

周りも体力テストなのに何やってるのだろうと呆れた視線を送っている。

ドオン!!

重りの音を聴くまでは・・・

重りを外して軽くまた解す電気と体の調子を合わせるために解す出久。

クラスメイトは二人の外した重りに興味津々である。

担任の消太も含めて・・・

一人の赤髪の男が出久の落とした重りの一つを持ち上げようとする。

しかし、軽くやっても中々上がらない。

力を入れてやって持ち上がった。

「な、なあ緑谷だっけ?・・・これどれだけあんの?」

「切島君だよね??? 1つだいたい20キロだよ」

「20キロ!!?!!」

出久の爽やかな感じが漂う回答。

内容はどこの筋肉超人?と云わんばかりの内容に生徒達は驚き、消太に関してはもはや呆れてる。

「上鳴、投げろ」

「はいー！」

生徒達の混乱を吹き飛ばすかのような消太の合図に電気も投げる。
なけなしの気を指に溜めて勢いよくボールを発車!!

投げたボールは天空に消えていった。

そして投げた電気の豪腕の風速で爆発系の個性でもないのに風が吹いた。

「自分の出来る事の最大限を知り、苦手な事を知り、そこを伸ばして応用を鍛えるのが合理的。記録は712メートル」

消太が自分の携帯に映し出された記録を生徒達に見せる。

「712!!?」

「嘘だろ!!?」

「個性を自由に使って良いのか?」

「面白そー」

生徒達の言葉に反応した消太が睨んでも見ても何かが違う目線で生徒達を見る。

「面白そうか？これから3年間、そんな腹積もりでいるのかな？よろしい・・・トータル成績の最下位は除籍とする」

その言葉に生徒達は絶句する。

「生徒達をどうするかは教師に一任されている。これから君達は3年間、我々が出し続けるスパルタ顔負けの試練を越えていかないといけないヒーローに成るために、PL US ULTRA」。ようこそ雄英高校ヒーロー科へ、1年生A組」

その言葉に生徒達はそれぞれ意気込んで行く。

その様子に消太も笑顔になる。

「準備運動が終わったものからやっていく。キチンと時間を掛けてからのの方が良い結果を生む。個性もあるからな。出席番号順よりも合理的」

そして、体力テストが始まった。



く50メートル走く

電気にとつては十八番な為、

「1. 01」

「くっ!凄まじい速さだ!追い付けなかった」

(ハイパースピードカメラで測つて良かった)

電気の超高速に足の脹ら脛がエンジンなつてる飯田天哉が悔しがる。

3秒代だから、充分に速い!

内心、消太が金の無駄遣いをしてサポート科の入学前に研究室に籠っていた新1年の

発明に感謝してた。

出久は気を体に纏つて身体を強化。

「3. 00」

飯田よりも僅かに速かった。

隣で一緒に走る事になった爆豪は結果的に負けて精神的にズタボロなのは気にしてはいけない。

く握力測定く

電気も出久も普通にそこは気でやった。

「600キロ」

「650キロ」

出久の一番の記録に電気は素直に称賛してた。

他のクラスメイトからは細マツチヨゴリラと云われているがな。

く立ち幅跳びく

二人ともまた鍛え上げた筋力と気で行った。

「2258センチメートル」

「2460センチメートル」

まあ、気が使いこなせる出久の勝利である。

1位は出久に負けて精神ボロボロの爆豪が気合いと根性で爆発を大量にしながら2500センチメートルを取った。

(25メートルです)

く反復横飛びく

電気は個性を使って、出久は気を使ってやって見たが、二人ともこの急な作業には慣れておらずに

互いに100で終わった(それでも凄い)

因みに1位は頭がブドウな峰田実で300だった。

頭から血が出ていたがな・・・

くボール投げく

電気は先程の記録で充分だったのでパス。

出久は気を使って思いつき投げた!

気を使うは電気以上に個性との関係上上手いので恐ろしくくらいに飛んでいった。

「1350メートル」

キロに直すと1キロと350メートル!

「すげえ!!トンでもねえ!!」

「マジかよ!!」

「凄い豪腕だ」

出久の飛距離に生徒達が驚く。

消太は出久のこれに冷や汗を掻いていた。

因みに1位は麗日お茶子でまさかまさかの無限が出た。

これには生徒達全員が啞然となった。

く上体起こしく

く長座対前屈く

この2つに関しては二人ともあまり常識から逸脱はしなかった。

上体起こしは100を越えてたが、まだ人間でも出そうな記録だ。

因みに上体起こし1位は電気と出久の同率。

長座対前屈1位は透明な女こと葉隠透だった。

く持久走く

最後の競技。

これは全員で走る事となってる。

全員の個性の出来る事は把握したのと、大人数の中でならどうなるかと言う担任相澤

消太のDSテストのトリである。

全員気合いを入れてる。

主にとある爆発マンととある眼鏡マンが気合いを入れすぎで全身から火のエフェクトを纏う何処の漫画?としか言いようがない描写が似合う程に……

「はいスタート」

飛び出したのはやっぱり電気と出久、そしてそれを全力で追いかけるのは飯田天哉である。

他の生徒はその後を追いかける。

電気の超高速は基本的に電気の個性の延長線上にある。

従って電気が容量オーバーにならないと遅くはならない。

しかし、体が大きくなり個性を使う時間が増える事により、今や電気の個性の容量は常軌を逸する程にある。

出久も負けてない。

気の身体強化で気の容量がかなりある。

互いにそれぞれの方法で速く走ってる為か。

あつという間に最後尾のキャラデザの関係上どうしようもない峰田を抜いて、他の生徒もグングンと抜いていった。

爆豪が二人に抜かされた際は流石に妨害を仕掛けたが、担任の相澤消太の個性 // 抹消 // で暫くの間、個性を消させてた。

驚いてたのに足を緩めなかったのは流石としか言いようがない。

消太もこれに関しては後で軽く注意ですますつもりだ。

何故なら、2人の速さに他の生徒も3名を除き心が折れてるもしくはやる気が見事に消えてる。

やる気が消えるのも無理はないが・・・

それに比べればやる気が消えてないだけマシである。

勿論、妨害行為は認める気がないから、ミッドナイト先生の特別指導室行きだが。

やる気が消えていないのは、爆豪を除いて二人。

飯田天哉とグラマーボデイが特徴の八百万百である。

天哉も百も根っからの繊細生真面目実直優等生。

これぐらいの事では心が折れない。

天哉は必死に二人の後を黒い煙を出しながら追いかけてる。

百は冷静に前の人間を見ながら、自分のペースを上げていつてる。

二人とも素晴らしくらしいの優等生である。

持久走の距離は3キロ。

いくら出久と電気と天哉が速くてもそうすぐには終わらない。

1分後

変化に気がついたのは峰田実である。

キャラデザと言うハンデに負けずに他の面々に付いていつてる(体力だけなら上位なのでは?)

消太も確り見てる。

しかし、地獄には変わらず、息を切らしなくなりながら走ってる。

そんな峰田の横に出久が現れる。

「何だよ緑谷・・・先に行けよ・・・」

しかし、出久は何も答ええない。

それどころか峰田の横を走り続けている。

これには流石の峰田も挑発されたと思えない。

まあ、誰が見てもそうにしか見えないが・・・

「バカにしてんのかよ・・・この!」

峰田は嫌がらせに對する嫌がらせとして出久の体に体をぶつけようとするがそれは出久の体を通り抜けてしまう。

「え?」

今度は嫌がらせ云々関係なしに確認のために振ってる腕を触ろうとするが素通りする。

2、3回それをやってから峰田は渴いた笑いをして

「お化けだあ!!!」

叫びながら、火事場の馬鹿力を發揮して全力疾走した。

峰田の突然の叫びに峰田の前を走つてた透が後ろの出久に気付き、同じ事をやって同じように叫びながら走つた。

後ろの出久だけではない。

グラウンドのコースの所々に出久と電気が現れはじめて、阿鼻叫喚になった。

爆豪と赤白頭が特徴の轟焦凍、百、天哉はマイペースに走つてた。

まあ爆豪はもう妨害禁止のルール、ド無視で攻撃していたが、当たることとはなかった。しかも混乱しながらも全員、持久走を止めなかったのは流石の一言である。

因みにこれは幽霊でも何でも無い。

個性と言う超常現象に発展した科学が存在する世界で幽霊なんて物は存在しないと
言うのは幼稚園児でも知ってるぐらいである。

これは二人の残像拳である。

二人ともこんな事はしなくても良いと思いつつも、担任の相澤消太の何でもやって
良いと言う言葉とヘソからビームを出し正しくザ・マイペースな事を度々やってた青山
優雅を見ながら、身体能力をただ使うだけではないアピールをしようと思つたのが切っ
掛けだった。

これは実を言うと二人とも握力測定の時から話し合っており、担任の消太に対して強
烈なアピールが必要と思つてやったからだ。

その時、消太は計画してた二人を見てたがこんなことになるとは全くの予想外であ
る。

すぐに消させようと二人を見ようとするが、二人とも残像を出しまくってるせいど
れが本物なのかわからず、引いてみて全体を見て消そうにも走ってる生徒達の個性を消
すわけにもいかずにそのままにした。

まあ、ほぼ全員が恐怖で明らかに先程に比べて速くなってるから、そっちの方が合理
的だと内心思い、本物を見つけた時には平常運転になっていた。

またこの阿鼻叫喚のせいで入学式から教室に戻っていく生徒達や上級生達の注目の的になったのは言うまでもない。



阿鼻叫喚の元となった問題児二人は無事にゴールした。

肩で息を切らしながら話す二人。

片や緑髪の草食系（見た目）

片や金髪の色男（見た目）

やり方を間違えなければすぐに人気は間違いなしであった。

そうコースの阿鼻叫喚を作らなければ・・・

二人ともそれを見ながら内心やり過ぎたと思った。

爽やかアピールのつもりが問題告発みたいな状況である。

「おい、お前ら」

消太も二人に対して睨み、二人ともそれにビビる。

「あれを何とかしろ」

まだコースを走ってる残像。

しかし、この二人にはこの残像を何とかする力なんてなかった。

だって、残像だから自然に消えるのを待つしかない。

「無理っす、あれの消し方は知りません」

「すみません、いつも自然消滅でやってたので」

この答えに消太は頭を抱えた。

二人を見ても消えなかったので、あれは個性ではなくて筋力でやったと言う事実
に頭を抱えた。

少しして天哉もゴールする。

そして倒れた。

ブスブス黒い煙を出して今にも壊れるのでは？

と思うような状態だった。

「飯田君だっけ？大丈夫？」

「み、緑谷君に上鳴君！今すぐにあれをどうにかしたまえ！全員がまともに走れないだ
ろう！」

へ口へ口天哉の抗議に出久も電気も2度と何も知らない人にはやらないと決めた（敵

は勿論除いて)

因みに消太は天哉の抗議も最もだと思つたが、全員速くなつてゐるから、もう考えるのを止めた。



全員が持久走を終えた。

約4名を除いて全員がグロツキーの死にかけてはあるが、因みに残像に対して攻撃しまくつてた爆豪は個性の使いすぎで腕が上がらない状態だった。

ゴールして出久と電気を攻撃しようにも出来なかつたし、自身の疲労もあつてゴール直後に意識を持ったまま倒れた(出久と電気もこれには申し訳ないと素直に思つた)

消太はやろうとした内容はともかく意識を持つてゐる事に感心してた。

他の面々も抗議しようにも火事場の馬鹿力を使いまくつたせいで倒れて動けず仕舞いだつた。

マイペースに動いていた焦凍と百は皆の状態を見て自分がゴールした時に抗議。

筋力だけでやった事に無茶苦茶ドン引きした。

動けなくなつてた面々でもある。

更には自分の最大限を知る目的の為、怒るに怒れなくなった。

「はい、と言うわけで結果を発表するよ」

消太がマイペースに結果発表をする。

出久、電気、焦凍、百以外、仰向けに寝た状態ではあるが・・

結果は出久が1位で電気が2位。

ぶつちぎりである。

そして、最下位を同率で取ってしまった峰田実と葉隠透は滝の涙を流していた。

悔し声すら疲労で出ない為、余計に悲哀である。

「因みに除籍は嘘だ」

「「「「「は!」」」」」

「君達の限界を引き出す。合理的虚偽」

消太の言い分に生徒達が言おうにも内容は自分達の利益にしかならず尚且つ動けず仕舞いが多数の為喜んだ。

透と実なんて今度は嬉し涙の滝である。

百が優等生らしく虚偽と見破れた事を言おうとしたが、ほぼ全員のグロッキー状態からのハッピーエンド状態に言うのを止めた。

「それじゃ、今日の授業はこれまで……全員後は他のクラスの迷惑にならないようにな」
「は!?!」

「申し訳ございません。相澤先生、今日の授業はこれで終わりですか?」

「そうだ、元々今日は入学式とガイダンスで昼までに終わる予定だったしな」

消太の言葉に百は納得した。

実際の時間割りもそうなっていたからだ。

また既に時計はその両方が過ぎてた。

恐らくこれから自己紹介を含めたHRの時間だろう。

「じゃ、お前ら後は好きにやれ、グラウンドからは早く出るよ」

消太はそのまま去っていった。

倒れてる生徒は残したまま。

出久と電気は誓った!

2度と本当に知らない人の前では残像拳は使わないとまた一つ成長した瞬間である。
こうして今日も青春が続いていく。

「「「助けてくれ．．．」」」

．．．A組はあまりの疲労に助けを求めていた．．．

因みに残像拳の数は12体。

1人倍になっていた。

始まる寮生活・・・・管理人は●●●

出久と電気は悩んでいた。

何を悩んでいたかと言うとこの状況をどう打開すれば良いのかを悩んでいた。

その状況とはA組が約4名を除いて倒れていたという惨状である。

出久、電気、百、焦凍の4人はこれをどうするか考えていた。

出久と電気はとりあえず、テスト前に外した重りを再び装着して全員またドン引きさせた。

考えてほしい80キロの重りを付けるのだ。

キツイ体力テストが終わった直後にだ。

引かない方が可笑しいのである。

「お前ら・・・体壊さねえのか？」

「そうですね、キチンと休みませんと」

「大丈夫だよ。轟君に八百万さん、慣れてるから」

「そうそう、寧ろ自分に負荷を掛けてないと変に集中しちまって落ち着かねえから」

爽やかに答える脳筋な二人に皆やつぱり引いていた。

実なんてDMだと連発する始末である。

出久も電気も心外だと思った。

まあこれは二人の意思だけでなく亀仙人の修業の弊害でもある。

しかし、グラウンドに長くは要られない。

すぐにでも出ていかないといけない状態なのだ。

何故なら、他の生徒の授業もあるが、その前に隣のクラスの1年B組が体力テストで使うからだ。

生真面目代表天哉を筆頭に全員動こうとするが全く動けない。

火事場の馬鹿力を使いすぎである。

全員、阿鼻叫喚せずにマイペースに走ればと心の底から後悔した。

しかし、それで限界が引き出されてとなつては微妙な気分そのものである。

出久と電気は置いといて、動けてる百と焦凍に倒れてるA組は尊敬の眼差しをした。

約1名は立ってる全員を睨んでいた。

「どうする？早く戻らねえと他のクラスの人間に迷惑が掛かるぞ」

「急いで担架を作りますので手分けして保健室に運びましょう」

焦凍と百の優しい言葉に倒れてるA組は眩しい後光を感じた。

これぞ正しくヒーロー、女神、最高、聖人、天使、素晴らしき雄英生である。

実と透なんてお祈りをするぐらいである。

「だったら、ちよつと待ってくれ。良いのあるから！」

「うん、皆、ちよつと待ってて」

出久と電気の言葉に全員が頭に？を作る。

「良いアイデアがあるのか？」

「勿論！」

「ではお願いします」

「んじゃ、取っ手来るぜ！」

電気はサムズアップをする。

それから動かない。

「どうした？」

「行かないのですか？」

疑問に思うA組。

二人しか聞かないのは全員疲れてるからである。

「八百万さん、轟君、これ残像」

笑いながら電気の体に通す出久。

やらないと誓ったのにこれでは意味がない。

最も電気もただバカでやったわけではなく、あくまでもA組全員が知っているのだ。ユーモアの一環としてやったのだ。

だがしかし、全員これのせいでえらい目に合っているのだ。それなのにこれをやったらどうなるか？

「「「ぎゃあああああああー!」」」

阿鼻叫喚再びである。

「何で!？」

「当たり前（だろ／でしよ）!!」

焦凍と百のツツコミが脳内筋肉センスなしユーモアマンの出久に刺さる。

この二人はやっぱり何処かがおかしい。

A組生徒全員の中で二人のキャラが確立された。

そして、速き事風の如しを乗り越えて雷の如しを実行する男 電気が戻ってきた。

阿鼻叫喚の凶に首を傾げる？

「皆どうしたんだ？」

「電気、君の残像拳のせいだって」

「何で!？」

出久と同じ反応をする電気にA組全員が呆れた。
ツツコミを止めた。

「それで、何を取って来られたのですか？」

「これだよ」

電気は袋を取り出し、その中にある豆を一粒出す。

そうこれは作者が描写するのすらめんどくさくなり、長いことこの二次創作から文字すら消えていた亀仙豆である。

「20粒ある？」

「勿論、足りる足りる」

入学の際に亀仙人から自分がピンチの時になったら、必要と言うことで大量の亀仙豆を貰っていたのだ。

しかも、それをドラゴンボールの定番の緊急時なのに少ない仙豆みたいにならないように大きい壺3つ分。

流石にそれは手で運ぶと迷惑になるから郵送であるが、さてよく考えて想像してほしい。

クラスの怪物二人が謎の豆を見ながら笑っているのだ。しかも漏れなく全員分有ることまで確認して。

怪しさ満点である。

A組全員とある事を考えていた。

「それは何ですか？」

クラスの優等生にして女神の百が二人に聞く。

「簡単に言う」と体力が戻る豆」

笑顔で答える二人。

全員考えが確信に変わった。

それは亀仙豆が

「「「麻葉だ!!」」」

どう考えてもヤバい物にしか見えないと言うことだ。

真つ当な反応である。

てか、普通に考えて食べただけで体力が戻る豆なんてのは存在しない。

「何で!？」

真面目に疑問を浮かべる二人。

そりやそうだ、この仙豆のお陰で何とかなつた数は数えるのも馬鹿馬鹿しいくらいに

多い。

1年365日、食べなかった日は手で数えるほどに・・・二人とも悪意なんて全くな

い善意で渡そうとしているが、A組の面々からすればヤバい物にしか見えない。寧ろ、善意で渡そうとしてる分、余計に質が悪い。

「み、緑谷、か、上鳴、お前から疲れてるんだ……」

焦凍が勇気を出して震えながら、二人を何とかしようとする。

「疲れてないよ」

「元氣だぜ、ホラー！」

腕をブンブン振り回す電気に全員もう頭が可笑しいのかと心の底から同情した。

「そう言われましてもよくわからない物を食べるのは……」

百の天使の一声にA組全員が女神様が後輪なされたと心の底から錯覚した。

「だったら、僕達が最初に食べるよ、ホラー！」

「元氣になるぜ！」

自ら毒味役をやり、何も無いことを証明する二人。

しかし、そのせいで全員からああ、もう慢性なんだと心の底から同情された。

怒り狂ってた爆豪ですら、同情した。

それでも笑顔で亀仙豆を焦凍と百に渡そうと手のひらに載せる二人。

見る人が見れば悪魔である。

しかし、二人の善意だけしかない笑顔に焦凍と百も戸惑う。

焦凍は家族の問題上悪い笑顔と良い笑顔の区別が出来る。良い笑顔は母親を始めとした家族で悪い笑顔は父親の笑顔と言う風に区別出来る。

そしてこの笑顔は良い笑顔だ。

焦凍は恐る恐る亀仙豆を手取る。

百もそれを見たことによる負けず嫌いかそれとも焦凍だけを犠牲にはさせまいとする心の清らかさ所以か、同じように手取る。

意を決して亀仙豆を手に取り食べる二人。

1年で今日は入学だが、その心は最早ヒーローそのものである。

A組は二人に心の底から無事であるように祈った。

「確かに戻ってる」

「「「神は死んだ!!!」」」

A組は絶望の声を挙げる。

「皆、落ち着いてくれ！本当に戻ったんだ！」

「本当ですわ、信じてください！」

必死に出久と電気を無実と証明しようとする二人。

ただ、元々動ける人が元気になつたつていつても効果が薄い。

悲しき事にA組にとってその姿はまるで悪の組織に洗脳されてしまった悲しき悪役のような状況である。

A組全員がその二人の姿に涙を流した。

「どうしたら、信じてもらえるんだろう？」

「本当に大丈夫なんだけどなあ？」

「確かに安全だったからな。こうなつたら仕方ない、片っ端から無理矢理食わせよう」

「確かにこうなれば荒唐治が一番です」

洗脳されて良心を喪つてしまったヒーロー達が悪魔の仕事を協力する。

その姿にA組は恐怖を感じていた。
彼らから見た四人の姿は悪！

どうにかして逃げようにも動けない。
過労で動けない。

皆分かった事が1つだけある。

動けないとは絶望なのだ、絶対にヒーローになつたら死んでも動くヒーローになる。
う。

細かい所は違うが大体のイメージが統一された瞬間である。

担任の消太も感涙ものの早さである。

しかし、四人も別にヤバイ物を食べさせようとは思っていない。

亀仙豆の効果は素晴らしいのだ。

悲しいことにこの会話の噛み合わなさを調整できる人はいなかった。

「ぼ、僕にくれ！」

「飯田君……」

天哉が四人に言う。

そして四人も天哉なら適任だと思った。

何故なら、天哉は自分の個性の影響でまだ足から黒い煙が出ているからだ。

天哉が走力を上げる個性なのはさっきのテストで分かつてる。

これで回復した天哉がグラウンドを軽くスキップをしながら走ってくれば良い。平常時に黒い煙が出てなかったら、出なくなるのを見せれば良い。

四人は笑顔で亀仙豆を食べさせる。

天哉が名乗りではのは四人の無実を証明する為ではなく、皆に食べさせないように犠牲になったのだ。

ヒーローの犠牲心を発揮させた天哉に他のA組の面々も次は自分が名乗り出ようと心に決めていた。

ヒーロー達の誕生である。

そして、亀仙豆を食べた天哉の体は文字通り戻った。

黒い煙も消えて、快調にストレッチをする天哉。

その証拠にグラウンド一周軽く回った。

啞然とするA組

「皆、これは本当に問題がなかったぞ！」

「！！！！マジかよ！！！！」

自らで証明してくれた天哉の言葉は流石に信用ができて、続々と他のクラスの面々も亀仙豆を食べる。

皆、体力が戻った事に驚いて素直に凄いと思い、出久と電気に侘びた。

が、全員心の底で自分の感覚が壊れているのでは？と急に動けるようになった自分を今度は疑い始めた。

「皆、治ったかな？」

「いや、1つ余ってる」

亀仙豆は1つだけ余っていた。

食べてないのが1人だけいる。

そう、それは唯我独尊を地で行い、持ち前の天性の才能で全てを薙ぎ払い、エリートコースを一直線で進もうといざ入学し、今日の体力テストで散々バカにした男と親友にコテンパンにやられてプライドがズタボロの爆発マン事、爆豪である。

「かつちゃん、食べてよ、動けるから」

「流石にこれは信用しろ、他の皆も活けてるだろ？」

「うるせえ！クソナードに金髪モブがそれにデクてめえ良くも個性があることを隠してやがったな？」

「今、その話を話をする時じゃ・・・」

「うるせえ！俺を騙しやがって！お前は敵だ！敵の施しは死んでも受けねえ」

お前はどこの王子と言わんばかりの発言に二人は顔を見合わせる。

「しょうがないな、電気」

「わかってるぜ、出久」

二人の妙な言葉に爆豪は鳥肌を立てた。

そして、出久は爆豪を羽交い締めした。

「離せ！クソが！てめえ!!」

「もう、暴れないでよ。急いでやらないとB組が来るかもしれないじゃん」

「んじゃ、食つてもらうぜ、爆豪！」

爆豪の口を掴み、亀仙豆を無理矢理食べさせる電気。

すぐに吐き出そうとするも出久と電気が無理矢理抑えて飲み込ませた。

A組はそれを見ながら、爆豪に同情した。

そして、飲み込む音を立てると出久と電気は離れて、爆豪は立った。

「ホラー！安全だったでしょ！」

「全く、いくら性格が糞でも信用はしろよな」

笑顔で答える二人。

何度もくだいようだが善意だけしかないのが無茶苦茶質が悪い。

残念な二人だとA組の面々は評価を改めた。

そして、施しを屈辱的な形で受けてしまった爆豪は敵顔負けの恐ろしい顔をしながら二人を見た。

さすがの二人もこれにはビビる。

「お前らあ……死ねえ!!」

突っ込む爆豪に二人は逃げる。

対処できない訳ではないが、争うと余計に時間を喰うので逃げることにした。

「何で!?!」

「確かに治ったろ!?!」

「そういう問題じゃねえ!!!」

A組の面々はグラウンドを離れていく3人を見ながら、自分達も行こうとグラウンドを後にした。

追われてる二人にも追ってる爆豪にも同情しながら、グラウンドを去った。

●●●

奇想天外奇々怪々摩訶不思議な体力テストを終わらせたA組は体の調子がバリバリ元気な筈なのに心労が凄くある状態で昼過ぎに寮に向かった。

因みに12時までのSHRで自己紹介をした。

怪物二人の自己紹介だけを少しだけ教える。

またこの自己紹介の主権は電気と天哉であった。

●●●

く自己紹介く

出久の番になる。

全員の視線が前の爆豪よりも強くなる。

当然だ、何せ体力テストで常識？なにそれ？美味しいの？とこの組の面々の度肝を抜いた怪物の1人である。

因みに主権の1人の電気は出身校と軽い自己紹介だけで終わり、皆からの質問は後にしてくれと言った。

この行動には親友の出久もわからなかった。

「緑谷出久です。出身校は折寺中学で、好きなものはカツ丼です！」

「個性はなに？」

マゼンタ肌の女 芦戸三奈が聞いてくる。

出久にとっては一番真実を答えたくない質問だ。

しかし、これから3年も一緒に頑張っていく仲間の質問を無下には出来なかった。

「個性は特殊な自分の中で作られるエネルギーを操る個性です。こんな風に」

軽く掌に気弾を作る出久。

真実は教えることが出来なかった。

嘘は言っていない。

実際に個性登録証にはそう書いてある。

しかし、真実は隠したままだ。

電気は出久のこの解答を黙って見ていた。

「緑谷ちゃんと上鳴ちゃんってどこで知り合ったの？」

「良く聞いてくれたぜ、蛙吸さん！」

「梅雨ちゃんって呼んで」

電気は出久の近くに行き、肩に腕をまわす。

出久は突然の事で気弾を消してしまいが、電気のこの行動は嬉しかった。

出久が真実を話す日はいつか来るのだろうか？

それはまだ出久もわからなかった。

「実はな、俺と出久は小五からの付き合いなんだ！」

「そんなに長くから？」

「おう、梅雨ちゃん！」

「てか、上鳴・・・今、答えるんだ」

「同じ質問をされると二度手間だしな。まあ許して」

「緑谷君と上鳴君は何か習い事してるのか？」

「僕達は6年くらい一緒の人に武術を教えてもらってたから・・・」

「へえ・・・どんな特訓だったんだ？」

肘からテープが出る男 瀬呂範太からの極ありきたりな質問を答える。

「毎朝、走りで個性牛乳の配達」

「「「ん？」」」」

「その後は岩崖をロッククライミングだよ。最低三往復だけど・・・」

「「「え？」」」」

「まあ、そこから放課後までは学校だから、それ以降は冷蔵庫や自動車が不当投棄されてた海岸の掃除二時間」

「「「「は？」」」」」

「んで、仕上げに水泳を1キロ1往復だな」

「そうそう」

「「「「い？」」」」」

「それを合計20キロの重りを付けてやってたよな」

「うん、小学校を卒業した時は5倍の量をやって、中学に上がると個性の特訓と組手が多くなつたね」

「毎日毎日ボコボコにやられては亀仙豆・・・さっきの豆なんだけどその世話になつたなあ」

「そうだね、師匠なんて、食わなければ明日死ぬぞつて脅してたしね」

「酷いよなあ、毎日毎日倒れても治るつてのが怖かつたぜ」

「中学二年の時の夏休みなんてさ、強化合宿じやとか言つちやつて、ハードな日が続いたよね」

「あの個性強制発動地獄はもう味わいたくねえな」

「電気なんて毎日一戸建ての電力を出さないといけなかつたしね」

「それは出久だつてさ、気を電力に変える機械を使つて俺と交代でやつてたじゃん」

「そうだったね、農家特訓はキツかったなあ」

「ああ、毎日毎日何処を探してきたの？つて思えるような場所で合宿をしたのに、絶対に東京ドーム分は最低でもあるような広さの固い土を手で耕してたもんなあ」

「爪が何回、剥がれたか」

「もう数えきれねえよ」

「耕す場所に木があつてもお構い無しだもんねえ」

「木があつたらさあ、二人とも個性を使わずに手でやれだもんなあ、使うとポコポコにされるし」

「そうだね・・・皆、どうしたの？」

引いていた。

今までとは桁違いに全員ドン引きしていた。

そりや亀仙豆を信用するわ。

そりやあんだだけ強くなるわ。

そりや脳内筋肉になるわ。

「ふ、二人ともそれで強くなったの？」

「おうよ、梅雨ちゃん！」

「な、何とも凄まじい修業だな」

冷や汗を掻きながら、答える天哉。

「どうしたの？飯田君？凄い汗だけど？」

「な、何でもない！何でもないぞ！！ハハハ！！」

こうして出久達の自己紹介は終わった。

話を戻そう。



こうして、ドン引きな自己紹介を終わらせたA組は12時になって終わったから寮に向かっているのである。

出久と電気は内心わくわくしながら行くのが目に見えて分かるので、他の面々はこの二人にイラアつとしながら向かっていた。

心労の原因はこの脳筋二人である！

いや、真の原因はこの二人をこんなにした指導者だ！

A組は思ったその指導者はいつかぶつ飛ばすと・・・

●●●
雄英の寮の内ヒーロー科の寮は実は2つしかない。

ヒーロー科は3学年に2クラスある。

計算が合わないだろうが合っているのだ。

1クラスごとに寮を作ってたら、いくら土地があっても頭が可笑しい為、学年ごとに別れている。

ただし、この雄英高校の特徴は何処から見てもHの字になると言う建築構造。

故に寮として捉えられているは1つだが、Hの形をしているため実質2寮と変わらない。

つまり、1つの学年、1寮だ。

それでも数が合わない。

3つなければいけない。

しかし、3年生の寮は存在自体しないのだ。

理由はシンプルに寮にいる時間が無いためである。

3年生ヒーロー科はインターンで現場を飛び回るのが主な活動になるためにインターン先から学校に直通、そしてインターン先に戻ると言った事をやってる生徒が多数な為、ヒーロー科3年生の寮は存在しないのだ。

故に寮は2つである。

また、自由な校風を売りにしてる雄英が寮をやることになったのは理由がある。それはオールマイトのせいだ。

6年前にオールマイトとオールフオーワンが死闘した時に二人の闘いは文字通り世界を変えかけた。

何故なら、この二人のあまりの力のぶつかり合いに「次元が歪んだ」のだ。

そして、その影響か今まで発見されておらず、この世界のルールから逸脱した物が出てくるようになった。

まだそれは鼠ぐらいしか出てきてはいないがもしもこれが人間だったら？

人間を超越した何かだったら？

もしも、その存在が邪悪だったら？

しかもそれが「家で寝ていたのに急に違う世界に来た」「みたいに軽く突然行われてしまったら？

この事実を知るのは世界でもそうはいない。

この国で政府と言う存在以外では雄英高校の教師たちと先代ワンフオーオールの友人のグラントリノぐらいしか知られていない。

新たな見えない驚異に備えるために寮生活を始めたのだ。もう、この時空だけの問題ではなくなった。次の世代が熟する前に別次元からの驚異に備えないといけなくなっ

たのだ。

この真実を知るものは雄英の教師だけである。

出久と電気が寮に入ると最初は広い共同スペースだった。そこには郵便で送られてきた荷物以外、今日は皆が持ってきた手荷物があつた。

郵便サイズはもうすでに充てられてる自分の部屋に置かれてる。

全員、自分の荷物を持つとしたら、とある匂いに気がついた。

「良い匂い」

「美味しそうな匂いね」

「なんだろう?」

全員が匂いの元を目線で辿ると共同スペースの一番広い机の上にチャーハンが全員分乗つてあつた。

蓮華と中華スープ付きで、

匂いにつられて荷物を持たずに一先ずチャーハンの方へ行くA組。

昼飯は学校が終わるため、寮で自分達でやらないといけなかったが、この匂いを嗅ぐとすぐに食べたくなる、そんな匂いである。

「良い匂い〜」

「食いてえ〜」

「ダメですわ、ヒーローを目指すものが人様のお食事につけてはいけません」

「皆、ここは耐えて自分達で作ろう!」

天哉と百の呼び声に全員名残惜しそうではあるが、ヒーローをこれから目指していくものが勝手に食べるわけには行かないのも事実なため、美味しいのを作ろうともう一度気合いを入れる。

「それはお主達の昼飯じゃよ」

聞き覚えのある年老いた男の声に出久と電気が素早く音の方を向き、他の面々も同じ方向を見る。

そこにはエプロンを着ている亀仙人がいた。

「貴方は?」

「ワシはこの寮の管理人を任された武天老師と言うものじゃ。人はワシを亀仙人と呼んでいる。暴言以外なら好きに呼んでくれて構わんぞ」

「あの?この食事は?」

「この寮で生徒が昼飯を食べるときはワシが作る事になっておる。夕飯は社会に出たときの事を考えて生徒が作るが昼飯はワシだ。今日は昼までしかないから作った。次に作るのは土曜日じゃな」

「マジか!!」

「ほれ、さつさと食べないと冷めるぞ。B組の生徒たちにはもう食べるように言つてきたからお主達もはよ食べい」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

出久と電気以外がお礼を言う。

その事に皆頭に疑問符を浮かべる。

「なんじゃ? 出久に電気、呆けた顔をしよつて」

「何でいるの!?!」

「何でつてワシが働いたらいかんのか?」

「いえ、師匠、そうではなくて」

「どうやって雇ってもらつたんだよ、じいちゃん!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

A組は思いがけないカミングアウトに驚く。

「良いから、はよ食べんか、お仕置きをするぞ」

亀仙人のその言葉に出久と電気は条件反射共を言える反応で席に座った。それに伴い他の面々も席に座った。

「それではA組諸君、召し上がれ」

「「「いただきます！」「」」」

疲れた時のチャーハンは格別である。

しかも長いこと生きてる亀仙人のお手製である。

旨いに決まっている。

出久と電気以外は亀仙人と二人との関係が気になっていたが、旨い飯を食べてる最中にそんな不粋な事は誰一人出来なかった。



全員食べ終わり、中華スープをゆっくりと飲んでる。

亀仙人もまた同じ机の席に座り一緒に飲んでいた。

因みに場所は出久と電気の間だ。

A組面々が3人を見ている。

「どうしたんじゃ？そんなに見て？」

「あの一・三人ってどーゆー関係なんですか？」

三奈が先陣を切って聞く。

面々もその質問に首を縦に振る。

「この二人はワシの弟子じゃ」

「「「弟子!」」」

「じゃ、あの個性牛乳を走って配達させた、イカれた師匠って」

「岩崖をロッククライミングさせまくったぶっ飛んだ師匠って」

「疲れた体で水泳をさせた鬼畜師匠って」

「「「貴方なんですか!」」」

「お主達、一体何を言っただんじゃ?」

A組のあんまりな言い方に亀仙人は出久と電気の頭を掴む。二人とも徐々に力が強くなってくる手にビビる。

「ふ、普通に修業の事を言っただけだよ」

「何も嘘は言ってません!」

確かに嘘は言っていない。

亀仙人の修業が鬼なだけである。

「師匠と言うことは、あの残像を作る技も教えたのですか?」

「あれは、こやつらが自分達で教える前に作った技じゃが、ワシもあれは出来るぞ。残像拳がどうしたのじゃ?」

「し、師匠何でもありません！」

「お、お、俺達、頑張った、ただだぜ！」

亀仙人は二人の慌てように絶対なんかやったと思った。

読心術を使うまでもない。

「お主達、それを教えてくれぬか？」

「「「は、はい！」「」」」

亀仙人のただならぬ雰囲気にはA組はさっきの惨状を教えた。

「出久、電気」

「は、はい！」

直立の姿勢でビビりながら答える二人にA組は悪い夢でも見てるかのような気分になった。

そりや悪魔のごとき行動をやって、A組の他の面々の常識を壊した二人は怖いものなしだと思っていたら、こんな事になるとは予想外だった。

「人を怖がらせる為にあの技はあるんじゃない！お仕置きじやな」

亀仙人はカプセルのスイッチをいれて、例の殺人ボールを4つ出す。

「し、師匠！それだけは許して下さい！」

「じいちゃん！勘弁して！お願い！」

亀仙人にすがり付く二人にA組はあのボールは何なんだろうとボールの方に集中が向かっていった。

「ワシよりも言う人達がおるじゃろう」

「皆さん、すみませんでした！」

迷いなき清々しい土下座をする二人。

A組は怒りの感情を忘れた。

爆豪もこの二人のこの有り様に怒りよりも驚きの方が強い。

「あ、あの頭を上げてください。別にその頑張ってる姿は素晴らしかったですよ」
百の一言から他の面々も頑張ってる姿と1位を取った事を称賛した。

爆豪以外は・・・まあ、誰も持久走には触れなかった。

「うむ、素晴らしき生徒達じゃな。でもお仕置きはお仕置きじゃぞ」

亀仙人は4つのボールのスイッチを入れた。

出久も電気も声にならない悲鳴を上げる。

ボールは例の如く刃を出しながら突進し、避けた二人の頬からは血が垂れた。

「ちよ、血が出てますよ！」

「ふ、二人とも大丈夫か!？」

「大丈夫じゃ、亀仙豆でどうにかなる」

A組は心底上には上がいると、そしてあの二人のぶつとび加減は間違いないこの人が原因であると思った。

ボールの突進を避けた二人は逃げようとするが、何故かボールからゴム弾が大量に発射されて動けなくなる。

「いてててててて!!」

「何なんですか！師匠これ!？」

「雄英のサポート科の1年生が改良してくれたのじゃ、喜んで良いぞ」

「喜ぶか!!」

撃たれてる二人はその1年生を心底呪ってやると決心した。

そして、そんな状況を見せられてるA組は二人を心底同情した。

同情だらけの日になっているが、これを見て同情しない人間など敵だけである。

約1名笑顔でこれを見ているが、誰かは敢えて言わないでおく。

「お、おい、亀仙人さん、もう止めてあげてくれ」

鋭児郎が先陣を切って亀仙人に止めてもらうように言う。

「なぜじゃ?」

「そ、その、俺達はもう平気だから、ふ、二人をこれ以上は・・・」

えらく吃りながら話しているのは、A組にとって亀仙人が悪魔に見えたからである。

先陣を切った鋭児郎は勇気があると言える。

「しかし、お仕置きはせねば・・・」

「だったら、お二人にお夕飯を作って貰うのはどうでしょう?」

「良いなそれ!」

「ふむ、二人とも返事は?」

「喜んでやらせてください!」

二人の二回目の土下座にA組も流石にこれ以上はと心の底から思った。

「出久に電気よ。材料は買ってあるから、7時までには作りなさい」

「はい!」

「それじゃ、お主達。3時から部屋の整理が終わったら少し遊んでみないか?」

「「「遊び?」」」

「そうじゃ、ワシから尻尾を捕まえば良い尻尾鬼じゃ。個性は勿論使って良いぞ、許可はとつてある」

亀仙人の言葉に焦凍と爆豪以外は乗り気だった。

爆豪は単純に興味がなく、焦凍はこれから内装を替えないといけないため、物理的に

不可能。

他の面々は個性を自由に使つて良い遊びにウキウキしていた。

「電気、師匠の言つてるのつて」

「言うな、言つたら俺達がえらい目に合うぞ」

「7時までには終わると思う?」

「無理だな」

出久と電気は小声でこれから行われる鬼ごっこをやる運命を選んだA組に同情した。



3時、出久と電気は表に行く、他のA組に内心祈りを捧げながら見送つた。

何人かが冗談半分で飯の支度を終わらせといてーと言つていたが二人とも終わるよと心の底から思つた。

ここからはダイジエストでどうぞ。

く30分後く

野菜を切っている二人。

その時、表から中へ鋭児郎と三奈が入ってきた。

「調子はどうだ？」

「ぜ、全然へっちゃらだぜ!!後少しで終わるぜ!!」

「ホントだよー!」

怒りの感情を隠しきれない二人は上に乗がっていく。

恐らくというか、爆豪と焦凍を参加させる気だろう。

2分経って二人は爆豪を連れて降りてきた。

そこに焦凍がいなかったのは恐らくまだ内装に時間を掛けているのだろう。正解である。

こうして3人は表へ行った。

「ねえ、どうなると思う?」

「爆音ならして怒号が始める」

電気の言葉の直後、爆発音がなり、怒号が本当に飛び交い始めた。

「怒号を言える元気があるだけ」

「まだマシだよなあ」

二人は黙々と野菜を切っていく。

〈1時間後〉

妙に表が更に騒がしくなり、出久と電気は表が気になり始める。

そんな時、天哉が中へ入ってくる。

「飯田君、表大分騒がしくなってるけど？」

「ああ、B組も参加してくれたんだ」

「B組も？」

「ああ、素晴らしき加勢だ！」

天哉はそう言って上に上がり、オレンジジュースを飲みながら降りてきた。

「どうやら、燃料切れだったらしい。」

「飯田君！B組って何人参加してるの？」

「20人全員だ！初日から素晴らしいチームワークだ！」

天哉はそう言つて、表へ戻り、出久と電気は互いに顔を見合わせた後、亀仙人が買つてきた大量の材料を見た。

「なんか、多いと思つたら・・・」

「作るの20人前じゃなくて、40人前かよ！」

「急いでやろう！」

出久と電気は互いに役割分担をして猛スピードで作業した。

く3時間30分後く

内装が終わつた焦凍が爽やかな顔で降りてくる。

「どうやら満足する出来だったようだ。」

降りてきてもう、皆要るだろうと思つた焦凍だったが、電気と出久以外は誰もいなかった。

「二人だけか？」

「と、轟君」

「皆、まだやってるよ」

「まだやってるのか？皆、そんなに楽しいんだな」

焦凍の天然発言に二人は思いつきり首を横に振る。

3人は外でやってる面々を見に表へ、

するとそこにはへ口へ口状態になりながらも必死に尻尾を捕まえようとするAB合同連合と1つの円の中で冷や汗すら掻いてなく、1回も尻尾を取られてない亀仙人の姿だった。

そう、亀仙人が言った遊びとは出久と電気がかつて破門されそうになった時の試練の事だ。

まあ、尻尾が二本から一本になっているのは亀仙人鳴りの優しさだろう。

AB合同連合の中には既に倒れてる人間もちらほらいた。

「どうなってるんだ？」

「じいちゃんに全員がおちよくられてる」

「これを皆に食べさせないとね」

出久は何処から出したのか壺を取り出して、蓋をあける。

中は亀仙豆の宝庫である。

「それ、何粒入ってんだ？」

「最低でも1000粒は入ってる」

「絶対に足りるぜ」

「でも、B組はどうすんだ？また長くならないか？」

「大丈夫だよ、彼処で倒れてる峰田くんをCMをすれば食べるよ」

倒れてる実を指差す出久。

考えてる事が鬼である。

「いや、ここは疲れてる女子たちに食べさせた方がCMになるぜ」

へばっている女子達を指差す電気。

考えてる事が鬼である。

「まあ手こずったら無理矢理食わせれば良いしな」

「だよ（なあ／ねえ）」

一人完結する焦凍。

考えてる事が鬼である。

鬼三人組である。

「7時になりました夕飯です」

出久と電気と焦凍は食器とか諸々の準備をして、デカイ炊飯器の横にデカイカレー鍋を並べた。

そして、表へ出るとたったの30分で力尽きたのか、倒れてる人間が多かった。

出久は実に電気は耳郎に亀仙豆を食わせて元気にさせた。

「皆……飯だよ!!」

「カレーができてるぜ!」

出久と電気の号令に喜ぶ面々。

「しまった!忘れてた!!」

B組は今まで忘れてた事を思い出してた。

「B組の皆の分もあるから!」

「カレーをよそうのは俺達の所だけだなあ」

その言葉にB組が二人に感謝したのは言うまでもない。

出久と電気は倒れてる人を次々と亀仙豆で起こしていった。B組の人は近くに倒れてるA組の人をダシに使って警戒心を溶かしてた。

そして、亀仙人と出久と電気以外の全員が中へ戻った。

「二人とも、ワシの分のカレーをよそってきてはくれんかの？」

「師匠、ここで食べるんですか？」

「中に入ろうぜ」

「別に構わん。それから皆に続きは8時開始と言つといてくれ」

出久と電気は思ったこんな事を食べてからする人間はいないと、しかし、出久と電気がその事を言ったとたん、わいわいとしていた雰囲気は消し飛び、37名から殺気が溢れていた。

出久と電気は亀仙人の分のカレーをよそって持っていった。

「師匠」

「おお、ありがとう」

「じいちゃん、ルールはあの時と一緒か？」

「そうじゃぞ、二人ともこれには手出し無用で頼むぞ」

「何でだよ？」

「お主らが出れば樂をする人間が出てくるに決まってるからじゃろう。それにワシ自身、こんなに若者に囲まれたのは始めてで楽しいんじゃない」

動機に二人とも呆れたが、二人とも参加する気はこれっぽっちも全く無かったのでその事を受け入れた。

亀仙人は早く食い終わり、皿を持って二人は中に戻っていくと中では雄叫びが起こっていた。

二人は近くにいたお茶子に聞くと焦凍が参戦するとの事に全員盛り上がった。

「どうなるんだろう?」

「とりあえず、食器を掃除しよう」

二人は自分達の分もさっさと食い終わり、せつせと食器を洗い始めた。

く 8時から2時間後の10時

食器を早いこと片付けた二人は明日からの授業の予習を自分の部屋で始めていて、暫くすると寮の屋上に行った。

二人とも永遠に終わらないあの様子に頭を悩ませる。

共同スペースのリビングで少し座っていると、中の扉から消太と赤いコスチュームのヒーローブラドキングが来た。

補足だが、この寮は実は地下で雄英校舎と繋がっており、二人はそこから来たのだ。

「おい、なんだあの騒ぎは？」

「管理人の武天老師さんがA B連合相手に鬼ごっこで無双してます」

「もう、止められないです。皆の殺気が強くて」

「ああ、ここでも感じるから凄まじいな」

「皆が倒れたら、これを食べさせますので安心してください」

出久は亀仙豆を二人に見せる。

「なんだこれは？」

「武天老師さんのお手製豆で体力が回復します」

ブラドはそれを聞いて亀仙豆を食べる。

漢方的一种だと思い、消太も同じ事を考えながら食べる、すると二人とも亀仙豆の効果に内心驚いた。

「凄い効果だな」

「これなら徹夜でも合理的に動けるな」

消太もブラドも純粹に効果に驚いてる。

確かにこれを食べれば徹夜なんて無いに等しい。

「すまないが20粒ほどくれないか？」

ブラドの言葉に亀仙豆を20粒程入れて渡す。

「誰に使うんつすか？」

「うちの生徒達だ。うちはお前達と一緒に行動してないから食べれなかった奴を考えてな」

何とも立派な教師だろう。

素晴らしい教師である。

生徒のB組が聞いたら感涙するだろう。

「ちゃんと食わせとけよ」

消太は出久と電気にちゃんと食わせるように言った。

天と地ほど対応の差である。

「もう一粒くれ」

消太の言葉に亀仙豆をもう1つ渡す。

すると自分で食べた。

「もう寝る」

そう言つて消太は去つていき、ブラドも去つていった。

「僕達も寝よつか」

「そうだな」

二人は風呂を沸かして入り、そして寝た。

く朝5時早朝だよ

早朝の5時。

今までの修業のせいか目が覚めた二人は準備を済ませて、共同スペースに行つた。

そして、まだまだ全然終わっていないかつた亀仙人無双に心底二人は呆れた。

二人は流石にキレて、亀仙人のいる場所にかめはめ波を放つた。

亀仙人も咄嗟の事だったので避けきれずに円の外へ出た。

「全員！もう朝だよ!?!」

「今すぐ、亀仙豆を食つて着替えろ！」

A B 連合は咄嗟の事で唾然となるが日の光を見て一斉に動いた。
そして亀仙豆を食べて疲れを飛ばして準備した。

● ● ●
吹き飛ばされた亀仙人。

「次は何をしようかな？」

懲りて欲しいものである。

因縁の決戦!出久 v s 勝己

雄英に入学して1週間。

全員、初日が強烈的過ぎた為か雄英での普通校と変わらない日常に戸惑いを隠せてない人間が多い。

あれから、亀仙人との鬼ごっこは毎日のように続いている。
まだクリアしていない。

ただ、初日にやり過ぎた為に校長からの厳しい説教を亀仙人含めた参加者が全員受けるはめになり、強制的に10時に終わりである。

その為か全員、短い時間で死ぬ気で取りに行くようになった。

晩飯担当は出久と電気で定着してた。

この二人は鬼ごっここの参加を認めてもらえずにいた。

理由は二人が入つたらすぐに終わってしまうからである。

この事実を聞いたA B連合はひどく憤慨したのだ。

何故なら、この二人よりも下であると言われて怒らない人間はいない。

約1名は怒りのあまり本当に火を吹き掛ける所だった。

だが、実際に負け続きなのには変わらなずなので、A B連合は二人から自分達の時はどれだけの時間が掛かったのかを聞いた。

二人は4時間から5時間以内に終わらせたことを言ったら、A B連合がドン引きした。

確かに無茶苦茶早く終わっているわけではなかったが、A B連合は10時間以上だと思っていた。

何故ならもう既にこれだけの人数で挑んで30時間以上かけてやっていて冷や汗の1つすら掻かせていない超人相手にまさかの1桁これを化け物と言わずして何を化け物とするか、しかも自分達はまだ亀仙人に個性を使わせていないのにこの二人はそれ込みで1桁だ。

引かないわけがない。

まあ、亀仙人は個性なんて持っておらず、全員が個性とと思っている読心術と気は技と言うことを二人は皆に教えなかった。

心がバキバキに折れるのが目に見えるからだ。

それから初日のエロ本作戦は物の見事に怒られて、2度としてはいけなくなつた。当然の結果である。

因みにそれで使ったエロ本は男子の目の前で女子たちの怒りの炎によって燃やされ

た。

特に響香の怒りは物凄かった。

理由を男子は当然知りたがり、唯一正解がわかった実は他の男子に広める前に制裁された。

まあ、それは放課後の課題なので、今はA組はハイテンションな英語をしてるプレゼント・マイクの授業をきちんと受けていた。



13時、今日は全員待ちに待った日である。

何故なら!?

「ワタシが普通にドアから来た〜!!」

オールマイトがヒーロー基礎学をやってくれるからである。シルバーエイジ時代の赤いコスチュームを身に纏ったオールマイトは文字通り画風が違った。

無茶苦茶ゴージャスである。

「皆！ヒーロー基礎学はヒーローとはなんたるかを学ぶ、授業だ。そして本日の授業は戦闘訓練だ。二時間連続で行うから、皆も気を引き締めてくれよ！それじゃ始めるからコスチュームに着替えてグラウンドβに集合だ！」

「「「はい！」」」

全員がコスチュームを着れる事に喜ぶ。

当然だ。

コスチュームはヒーローの姿、ヒーローの全て、ヒーローと人々を繋ぐ一番最初に目が付くところである。

故にヒーローは如何にアホに見られようが目立つ服装なのである（基本的には）

出久と電気は自分のヒーローコスチュームを早く着たい一心ですぐに更衣室に向かい、それに続いて皆も更衣室に向かう。

最後になった爆豪は静かに更衣室に向かった。



更衣室から続々とグラウンドβに出てくる面々。

皆が様々なコスチュームを身に纏ってる中で我らがA組の亀仙流コンビは似ている

コスチュームだった。

亀仙流の胴着ではないが、胴着だったのだ。

出久は緑色の胴着に赤色の長袖のインナーシャツで帯も赤色だった。

電気は黒色の胴着に黄色の長袖のインナーシャツで帯も黄色だった。

首から上に関してはお出久は何も無く、電気には小型の機械が耳についてあり、腰元にも違いが出て、電気には帯に小型の機械をつけていた。

このコスチュームはお互いの家族と亀仙人が内緒で造り上げてた物だ。

亀仙人の部分が多いがそのコスチュームから伝わる家族の思いは確りと二人とも感じてた。

因みに電気の耳と腰の機械は緊急端末と緊急バッテリーである。

両方とも亀仙人が自ら体につけて耐久テストをやった優れものである。

「良いねー二人とも！地に足ついてるって感じで！」

二人は声がした方を向く。

そのには。パツパツスーツを身に纏ったお茶子がいた。

こう言っつては何だがかなりエロい。

(ヒーロー科、やべえええ!!)

健全な邪な二人はまたもや良からぬ事を考える。

「いやー、要望をちゃんと書いてけば良かったよ。パツパツになって恥ずかしい」
素で恥ずかしがるお茶子。

しかし、その姿は邪な二人の性欲を上げるだけである。

(やべえええ!!可愛い!!)

「あんたら二人とも爆発すれば良い」

響香が自分のコスチュームの確認しながら、鼻の下を延ばしまくってるアホコンビに
毒を吐くがそんなものは聞いていない。

余計に腹がたつたのは言うまでもない。

「おおー!皆!様になってるね!!」

オールマイトは全員のコスチューム姿を見てそう思った。出久と電気の似すぎてる
コスチュームを見てオールマイトは二人とも出来てるのかな?と内心思っていたのは
オールマイトの秘密である。

腐男子脳満載である。

「君らにはこれからヴィラン組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦を行ってもら
う」

「屋内ですか?」

「そうだ、真に賢しい敵は人気のない意外な場所で活動するからね」

「基礎訓練もなしに?」

「その基礎のなんたるかを知るための訓練さ、ただし、今度はぶっ飛ばせばOKなロボットではないよ」

「勝敗システムはどうなっているのですか?」

「ぶっ飛ばしても良いですか?」

「また相澤先生みたいに除籍があるんですか?」

「組分けはどのようになさるのですか?」

「このマント、ヤバくない?」

「んんー!! 聖徳太子!!」

約1名のおかしな質問を除いてオールマイイトはこの大量な質問攻めを満喫してから、カンペのノートを開いた。

全員、カンペ見るんだと思ったの言うまでもない。

「状況設定はヴィランがアジトのどこかに核兵器を隠していてヒーローはそれを処理しようとしていて、ヒーローは時間内にヴィランを捕まえるか核兵器を回収すること、ヒーローは時間内にヴィランを捕まえるか核兵器を回収すること、そしてチーム分けは

くじ引きだ！」

くじ引きのボックスを何処からとも出すオールマイト。

確かにエンターティナーではあるが、どちらかと言うとこれは、コメディアンでは？と皆は思った。

それではチーム分けをするよ！

これは殆ど一緒である。

爆豪は天哉と組み、他の皆も大体同じである。

しかし、この世界においての出久の相手は麗日お茶子ではなくて、耳郎響香だった。

「よ、よろしく願います、耳郎さん」

「ああ、よろしく緑谷」

（ひい！何か怒ってる？）

響香が怒ってる理由は単純である。

先程の鼻の下を伸ばした事がムカついているのだ。

初日にはエロ本作戦を男子が決行してウンザリして、尚且つそれに載ってたAV女優が皆、巨乳なグラマー体型でそれを実にバレそうになるわ、亀仙人がそれに対して鼻の

下をもの凄いい伸ばして、しかも出久と電気も麗かボディのお茶子の姿に鼻の下を伸ばしていた。

要するに体型が良い女子に対する嫉妬である。

しかも、ザ・草食系な見た目の緑谷がかなりのむつつりスケベな事にもいらあつとしてた。

「それでは最初の対戦相手はコイツらだ!」

番号はAとD

爆豪と天哉ペアと出久と響香ペアだ。

この試合表に爆豪が出久を見る。

一瞬、出久はビビるが負けずに睨み返す。

爆豪的には睨んでるつもりなんて更々なく見ていただけだったが、目付きが悪いのか出久にはそう認識されなかった。

爆豪の怒りのゲージが少し溜まったのは言うまでもない。

「敵チームは先にフィールドに入ってセツテング。5分後にヒーローチームが潜入です
ターゲットだ」



爆豪と天哉が核弾頭ダミー部屋で準備運動をしていた。

「これが、核弾頭か、訓練とはいえ敵になるのは心苦しいな」

「おい、デクは凄いか？」

「何を聴いているんだ？爆豪君？緑谷君も上鳴君も僕達が比べるのも烏澁がましい位に凄いいではないか？」

「だよなあ」

えらく静かな爆豪はひどく不気味に見える。

「爆豪君、何をする気なんだ？」

「何も訓練さ……あのクソナードに勝ってやる！」

その言葉は滑稽かもしれないが、その雰囲気、その声色のおかげで天哉は本気なのだと思った。

「爆豪君……素晴らしいガッツだ。勝とう！」

「ああ、てめえは核を守ってる。デクは俺が潰す」

気合いの入れ込みすぎで失敗するような程の雰囲気だが、不思議と天哉はある種の確信を感じた。

今の爆豪君ならもしかしたら……

そう思った天哉には爆豪の作戦を否定するほどのアイデアはなかった。

「良いだろう。ただし、無線は常に繋がるようにしておいてくれ」
「ああ、わかった」

本気で勝ちに行こうとする二人に勝利の女神は微笑むのか？



一方こちらはヒーローチームは建物の見取り図を見ていた。

「緑谷、地図覚えた？」

「うん、耳郎さんは？」

「やつと覚え・・・どうしたの？」

地図から目を離れた響香は冷や汗が出ている出久を心配する。

「ちよ、ちよつと緊張しちゃってね」

「緑谷でも緊張するんだ」

「そりや、するよ。相手がかつちやんだし・・・」

「爆豪だから？ そう言えば仲悪いね。あんた達、何かあんの？」

「大丈夫、私情は挟まないよ。本当に嫌なやつで最低だけど強いことは強いから」

出久の気負いすぎてる言葉に対して響香は出久の脇腹をこずいた。

「ツ！何するの？」

「あんだ、なに考えてんの？」

出久に顔を近づける響香、出久は顔を赤らめてしまう。

「ウチら、今はチームなんだから、何でも気軽に言いなつて、サポートするから」

響香の姉御発言に出久は惚ける。

「チームとして……」

「嘘でしょ……」

「優秀な……」

「緑谷？」

何か言葉を繕うにもどうやら響香にはばれてしまっているようである。

「かつちゃんに勝ちたい」

「そっか、なら飯田の相手は任せな！」

「良いの？」

「その代わりウチも飯田の速さから逃げ切れる自信がないから、終わったらすぐに来て

よ」

響香の身長は出久より12センチ小さい。

近づけば自然と響香が上目遣いになる。

今の響香の発言に出久は本当に顔を真っ赤にさせた。

「行くよー!」

先に入っていく響香の背中を出久は追いかけた。

サバサバしてはつきり言えて自分には無いものを持つてる響香を眩しく感じてた。



建物の中を突き進む出久と響香。

響香は耳たぶのイヤホンを壁にさして、微かな物音を聞いていた。

「何かがこっちに来る、凄い轟音」

「かつちゃんだ」

出久は爆豪を倒そうと進む。

「その曲がり角にいる!」

響香の言葉に出久は咄嗟に体を反らした。

待ち伏せをしていた爆豪の右手の大振りの中を舞った。

出久はすかさず体勢を立て直して、爆豪の腹に1発蹴りを放ち、爆豪も負けずに出久

の腹を蹴る。

互いに少し離れる。

「デクウ!!」

「かつちゃん!!」

睨み会う二人。

それほどまでにこの二人の因縁は強いのである。

「緑谷、飯田は任せな!」

「うん! 絶対に追い付くから!」

響香はそのまま核弾頭の部屋まで走る。

爆豪はそれに対しては気すらしてなかった。

「追い付くだと? クソナードが、」

「僕だって強くなってる」

「ああ、理解してるよお、でもなあーっただけてめえは間違えてらあ、俺は天才だ。てめえは落ちこぼれだ。落ちこぼれがどれだけ努力したって天才のエリートの俺には勝てねえんだよ! 喧嘩は鬼ごっこが上手けりゃ勝てるもんじゃねえよ」

「落ちこぼれだって必死で努力すればエリートを超える事があるかもしれないよ」

「面白え、地力の差を分かせてやる」

爆豪はまた右手の大振りをするが、出久はそれを読み、素早く爆豪の懐に入って、右手をボディに入れた後、左肘で爆豪の顎を打ち上げる。

爆豪はその衝撃に耐えて、仰け反りながらも左手を出久にぶつける。

出久も避けきれずにガードする。

しかし、爆発の威力は想像以上で出久は前のめりな体勢になる。

爆豪はすかさず立て直して出久目掛けて右アッパー。

出久も自分に直接迫ってくる爆豪の右アッパーに対して自分の右拳を爆豪の腕の手榴弾の籠手に当て弾く。

出久は素早く体勢を整えて爆豪の顔面目掛けて左ストレート!

爆豪の顔面に出久の左手はめり込み、爆豪をぶっ飛ばす。

吹っ飛ばされた爆豪は体勢を立て直して自分の爆破を利用して、勢いを殺す。

そして、爆破でブーストしながら出久に突っ込む。

出久も手に気弾を作り、爆豪目掛けて大量に放つが爆豪も負けてはいない。

その気弾一つ一つを爆破で相殺しているのだ。

出久は新しい気弾を作る。

しかし、その気弾は投げる前から螺旋回転をしていた。

その気弾を放つと先程までとは違う速度で見事に爆豪の体に命中。

しかし、爆豪は少し下がっただけで止まった。

「効かねえな!!」

叫びながら突進してくる爆豪。

出久はそれに向かい、爆豪の右大振りに合わせてスライディングできない避ける。

そして、その勢いを利用して爆豪の右足に手を掛ける。

爆豪の右足は突然後ろに引つ張られ、爆豪はうつ伏せに倒れる。

出久は飛びかかると同時に爆豪の後頭部を思いつきり殴る。

少し、爆豪の顔が地面にめり込む。

出久はすぐさま立ち、うつ伏せの爆豪を蹴る。

細長い廊下ゆえか爆豪はすぐに壁にぶつかる。

出久は爆豪を完全にノックアウトさせようと手に気を溜めて、体を引き絞って殴ろう

とするが、その攻撃は遅いために爆豪は爆破の勢いで立ち上がり、意趣返しと言わんば

かに殴った。

またもや前のめりになる出久。

爆豪は今度は出久の顔を蹴ろうとするが、出久は爆豪の手を掴み、思いつきり投げた。

投げられた爆豪は空中で爆破を使って体勢を立て直す。

「デクあ」

爆豪も出久も同時に走り出す。

爆豪は爆破で飛び、出久は身体能力で飛ぶ。

そして、二人とも同じタイミングで右足の蹴りを相手の左頬に入れる。

互いに弾き飛ばされるが、爆豪の方が良く飛んでいる。

出久が必死で鍛え上げてきた6年のせいか、キチンと出ている。

というかここで出なかつたら涙ものである。

二人ともすぐにまた向かい合い、今度は互いの襟を掴みあい、互いに互いを押し別場所に移動する。

この掴み合いも出久の方がより強烈に爆豪を壁に押し付けていた。



そして、核弾頭部屋前では、響香が部屋の中で門番をしている天哉を見ていた。

天哉も繊細生真面目実直な性格な為か真面目に敵を演じていた。

吹き出す直前であったが、自分の個性や闘いかたでは天哉とは相性が最悪な為、必死に耐えて出久を待つことにした。

「緑谷、勝つてよお」



出久と爆豪の戦いは苛烈を極めていた。

どちらが優勢かと言われれば圧倒的と言わんばかりに出久である。

しかし、爆豪のタフさと強烈なプライドは自分の耐久力を極限の位まで上げており、出久を苦戦させていた。

しかも、下手をすれば爆破が飛んで来る狂暴な闘いかたに出久も一先ず引く。

「逃げんのか!? どうしたよ? あの極太の奴を撃てよ! てめえのそんなもん全部無意味だって教えてやらあ。掛かってこい!! 真正面から叩き潰してやる!! てめえ見てえな落ちこぼれには相応しいじゃねえか!!」

爆豪は天才である。

全ての事が早熟で延びしろも常人とは桁違いに高い。

しかし、その天才であるが故に挫折を知らずに生きてきた。

しかし、英雄高校に入ってから、四人の同級生に体力テストでボロ負けし、二人の師匠と名乗る老人からは終始おちよくらなればなし。

なけなしだったプライドなど、当に粉々である。

故に今回の戦闘訓練は爆豪自身の気合いの入れ方が違う。

完全に出久を完膚なきまでにぶちのめす事だけを考えて行動している。

そこに慢心なんて存在しなかった。

無個性だろうが個性持ちだろうが最早どうでも良かった。

出久を倒して1位になるまで止まりそうにもない戦闘マシーンと化したのである。

大口は全然変わってはいない。

出久がかめはめ波を使わないのは室内故に建物を壊しかねないと言う、ヒーローとしての考え方故だ。

“ヒーローと敵”

“出久と爆豪”

この二人の大きな認識の差は全然違っていた。

そもそも今の出久に取って爆豪は辛勝せずに勝てる。

しかし、狭い戦いの場にヒーローと言う縛り、そして縛りなんて気にせずにガンガン来る爆豪の3重苦に苦戦を強いられていた。

出久はかなり大きい部屋に入る。

爆豪もそれを追うように入る。

「来いよ、掛かってこい!!」

出久は爆豪目掛けて気弾を放つが爆豪は避けて気弾は地面にめり込んだ。

「馬鹿が!」

爆豪は自分の籠手のピンを抜こうとする爆豪。

「死ねええええ!!」

ピンを抜いて大爆発を出久に放とうとしたその瞬間!

下から出てきた気弾に顎を打ち上げられて爆豪は意識を失った。

そう、この気弾はさつき爆豪が避けて、地面にめり込んだ気弾である。

そのまま地面を掘り進んで爆豪の顎目掛けて一撃。

出久との激戦、気弾に当たっても倒れないタフさ故の慢心が仇となつて爆豪は完全に

出久に敗れた。

場所の関係上、自由に動いていない出久に自分は自由に動きながら負けたのだ。

「見たかかつちゃん!新必殺技 繰気弾!!」

出久はそう言うと、倒れてる爆豪の手足を縛る。

一段落した為、出久は無線機で響香に連絡を取る。

「耳郎さん」

「緑谷?終わったの?」

「なんとか・・・」

「ごめん、飯田の奴、部屋中をしっちゃかめっちゃか動き回って下手に動けない」

「耳郎さん、今何処にいるか教えて貰ってもいい?」

「5階の中央の部屋」

(この真上か、よし!)

「耳郎さん、もう時間がないから一か八かの作戦だけど良い?」

「勿論!絶対に取る」

出久は耳郎に作戦の内容を伝える。

互いに確認を取り、出久は掌に気弾を作る。

「頼むよ耳郎さん!練気弾!」

出久の練気弾は非常にジグザグしながら上に登っていく。

そして5階の着くとしっちゃかめっちゃか動き、天哉はその特殊な気弾に驚き混乱してしまう。

その隙に響香が核弾頭に向かって行くがそこは天哉、腐つても優等生、響香を抑える。

しかし、響香はイヤホンを伸ばして核弾頭にそれをぐるぐるにくくりつけて確保、この勝負ヒーロー側の勝ちである。

こうして出久は爆豪に勝つたのだ。



あの戦いの後すぐのオールマイイトからのMVPは誰かと言われる質問に百が答えた。
まあMVPは響香と天哉である。

二人とも至極冷静に自分の出来る範囲を的確にやっていた為だ。

出久と爆豪に関しては私怨駄々もれの行動と最後の繰り弾大暴れのせいで減点である。
る。

この後も全員がチームアップをして闘った。

因みに電気の相手はお茶子で二人とも闘う時の役割は敵であった。

だから、対戦相手の三奈と優雅組に前半は残像拳を廊下のあちこちに作って二人を翻弄。

そしてクライマックスになったら、お茶子が軽くして上げたぶつけると痛そうになるドラム缶だったりなんだりを延々と出入り口に蹴りまくる鬼のような攻撃をした。流石に前半はともかく、クライマックスのこれな為、評価が悪かった。



放課後になり、1人ポツンと寮の屋上で佇む爆豪。

気絶させられて、オールマイトから結果を言われてふらふらしながら、寮の屋上にたどり着いた。

下の方ではA B連合による尻尾鬼をしている。

爆豪は下を見ながら、いつもとは違う景色を見て気分転換しようとしていた。

「ダメだよ！ かつちゃん！」

出久が飛び付いて来るまでは・・・

「てめえ、何しやがる!？」

「1度や2度の負けで死んじやダメだ！」

「はあ!?! 何、言ってるんだ馬鹿が! 下の奴らを見てたんだよ!!」

「へ? そうなの?」

「勝手に殺すな！」

「ごめん！」

爆豪は憤慨し、屋上を去ろうと動いた。

「かつちゃん、僕、かつちゃんに言わなきゃいけないことがあるんだ」

出久のその言葉に爆豪は耳を傾ける。

「僕の個性、あれ嘘なんだ。信じられないかもしれないけど僕の力は全部修業で手に入れた物なんだ。だから、僕は君を騙してな・・・」

「なんだそりゃ!?!」

爆豪は出久と向き合う。

「お前が無個性か個性持ちかはもうどうでも良い！俺は自分の才能だけで闘ったアホでお前はそれを越えたバカなだけだ！てめえも金髪も二人とも見てるとずっと勝てねえって思ってた。入学した時にな」

顔に手を当てる爆豪。

鼻を吸る音がする。

「いいか！こっからだ！こっから俺はお前ら二人を越えて本当のナンバーワンになってやる！首を洗っとけ！」

そう言って、出久から背を向ける爆豪。

「……今まで悪かったな出久……」

微かにしか聞こえない謝罪を出久はキチンと聴いていた。

そのまま去ろうとする爆豪が屋上のドアに手を掛ける。

「ちよつと待つてよ、何かつてに終わつてんだよ? 君に僕がどれだけ苦しめられて来たかわかつてんのかよ!」

爆豪は出久の方を見る。

「僕は君が君が嫌いだ。けど赦せない自分はもつと嫌いだ。だから、僕も宣言させて欲しい。君がナンバーワンに成るなんて絶対にならない! ナンバーワンになるのは僕だ!!」

出久のこの挑発に爆豪のコメカミの血管が浮く。

「だと? この野郎?」

「事実、師匠の鬼ごっこで取れてない君に負けるつもりはない」

「上等だ! そこで見てやがれ! 一瞬で取つてやらあ!」

爆豪はそう言つて、尻尾鬼の方へ向かった。

「良いのか? 出久?」

屋上で隠れていた電気が出久に近づくと。

隠れてた理由は、勝己が出久に対して良からぬ事をした場合助ける為だったが、拍子抜けになってしまった。

「何が、電気？」

「もつとキッチンと謝らせなくて・・・」

「別に良いよ、あれで満足だよ僕は・・・勝てたしね。変かな？」

「いや、お前が良いなら良いんじゃないか？俺はお前じゃねえしな」

笑い合う出久と電気は下に降りて食事の準備を始める。



キッチンで野菜を切っている出久。

電気はトイレである。

そんな時に響香が表からやって来た。

「耳郎さん、どうしたの？」

「あんた、爆豪になんかした？」

「ん？」

「名前なんて死んでも呼ばなかった暴言マンだったのに、全員の名前を言ってんだよ？」

その事実には笑う出久。

どうやら勝己のヒーローアカデミアも始まったようである。

「何もしてないよ」

「ふーん、ま、いつか!」

響香の笑顔に見惚れた出久は包丁の使い方を誤り、指を切ってしまう。

「っ!」

「あんだ、何やってんの?」

響香は出久の切れた指がある手を掴んで、自分のポケットの中からバンソーコーを出して、出久の指の手当てをした。

出久は手際の良かった響香をずっと見てた。

「ちよつと何見てんの? 恥ずかしいんだけど」

「ご、ごめんなさい!」

「刃物は危ないから気を付けなよ。じゃあ後で」

そう言って去っていく響香。

出久はその姿に見とれていた。

電気がトイレから帰ってくるとブーツとしてる出久に気がつく。

「おい、出久どうした?」

「電気? 誰かの事をさ、ずっと思っても辛くなくて、実際に会って話せない事に胸が締

め付けられるんだけど、この感情って何なのかな？」

「そ、それってお前……」

「それは恋ね！」

「ウワ!!」

何処からともなく急に忍者のように現れたミッドナイトに二人は驚く。

「緑谷君、君のその感情は恋よ！」

「恋ですか？」

「間違いないわ！私、こういう青春が大好きなの表情撮らせて」

ビデオカメラで出久の表情を撮ろうとするミッドナイトに電気は親友の黒歴史にな

りそうなこれを全力で邪魔をする。

「ちよつと上鳴君！止めなさい！」

「ダメです！親友の未来の為に！」

「喧しい！」

「おい、出久！お前、誰を好きになつたんだよ！」

電気がミッドナイトの邪魔をしながら、出久に聞く。

「恋か……そうか恋か……」

出久は一人、恋の世界に入って出てこない。

「離れなさい!!」

「ダメですつて、おい、出久!そっちに行く前にミッドナイト先生をどうにかした方が出久!出久!!」

電気の声キツチンに響き渡る。

出久の今は片想いなこの恋は実るのだろうか!?

絶望と夢と絆編

完全なる敗北！世界最強の殺し屋

戦闘訓練が終わり、出久達は日常を謳歌していた。

亀仙人の鬼ごっこはあの後入った勝己が終わらせると言ったが全く終わるわけがなかった。

んで、その事に対して出久と電気がキレた。

キレた理由は簡単である。

毎日毎日毎日、晩御飯の支度40人分を作ってる二人は、晩御飯の当番の変更を求めてきた。

確かに二人とも当番をするはずだったのは初日だけで1週間もそれが続くと流石に嫌になる。

これには皆納得した。

何故なら、全員それ以降の片付けも二人に任せて、2日目の朝のあれ以降、二人が1年生の母ちゃんなのでは？と思うぐらい毎朝毎朝毎朝全員叩き起こされる。

B組もである。

んで、これまた二人が作った朝飯を食べて学校に行っていた。

二人が怒るのも無理はない話である。

特に飯を食ってるだけのB組は非常に申し訳なさが出た。

次の日からはキッチンと当番制になった。

メンバーはA B連合でバラバラではあったが、出久と電気から見れば、やっと終わったと思った。

で、そんなこんなでとある事件が学校で起こった。

雄英の校門が破られてパニックになったのだ。

幸い天哉の迅速的な行動のお陰で生徒達のパニックは収まった。

まだ、学級委員を決める事になったが学級委員長は天哉が圧倒的投票数を稼いだ。

理由は個性把握体力テストの時の立派な姿を思い出した為である。



1年A組の教室では消太が教卓の前に立っていた。

「今日のヒーロー基礎学だがB組と合同授業で、俺とブラド、オールマイトの他にもう1人の計4人で見ることにした」

「何をするんですか？」

「災害水難何でもござれ『レスキュー訓練』だ」

「レスキュー、今回も大変そうだな」

「これこそ、ヒーローの本質だぜ！」

騒がしくなる教室。

消太は思いっきり睨む。

すると、全員静かになった。

「訓練場は離れた場所にあるからバスに乗っていく。以上、準備開始」

消太の言葉に全員、更衣室に行き、コスチュームに着替えて、バスロータリーに行く。

そこにはA組だけでなく、B組も集まっていた。

互いに互いのコスチュームを見るのは初めてで、それぞれのコスチュームに盛り上がってた。

金属男の鉄哲徹鐵と鋭児郎はコスチュームすらのだぶりように両方の組からネタにされた。

出久と電気もバスに乗るまではゆっくりする。

そこに、オレンジサイドポニーの拳道一佳が来る。

「よ！二人とも胴着なんだな」

「拳道さん・・・」

「おうよ、俺達のトレードマークでな」

「へえ、あのお爺さんの弟子だもんね。二人とも」

一佳を筆頭に今まであまり話して来なかったB組の生徒が出久と電気の近くにきて、バスが出るまで二人は修業の事を話してた。



バスに揺られながら、生徒達は楽しく会話していた。

騒がしすぎない喧騒の中で、話されてる内容の殆どがこれから始まる訓練と亀仙人に

勝つ方法である。

「ねえ、緑谷。あの爺さんに勝った時ってどうやったの？」

響香が横に座っている出久に対して聞く。

「あの時は、土壇場で電気が超高速を僕がかめはめ波を使えるようになったから、それら2つを囷にしてやって師匠の意識を反らしたよ、1発勝負だったけどね」

「それ、ほぼ無理ゲーじゃん」

そう、そんな方法はもう既に亀仙人相手にやっていた。

A B連合もバカではない。

寧ろ、戦略の多さなら圧倒的に出久と電気のペアよりも多い。

しかし、一向に勝てないのはそもそもその鍛えてる量が違う故だろう。別にA B連合の皆が鍛えてこなかったわけではない。その質も量も雄英に入るためにやってきた最高クラスの努力の証である。

各々、自分の個性を伸ばし、頭を使ってやっている。

それでも亀仙人に届いていない理由があるとすれば慣れである。

出久と電気は6年修業を積ませてもらったお陰で亀仙人の達人的な動きに慣れてるのだ。

事あるごとにエロ本を見る癖にすら、

A B連合はまだその慣れ事態がないのだ。

入学してから、ほぼ毎日やっているが全然足りないのだ。

「てか、あの爺さん、何やってた人なんだ？」

鋭児郎が前の横向きシートから出久に聞く。

「僕達も6年、一緒にいるけど教えてくれないんだ」

「でもたまに昔の話とか写真を見せてくれるぜ」

「へえ、どんな話なんだ？」

「僕達よりも前に師匠の弟子の人達の話だよ」

「いんのかよ」

「らしいよ、会った事は無いけど・・・」

「それって本当の話なのか？」

実の言葉に出久と電気が睨む。

「だってよ、普通に考えて写真を含めて色々騙せるじゃん、経歴だったり、その話本当なのかって疑問に持つだろ？」

実の言葉も尤もである。

頭が良いし、臆病な実らしい言葉である。

臆病なのは悪いことではない。

何故なら臆病は生き残る可能性が高いからだ。

しかし、その発言は出久と電気を不機嫌にさせるには充分だった。

「師匠は僕達に嘘は言わないよ」

「ああ、隠し事はあるけど嘘だけは絶対に言わねえ」

「う、ごめん」

出久と電気の怒りが籠った声はバスの中によく通った。実も己の否を謝り、この話は終わった。

「あの爺さんの弱点って何なんだ？」

「「煩惱」」

範太の言葉に二人とも同時に答える。

これには全員呆れる。

「いや、それじゃなくて・・・」

「いや、だってじいちゃんを負かすのに手っ取り早いのは絶対にこれだけ」

「絶対に効くからね」

太鼓判を押す二人。

二人とも隣の女子のゴミを見る眼には全く気がついていない。

「おい、お前ら静かにしろ」

消太の言葉で静かになるA組。
バスは地獄へと向かっていく。



AB両組ともバスから降りて、ドーム型の訓練場のゲートをくぐり、中に入る。
中とはとつもなく広く、様々な災害を表した施設がある。

訓練場には既に宇宙服なコスチュームを着たヒーロー13号がいた。

「スペースヒーロー13号だ!災害救助で活躍する紳士ヒーロー」

「わあ、私好きなんだ。13号!」

ヒーローオタクの久と13号ファンのお茶子が彼の登場に喜ぶ。

「皆さん、ここは災害救助訓練用に作られて、水難、火災、土砂、暴風などありとあらゆる事を体験し対応するための施設……その名も」

「「「その名も?」」」」

「ウソの災害や事故ルーム、略してUSJ」

「[[[[USJかよ!]]]]」

AB連合のツツコミが冴えまくる。

「始める前に小言が1つ、2つ、3つ、4つ、5つ……」

「[[[[増える)]]]]」

「相澤先生のテストで自分の可能性や限界をしり、オールマイトの戦闘訓練で自分の個性の危うさを知ったと思います。君達の個性は人を助ける為ではなく、人を助ける為にあるんだとそう思っただけ帰ってください」

「[[[[はい]]]]」

13号のスピーチも終わり、消太がオールマイトは後で合流と言うのを生徒達に伝え、訓練場を使わせようとした瞬間、

黒い穴が突如、下にあるセントラル広場中央に現れる。

消太はそれに気付き目を開く。

出久と電気もそれを見て、他の生徒達もそれを見る。

「13号！ブラド!!生徒を守れ!!!」

消太はゴーグルを掛けて臨戦体勢になる。

「何だ?入試の時みたいなのもう始まってるとってパターンか?」
「動くな!!あれは敵だ!!」

黒い穴から、3人の男が出てくる。

全身に手を大量に着けた 死柄木 弔

全身黒い脳が見えてる 脳無

そして、ローブを羽織って顔が見えない男

最後に黒いもやで顔や手が隠れてる 黒霧

計四人が現れた。

たった四人だけしかない襲撃に先生達も生徒達も驚く。

「四人だけなのか!」

「アホか!そんな数でどうにかなるとでも!」

怪訝な顔をして敵を見る生徒達。

先生方は冷静に驕らずに四人を見て臨戦体勢になっていた。



「ああ、何処なんだよ。オールマイトは？折角良い奴を二人連れてきたのに」

「可笑しいですね。先日頂いたカリキュラムでは確かに」

死柄木と黒霧が話す。

オールマイトが居なくて弔はご機嫌ナナメだ。

「おい、ガキ共を殺せ、そうすれば早く来るんじゃないか？」

死柄木はローブの男に言う。

それを無視するローブの男

ローブの男にイライラする死柄木。

「貴方も記事になりたいんでしょう？」

「仕方ないな、記事は金払いが良いやつに見てもらいたいな」

黒霧の言葉にローブの男はそう言って四人の前に来る。



消太は前に出たローブの男に集中する。
絶対に見続けて個性を使えないようにさせる。
瞬きなんてしないと意思を固めて見る。

ローブの男は消えた。

いや、消えたのではなく、消太の目で捉えきれないほど早く動き、生徒達の後ろにあるこのUSJのゲートの前に移動したのだ。

生徒達を守ろうとブラドが拘束しようと籠手から自分の血液を出し、個性の凝血をローブの男に発射するがローブの男は、それをやる前にブラドの肋骨と左膝の骨を折ってブラドを蹴り飛ばす。

蹴られたブラドはUSJ内にある山岳ゾーンまで吹き飛ばされて気絶してしまう。

13号もすかさずに自身の個性のブラックホールを発動しようと右手を突き出して出るがローブの男はすぐに13号の懐に入り、13号の腕を肘と膝で挟み込み折った。

右腕を抑える13号をローブの男はまたも蹴り飛ばして、土砂ゾーンまで吹き飛ばされて気絶する。

消太は生徒達とローブの男の間に移動して自分の特殊合金の鋼線が混ぜ込まれてい

る捕縛布を投げてローブの男の左腕に巻き付ける。

「どどん波」

ローブの男が右手を突き出しながらそう言う。

すると右手の人差し指から光線が出て、消太の右肩を貫通する。

消太は左手で貫通した所を抑えようとする前にローブの男はどどん波を三回出し、左肩、左腿、右腿を貫く。

消太は膝をついてしまう。

ローブの男は動けない消太を蹴り飛ばす。

水難ゾーンまで飛ばされた消太は、施設にある船にぶつかり、気絶した。

ここまでの事を僅か10秒で終わらせた。

先生達が弱いわけではない。

圧倒的と言えるほどにローブの男が強すぎる。

生徒達はローブの男に恐怖しながらもそれぞれ構えていた。

防衛本能が働いている。

先生達を吹き飛ばすのにゲート前から離れていたローブの男はゲート前まで悠々と歩いている。

生徒達はローブの男に恐怖し、絶対にミスをしないように見ている。

それは生徒達の頭から逃げると言う選択肢を奪っていた。

「何者だ？」

「んん、ちよつと待つてくれ、中々良い謳い文句が出ないんだ、少し待つていろ」

「ふざけてんのか！」

「これだから、子供は・・・しょうがないなあ」

ローブの男はローブを脱ぎ捨てる。

着ていたのは、桃色がベースの中華風の拳法着を着ていて、胸には殺のマーク、背中にはKILL YOUの文字があり、黒い三つ編みが特徴の中年のような男が現れた。

「雄英生徒諸君、私の名前は桃白白。こことは違う宇宙の星だがここでは世界最強の殺し屋と言われていた。諸君にはこれから私がこの世界で敵として金を稼ぐための殺人事件の被害者として死にかけてもらう。安心した前、殺すのは生徒達では1人だけだ。私は金がないとやる気が出ないが稼ぐためのやむ得ない犠牲者は1人だけだ。まあ、誰にするかは闘いながら決めるがな」

桃白白はそう言つて構える。

生徒達もこのイカれた殺し屋である桃白白に対して臨戦体勢になる。

出久と電気が飛び出して、桃白白を同時に殴ろうとするが桃白白は二人に対してデコピンで吹き飛ばす。

吹き飛ばされた二人に当たらないように生徒達は避けて、二人は地面を転がる。

「中々、良い反応をしてくれるな」

生徒達はデコピンで間違いなくこの1年生ヒーロー科で最強の二人を吹き飛ばした桃白白に恐怖する。

「嘘だろ!?!」

「こいつ、じいちゃん並かよ」

「じいちゃん? 亀仙人か」

「師匠を知っているのか!?!」

「知ってるも何も、私はこう見えて武術家でもあり、私の流派と亀仙流は表裏一体の存在。私は鶴仙流の正統後継者!文字通り最強の流派のな!」

その言葉に生徒達が絶句した。

桃白白も亀仙人も本気の強さを見せてはいないが、AB連合が束になっても全然赤子扱いから抜け出せないほどの達人の亀仙人と為を張る流派の後継者なのだ。

自分達よりも強い存在だと嫌でも認識した。

「長々と待ってるなら、こっちから行かせて貰うぞ!」

桃白白は生徒達に突っ込む。

一佳が右手を大きくして、上から潰そうとするが、どどん波を右手に放って風穴を開

ける。

手を戻して抑える一佳に近づき、左膝を折り、ハイキックを当て吹き飛ばす。

「拳道! このやろう!」

徹鐵と鋭児郎が体を金属と硬化して二人とも右拳で桃白白に殴りに掛かるが、桃白白は両拳を使つて二人の右拳を粉碎し、膝を付く二人の間に立つて二人のこめかみに裏拳をぶつける。

やられた二人は地面に顔がめり込んだ。

「飯田くん、急いで全力でゲートを走り抜けて先生を呼んでくる準備をして! 電気と僕で援護する!」

「緑谷君、了解だ!」

「わかった、出久!」

出久と電気が桃白白に突っ込み、攻撃する。

手足を使い連打連打連打の嵐。

しかし、桃白白はそれを完全に防御する。

天哉はこの状況を見て、ゲートまで全力疾走をする。

後、少いでゲートだった所で桃白白のどどん波で左腿を貫かれてしまう。

桃白白は攻撃する二人を殴つて後退させると天哉の前へと移動する。

「甘かったな小僧」

桃白白は天哉の両膝を折り、右腿にもどどん波を貫通させて動けなくさせた。

「飯田君!」

「くそつたれ!!」

出久と電気が再び同時攻撃するも桃白白は二人に対してカウンターをやり、吹き飛ばした。

「ナメんな!」

勝己と体から刃物を出すことができる個性の鎌切尖が右掌と左の腕に生やした大鎌を桃白白に当てようとするが、桃白白は二人の足にどどん波を放ち、動きを止めて無事なもう片方の足の膝を折る。

完全にうつ伏せで倒れる二人の両肩にどどん波を貫通させて動けなくさせる。

「青二才が意気がるな」

「いのー!」

電気が超高速で桃白白に突っ込み、腹に飛び蹴りを喰らわせる。

予想外の速い攻撃に流石に桃白白も二、三步退く。

「やるな、小僧」

腹を擦ってる桃白白に角を飛ばす個性の角取ポニーが角を飛ばす。

角を大量に飛ばして桃白白を吹き飛ばそうとする。

大量にすると操れなくなるが一直線なら飛ばせる故にやった行動であるが、桃白白は計10本の角に押されながらも平然と歩いて向かってくる。

遅くなったのは事実なので、顔から接着剤を噴き出す事ができる個性の凡戸固次郎と実が接着剤と頭の玉を桃白白にぶつけて動きを完全に止め、焦凍が桃白白の全身を氷付けにする。

「よしー！」

「流石にもう動けねえだろー！」

「この程度で、動けなくなると本気で思ったのか？」

桃白白は全身から気を出して氷や接着剤、角、さらには実の玉まで吹き飛ばし、焦凍の肋骨を蹴りで折ってからどどん波で両腿を貫通して動けなくさせてから、体格の良い固次郎は肋骨を折られてアツパーで顎の骨を粉碎されて倒され、実はサッカーボールのように蹴られて吹き飛んだ。

「どうした？この程度なのか？」

「これでも食らえー！」

優雅が桃白白にレーザーを当てる。

鱗を生成する事ができる個性の鱗飛竜とオノマトペを具現化できる吹出漫我が鱗と

オノマトペを桃白白にぶつける。

しかし、桃白白は当たっているのに全く効果がない。

『ゴンガンゴンガンゴンガンゴンガン!!』

漫我の数十メートルはある最大の攻撃が桃白白に向かうが、桃白白は気を放射線状に放ってそれを破壊。

そして、優雅と鱗と漫我の3人の喉を潰し、肋骨を折る。

三人は動けなくなる。

「黒影!」

鳥形状の伸縮自在の影を操る常闇踏影の黒影が桃白白に向かっていくが桃白白は黒影が来る前にどどん波で踏影の四肢を貫く。

しかし、黒影は全く怯まず桃白白の顔を殴る。

「そういう感じか」

『ウオオオオオオオ!!』

黒影が雄叫びを挙げながら桃白白に向かっていく。

桃白白はもう一度気を放射線状に放った。

すると光に弱い黒影は踏影の中へ戻った。

「どういう原理なんだ?」

「いい加減にしろ！」

出久と電気が桃白白にまた向かっていくが桃白白は今度は全ての攻撃を避け続けて二人にゼロ距離で気弾をぶつけて吹き飛ばす。

一息吐く桃白白の足元が突如軟化し始める。

生物以外を柔らかくできる個性の骨抜柔造が足元を軟化させてるのだ。

「ナイス！骨抜！」

他人の個性をコピーできる個性の物間寧人が倒れてる漫我に触れて個性をコピーする。

『バババババババババババ!!』

寧人はマシンガンのオノマトペを桃白白にする。

高速で進むオノマトペを桃白白は素手で一つ残らず掴んでから、見せつけるように地面にバラバラと落とす。

そして、足元が軟化している地面の上を走って柔造と寧人の腕の骨を折り、膝を折って動けなくさせた。

「な、何で？軟化している筈なのに・・・」

「まだまだ固いぞ」

「ウオオオオオオ!!!」

砂糖を舐めて力を増大させる個性の砂糖力道と獣化して力を増大させる個性の穴戸
獣郎太が同時に桃白白に突っ込で行くが、二人とも四肢にどどん波を貫通されて動けな
くなる。

響香が自分のコスチュームの足につけてるスピーカーにイヤホンをつけて大音量の
衝撃波を放つが桃白白には全く効いておらず、スピーカー目掛けてどどん波を放つ。

しかし、それを出久が防ぐ。

「緑谷!」

「ほう、やっぱりお前と金髪頭は一味違うな」

「これ以上、好き勝手させて堪るか」

「このクソ野郎」

出久の隣に電気が来て、二人は桃白白に向かっていく。

しかし、攻撃は完全に防御される。

「お楽しみは後にしておく」

桃白白は攻撃してくる二人の手と足を掴んでそのまま、USJ内の倒壊ゾーンに二人
を投げげる。

「さて、そろそろ殺す相手を決めないと」

桃白白はそう言って今度こそ響香のスピーカーをどどん波で足ごと貫通させる。

体のあらゆる場所がドリルのように回転する個性の回原旋が地面をドリルで壊し、大きな瓦礫を作る。

それをお茶子と身の回りの物体を浮かせられる個性の柳レイ子が浮かして、更に生物以外の大きさを変えられる個性の小大唯が瓦礫を小さくして、尻尾がある個性の尾白猿夫と触れたものに二度と衝撃を与える事ができる個性の庄田二連撃が蹴ったり殴ったりして飛ばす。

また二連撃の任意で二度目の衝撃を与える個性で不規則なタイミングで瓦礫が疎らに更に小さく速く、そして唯が個性を使って瓦礫の疎らに大きくする。

「容易だな」

桃白白はまた気を放射線状に放って、瓦礫ごと六人を吹き飛ばす。

黒い物の中に入り、操る事ができる個性の黒色支配が倒れてる踏影の黒影に入り、桃白白を襲うがまたもや放射線状に気を放ち、踏影事を二人を暴風ゾーンに吹き飛ばす。

あらゆる物を分子レベルで繋がられる個性の泡瀬洋雪が百が創造した爆弾を持って桃白白に向かう。

どどん波を放つが、吹き出した空気を固める事ができる個性の円場硬成が吹き出した息で足場を作り、それを使ってジャンプで避けてから桃白白の上を飛び越え、背中に百の爆弾を繋げる。

爆弾が爆発して爆風と黒い煙が桃白白を包む。

「どうだ!？」

桃白白は黒い煙に包まれながらも、洋雪、百、硬成の四肢にどどん波を放って四人を動けなくさせる。

黒い煙が晴れると桃白白は無傷だった。

服すら無傷だった。

「今ので服が破けなくて良かった」

範太が自分のテープを蔓の髪を操る個性の塩崎茨が桃白白を拘束する。

桃白白はすぐにその拘束をちぎり、テープと茨を持って二人を引っ張る。

しかし、範太には生き物を操る個性の口田甲司が茨にはカエルのような個性の蛙吸梅雨が桃白白に引っ張られないように抑えるが桃白白はそんなの関係なしに四人ともグルグルジャイアントスイングをして、暴風ゾーンに吹き出した。

空中で四人の四肢をどどん波で貫くオマケまでつけて

桃白白は暴風ゾーンに飛んでいった四人を見てる隙に2対の触手に体の器官を複製できる個性の障子目蔵が後ろから桃白白の首を締める。

「今だ、小森!・芦戸」

目蔵はキノコの胞子を出せる個性の小森希乃子のキノコ胞子と三奈の酸を撃つよう

に指示しながら、桃白白と二人を向かい合わせる。

三奈も希乃子も目蔵の指示に従い、最大パワーで撃つ。

「小僧、お前も無事ではすまんぞ」

「俺の命なら安い、これ以上貴様の好きにはさせせん！」

「良い根性だ、気に入った」

桃白白は息を吹き、なんと酸と胞子を出した二人に返す。

希乃子は自分の胞子まみれになり、三奈は自分の酸で皮膚が爛れる。

「何!？」

「まだまだ考えが固いな」

桃白白は肘を目蔵の鳩尾に当て、拘束が解かれたら、胞子まみれの希乃子の肋骨と膝を折って目蔵の頭を掴んだ。

「決めた。私の敵初の殺人は貴様だ」

桃白白の邪悪な言葉に目蔵は睨んだ。

「ふざけんな!!」

「いい加減にして!!」

体をバラバラに分裂できる個性の取陰切奈と透（全裸）が桃白白を攻撃する。

目蔵にしか興味がいつていなかった桃白白はそれをまともに受けて目蔵を放す。

「小娘どもが!!」

桃白白は拳で二人を攻撃するが、切奈は体を分裂させて

避けて、透は透明人間ゆえに桃白白も攻撃を当てられない。

二人にボコボコボゴボゴ攻撃されているが、桃白白にはちつとも効果があるように見え
ない。

鬱陶しそうにしてて痛みがあるように見えない。

「鬱陶しい!」

桃白白は気を放射線状に放ち、分裂した体事、切奈を吹き飛ばす。

「切奈ちゃん、この!」

透は桃白白に金的をお見舞いする。

流石にそこは桃白白でも鍛えられなかったのか、抑えて悶絶する。

「皆の分!」

透は桃白白に向かってこめかみを殴ろうとする。

「なんちゃって」

桃白白は笑いながら、透明人間でもある透の首を掴む。

「ど、どうして?」

「私は微かな気配を読めてね。君の姿は最初からわかってたぞ、どうだ?絶望すら越え

る恐怖を味わう気分は？」

透は桃白白に遊ばれていた事に悔し涙が出た。

「涙見えるか、私は今最高の気分だ！これでこの事件の記事が売れ、雄英の信頼に泥を塗った私は裏社会で大量の金で犯罪に雇われ金が入る。君達には感謝してるよ、これで私は大金持ちだ！」

「人の命を、人の人生を何だと思ってるの？」

「金の成る木さ、それ以外に何の意味がある？」

「悲しい人生だね」

透は泣いた。

先程の悔し涙ではない。

桃白白のこの金と犯罪でしか生きられない桃白白に同情して泣いた。

桃白白の顔が変わった。

笑みは消えて、怒りを籠った目で透明の透を覗た。

「忌々しい小娘が殺す相手は変更だ。お前のその姿は死んでも見えないのか試してやる」

桃白白は右手を構え、掌が見えるようにする。

「死ね」

そして透明の透の腹を目掛けて右手を突き出す。

しかし、気で吹き飛ばされた猿夫が全力で走ってきて、桃白白と透の間に入り、その攻撃を身代わりする。

五本の指が猿夫の腹に刺さる。

「尾白君!?!何で?」

「何でって、人を助けたら駄目なの?葉隠さん」

猿夫は見えないが透に笑顔を向ける。

透はその微妙に視線が違う笑顔に情けない自分が嫌になる。

「小僧、お前、頑丈だな」

「鍛えるしか……ないんだよ……俺は、才能も良い個性も無いからな」

尾白猿夫は普通の人間である。

普通の家に生まれて普通に勉強し続けてきた。

周りに特徴的な個性が出てくると決まって最初に猿夫が比べられる。

そして周りに言われ続けてきた「普通」と、そしてそんな自分の個性が嫌になったのは数えきれない。

何の特徴もない『普通な自分』

それは個人が特徴的であればあるほど良いとされる個性社会で生きるなど言われるのと同じである。

猿夫は卑屈になりかけた時にあるものを観た。

『自分の個性が強いからヒーローになるわけではありません。その自分の全てを受け入れて限界を超えて行き、それを人の為に自分の為に道しるべとして使うからヒーローになるのです』

バラエティー番組でオールマイトが自分の個性が強いものがヒーローになれるのかと言う質問に対する答えを言ってる時だ。

これを聞いてから猿夫は変わった自分を徹底的に鍛え上げ、自分の個性を認められるようになったのだ。

そして、尻尾があるだけの個性で雄英の入試を突破した。

しかし、入学と同時に本物の凄い奴らに会った。

同学年の出久と電気だ。

自分達の体を徹底的に鍛え上げて常識外れな力を見せつけまくった二人。

更には亀仙人。

二人の師匠で未だに鬼ごっこではA B連合の出久と電気を抜いた38人で一回も勝てない。

それから聞いた二人の修行の仕方を聞いて猿夫を死ぬほど実感したのだ。

“自分は努力すら普通だったんだ”

二人に努力と言う自分の十八番ですら負けて、個性でも負けて、それで心が折れない人間はいない。

心すらもう折れていた。

折れていたのだ

けれど、ヒーローとは強ければ良いわけではない。

いくらどんだけ努力をしてもどれだけ凄い個性を持っていても、どれだけ才能に恵まれていても、

“本当のピンチに人を助けられなかったらヒーローではない。”

猿夫は今日ほど嬉しかった日はない。

何故なら友達の死を防げたのだ。

“自分のヒーローに成ると言う夢はまだ壊れてなかったのだ。”

心の底から嬉しかった。

「葉隠さんを放せ!!」

猿夫は自分の尻尾を透を掴んでいる桃白白の腕にぶつけて透を放させる。

そしてそのまま、桃白白に最大威力の尻尾の攻撃をぶつけて、後退させる。

五本の指を抜けて、腹を抑える倒れそうになる猿夫。

透が猿夫を支える。

その目は桃白白を見ていた。

桃白白は後退はしたものの全く効いておらず、けろっとしていた。

「化け物が」

猿夫は心の底からそう思った。

「小僧に小娘がこの私を不機嫌にさせよってからに、このまま仲良く地獄に行け」

桃白白は指に気を貯める。

二人も死を覚悟する。

「死ねえ、どどん波!!」

どどん波が二人に向かっていくが、それは二人の命を奪わなかった。

何故なら、出久と電気がそれを防いだからだ。

「緑谷、上鳴・・・」

「遅れてごめん」

「すまねえ」

「いや、助けてくれて・・・ありが・・・と・・・」

猿夫は倒れた。

「尾白君!?!尾白くん!尾白君!」

死んではいけない気を失ってるだけだが、その勇姿は二人の怒りを爆発させるのに充分だった。

「雷豪・かめはめ波!!」

「豪龍・かめはめ波!!」

二人の切り札は、二人とも今までにないくらいの強烈で巨大になって桃白白に向かっていく。

「こんなもの！」

桃白白は二人の二つの光線を素手で受け止める。

暫くそれは拮抗して、やがて大量の砂ぼこりを生んだ。

肩で息をする二人。

そして砂ぼこりが晴れると桃白白が両掌から煙を出していた。

二人のかめはめ波で軽い火傷を負ったのだ。

出久も電気も唾然とする他ない。

「今のは痛かった……痛かったぞ!!」

桃白白がへろへろの二人に突っ込みボコボコにする。

二人とも防御するが桃白白の攻撃は防御を徹底的に破壊して痛め付ける。

内臓を破壊し、骨を砕く。

透も二人の為にもう一度時間稼ぎをしようと突っ込むが、一緒にボコボコにされて、

出久と電気は首を絞められて、透は倒れる猿夫の所に飛ばされた。

「さてと、痛くて激情してしまったが君達は最高に楽しかった」

桃白白は二人を地面に捨てて、透の方に行く。

「止めろ！」

「ふざけんな！俺達はまだ死んでねえぞ！」

「ほざけ!倒れたままの状態で何が出来る!?!」

出久と電気は立ち上がろうとしたが、骨も筋肉も完全に破壊されて動けなかった。

「弱ければ何も意味はない。弱ければ全てを奪われるのだ」

桃白白は透に向かってどどん波を放てるように気を貯める。

倒れてる全員、その光が文字通り“絶望の光”に見えた。

そして、透にどどん波が放たれる直前、桃白白の体が横から来た光線に吹っ飛ばされてセントラル広場まで行った。

「今のは!?!」

「妙な気を感じてオールマイトと一緒に来てみれば遅すぎたか、遅れて本当にすまなかった」

「皆、謝っても謝りきれない!でもこれ以上、君達を苦しませはしない。何故なら“私が来た”!!」

オールマイトと亀仙人がとてつもない怒りを爆発させながら、やって来た。

そして、二人はセントラル広場にいる敵目掛けて、走った。

「やっと来たか、案外早かったな、脳無やれ」

死柄木が脳無にそう言い、脳無はオールマイトに向かっていく。

パワーファイターとパワーファイター同士がぶつかり合うが、やがて脳無はUSJの天井を破壊して天空に消えるほど吹っ飛ばされた。

「はあ!? 何で? ショック吸収とか超再生に超パワーでオールマイトを殺す為に用意した改造人間だぞ!!」

「それが、どうした?」

オールマイトは死柄木達を睨む。

その姿はぼろぼろ出会った。

決して今のが楽勝ではなかったのを物語っている。

「桃白白! 貴様! どうやってその体を手に入れおった!!?」

吹き飛ばされた桃白白は立ち上がる。

口から血が垂れている。

「私の今の師匠からの贈り物だよ」

「何者じゃ!? それにお主、どうやってこの世界に来よった!!」

「師匠はお前も知っている。ここへ来たのは恐らくは亀仙人、貴様と同じ方法だ、私の師

匠もな」

「貴様!」

「相変わらず、三流の武術を教えているのか? 武術は人を壊すために人を蹴落とすために生まれてきたのだ! それを否定している貴様は何時までたつても三流だ」

「わ「ふぎけるな!!」・・・出久、電気」

「師匠が三流な分けない! 何もなかった僕を助けてくれた最高の人だ!!」

「覚えが悪くて最低な俺でも一生懸命鍛えてくれた俺の大事な師匠だ!!」

「(師匠/じいちゃん)を悪く言うなら、(俺/僕)が許さない!!!」

動けないまま怒る二人。

亀仙人はそんな二人に涙を流していた。

「ワシの大事な教え子達を痛めた分を返させて貰うぞ」

「お前達は絶対に許さない!!」

亀仙人もオールマイトも敵に向かって臨戦体勢を取る。

敵も先程とは違う状況に油断なく臨戦体勢を取る。

両方ともに緊張し、とてつもない緊迫感を生む。

そして、

「おやおやおやおや、
ずいぶんと楽しそうでは
ありませんか」

絶望の音が響いた。

四人が、意思が残っている生徒達が全員声のした方向上を見る。

そこには、体が白くて異様な威圧感を発揮する怪物がいた。

「フリーザ!!!」

そうそれは史上最悪の「絶望の帝王」フリーザだった。
亀仙人がフリーザを見て叫ぶ。

フリーザの近くには先程オールマイトに吹っ飛ばされた脳無が浮いていた。
フリーザは敵達の前に降りて、脳無を放り捨てる。

すかさずに黒霧は脳無を回収した。

「何者だ!」

「私の名前はフリーザ。『悪の帝王』と呼ばれています」

紳士的に話すフリーザだが、威圧感はとてつもなかった。

オールマイトは冷や汗を大量に掻いていた。

「貴方がオールマイトですね? 私の同盟相手の『オールフォーワン』がよろしくと……
そして『神々のゲーム』にようこそと仰ってました」

「オールフォーワンだと!? 神々のゲームとは何だ!!」

「貴方は『キング』に選ばれたのです」

「どうやら貴様には大量に聞かなければならない事があるようだな」

オールマイトは拳を構えてフリーザを見る。

フリーザの威圧感に震えながら

「フリーザ、お主の後ろにいる神は何者じゃ!？」

「おや、武天老師さん、はて何の事ですか?」

「惚けるでない!ワシのいる前でそんな発言をして惚けると思ってたか!!答えろ!お主の後ろにいる神は誰じゃ」

「流石は孫悟空の師匠。孫悟空に似合わずに聡明ですね。けど今回は私はあくまでも捲き込まれただけなんですよ」

「私だって最初からこの計画をしようとは思っていませんでした。筋書きも何もかも全て、私の同盟相手の内容です」

フリーザはそう言つて、二人に向けて強大な気の玉を向けた。

「待つんじゃ!フリーザ、ゲームとは何じゃ!？」

「おおっと、それはこの場にビルス様が孫悟空を連れて私の前で受けると言わなければ意味が無いんですよ」

「何!？」

「来なさい!!孫悟空!!貴方の大切な師匠を殺してしまいますよ!!!」

フリーザは天に向かって叫ぶが何も起こらなかった。

「残念です」

そう言つて二人にドデカイ光線を放つ。

何をやっても無駄と直感でできる程強烈だ。

光線が二人を呑み込もうとした瞬間、天から白い光線が二人の前に降ってきて、光線がチリと化した。

そして、姿を現したのは

“孫悟空”

“ベジータ”

“ピッコロ”

“クリリン”

“天津飯”

“破壊神
ビルス”

“付き人 ウイス”

乙戦士集結である。

「悟空、クリリン、天津飯、ピッコロ、ベジータ、ビルス様にウイス様まで」

「遅れて悪かったなじっちゃん」

「御無事で何よりです」

悟空とクリリンが亀仙人の無事を労う。

「おやおやおや、ビルス様。受けられるのですか？神々のゲームを」

「不本意ながらだけどね。それよりフリーザ、お前なのか？このクソなゲームをあいっに教えて武天老師を捲き込ませたのは？」

「いえ、シナリオは全て私の同盟相手とあの人が作り上げましたので、武天老師さんが捲き込まれているのは、あの人の恨みからです」

「相変わらず陰険な悪知恵が働く奴だな」

ビルスが“あいつ”に対して怒っている。

「今回は本当に私はあの人と同盟相手を結びつけただけですので、何もしていませんので、怨まれても冤罪です」

「もう一つだけ答えろフリーザ、お前、何を企んでる?」

「ホホホ、企みを教えたなら企みとは言わないじゃないですか、けど私の望みは何時だった一つですよ」

フリーザはそう言つて、悟空を指差す。

「孫悟空さん! 貴方を苦しめる事です」

「オラとお前だけなら良い。けどそれで他の人をじつちゃんを捲き込むなら、お前を許さないぞフリーザ!」

「では、神々のゲームを楽しみましょう」

黒霧はゲートを作り、死柄木が最初に戻る。

桃白白は天津飯を見る。

「久しぶりだな、天津飯!」

「桃白白様……」

「お前が憎くて、亀仙流が憎くてしょうがないぞ。私は」

「貴方を本当に昔は尊敬してた強くて冷酷で残忍だったから、でもそれが間違いであることに気づいても私は貴方に対する尊敬を止めなかった、あの時までは、武道家の誇りを喪うあの時までは」

「そんなもの何の金にもならん」

「私は貴方を必ず止めます」

「なら、共に鍛えることじやな。亀仙人と共にな」

「そうそう、言い忘れておった。私の今の師匠は、フリーザ様だ」

桃白白は黒霧で戻ろうとする。

「桃白白!!」

出久と電気が叫ぶ。

「お前だけは!」

「僕達が倒す!」

「亀仙流の名に懸けて!!!」

その叫び声を聞くと桃白白は今度こそ黒霧で戻り、フリーザも戻って黒霧は消えた。

「ウイス、全員今すぐ助けてやれ」

「あら、よろしいのですか?」

「速くやれ、死人が出るぞ、コイツらに死なれたら面倒な事になる」

「わかりました」

ウイスが杖を振るとUSJで倒れていた生徒達の怪我が全て治った。

生徒達は治ったことに戸惑いながらも嬉しく感じていながらも、心の奥底では理解していた。

桃白白一人に手も足も出なかった。
生きているのはただの奇跡だ。

殺し屋一人に雄英高校1年ヒーロー科は

“完全なる敗北”をしたのだ。

「君達は一体?」

オールマイトが悟空達に尋ねる。

「ウイス、コイツも治してやれ」

「良いんですか? 二回の回復なのに」

「キングがヨレヨレだと勝負にならない」

「では」

ウイスはオールマイトに向かって杖を振り、オールマイトの体は光に包まれる。

光が消えるとオールマイトは自分の体の変化に感じたのか、シャツを捲つて見る。

すると、[〃]かつてオールフオーワンとの死闘で受けた傷痕が消えていた[〃]。

「ここ、これは一体!? どうなって!」

「詳しい話は後でキチンと全てやってやる」

ビルスとウイスは生徒達の方に向かう。

生徒達は突然来訪したビルスを警戒する。

「そんなに怖がらなくても良いのに」

「あの後では無理ですよ」

「そっか、んん! えー、僕の名前は第7宇宙破壊神ビルス、こっちはウイス、[〃]第4宇宙

[〃]の皆さん、ちょっとお話をしてくれませんか?」

何が始まるのかわからない。
しかし、これだけは言える。

これは“神々のゲーム”なのだ

燃えよ！若き亀仙流の弟子達

この宇宙は12の宇宙からなっている。

そして、足して13の数字になれば兄弟のような関係に宇宙がなる。

その全ての頂点に立つ「全王」

そして、各宇宙の創造の神「界王神」、破壊の神「破壊神」

そして、宇宙は4つの銀河に別れていて各銀河を管理する役割の「界王」、そして星の「神」がいる。

また、星に死んだものの魂を管理する「閻魔大王」も存在する。

こうして、宇宙は存在し続けている。

しかし、人間のレベルと呼ばれる物あり、あまりに低い宇宙は消されかけたことがある。

それを救ったのが「孫悟空」

彼の発案した武道大会は「力の大会」と呼称され、レベルが低かった12の内の計8の宇宙でおよそ48分間、各宇宙の選りすぐりの10人が1チームとなって最後まで己の宇宙の為に戦うバトルロイヤル。

そして、勝ったのが第7宇宙であり、最優秀選手に送られるどんな願いも叶うことができる願い玉「超ドラゴンボール」を最優秀選手の17号さんの願いによって、力の大会に参加して全王様に消された宇宙の復活を願う。

大会は幕を閉じたのです。

それからは宇宙同士の大きな争いはありませんでした。

しかし、今回提示された「神々のゲーム」、我々の中ではこう呼んでいます「知恵の育成」と

亀仙人こと武天老師さんはこのゲームに捲き込まれてしまったのです。

ゲームの詳しい内容を話す前になぜ、武天老師さんがこの第4宇宙のこの星に来てしまったのかと言う説明をさせて頂きます。

本来、このような時空を越える状況になるのは非常に珍しい事です。

数千年に一度あるかないかと言う状況です。

これがなつてしまった原因は、こちらの星のオールマイトさんとオールフオーワンさんの死闘と第7宇宙の星で悟空さん、ベジータさんとブロリーさんの死闘。

時空を歪めたこの2つの死闘が全くの同時に行われ、時空を越えて2つの星がリンクして互いの宇宙に穴を開きました。

こちらの死闘で開いた穴は比較的小さく、この星だけにしか歪みは出ませんでした

し、こちらの生命が第7宇宙に来ることはありませんでした。

しかし、悟空さん達とブローリーさんの死闘の凄まじさは想像を越える戦いでとてもなく大きな穴が第7宇宙のあちこちに出来たのです。

そして、寝ていた武天老師さんと桃白白さんがこの世界に同日に来て、フリーザさんは部下の皆さんと宇宙船一つと一緒にこの星へ。

武天老師さんは比較的完全な場所に大怪我もなく出ることが出来ましたが、フリーザさん達が出たのはオールフオーワンさんのアジトだったので。

フリーザさん達は勿論制圧しようとはしましたが、死にかけになりながらもオールマイトさんへの復讐心に感心したフリーザさんは自分の軍の最新メデイカルポットへ入れて差し上げて、完全回復させました。

フリーザさん達もこの星を出ようと思いましたが、宇宙船のエネルギーがキレてしまい、再び宇宙に行けるのに三年掛かると言われて仕方なくオールフオーワンさんと共に生活しました。

オールフオーワンさんのオールマイトさんへの復讐にはフリーザさんは全く興味が無かったのですが、あちこちを調べ廻る為のスパイカメラから武天老師さんとお弟子さんの緑谷さんと上鳴さんを発見し、興味本位で二人を調べたら、雄英高校に行きたいと言うことが分かりました。

そして、お二人が武天老師さんと戦い、緑谷さんが「かめはめ波」を撃った所のデータを元に雄英に受かるかと言う計算を第7宇宙最新のコンピュータで計算し100%受かると言う情報を手に入れ、オールフオーワンさんもオールマイトさんが雄英高校の教師としてやると言う情報を手に入れたフリーザさんは宇宙船を使い、オールフオーワンさんの計画を第4宇宙の破壊神「キテラ」様に言い、協力を仰ぎましたが、あまり乗ってはくれませんでした。

そこで、フリーザさんは武天老師さんの事をキテラ様に伝えるとキテラ様はそれは上機嫌になり、協力をするようになりました。

理由は、「力の大会で武天老師さんが第4宇宙の選手を三人も倒しているからです」結果的に人数を多く落とされた武天老師さんへの復讐にキテラ様は心から協力するようになりました。

そして、その頃にフリーザさんが地下の下水道で倒れていた桃白白さんを発見したのです。

一目見て達人だと判断したフリーザさんはオールフオーワンさんに桃白白さんを紹介してあげ、桃白白さんはオールフオーワンさんからの計画を知り、またその計画に亀仙流派の使い手が敵にいると知ったら、協力をすると決意して、体を完全にサイボーグの状態から人間へと戻し、それだけではなく、キテラ様が天使の力を使って桃白白さん

を強化したのです。

強さは上から下までピンきりではありませんが、〃力の大会の代表選手〃になるくらいまで上げて、それ以降はフリーザさんが桃白白さんを鍛え上げてます。

オールフオーワンさん、フリーザさん、キテラさん、桃白白さん達は互いにそれぞれ邪悪で残忍、冷徹、そして四人とも野心が強いためにお互いへの信用はありませんが、四人ともかなりこの復讐に力を入れ、そしてそれを〃知恵の育成〃と呼称して、全王様にこのゲームを認めて貰い、キチンと全王様の権限でルールを厳粛化してる上で第7宇宙に挑んで来たのです。

ここで、〃知恵の育成〃と言うゲームのルールを説明します。ルールは至ってシンプルになっており、互いの陣営の〃キング〃と〃戦士〃の2つの駒を相手の陣営の〃キング〃と〃戦士〃と闘わせて勝敗を決めるゲームで、勝敗のシステムは殺しから降参または逮捕まで様々です。

ただし、キングと戦士は相手陣営のキングと戦士をほぼ同時に正確には〃誤差一日〃未満に倒さないと行けません。

また、キングはキングとしか闘ってはいかないため戦士には手を出せませんし、戦士もキングには手を出せません。

そしてここからが重要なのですが、このゲームは全王様に認められているゲームです。

全王様はこのゲームのダイジェスト動画を宇宙時間の1000テラ後に渡すと申告されてOKしています。

地球の時間では100年後です。

故にこの長期間に渡るゲームは全王様自身が見ておられぬため非常に向こうが申請した向こう有利のルールを変更しにくくなっています。

その代表例が桃白白さんの扱いです。

『第7宇宙の人間はキングと戦士のサポートをしていいが、戦闘を禁じる。但し、桃白白選手は戦士として認める』

これが恐らくこのゲームのルールで一番向こうに有利なルールでしょう。

つまり、桃白白さんは「戦士」として任命されていて、それを倒せる資格があるのはこちらの「戦士」のみなのです。

そして他にもあります。

『「キング」と「戦士」は日常で非常に近い所にいる必要がある』

ここでの「キング」「オールマイトさん」なのでオールマイトさんが普段の日常で近くにいる人でないと「戦士」にしてはいけません。

すなわち、この雄英高校の関係者です。

また、『それぞれの陣営には“マスター”と呼ばれる存在がおり、“戦士”は“マスター”の弟子でなければいけない。』

『“マスター”は“キング”や“戦士”と闘ってはいけない』

『オールマイト陣営の“キング”はオールマイト、“マスター”は武天老師とする』

『神や天使はプレイヤーであり、参戦できない。しかし、特例に天使による回復を二回だけやってよい（オールマイト陣営0 オールフオーワン陣営2）』

以上これが向こう主体の良いように作られたルールで、私達もこれを聞いた時に抗議をして、付け加えられたのは1つだけです。

『オールマイト陣営の“マスター”は亀仙人の他に最大五人までつけていい』

そこで、私達は“孫悟空さん”“ベジータさん”“ピッコロさん”“クリリンさん”“天津飯さん”の五人を連れて来たのです。

また今回のゲームに勝っても何も良いことはなく。

負けたら、相手に対して目の前で一時間ほど徹底的に全王様公認で相手を大笑いできると言うぐらいのもので、ビルス様は受けるつもりはありませんでしたが、それをしなければ武天老師さんが殺されてしまう状況でした。勿論、武天老師さんは第7字

宙の人間ですので抗議しましたが、現時点で第4宇宙にいる人間の生死は第4宇宙の破壊神が握っており、上手くいきませんでしたので受けることになったのです。

因みに向こうの陣営の編成はこんな感じです。

『オールフォーン陣営の“キング”はオールフォーン、“マスター”はフリーザ、“戦士”を桃白白とする』



ウイスの説明を雄英の教師達は会議室で聞いていた。

ビルスはウイスの横で不機嫌ですと顔に描いてるのがわかるほどの感じで座っている。

スケールその物が圧倒的に違いすぎる。

心の底からそう思った。

何だよ、全王って？

宇宙って12もあんの？

常識なんて物は綺麗さっぱり吹き飛んだのである。

「失礼します。ウイスさん」

オールマイトが手を上げる。

「はい、オールマイトさん」

「私の怪我を治したのは何故でしょうか？」

「キングが死にかけだとカツコつかないでしょ」

ビルスが本当にめんどくさそうに話す。

ナンバーワンヒーローに向かって凄く不遜な態度であるが、ここにいる教師全員、先程のスケールの凄さを知っているので何も言えない。

「ここでお礼を言わせて下さい。ありがとうございます!!」

「良いよ。お前の為にやったんじゃない」

「こういう態度は照れ隠しですので許して上げてください」

「おい、ウイス！」

「ほほほ、失礼」

「つたく、んじゃさつきとこつちも『戦士』を決めるぞ。この僕をおちよくりやがって絶対に勝ってやる」

ビルスはウイスと一緒に会議室を出ようとする。

「ちよつと待つてください、オールフォーワンの居場所は分からないのですか?」

消太が二人に尋ねる。

「ウイス?」

「ゲームを始める前は分かっていたましたが、ゲームを受けることとなった途端に分からなくなりました。恐らく全王様公認ルールの影響でしょう」

その事に教師達は溜め息を吐いた。

「でしたら、その見えていた時の情報まで渡してはいけなんでしょうか?」

オールマイトが二人に対してお願いする。

教師達も良い返事を待つ。

「やだよ、めんどくさい」

しかし、返事はたぶん最悪の態度で言われた。

「僕達だって好きでやるはめになったんじゃないの、しかも原因は君達の星の人間だ。悪いけどそこまでしてやる義理は無いね」

ビルスのあくびしながらの言葉にオールマイトも腹が立つ。

「あの悪党は、大勢の人を苦しめている怪物です!人の人生や命を弄ぶ悪魔です!どうしても倒さなくてははいけない!ですのでデータを下さい」

オールマイトの熱い思いと声。

聞く人が聞けば、見る人が見れば感動もののスピーチだろう。

「だから？」

そんなものは神には届かない。

ビルスの言葉に教師達は言葉を喪う。

「そつちの都合でこつちを動かさないでよ。今回は本当に君達のせいであんなってんだから、もう何も言わないで」

心底、うんざりしてるビルスの声にオールマイトがキレる。

「悪党をのさばらせて良いと言うのか!?それが神のやることか!?!」

オールマイトはビルスに詰め寄るが、ビルスは耳掻きをしながら片手間でオールマイトの首を締め上げる。

体重250キロ越えのオールマイトが軽く持ち上げられる。

「お前、さつきからうるさいよ、僕達はお前らにそんな事する義理は無いつて言ってるよ? いい加減にしないと破壊するよ」

「神が悪をのさばらせて良いのか?」

「悪?僕は破壊神だからね、悪かもね、けど神が正義の味方だって誰が決めた?君達が正義だって誰が決めた?君達はただ正義を自称して周りがそれを持て囃してるだけだろ

? 何べんも言うけど今回は君達の星の人間が全てやったんだ。この第4宇宙の二つ名を知ってるかい? 『陰謀の宇宙』だよ。邪悪な奴が生き残る』

ビルスはそう言つてオールマイトを放した。

「一つ言えるのはこの星の人間の本质は『邪悪』だ」

ビルスとウイスはそう言つて会議室を出た。

オールマイトは悔しさゆえに口から血を流していた。

全てを否定されたのだ。

自分のヒーローとしての矜持だけではない。

オールマイトの中で脈々と流れ続けてるワンフォーオールを受け継いで継承してき

た先代達の全てを否定された。

しかもその原因を作ったのが自分達と同じ人間。

神からの拒絶は精神的にかなり来る。

そして神からの一方的な認知。

反論したいのに自分の無力差、浅はかさの方が悔しくなる。

オールマイトは叫びながら、地面を叩く。

拳はめり込み、血が出ていたが誰もそれを止められなかった。



1年生の寮では、同じ説明をピッコロが代表でやっていた。そして、それを聞かされたA B組は思った。

((((スケールでかすぎじゃない?))((

真つ当な正論である。

「・・・以上だ。質問はあるか?」

((((あんた何でそんなに緑なんだよ!))((

気になる所が可笑しい生徒達であった。

「まあ、いきなりこんな話言われてもわかんねえよな」

クリリンがフォローをして皆をリラックスさせる。

場が少しだけ、和む。

「よし、フリーザはオラ達に任しとけ!」

「悟空、桃白白様には俺達は手出し出来ないことを忘れてないよな?」

「ん? そうだったっけ?」

悟空のバカさ加減に乙戦士達は溜め息を吐く。

AB連合は直感した。

(((((この人、バカなんだ))))))

全員、当たり前の事を思った。

これが宇宙を救った救世主と言うのだから、その貫禄の無さにはさっきの話本当かな?と疑問に思うものも出た。

「にしても、フリーザの野郎は何を考えてやがる。今回のフリーザは嫌に静かすぎるし、目的がわからん」

ベジータがフリーザの動向について疑問に思った。

フリーザは今回、本当にオールフォーワンとキテラを引き合わせた事位しかやっておらず、見返りが無い。

更には桃白白の師匠になったのも見返りが無さすぎる。

いつものフリーザとは違いすぎて不気味である。

「弟子が欲しくなったもしんねえぞ」

「何のためだ?」

「一緒に悪いこと……あー駄目だ、そういうやつじゃねえなフリーザは」
「だとしたら、なんなんだよ？」

「弟子を鍛えて、闘ってみてえとか？」

「そんなわけないだろ」

「そうか？オラ、一回やってみてえぞ」

頭が戦闘と修業だけで出来ている悟空。

この脳内戦闘バカっぷりにA B組は困惑以外何も出来なかつた。

「おい！おっさん共、いい加減にしろ！そんなわけのわかんねえ話を言われてもはい、そうですかなんて出来るわけねえだろ！」

勝己がZ戦士達にメンチを切る。

流石、勝己。

何処に行つても何をやつても勝己である。

「んじゃ、どうすりゃいいんだよ？」

「んなもん、これに決まってるだろ！」

拳をパンと合わせる勝己。

A B組は思った。

アホだと、

「良いな!オラも闘ってみたかった所だ」

もつとアホがいたとA B組、更には乙戦士達は思った。

「止めとけ、バカが、ガキのワガママに一々付き合う奴があるか」

ベジータが悟空を止める。

「んだよ、ベジータ?気になるだろ?」

「うっせえ!Mツパゲは引っ込んでろ!」

ベジータ相手にハゲと言う高校生は恐らく全宇宙探しても勝己だけだろう。

しかし、ベジータも流石に暴言にはキレる男である。

瞬時に勝己の後ろに廻って左手で頭を掴み、軽々と持ち上げる。

「おい、ガキ、礼儀作法は教わってこなかったのか?だったら安心しろ、このベジータ様がお前に一晩中付きっきりで礼儀作法を教えてやる。明日、社交界に出られるほどな」

「フザケンナ、放しやがれ」

「威勢が良いな」

ベジータは更に握力を強める。

「ベジータ、もうそこまでにしてやれ」

突如、現れた亀仙人の声にベジータは手を放す。

そして、亀仙人の後ろにビルスとウイスが、更に後ろには消太とブラドがいる。

「師匠！」

「じいちゃん！」

出久と電気が亀仙人の元へ行く。

亀仙人は二人に対して厳しい顔を向ける。

「出久、電気、お主達を破門する」

その言葉は出久と電気に衝撃を与えた。

同門の悟空とクリリンにもだ。

「な、な、なんで？」

「う、嘘だろ？じいちゃん？」

「嘘ではない、お主達を破門する」

二回言われた言われたくない言葉。

出久と電気は狼狽える。

「じいちゃん、負けたことを怒ってんのか？だったら大丈夫だぜ、次は絶対に負けねえから」

「師匠の顔に泥を塗ったのは僕達だ、僕達の手で拭わせてください」

健気である。

純粹に健気である。

しかし、その言葉に亀仙人は余計悲しい顔をした。

「じゃから、破門するのじゃ」

「俺達が破門されたら『戦士』は誰がやんだよ!？」

「そうですよ!僕達以上の適任なんて・・・」

「いるだろ?大量に」

ビルスが割ってはいいる。

「(こ)のお前達より上の学年なら普通に強くて使えるのがいると思うから、邪魔なお前達は破門するんだ」

ビルスのあからさまに挑発が入ってる言葉にキレイない弟子はいない。

出久と電気はビルスに飛び掛かるが、ビルスは軽く息を吐いて吹き飛ばす。

「[[[[[[緑谷!]]]]]]」

「[[[[[[上鳴!]]]]]]」

吹き飛ばされた二人にA B組が駆け寄る。

「ビルス様、ちよつとやりすぎじゃねえか?」

「フン、心が折れてる役立たず共に構う時間は無いんだよ」

「[[[[[[役立たずだ?!]]]]]]」

ビルスの言葉にA B組はキレて臨戦体勢になるが、ビルスはそれを一睨みで一蹴す

る。

あまりの恐怖に腰を抜かすものも疎らにいる。

「この程度でこれじゃ、程度が知れるな。こんなんでヒーローを目指すなんてお笑いレベルだよ。じゃ武天老師、明後日の朝にはここを出るよ」

「わかりました」

そう言つてビルスはウイスを連れて去つていく。

亀仙人は動けなくなつてゐるA B達を一目見てから去る。

悟空とクリリンは亀仙人にこれで良いのか？と聞きながら一緒に付いていく。

ピッコロ、ベジータ、天津飯も去つていき、残つたのはA B達と先生二人だけだ。

「飯田、来てくれ」

「拳道も頼む」

消太とブラドがA組とB組の学級委員長である天哉と一佳を呼び、大量の紙を全員に配るように言う。

二人ともその紙を見てあれこれ言うが消太とブラドはそれらを配らせた。

その紙は「退学届け」だった。

「お前らにそれを渡したのは、明日の臨時休校でよく自分のこれからを考えて欲しいからだ」

「辛くなつたら何時でも辞めていい、俺達でさえ体が震えるほどの相手なんだ。辞めたって悪い訳じゃない」

「それは絶対に出す必要もなければ出ささない必要もない。とにかくそれを持って置いて良く考えてくれ、皆、護れなくてすまなかつた」

消太とブラドはそう言つて、その場を去つていった。

残されたのはA B組だけである。

全員、渡された退学届けを見る。

圧倒的な怪物に立ち向かわなくていい手段。

死にかけて全員に取つて、今これほど良いのはないだろう。

しかし、出久と電気はそれをビリビリに破つた。

「み、緑谷、上鳴も何やつてんだよ?」

人一倍ビリビリな実が二人に尋ねる。

「何つて?破つてんだよ」

「見りゃわかるだろ?」

「誰が今やつてる行動を言えつて言つた!?破つたらわかつてんのか!?!逃げられねえんだぞ!!死にかけてた化け物とまた闘うんだぞ!!ちよつとは自分の命を考えろよ!!」

実は二人を心配して言う。

桃白白に一番殴られて蹴られて、ボコボコにされたのはこの二人だ。

1年生最強のこの二人があんな状況になったのだ。

心配するなど言うのが無理な話だ。

「考えてるよ、考えて選んでる」

「誰がなんて言おうが俺達はまたアイツと闘う」

「どうして、そこまで？何がお二人を動かしているのですか？」

百があまりの二人の迷いのなさに尋ねる。

「努力してたから、6年間、必死で師匠の修業に付いていった」

「だから、それを誰にも否定させねえ、じいちゃんが必死でやってくれた時間を……」

例えそれが神様であつても」

「(僕／俺)の夢は誰にも否定させない!!(師匠／じいちゃん)の優しさもだ!!例えそれを否定するのが(師匠／じいちゃん)であつても!!」

出久と電気はそう言つて、その場を去つていった。

呆然と残つた面々は、それぞれゆっくりとその場を去る。



亀仙人は苦しんでいた。

自分のせいでまさか弟子達が狙われるはめになるとは思っても見なかった。

亀仙人にとって一番の苦痛は弟子が無惨に命を散らす事である。

いくらドラゴンボールで甦ってもそれは変わらない。

自分を憎む破壊神

亀仙流そのものを憎む桃白白

そうこの「知恵の育成」は全てそこに向いていた。

有利なルールも何もかも全てが「オールマイイトと亀仙人」を苦しめる一点に集中していた。

故に亀仙人は出久と電気を破門した。

もう二人には傷ついて欲しくなかったからだ。

しかし、「戦士」は必ず選ばねばならない。

だが、もう二人を傷つけないと言う思いが強い。

自分よりも若くて無鉄砲で純粋で才能に溢れて努力家な二人に亀仙人は闘えとは言えなかった。

悟空もクリリンも昔から闘って来た。

しかし、それは二人が必ず勝てると思ひ、そして二人は亀仙人が心配する前に問題に

突っ込んで解決してきたのだ。

互いに強くなり、サイヤ人の時にはもう二人とも越えていて強く限界はないと証明し続けてきた。

しかし、今回ののは違う。

出久も電気もまだそこまで強くないのに、最悪の敵が現れて二人を痛め付けた。心が苦しくないわけない。

亀仙人は二人の事を考えて、そして破門したのだ。

「じっちゃん、あれで良かったのかよ？」

「武天老師様、あれではあの二人があまりにも可哀想です」

悟空とクリリンが亀仙人に抗議する。

二人とも出久も電気も知らないが、その二人と亀仙人との掛け合いを見れば嫌でもわかる。

この二人は亀仙人の弟子なのだと、悟空とクリリンは亀仙人に抗議する。

この決断はあまりにも亀仙人らしくない。

「悟空にクリリンよ、ワシの想像を越え続けた二人にワシの気持ちはわからんよ」

「けどオラだっていっぱい無茶やって来たぞ」

「武天老師様、私もです！」

「そうじゃな、ワシの知らない所で無茶ばかりやり続けて、心配した途端に解決してきたからの」

「じつちゃん……」

「武天老師様……」

「お主達の闘いを心配しなかった事は一度もない。ずっとワシは心配し続けてきた」

亀仙人からの気持ちの吐露に二人は黙る。

そして、亀仙人は二人の元から去った。

「クリリン、オラやっぱり駄目な弟子だな」

「悟空……」

「じつちゃんが心配してくれてたのに何も気付かなかったなんて……」

「俺もだよ……」

「オラじつちゃんには貰ってばっかだな」

「ああ……俺もずっと助けて貰ってた」

「じつちゃんに何か返してえな、クリリン、今度はオラ達がじつちゃんを助けようぜ」

「そうだな、俺達で助けよう」

意気込む二人。

そこには世界を救ってきた戦士の姿も戦いが好きな戦士の姿もなかった。

二人の亀仙流の弟子がいただけである。



臨時休校。

この日、生徒達は全員、家に帰るか家にいる家族、昔からの友人に会ったり、電話をしていた。

轟焦凍もその一人である。

焦凍には病院で入院している母親がいる。

焦凍の母親はナンバーワンヒーローのエンデヴァーと結婚をして、四人の子供を産んだ。

しかし、その結婚は個性婚と呼ばれ、自分と相手の個性を組み合わせてより強烈な個性を作るという品種改良に近かった。

五歳になってから、ナンバーワンヒーローのオールマイトを超えさせるために連日の地獄の特訓、父親の恐怖と夢への憧れ、そして焦凍の側に立とうと懸命に頑張ってくれ

た母親はエンデヴァーによる暴走と夢を追おうとする焦凍との板挟みになり、精神的に追い詰められていき、自分の母に気持ちを吐露してる所を焦凍に見られて、気が動転し、お湯を焦凍にかけた。

彼の左にある火傷はその時の火傷だ。

それ以来、彼は誓った。

母親だけの個性を使って父親を全否定すると、そしてその誓いは桃白白という殺し屋に粉碎された。

圧倒的な力の前に母親だけの個性では勝てなかった。それは父親の個性を使っても同じだろう。

しかし、次々とA B組のクラスメイト達が倒れていくなかで彼は後悔した。

“皆、死にかけてるのに自分は半分しか使ってねえ”

そう思った。

焦凍はそう心の底から後悔したら迷いがなかった。

母親の病院に行く。

入院してから初めて焦凍が行くのだ。

父親を許したのでは無いし、未だにこの炎の個性は嫌いである。

使うことにも抵抗がある。

しかし、それを使わずに誰かが傷付くところなんてもう見たくないのだ。勇気を出して、彼は母親の所へ行く。

どんな会話があり、どんな状態になるかはわからないが一步踏み出そうと決意した瞬間である。



焦凍だけではない。

この日、A B組の生徒達は全員、あることを心に決めていた。

それは、ヒーロー科を辞めないと言うことを決めていた。

何故なら、死の恐怖よりもっと怖いものを感じたからだ。

それは誰も助けられないと言う苦しみと目の前でクラスメイトが死ぬかもしれないと言う恐怖だ。

自分の死よりもクラスメイトの死の方がより怖かった。

本来ならば、まだ入学したてではこう感じないだろう。

しかし、全員とある事をしていた。

亀仙人との鬼ごっこである。

おちよくる亀仙人に勝つために全然知らない人間と一緒に頭を捻り続けてきたのだ。

互いに互いをよく知るようになった。

何よりも亀仙人のおちよくりが嫌に記憶に残りやすく、学校の休憩時間すら潰して考える程なのだ。

故にお互いもうただのクラスメイトではなく、友人になった。

だから、友人を助けるために自分も全力を出すと心に誓ったのだ。



亀仙人は荷物を抱えて、1年生の寮を出た。

外ではビルスや悟空達が待っていた。

「んじゃ、さっさと「ちよつと待っててください!」・・・ん?」

出久と電気がZ戦士達の前に来る。

「師匠！」

「じいちゃん！」

「もう一度、鍛え直してください!!」

土下座をして、願う二人。

ビルスは呆れる。

「呆れたら、何でそんなに諦められないの？弱いから無理だって言ってるじゃん」
「僕達が弱くて誰も救えないからです！」

「俺達は弱くて誰も守れないんだ！だから……」

「お願いします！ 武天老師様 ！もう一度弟子にしてください！」

涙を流しながら懇願する二人。

亀仙人は二人の姿を見て静かに涙する。

破門と自分勝手にやったのにまだ慕ってくれる事に嬉しかった。

「フン！君達たった二人で二人だけじゃねえ！」……またかよ、僕の台詞なのに……」
「皆……」

出久と電気の後ろに雄英高校1年生ヒーロー科計40人が来る。

「……（俺達／私達）も鍛えて下さい！」……」

「理由を言え」

ピッコロが今来た生徒達に言う。

そして、勝己がそれに反応する。

「あのクソ桃は俺が絶対に潰す、でも今の俺じゃ弱くて歯が立たねえ、だから俺を鍛えてくれ、あんたら強い奴が好きなんだろ? 断言してやる、俺を鍛えたら間違いなく最強だ。だから、最強の俺と闘いたいなら、俺を鍛えてくれ!」

支離滅裂な無茶苦茶な理由だ。

ピッコロもクリリンも天津飯もその無茶苦茶な理由に引いてるが、悟空とベジータはその理由で少し楽しみを感じていた。

「もう、弱いままじゃ嫌なんです!」

「友達が、守るべき人が死にかけてるのに何もできなくて後悔するのは嫌だ!」

「オイラだって! カツケエヒーローになるんだ! こんなところで変なオッサンに潰されて堪るか!」

「もつと強くなって皆を守りたい!」

「もう、自分に負けるのは嫌だ!」

各々がそれぞれの理由を語る。

それを聞いていたZ戦士達は嬉しくなった。

心が折れてないよりも皆、誰かの為に、自分に負けなかったために話していたからだ。

武術とは、

〃相手に勝つためではなくて自分に負けないうためにある。〃

亀仙人の描いた理想は、全員に受け継がれていた。

亀仙人はビルスに対して土下座する。

「お願いします、ビルス様、どうかこの私に機会を下さい」
「何の機会だ？」

「この40人でゲームに挑むと言う機会です」

「ふざけるな! わかっているのか? 相手は殺す事に躊躇がない人間なんだぞ! 失敗したら一番、傷つくのはお前だぞ、武天老師!」

ビルスは武天老師に恩情を感じてる。

力の大会で三人を落としただけじゃない。

ベジータが壺に封印された時は必死で助けたし、クリリンが落ちた時は細かく考えすぎな悟飯にアドバイスをしたり、その精神的な影響は第7宇宙で最も必要だと感じた故に今回のこの「知恵の育成」は強制的に亀仙人の弟子が「戦士」になつてしまう。

もし死んだら一番苦しむのは他でもない亀仙人だ。

だから、ビルスは亀仙人に出久と電気達を破門した方が良いと言つていたので。

「わかつております、誰よりも」

「だったら、なぜやる?」

「この若者達の心に私は掛けてみたいのです」

亀仙人の言葉にビルスは心底、呆れた。

「ビルス様、オラからもお願いします」

「ビルス様、お願いします!」

「私からも!」

「俺からもだ!」

「俺もだ！」

亀仙人の言葉に悟空達五人もビルスにお願いする。

「何だよ？ベジータまで、お前そういうキャラじゃないだろ？」

「一回助けてもらった借りだ」

ビルスは頭を掻く。

「いつもお前達といると全く思い通りにいかない！」

「へへ、今に始まった事じゃねえじゃねえか」

「うるさい！しょうがないなあ」

ビルスは頭を掻くのを止めて、亀仙人と40人の弟子達を見る。

「ウイス、キテラの所に行つて登録しよう」

「おや、なんと？」

「ここにいる40人を『戦士』として登録するんだよ。戦士の上限は無かつたら？」

「確かに上限はありませんが、一度登録すると終わるまで変えられませんよ」

「いいからやれ！武天老師！負けたら許さんぞ!!」

「はい！」

「それと、フリーザには気を付けろ。ここまでフリーザにメリットがないことをワザワザやるって事は、それほどの理由がこの星にあるって事だ。注意しておけ」

ビルスとウイスはそう言つてキテラの所へ行つた。

「んじゃ、早速修業始めつぞ!」

悟空が元気よく言う。

生徒達は鍛えてくれる事に嬉しかったがこの余韻を感じない性格は何なんだろう?と本気で思つた。

「待つんじゃ、悟空。ワシに話させてくれ」

亀仙人は出久と電気の前に座り、もう一度土下座した。

出久と電気は戸惑う。

「出久、電気よ!愚かな師匠のワシを慕つてくれたお主達には感謝してもしきれない!自分勝手にお主達を破門したワシを許してほしい!・・・頼む!もう一度亀仙流に入つてくれ!」

亀仙人の言葉に出久も電気も頭を下げる。

「よろしくお願いします!!」

生徒達も乙戦士達もその両者の姿を黙ってみていた。

そして、その沈黙を破つたのはベジータだ。

「おい、爺さん、これから俺達がこいつらを鍛えるならやることがあんだろ?」

「わかつておるわいベジータ」

「どんな事情があるにせよ、言うべきだ」

亀仙人は立ち上がる。

生徒達はそれを黙って見てる。

「皆に言わねばならぬ事がある。

〃 緑谷出久は無個性である 〃

無個性であるが故に気を自在に操る事が出来るのじや」

その衝撃のカミングアウトに生徒達は出久達は絶句する。

本当の修業の幕が上がる。

出久の悪夢、再び!

桜が葉桜になり、徐々に夏の季節に代わり始める。

雄英高校の波乱の春は終わり、入学した1年生も徐々にこの学校に慣れてくる。

そして、雄英高校はあの地獄を体験しながらも普段と何も変わらない日常を繰り返していた。

そして、それは1年A組でも変わりなかったが、1つだけ変わった事がある。

出久の無個性が1年生ヒーロー科の全員にカミングアウトされたのだ。

その時はその場で解散になり、何も追求することが出来なかった。

それから2日後の今日。

あれから、亀仙人もZ戦士達もヒーロー科に修業をつける事はなかった。

それどころかいつもやっていた亀仙人無双の鬼ごっこでさえ、やらなくなつた。

全員、急いで強くなりたいのに何もしてない状況に戸惑う。

それだけでなく、出久のカミングアウトも波乱を呼んでいた。

突然の「無個性」というカミングアウトは2日間ずっとヒーロー科生徒達が悩むと

言うか、話題の種になった。

それは個性が基本的にある出久達の世代では珍しい無個性の人間。しかもそれが1年生最強の二人の内の一人なら尚更である。

しかし、出久はそれに対しては徹底的に何も言わなかった。それどころか、この2日間は明らかに今までと違って人との付き合いを徹底的に避けていた。

今までの出久とは違うこの態度に電気と勝己以外は困惑していた。

そして、授業が終わり、昼休みになる。

「緑谷！一緒に……」

鋭児郎が出久に授業終わりとはほぼ同時に声を掛けるが、何ともうすでに教室から出ていた。

「またかよ!?!」

「速いな」

あまりの速業にクラス中が啞然となる。

「んだよ！緑谷やつ！無駄に暗くなつてよ!」

実の怒りの言葉にこの2日間の出久の態度を見ていたクラスメイト達も怒りが出てくる。

「まったく、出久のやつ」

電気が出久の後を追おうと教室を出ようとする。

「上鳴、緑谷の事なんだけど」

鋭児郎が電気近づきながら話す。

「悪い、それは俺からは言えねえから、待ってくれ」

電気は鋭児郎が聞きたがっている事を察して言う。

そう、この問題は親友の電気とて簡単に話していい内容ではないからだ。

「んじゃ」

電気はそう言って、教室を出る。



雄英は敷地内に様々な物がある。

様々な状況に対応できるヒーローになれるよう、膨大な敷地と施設がある。

この森もその一つだ。

出久はその森の中で一人、購買のパンを食べていた。

ランチクックが作る食堂でカツ丼を食べたいが、今は食堂を使う気になれない。

無個性である事が皆にバレた。

正直に言ってる怖いのだ。

今までそれでかなり酷い目にあってきた、亀仙人との修業で何とかしてきた。

勿論、出久本人もこの雄英に入ってからヒーローを目指す生徒がそんな人間ではないのはわかってはいるが、

心が言うことを利かないのだ。

「本当に大丈夫か？」

出久は声のした方を向く。

そこには電気が立っていた。

「電気……」

「皆なら大丈夫だって」

「わかってるよ、そんな事」

電気は出久に近づく。

「皆を信じてやれば・・・」

出久の肩を掴む電気。

その肩は震えていた。

「怖いんだ、怖いんだ電気・・・皆が怖いんだ」

「出久」

「頭では皆は違うつてわかってるのに全然、体が言うことを利かないんだ」

出久は電気の胸を借りて泣く。
電気も背中をトントンと叩く。

「大丈夫だ、大丈夫だから」

「ごめん、いつも助けられてばっかで」

「いいから涙を何とかしろ、次はA B合同でヒーロー基礎学だぞ」

出久は離れて、涙を拭う。

「昼飯は食ったか？」

「さつき食べた、電気は？」

「もう購入のパンを食ったよ・・・ほら、戻るぞ」

電気は教室に戻ろうとし、出久も付いていく。

森から、二人は去るが二人から離れた位置で亀仙人、悟空、クリリン、ベジータ、ピッコロ、天津飯の6人が気配を消しながら、その話を聞いていた。

「フン、軟弱な奴め」

「そう言うなよ、ベジータ」

「そうだ、誰にだって怖いことの1つや2つあるだろう？」

厳しい事を言うベジータに反論する悟空とクリリン。

しかし、ベジータはそんな事はお構いなしの様である。

「そんなものは誇り高きサイヤ人にはない」

「へえ、この前、ブルマにこっぴどく怒られてたのにか？」

「き、貴様！何故それを!?!」

「ん？ブルマから言われたぞ」

悟空の言葉にベジータが顔を赤くする。

言い争う二人に他の四人は離れて一塊に集まる。

「ベジータの奴、一体何を言われたんだ？」

「何でもトランクスの学校の父親参観を1週間前から言われて更に前日にもきつちり言われてたのに悟空と一緒にビルス様の所へ修業に行ったららしいです」

「ほお、それでこっぴどく怒られたと」

「もうブルマさん、カンカンでしたよ。『自分の息子との約束を破るなんて何がサイヤ人の王子よ!』ってしかも、トランクスにも『パパなんて大っ嫌いだ!』って言われて、次

の日は一日中家族サービスしてたらしいですよ」

「ベジータが宇宙一怖いものはブルマだな」

「違うない」

笑い会うガヤの四人にベジータは睨む。

「貴様ら、止めろ！ブツ飛ばされたいのか！」

和む六人。

亀仙人がわざとらしく咳をして、五人を止める。

「五人とも、お主らの初仕事はまだまだ先になるじやろう、午後からの授業を見て生徒それぞれに会った修業法を一人一人考えてくれ、お主らに頼むときはそれを実践して欲しい」

「ええ、オラ達の出番はまだかよ」

「出番も何も悟空、まだ生徒らの事を知らんだろ？ワシが頼むまでよく見て修業法を考えるのじゃ」

「なんか、めんどくせえな」

「学ぶのも修業じゃ」

「くだらん、俺様はトランクスを鍛えてた。今さらそんなめんどくさい事が出来るか！」
「ベジータよ、トランクスと生徒達は違う。人に合わせて人を強くさせるのは教える師匠にとつても立派な修業じゃ、それにこれは悟空でもやった事が無いから、悟空を越えられるかも知れんぞ？」

亀仙人の言葉にベジータは黙る。

流石は武天老師、修業と指導に関しては地球一である。

(宇宙一は天使になるので逆立ちしても無理)

「クリリンも天津飯もピッコロもそれで構わぬな?」

「はい! 勉強させていただきます!」

「私も自分の道場の教え子達の為に精進します」

「ま、当たり前だな」

三人ともいい返事を亀仙人に返す。

ピッコロはどこかはなにかけて言っている。

「何だよ、ピッコロ。そんな当然みたいな返事して」

「当然だ。俺は悟飯を鍛えたからな、少なくともこの中じゃ武天老師の次に師匠として優秀なのは俺だ」

「何だと？トランクスを強く鍛えてきたのはこの俺だ、いずれトランクスは悟飯よりも強くなる」

ピッコロの言葉にベジータが反論する。

「フン、あんなガキの頃からガールフレンドがいる不純な奴に悟飯は超えられん」

「黙れ！古くさい陰気な奴め！」

「そうだぜ、ピッコロ。本人同士が好きなら良いじゃねえか」

「ませたガキがサイヤ人一頭脳明晰な悟飯を越えるなど絶対にありえん」

「面白い、いずれトランクスと悟飯を勝負させてどっちが優秀な師匠か試してやる」

「勝つのは悟飯だ」

ピッコロはベジータは互いに睨みあう。

「まあ、その勝負やいずれ見させて貰うとして、お主達よ。午後からの授業に遅れぬようにな、特に悟空」

亀仙人は五人に言った。

悟空には杖を突きつけて名指しで、

「何だよ、じつちゃん? オラだってちゃんとやるぞ」

「お主がこの中で一番時間にルーズじゃから言っておるのじゃ、昔、天下一武道会で危うくエントリー出来ない所だったのを忘れると思うたか」

「その次はちゃんと間に合わせただろ?」

「そうじゃが、お主のその他人に合わせなさすぎる所は目に余るぞ、お主もいい年して二

児の父で一児の祖父なんじゃから」

「武天老師様、大丈夫ですよ。俺が一緒に居ますから」

「うむ、頼んだぞクリリン」

「悪いなクリリン」

「良いつて気にすんな」

六人はその場で解散し、午後からの授業に向けてそれぞれ時間を潰していた。

悟空とベジータは食堂に入り、食堂の食料の半分を平らげてしまい、料理長のランチラッシュが過労で倒れた為に腹八分目で食事が終わるはめになった。

この時の二人を見た雄英生徒は二人のブラックホール並の食欲に引っくり返ったのは言うまでもない。

因みに二人はこの2日間の間、学校の食堂ではなく、クリリンが近場でやつてる大食いチャレンジのチラシを持ってきてそこで飯を食べていた。

稼いだ額は二人とも互いに20万を超えており、学校の近場の店から出禁にされた。更に二人の食いつぷりに負けん気を起こしたとある店の店主が1日の内で更に二人に挑戦してとんでもない大赤字を出してしまい、その店は1ヶ月後に潰れた。



A組、B組の生徒達がコスチュームに着替えて、グラウンドβに集合する。担任の消太とブラドが生徒達の前に立つ。

「お前達がこの前の戦いを経験してその上でこうして全員が辞めなかったのはヒーローとして本当に嬉しく思い、心の底から尊敬する」

「だが、教師としては嬉しく思う半分、自分達の体や命を大事にして欲しい。誰しも永遠

にヒーローは出来ない、ヒーローが体を壊して引退して苦悩の余り、自殺した例は世界中で後を絶たない。若いお前達にそのような人生を歩んでほしくはない」

消太とブラドは生徒達の覚悟を嬉しく思い、大人としてヒーローの先輩として教師として、生徒達に語る。

その姿に生徒達はより一層自分の将来の事を考えるようになった。

「今日のヒーロー基礎学は戦闘訓練だ」

「先日の件でお前達にこんな悪趣味な争いの戦士として登録されたのは本当にすまなかった。お前達を守るのが仕事なのに何も出来なかった俺達を恨んでも構わない」

「だから、今回の授業は武天老師さん以外の方がお前達の事を知るために戦闘訓練をする事になった」

「詳しい内容は発案者の武天老師さんが話してくれるのでよく聞くように」

「[[[[[[はー!]]]]]]」

「では武天老師さん達、来て下さい」

亀仙人達は生徒達の前に立つ。

「[[[[[[ここで改めて自己紹介をさせて貰う。ワシは武天老師、他の星では武術の神と呼ばれていた者じゃ、亀仙人と人はそう呼ぶ」

「オツス、オラ孫悟空だ! じっちゃんの弟子でサイヤ人ちゆう宇宙人だけど、よろしくな
!」

「俺はクリリン、武天老師様の弟子で悟空とは同じ釜の飯を食べた仲だ。俺はあんまり強くないし、精神が未熟な時期が長かったから、辛いことがあったら相談して欲しい」

「ベジータだ。貴様らを徹底的に鍛え上げるが泣き言は一切認めん、以上だ」

「ピッコロ。俺にも一人弟子がいる、勿論お前達があいつと同じとは一切思わんが容赦の無さは変えるつもりはない」

「俺は天津飯、皆には言っておかなければいけないが、俺は今もう関わってはいないが、桃白白と同じ鶴仙流の弟子だった。お前達を痛め付けた技は俺も使える。俺を元同じ流派として恨むも憎むも好きにしてくれていい、次にあの人と闘うまでの対策は協力する」

全員の自己紹介が終わり、天津飯の内容には驚きこそすれ、誰一人恨む人間はいなかった。

全員、天津飯の言葉の重みがわかったからである。

「それじゃ、自己紹介も終わった所で本日の訓練の内容を伝える。本日の訓練は出久と電気の二人とそれ以外の生徒で戦って貰う」

亀仙人の言葉に生徒達は戸惑う。

その通りだ。

内容がとてつもなく不安だからである。

「そして、もう一度言うが出久は無個性じゃ」

「じいちゃん!」

「黙っておれ、電気」

電気からの抗議を亀仙人は却下する。

出久は不安な目で亀仙人を見る。

「何か質問があるものはおるか?」

「武天老師先生! 戦いと云うのはどのようによ?」

「出久と電気のペアを30分以内に制圧できれば、お主らの勝ちで出久と電気は逆に30分以内に他の皆を無力化すれば良い。時間切れは引き分けとする、それでは時間が無

いことじゃし、5分後に始める。出久と電気はワシらの近くでスタートし、お主らはここからスタートじゃ」

亀仙人達はそう言つて去り、出久と電気もそれに付いていく。他の皆も戸惑いながら準備を始めるのであつた。



出久と電気は互いにストレッチをしながら、合図を待つ。
亀仙人達も出久と電気を見る。

「出久、大丈夫か？」

「大丈夫だよ、皆、いい人だもん」

「なら、良いけど」

明らかに作り笑いをしてる出久に電気は何も言えなかった。電気は亀仙人を睨むが亀仙人はどこ吹く風だった。

「それでは行くぞ! よーい、始め!!」

出久と電気は猛スピードで開始と同時に突っ込んでいく。亀仙人はストッププウオツチを持ちながら走っていった二人を見る。



二人が走っていくと何とA B組の殆どがその場を動いていなかった。

寧ろ、二人が突っ込んで来て始めて始まったことに気づいてる人もいた。

「いくぜ、緑谷！上鳴！」

鋭児郎が二人もとい、出久に突っ込んでいく。

全身を硬化して、出久を殴ろうとする。

出久は本気で向かいに来てくれる鋭児郎に心の底から嬉しかったが、拳が自分の顔に向かつてる途中、硬化が解けた。

これは鋭児郎自身、本当に無意識でやってしまった事だ。何も悪意なんて物はなかった。本人が持つ本来の優しさゆえに無意識でやってしまったのだ。

しかし、それは残酷にも出久が最も辛く感じる「侮辱」の行為であった。

この行為は亀仙人達も目を鋭くさせた。

ブチッと何かの琴線がキレた。

出久は鋭児郎をたった一発のカウンターで気絶させた。

「出久！」

電気が出久の名前を呼ぶが本人はもう怒りに囚われてまともに聴いていなかった。

「電気、かつちゃんだけお願いして良いかな？」

「あ、ああ」

出久の変貌に電気は言葉を喪った。

「すぐに終わらせる」

出久はそう言つて、突っ込んでいった。

電気は言われた通り、勝己の相手をして10分かけて沈めていたが、出久はその間でほぼ全員を沈めていた。

本来、いくら出久でもこんな早く沈ませる事は出来ないが、出久が無個性である事で全員、無意識の内に一瞬だけ手加減してしまい、そこを出久が怒りの鉄拳で沈めていたのだ。

もう残っているのは、手袋と靴を履いている透明女子の透だけだった。

出久は透を睨む。

透は体を大きくビクつかせて両手を上げる。

「こ、降参する。緑谷君、降参する」

「そう、葉隠さんも真剣にやってくれないんだね」

「真剣だよ!けど、勝てない戦いは「真剣じゃないじゃないか!!」・・・えっ?」

透は突然の出久の激昂に言葉を喪う。

「君は何で透明になつてない！その手袋と靴は何だ!?真剣じゃないじゃないか!!君の個性の良さは透明になれる事だろ!?!」

透は出久に指摘されて、始めて自分が本気でやっていなかったことを理解した。

「こんなのが嫌だから、必死で隠してたのに、ここの皆は違うと思つてたのに!信じてたのに!・・・もういい」

出久は透に向かつていく。

手袋があるお陰で何処に急所があるのか一目瞭然だからだ。

透は出久に恐怖し、手を前に出す。

しかし、出久の拳は超高速を使って出久と透の間に入った電気が止めた。

「電気、退いてよ!」

「出久、もう終わった。拳を引かせないと俺も容赦しねえぞ」

「どっちの味方だよ？」

「少なくとも降参してる相手を殴ろうとする奴の味方じゃない」

出久は透を見た。

透は腰を抜かしてへたり込んでいた。

出久は拳を引き、電気は透に手を差し伸べて立たせた。

「それまで！」

亀仙人のストップの合図が響く。

30分の戦闘訓練はわずか10分で終わった。



戦闘訓練が終わったが、勝己以外、全員浮かない顔をしてる。そうである。

勝己以外、出久を侮辱したのだ。

しかも悪意がない善意でやったのだ。

出久と電気は亀仙人から講評を受けていたが、皆は悟空達から受ける事となった。悟空達もまさかこんな事になるとは思っておらずに困惑していた。

そして、その沈黙を破ったのは悟空だった。

「お前らも悪くなかったけどよお、もっと本気を出さねえと二人に失礼だぞ」

「貴様らがやった事は戦士に取っては侮辱以外の何物でもない。恥を知れ」

「今のお前達が桃白白と戦うなんて夢でも無理だ」

「俺は弱いけど、あんな手の抜き方をされたら、流石に腹が立つよ」

「お前達がやったのは優しさではない。自分は優しいと自惚れた結果のただエゴだ」

五人のダメ出しはこれで終わった。

五人ももう何も語りたくないと言う感じだった。

一方、出久と電気は亀仙人の講評を受けていた。

「電気よ。勝己一人相手にあそこまで時間を掛けてはいかん、卑怯じゃないとは言わないが、誰かと一緒に仕事する時はチームワークが必要じゃから、次は気を付けるように」

「わかった」

「出久よ、確かに皆の行動に腹を立てるのはしょうがないが、降参してる相手にまで手を掛けて良い理由にはならないぞ」

「すみません」

「それは武術ではなく、暴力になるから頭を冷やしなさい」

「ちよつと待つてくれよ、じいちゃん、元はと言えばじいちゃんが皆の前で……」

「良いよ、電気、これは僕が乗り越えないといけない問題だから」

「出久」

出久はそう言つて去つた。

電気は亀仙人を睨む。

「じいちゃんのせいだ！じいちゃんが言わなければこんな事には……」

「そうやって、皆に隠し続けるのか？それは皆に対する侮辱じゃ」

「こんな事に意味はねえよ！俺達はあのクソ野郎をブツ飛ばさねえといけねえんだ！強くしてくれよ、じいちゃん！俺と出久なら出来る！」

「電気よ、今のお主には足りないものがある。それを知るのじゃ」

「何だよ!足りないものって!？」

「それを学ぶのじゃ」

電気は出久を追いかけようとする。

「いくら、戦士としてじいちゃんと言ってる事が正しくても人としてヒーローとして出久の親友として絶対に正しいなんて認めない!絶対に!」

そう言っ出て出久を追いかける。

こうして、訓練が終わった。



授業が早く終わり、残りの時間は亀仙人は校長室で校長とブラド、消太と四人で話して。

「次のヒーロー基礎学も戦闘訓練にして欲しいって無理だよ、ヒーローは戦闘だけできれば良い存在じゃない。法律や救助、それに生き残るための渡世術も必要だから、二回続けて戦闘訓練は無理だよ。ましてや同じ内容じゃ」

「無理なのは承知の上です。どうか、もう一度頼みます」

頭を下げる亀仙人に校長は困る。

「校長どうでしょう？ 次の時間は互いに前の授業の反省も兼ねた道徳ですから、一緒に受けてもらい、放課後、グラウンドβでやって貰うのは？」

消太が校長に対して進言する。

「けど、たった一時間ちよつとで直るとは思えないよ」

校長が紅茶を飲みながら、頭を掻く。

「私達もサポートしますので」

ブラドも熱意ある言葉で話す。

「しようがないな、許可するよ。但し、今日だけでそれでも同じ結果になったら、この内容では二度と許可しないよ」

「ありがとうございます!」

亀仙人は校長と消太、ブラドに礼を言って、消太、ブラドと一緒に校長室を出た。

「先生方、ありがとうございます!」

「いえ、俺達はその位でしか役に立てませんので」

「しかし、今回の内容はあまりにも厳しすぎたのは？まだ、皆は学生です」

「厳しいのはわかっております。皆、心優しき生徒ですので、しかし、相手に対して敬意を伴ってなければこの先チームとして彼らは必ず崩壊します。それは何としてでも避けなければいけません」

亀仙人はそう言い、去っていった。

残った二人は亀仙人の背中を見ながら、心から思った。

教師として桁が違いすぎる。

二人ともその事実を噛み締めて互いにもっと上を目指すと誓った。



六限目の授業

A組教室でミッドナイトが先ほどの授業の反省も兼ねて道徳の授業をする。

B組では13号がやることとなってるが、全員明らかに沈んでいた。

「よし、授業を始める前に皆に知らせよ。放課後、グラウンドβでさっきの補習をします。条件はさっきと一緒よ。全員さっきの事について道徳も兼ねながら、B組と一緒に受けるからこれから大教室に移動よ。但し、緑谷君と上鳴君は先にβへ行つて、作戦会議も兼ねてるから」

「わかりました」

出久と電気はそう言つて教室を出た。

「よし、皆移動よー!」

A組はそう言うミッドナイトの言葉を受けて教室を出た。



βでは亀仙豆を食べた出久と電気がシャドーしてる。

出久のシャドーは明らかに力が入りすぎていた。

「出久、皆もわかってくれるって」

「無理だよ、そんなに人間が変わるわけない」

「大丈夫だって、俺だって」

電気の言葉に出久は電気に詰めより、胴着の襟を持った。

「皆が皆、電気みたいに強くないんだよ！勝手な事言うな！」

出久の怒号に電気は呆然となる。

出久は電気を怒ってしまった事に気がついた。

「ご、ごめん、電気を責めるつもりは無かったんだ」

「良いよ、俺は大丈夫だから」

「僕は何をやってたんだ!? 自分の問題に皆を捲き込んで、親身になってくれてる電気にな
で……」

「出久……」

「ごめん……頭を冷やしてくる」

出久はそう言って去った。

電気はその場に踞った。

傷つけるつもりは無かったのに傷つけた自分のアホさ加減に幻滅した。

「オッス、お前は上鳴だったっけ? ちよつとオラと始まるまで話さねえか?」

電気は悟空を見ながら話す事を決めた。

一方、頭を冷やすために、手洗い場の蛇口の水を頭に掛ける出久。しかし、顔はさつきと何も変わっていなかった。

「お？ここに居たか？どれちよつと俺と始めるまで話さねえか？」

出久は顔を上げて、やって来たクリリンを見た。

「これは僕の問題ですのぞ」

「そうだけど、誰かに話すと気が楽に成るかも知れねえぞ。亀仙流の先輩として相談に乗ってやる」

クリリンはそうやって胸を叩いてむせた。

出久はその姿に和みながら、話す事を決めた。

亀仙流の先輩として悟空とクリリンは二人に何を言うのか？

果たして、皆はこの試練を乗り越えられるのか？

友情の絆！出久&電気 v s 1年生ヒーロー科

自分の無神経な言葉で出久を傷付けてしまった電気。

電気は、悟空とその事について話していた。

「俺、出久と六年間一緒に修業してきたんです。出久の無個性の事は三年ぐらい前に知り、俺その時、気が上手く出せなくてイライラしててあいつの前で無個性に成りたかったって言ったんです。無茶苦茶キレて無個性の何がわかるって怒られて、その日の内に互いに謝ってそこからは一緒に頑張ってきたんです。無個性の事を必死で勉強して傷付けたくなくて、けど何も分かってなかった。分かった気になってただけなんです」

電気は涙を出しながら、悟空に話す。

悟空はこう言う事は無茶苦茶苦手だが、親身になって聞いていた。

「オラもクリリンにこの前、怒られたんだ」

「えっ？」

「じつちゃんがまだオラ達の星にいる時、久しぶりにクリリンと修業して貰ってその時、言われたんだ。『俺はお前とは違うんだ！』ってオラそう言うの苦手だから皆に迷惑掛ければなしでな」

悟空が言っているのは力の大会前の亀仙人にクリリンと一緒に受けた修業だ。クリリンがトラウマを克服するために頑張った時だ。

「そ、それで」

「ん？」

「それで二人はどうやって仲直りしたんっすか？」

「さあ?そもそも喧嘩してねえしな」

「うえい!?!」

悟空のあつけらかなとした答えに電気は驚く。

そりやそうだ、誰が聞いても喧嘩したようにしか聞こえない。

「クリリンが頑張って克服したら、戻ったんだ」

「参考になんねえっす」

「まあ、オラが言いたいのは緑谷を待ったらどうだ？」

「待つ？」

「おう!待つんだ!強くなるまで!」

「でも、出久が心配で・・・」

不安がる電気に悟空は笑う。

「電気は緑谷の奥さんだな!」

「ちよつと！俺は女の子が好きです！」

悟空のあらゆる疑いを全力で否定する電気。

「ハハハ、でもそう自分からじゃなくて相手を待つのも良いもんだぞ」

悟空の笑い声に電気は理由は分からないが安心感を覚えた。何故か大丈夫だと思えた。

そして、電気は出久を待つことに決めた。

「悟空さん！俺、出久を待ってみます！戻ったらごめんって言います！」

「おう、悪いことしたら謝んのが一番だ！オラもチチに謝ってばっかだ」

「チチ!？」

「オラの嫁さん」

「嫁!?!奥さん居たんつすか!?!」

「おう、息子二人に孫もいっぞ」

「孫!?!」

悟空の家族関係に心底驚いた電気は暫くの間、呆然としていた。

一方、その頃クリリンと出久も話し合っていた。

「僕、無個性で昔から皆にバカにされてたんです。でも師匠と出会って電気と出会って一緒に頑張ってきて、自分が無個性だったのを受け入れた筈なのに全然受け入れてられ

なかった」

「まあ、さっきのは誰だつて腹立つよな」

「皆、優しいってのは知ってるんです。けど頭がいくら理解しても心が言うこと利かなくて、電気にも八つ当たりして最低だ」

「俺も前に悟空に怒った事があるんだ。武天老師様の所で久しぶりに悟空と一緒に修業したんだけど、その時の相手が自分のトラウマだったんだ」

「トラウマ・・・その時、どうしたんですか?」

「立ち向かって勝ったさ」

「どうやって?」

「思い出したんだよ、悟空の凄さを」

「凄さ?」

「どんな逆境でも強い敵でも笑って立ち向かえるんだ。悟空は!俺もそうなりたいって思ってたんだ!・・・緑谷には身近にそんな奴は居ないのか?」

出久はクリリンの言葉を聞いて思い出している。

亀仙人の修業を一緒に越えてきた親友をいつも明るく元気で勉強が苦手な女好きなヒーローと一緒に過ごしてきた時間を思い出してきた。

「いるんだな?」

「います。僕の一番の親友です。電気になりたい……電気みたい逆境でも明るく笑えるヒーローになりたい！」

出久は泣きながら、電気に対する憧れをクリリンに言った。

「トラウマはどうやっても永遠に自分に付き纏うけど憧れがあると耐えられる、乗り越えられる、一緒に憧れに向かって頑張ろうぜ！」

優しく厳しいクリリンの言葉は出久の心に住み着いていたトラウマを消し払う為の光を帯びて、出久の心に入っていった。

「はい、ありがとうございます」

トラウマは簡単には治せない。

けど、支えがあればきつと治せる。

出久はこれからも自分のトラウマと向き合おうと心から誓った。

「ところで緑谷、お前好きなき子いるか？」

クリリンの突然の質問に出久は顔を真っ赤にする。

「すすすす好きって、ななな何をし？」

「いるんだ、誰だ？ 芦戸ちゃん、蛙吸ちゃん、麗日ちゃん、耳郎ちゃん……」

「……っ！」

出久は響香の名前を聞くと耳まで真っ赤にする。

「そうか、緑谷の好きな子は耳郎ちゃんか!」

「クリリンさん!ぼぼぼ僕は別に耳郎さんなんて!」

「へえー、んじや響香ちゃんって呼ぼうかな?どうせ名前で呼ぶのが多くなるし」

「駄目です!僕だつてまだ呼べてないのに!・・・あつ」

出久のテンパリ具合にクリリンは膝を叩きながら笑う。

とんだ羞恥プレイである。

出久は真つ赤にしながら、顔を伏せる。

「俺も若い頃は好きな子にそうやってたよ」

「クリリンさん、彼女さん居たんですか?」

「ん?嫁さんと子供もいるよ」

「奥さんも子供も要るんですか!?!」

クリリンは胸ポケットから、18号とマーロンと一緒に撮った写真を出久に見せる。

「ほら、嫁さんと子供だ。嫁さんが18号つて名前で娘がマーロンつて名前だ」

「奥さんの名前、个性的ですね」

「まあ、訳ありだからな、マーロン可愛いだろ!」

「はい!」

「手え出すなよ」

出久はクリリンを見ると鳥肌が立った。

笑顔だが明らかに『手を出したら殺す』と書いてあった。

出久は苦笑いしながら始まるまでクリリンと話していた。



大教室ではA B組が反省と道徳の授業として開始していたが、ミッドナイトは少し待つてといい、13号と消太とブラドに任せていた。

三人ともいざ始めようと思ったが、生徒達にどうアドバイスするべきか悩み、生徒達も自分達がやった事の重大さに黙るしか無かった。

「遅れてごめん、待たせたわね」

ミッドナイトが入ってくる。

しかし、その格好はいつものハレンチな格好ではなく、凄いギャップがあるほど見る人に同じ人？と言われるほど普通の格好だった。

「ミッドナイトさん、何やってんですか?」

「あの格好でこんなナイーブな話はしにくいでしょ、こうすれば皆も親しみが出てくる」
「ええ、いつもその格好なら目のやり場に困りません」

ミッドナイトのノリに全く乗らず消太は答える。

「さてと、あなた達に質問です。私達がヒーローをやつてて永遠に続く問題は何でしょ?」

ミッドナイトの質問に全員が答えられずにいる。

「はい!」

「飯田君」

「人を助けられなくなる事です!」

「それも間違つてないけど違うわ」

天哉からの答えにミッドナイトはあざとく答える。

いい年して、

「答えはね、人を傷付ける事よ」

ミッドナイトの低くなった声に突然だした重圧に生徒達に緊張が走る。

「私の武器の鞭で敵を捕まえ続けてきた。けどそれは同時に敵を傷付ける事でもある。このジレンマはヒーローになったら永遠に続くわ」

「そこからは抜け出せないんですか？」

「無理よ、けど私はそれで特に落ち込んだこともなければ苦しんだこともあまりないわ」
「どうしてですか？」

「だって、私のこれは皆と特訓して得たものよ。仲間と本気で喧嘩しまくってね。だから自信があるの絶対に殺さないって、緑谷君も恐らく貴方達に対してそう思ってるわよ。絶対に問題ないから本気でやれって」

ミッドナイトの言葉に皆は出久の怒りを思い出す。

「あとは、教えなくても良いよね。それじゃ、私達先生はちよつと席を外すから皆、反省会を頑張ってね」

ミッドナイトは教師三人を引き連れて教室を出た。

生徒達だけで反省会をする事になったが、沈黙は長い。

それを破ったのは出久がキレた原因を作った鋭児郎だ。

「一瞬、個性を解いちゃまった。傷付けたくないって思っっちゃまった。バカだよな、俺なんか緑谷に傷つけられる事なのに・・・どうして、気が緩んだ、くそ！」

鋭児郎は机に思いっきり頭をぶつける。

「ちよつと、切島！何バカやってんの!？」

「うるせー！自分のクソさに怒りが止まらねえんだよ！」

「あんただけじゃない!私だって躊躇した」

「俺もだ」「僕も」「私も」「躊躇した」「一瞬・・・」「僕も」「私も」「俺も」・・・etc
どンドン、自分のやってしまった事を言うヒーロー科。

確かに反省も後悔もあつた。

「強いのは出久だけじゃねえだろ」

突然、勝己が全員にそう言う。

「放課後は勝たねえと意味がねえ、俺は何としてでも勝ちに行くぞ、それが二人に対する
礼儀だ」

鋭く眼光を光らせる勝己。

本気で勝ちに行く人間の目だ。

それに全員が気合いを入れ直した。

緑谷に対する侮辱を償うために、心底呆れられた悟空達に認めさせる為に作戦会議を
する。

教師たちは部屋の外からそれを眺めていた。

●●●
グラウンドβでストレッチをする電気。

悟空は、電気の様子を眺めていた。

さつき話して吹っ切れた電気の姿は見ていて安心を感じていた。

その二人の元に出久とクリリンがやってくる。

電気も悟空もそれに気付く。

「出久」

「電気、いつもありがとう」

電気は突然言われた感謝の言葉に困惑する。

寧ろ、さつきの事で謝りたかったのに出鼻を挫かれました。

「お、おう」

「僕、電気になりたい。電気みたいに明るく笑顔で逆境を乗り越えられるようになりたい。だから、僕、頑張るよ。電気、これからもよろしくね」

電気は先ほど悟空に電気の奥さんと言われたのを思い出してしまった。

誰がどう聞いても告白か何かには聞こえない。

電気は出久に対して嬉しく思うが嫌な物は嫌である。

「そ、それは愛の告白か何かじゃないよな?」

「ちよつと!?!折角、悩んで出したのにどうして茶化すの!?!」

「いや、マジでそうにしか聴こえねえよ!俺は女が好きだ!」

「僕だつてそうだよ!」

「へえー、んじや誰が好きなんだよ?」

「それは・・・つて言つてたまるか!!何かつてに人の恋路を聞こうとしてるの!?!」

「そりゃネタになるからだよ、笑いの」

「最低だ!電気の好きな子をクラス中にバラすぞ!」

出久の言葉に電気は顔を赤くする。

「どうやら、出任せで言つたがどうやら電気にも好きな子がいるんだと出久は直感した。」

「え?マジでいるの?」

「うるせー!いねえよ!」

「その反応はいるだろ!?!」

「いない!」

他愛もないバカな会話だ。

けど、二人ともギクシヤクしてた物は無くなっていた。
電気は悟空の言うとおりでだと思った。

勝手に向こうが乗り越えてきた。

悟空を電気は凄いと心から思った。

何気ない会話をする二人を悟空とクリリンは一緒に見ていた。

「クリリン、いつもありがとな」

「何だよ、急に変な奴だな」

「へへ、助けられっぱなしだからな」

「あれ？俺、悟空を助けた事あったっけ？」

「おう！いつもな」

悟空はクリリンに今までの事を感謝した。

悟空の方がクリリンを助けてる回数が多いが悟空はそんな事は気にしなかった。

いつも修業に付き合ってくれるクリリン、どんな時でも一緒に戦おうとするクリリンに心から感謝した（力の大会の戦わないは置いて）

そして、放課後になる。



また、さつきと同じ所からのスタートで、出久も電気も準備する。

「出久、勝つぞ!」

電気はさつきと言葉を変えた。

下手に出久に過度な期待をさせるわけでもなく、重圧を感じさせるわけでもなく、いつも通りの事をやった。

「うん!電気、勝とう!」

出久は電気に笑顔で答える。

この二人の姿はどこか似ていた。

「それでは、始める。よーい、始め!」

出久と電気はまた猛スピードで走る。

さつきと同じ場所に来るが、そこには誰もいない。

辺りを見回していると、突如暗くなり上を見上げたら、大量の瓦礫が降ってきた。

「麗日さんか！」

「やべー！」

二人は互いに分かれて別々の建物の中に入り、その攻撃から身を守った。

電気は、瓦礫の雨が降りやむのを待とうとしたが、突如背後からの殺気に気付き、前転しながらその攻撃を避けた。

それは勝己の右の大振りの攻撃だった。

「爆豪か！」

「さっきの借りを返させて貰うぞ」

「また倒してやる」

「ホザケ！」

電気と勝己は互いに戦いを始めるがやはり、電気の方が何枚も上手でタフさでは勝己が勝つてるが手数は電気の方が遥かに多い。

「どうした!?! さっきと同じだぞ! ウエイウエイウエイ!」

「どうかかな?」

その時、氷が這ってくる音が聴こえて電気は超高速で避ける。先ほど電気がいた場所には大きな氷が出来ていた。

「轟か！」

「だけじゃねえぜ」

尖が大鎌を生やして斬りかかるが、電気は腕に気を回して受け止める。

ここでコスチューム説明だが、この二人の胴着の下のインナーは鋼線を編み込まれて出来ており、そつとやちよつとの刀剣類では斬れない。

「鎌切!」

「後ろに注意だね。A組」

電気は勝己の個性をコピーした寧人の爆破を背中に受けて少し、ぶつ飛ぶ。

「やるじゃねえか!」

電気は勝己、焦凍、尖、寧人を見ながら言う。

「わくわくしてきたぜ!!」

電気は楽しみながら、四人に向かっていく。

一方その頃、出久は範太のテープに右手、茨の茨に左手を拘束されていた。

「そんなので抑えられるとでも?」

出久は二人に突っ込んで行き、両手で両方の鳩尾を殴る。

「た、確かに・・・」

「捕まえましたわ」

二人は腹にめり込んだ出久の手を掴む。

動きにくい出久の正面に旋が腕を個性で回転させながら出久に殴り掛かる。

出久は二人にゼロ距離で気弾を当て吹き飛ばし、旋の攻撃を防御する。

旋は連打で責めるも出久はことごとく防御して、カウンターで気弾を当てて吹き飛ばす。

今度は出久の足元が柔らかくなる。

柔造の個性で柔らかくなったのだ。

出久は建物の二階に逃げる。

二階はがらんどうとした所になっていた。

すると突如、出久の首が絞められる。

透が後ろから近づいて飛び掛かって絞めに来たのだ。

「は、葉隠さん」

「緑谷君！さつきとは違うよ」

「みたいだね」

出久は透を振り払おうとするが全然離れない。

寧ろ、どんどん絞まってくる。

「喰らえ！緑谷！」

猿夫が正拳突きをしようと向かってくる。

出久はとっさに後ろを向いて、背中に張り付いてた透に当てさせる。

透は突然の衝撃に出久から離れてしまう。

「ああ、腰が・・・酷いよ尾白君！」

「ごめん、葉隠さん！」

透は腰を抑えながらも出久に対して構えて（透明で見えない）、猿夫も構える。

「こう言うのはどう？」

出久は気弾を撃ち、大量の埃を二人に被せる。

すると、透明な透の輪郭が見えるようになる。

ここで一つ考えてほしい。

透は服を透明に出来ないで基本的に全裸だ。

その全裸な姿で輪郭が見えてきて、大変グラマー体型なのでまあエロい。

むしろ、輪郭だけしか見えないゆえに想像が止まらなくなるから更に・・・そんな姿を間近で見た純情男の猿夫は鼻血を出しながら、倒れた。

「ちよ？尾白君どうして!?!」

「だから、倫理的にやばすぎだつて！」

「初だなあ、尾白君」

顔を赤くしてる出久の言葉に説得力はない。

「ひ、酷いよ緑谷君！こんな乙女の柔肌を利用して純粋な人を戦闘不能にさせるなんて、卑怯者！卑劣漢！変態！」

「失敬な！こうなるとは思ってなかったよ！まあ葉隠さんも見えるから、すぐに戦闘不能にさせてもらうよ」

「うう」

出久は体を振らせてる透に対して構える。

まあ妄想逞しい猿夫が純情かどうかは一先ずおいておく。

透の輪郭も見えるようになったので分かりやすくなったが、透もまさか猿夫がこんなになるとは思っても見なかった為、急に今の状況が恥ずかしくなってきたのである。

うん、知らない人が見れば、どうみても出久が悪党で透が被害者な状況である。

「この変態が!!」

響香が百に作って貰った特大ハンマーで出久の頭を殴る。所謂100トンハンマー攻撃である。

出久は気を読めない為に突然の事に対処しにくい。

その為にこの攻撃をまともにくらい、頭を抑える。

そして、攻撃してきた方を見ると響香だけではなく、お茶子と茨、透以外の女性陣もいた。

「げっ!?!」

「女の敵が覚悟は良いな!?!」

「ちよつと待つて耳郎さん!誰だつて透明人間相手ならこの方法を取るよ!」

「問答無用!透の柔肌を利用した卑怯戦法に加えて反省しない残念頭!そして、顔面を赤くして鼻の下を伸ばすあんたに容赦する義理はない!」

響香からの指摘にすぐさま鼻の下を触つて伸びてないか確認する出久、その態度が相手の怒りに油を注いってしまった。

「死ねえい!!!」

響香は出久の心臓目掛けてイヤホンジャックを飛ばす。

出久も避ける。

そして、響香の後ろにいたレイ子が大量の塵を出久に向かって発射。出久は構えるが、その塵を唯が個性で大きくし大量の石にして、出久に飛ばす。

出久は急に石になったのに驚くも全部気合いと根性を使い素手で叩き落とす。

全てを叩き落とすと周りを出久の周りには女性陣が囲んでいた。

全員、ゴミを見る目で出久を見る。

出久は皆が本気で来るこの状況に嬉しく思いながらもどこか納得できない感情であつた。

「じゃ緑谷、大人しく、潰される」
「お断りするよ」

その合図に出久と女性陣の戦いが始まった。

百、唯、希乃子、ポニー、レイ子は遠距離から大砲や瓦礫やらで攻撃するも出久は全て気弾で対処してるが、一佳の巨拳で握り潰す為に掴まえられても強引に脱け出し、そこを切奈が個性で突然、出久の前に現れて出久は殴るも当たる箇所を分裂されて避けられてカウンターを貰う。

すかさずに三奈の酸が出久を襲う。

出久は何とか全てを被らずにすんだが、避けきれなかったためにコスチュームの胴着が少し、溶けた。

冷や汗を掻くがそんな事を気にしてる余裕もなく、梅雨の舌の鞭を目に受けて視界を奪われて、響香のスピーカー攻撃で聴覚までも奪われる。

やみくもに手を動かす出久。

気を読めないと言うのがここまで酷いことになるという良い例である。

因みに出久だけでなく、電気も気を読めない。

何故なら、気を読むと言うのは強い相手と戦って強いと言うのを肌で感じないと覚えにくいのだ。

現にベジータもナメック星では悟空達と戦った後ゆえに覚えていた。

話を戻して、出久が手を動かし続けると突然、柔らかいような硬いような不思議な感触が手に伝わる。

何回か揉み、視界が回復して、手の先にあったのは、響香の胸である。

響香は顔を真っ赤にさせて、目尻に涙を溜めていた。

「ハ、ハ、ハ、この・・・」

「ごめんなさい!!」

「この変態が!!!」

出久は謝るが時すでに遅し、響香の100トンハンマーを諸にくらい建物の外まで吹っ飛ばされた。

〃瓦礫のない〃道路に落ちる。

鍛えてたお陰で何とかなったが、凄い威力だったと心から感心した。

恐ろしいくらい怖かったが・・・

「ウエイ!!?」

電気も出久の近くに飛ばされてくる。

コスチュームも胴着が焦げて破けていた。

「電気、大丈夫？」

「何とか」

「誰に？」

「爆豪と物間のダブル爆破攻撃にやられた。あー、効いた」

電気は少し、重い足取りで立つ。

するとまた影が出て来て上を見上げたら、瓦礫の雨が降る。

二人は避けられずに体を身構えるが瓦礫は二人に当たらずに円形のリングの輪郭のように周りに積み上げられる。

「これは……」

「誘い込まれたか」

「その通り！」

出久と電気が声のした方を見ると天哉が立っていた。

「いくら君達二人でも一斉にこれだけの人数ならただじゃすまないだろ！」

すると、A B連合が出久と電気を取り囲む。

先ほどの授業の訓練とは違って統率力を持ってやっていた。

先ほどとは月とスッポン並の違いだ。

「へへ、出久。今のところの気分教えてくれよ」

「嬉しくてしんどくて楽しい」

「ああ、ワクワクしてきたぜ」

出久と電気は互いに破れてる胴着を破り捨てて上半身はインナーだけになる。

まだまだ、楽しみ足りないと言った感じだ。

囲んでるA B連合も笑っていた。

そして、戦いが始まった。

BGM：「超絶☆ダイナミック」

踏影が黒影で攻撃してくるが、出久と電気は避ける。

徹鐵と鋭児郎が息のあった攻撃で倒そうとするが、出久と電気も抜群のコンビネー

ションで二人を倒す。

実が頭のブドウを大量に二人に投げまくる。

出久はブドウ一つ一つを気弾で破壊、電気が実に突っ込むとするが、柔造の個性で

足元が柔らかくなり、力が入れにくくなる。

「出久!」

「了解!」

出久は気弾一つを電気に当てて無理やり脱出させる。

「出久、飛べ!」

「荒いなあ」

「150万ボルト放電！」

電気が大放電の放電をして、A B連合を痺れさす。

出久はかなり上空までジャンプし、それを避けていた。

着地すると何人かは倒れていた。

「派手にやったね」

「ありがとう」

出久と電気の所に力道と獣郎太が突っ込む。

「うおおおおお!!!」

力道が出久の、獣郎太が電気の首を絞めるが、出久と電気は相手の腕を掴み、力付くで首から放した。

そして、相手に頭突きを喰らわせて放れさし、すかさず出久が二人に気弾をぶちこむ。

「電気！大技行くよ！」

「よっしやあ！」

出久と電気は互いに左右対称な構えになり、勝己や天哉等の残りの生徒達、目掛けて発射の体勢になる。

「豪龍・かめはめ波!!」

「雷豪・かめはめ波!!」

二つのかめはめ波が生徒達に向かっていく。

しかし、それは悟空一人の手によって止められる。

「ちよつと、悟空さん!」

「良いところだったのに!」

「悪い悪い、けどもう時間だぞ!」

「「「「えっ?」」」」

悟空の言葉に残ってる生徒達が亀仙人を見る

亀仙人はストツプウオツチを見せると確かに30分になっていた。

「この勝負、引き分けとする」

「「「「ええええええ!!?!」」」」

納得が行かずに生徒達の不満の声が出てくる。

「まあ、こういうのはこれからもあるから今日はおしまいじゃ」

亀仙人の言葉に約何名かは凄く不満そうな顔をするが、しようがないと思い、一先ず

諦めた。

「皆!その・・・色々と迷惑かけてごめん」

出久が皆に聴こえるように言った謝罪、だが皆の反応は、誰一人気にしていなかった。

「別にいいぜ！緑谷！今日は最後まで吹っ飛ばされたけど次は勝つからな！」

「次は負けねえ！」「絶対に勝つ！」「今度は引き分けがないルールでやろう！」「まだまだ互いに全力を出しきってないから、次は出そう！」

皆が色々と言ってくれる。

出久にとつて、呪いと思っていた物はここにはやはり存在していなかった。

いや、していたが消えた。

薄れたと言つて良いかもしれない。

それは出久の心を暖かくさせていった。



訓練の補習が終わり、全員、グラウンドβにまだいた。

互いに今回の訓練の補習で至らなかつた所を二人から聞き、二人も自分達の駄目だつた所を皆から聞いている。

それを最初は黙つて見てた悟空達だが、ついに悟空が声を出した。

「お前達凄かつたな！どうだ？オラと戦わねえか？」

乙戦士たちは呆れて生徒達も流石に疲れてるために断ろうとしたが、電気はノリノリだった。

「やりましょう!俺の速さを見せつけますよ!」

「ちよつと電気!」

「おお、いいな!やろうぜ!」

「悟空、落ち着けて」

互いに互いの相棒を落ち着かせようとするが全然落ち着かず寧ろ、ドンドンヒートアップしてくる。

堪えかねた亀仙人が四人に言う。

「よし、お前達四人でかめはめ波で決着をつけい!」

「二「かめはめ波で?」」

「そうじゃ、互いに二人二組で相手を撃って、押し勝った方が勝利だ」

「武天老師様、緑谷達が危ないですよ」

「大丈夫じゃ、クリリン。お主達がキチンと力を抑えられていれば良い。出久も電気も柔な鍛え方はしておらん。力を抑える為の修業と思え」

「・・・わかりました」

「おお、じつちゃん!ありがとな!」

「お前は何でそう元気なんだよ?」

「流星はじいちゃんだぜ!」

「あれだけ、派手にやったのにちよつと余力多くない?」

出久もクリリンも互いの親友の元氣っぷりに呆れながらも、準備する。

それでも互いに親友に付き合うのはもう当たり前前の感覚だった。

ここに亀仙流のかめはめ波対決が決まった。

他の生徒達とZ戦士達は捲き込まれないように退避する。

「緑谷君も上鳴君も元氣やなあ」

「よくやるよホントに」

響香とお茶子が二人の元氣っぷりに呆れる。

「おい、小娘ども、もっと離れてろ」

ベジータが二人に対して言う。

二人は小娘呼ばわりしたベジータを睨む。

「何だ?」

「私の名前は麗日お茶子って言います」

「私は耳郎響香」

「だから、何だ?」

「「名前で呼んでください」」

「断る、さっさと行かないと殺すぞ」

ベジータは二人を睨む。

正直に言つて無茶苦茶怖いので、二人はヒソヒソともう少し離れる。

ベジータは生徒達が危なくないようにバリアーを張る。

それを見た生徒達からツンデレ?と色々と話し声が出てくるが、一喝して止めた。



悟空とクリリン、出久と電気が互いに向かい合う。

出久と電気は何気ない二人の確かな重圧を確り感じる。

「緑谷も上鳴もじっちゃんのでどんな修業をした?」

「一つだけで良いから教えてくれよ」

「牛乳配達」

二人のはもった答えに悟空とクリリンは笑う。

何も変わつてない事に笑った。

今も昔も亀仙流は何も変わつてなかった。

亀仙人は笑つて二人に優しい笑みを向ける。

「二人とも本気で来い!」

「同門の先輩が胸貸してやる!」

「よろしくお願いします!!」

四人ともかめはめ波の体勢になる。

「始め!」

亀仙人が合図をする。

悟空とクリリン、出久の手に光が溜まっていく。

電気の手稲妻が溜まっていく。

「豪龍・かめはめ波!!」

「雷豪・かめはめ波!!」

出久と電気の最高のかめはめ波が悟空とクリリンに向かっていく。

「やるぞ、クリリン」

「オツケー、悟空」

「かめはめ波!!」

何の変鐵もないただのかめはめ波だが、そのかめはめ波は出久と電気のかめはめ波を軽く押し続ける。

「どうした?これで精一杯か?」

「何のまだまだ」

「もっと、やって良いぞ」

「はいー!」

悟空とクリリンは凄い余裕で話すが、出久と電気は話すのもやっとの状態だった。ドンドンと押されていく出久と電気。

「負けてたまるか!!」

叫びながら、力を全て出しきる勢いでやる。

悟空とクリリンはそんな二人を見ながら笑みを浮かべる。

必死な所も自分達にそっくりだと思いつつ、

「よし、クリリン!もつと行くぞー!」

「えっ?」

悟空は何と超サイヤ人ブルーになる。

クリリンもこれには啞然となる。

「お前、なに考えてんだよ!二人を殺す気か!」

「大丈夫だつて」

出久と電気は突然変異した悟空に驚きながらもかめはめ波の方に全神経を集中させていた。

「よし!10倍だ!」

「バカ、二人が死ぬわ!」

「んじや、何倍なら良いんだ？」

「二倍ならまあ」

「二倍?!?!」

出久と電気は軽い会話をしながら、物騒な相談をする二人に心底驚いた。

そして、二倍になった時など考えたくないから、力を入れて悟空達に勝とうとするが
びくともしない。

「よし、クリリン！」

「わかったよ」

「波!!」

本当に宣言通り二倍の威力で撃つ二人に出久と電気は迫り来るかめはめ波を怖いと
思ったが同時にとある事を思った。

先輩達は凄い。

追い付きたいと心から思った。

そして、悟空達のかめはめ波に押されまくった二人は吹っ飛ばされた。

吹っ飛ばされた先で寝転がりながら二人は笑った。

自分達なんか足下にも及ばない凄い先輩だ。

清々しいまでに笑うしかなかった。

「出久、追い付こうぜ」

「うん、必ず二人よりも凄いコンビになろう」

「ああ、宇宙一のコンビにな」

二人は笑いあい誓った。

こうして亀仙流の弟子たちの交流が始まった。

亀仙流短編集

〔ランチラツシユvsサイヤ人〕

雄英高校の食堂、様々な生徒達が通うこの学校の食堂は広くそして、多種多様な料理に溢れており、なおかつ学生と言う育ち盛り達の為に量を一般の食堂とかと比べても明らかに多く出しており、雄英高校の魅力の一つと世間ではそう評される。

しかし！昨日ここに現れた怪物二人の為にその魅力の一つが潰れようとしている。

彼ら二人の名前は、〃孫悟空〃、〃ベジータ〃。

突然宇宙から現れた胃袋がブラックホールの怪物二人である。

彼らが来たのは一昨日かそこらであったが、食堂を使い始めたのは昨日だ。

それまでは町の食べ物屋を使っていたらしい。

しかし、その食べ物屋を出禁になり、ここを使い始めたようだ。

雄英高校食堂の長たるランチラツシユは二人を歓迎した。

そりゃそうだ。

内外で有名なここを使わずに外に行かれては雄英の魅力の名折れだからだ。

だから、美味しいご飯で満腹させようと頑張った。

頑張ったは良いが二人はランチラッシュの想像を遥かに越えていた。

まるで食べ物ブラックホールに入れられてるように恐ろしい早さで消えていくのだ。

二人のテーブルに置いたら最後、一分間も持つていれば良い方で、一秒で消えてる井ものが普通にあつた。

井が一秒で消えるのどうぞ？

ランチラッシュは食い物のヒーロー、決して満腹以外で返してしまうとプライドが崩壊する。

そして、昨日、ランチクックは過労で倒れてしまった。

まあ、亀仙豆で回復したは良いがその後自分の部下から二人が食堂の食材の一週間分の半分を平らげた上にそれでまだ腹八分目と言う怪物具合にランチラッシュは頭を抱えた。

人間が太刀打ちできる胃袋と食欲ではないと心から思った。

聞けば食堂を使う前は、町の大食いチャレンジばかりして文字通り食い潰して来たと言われ、さらなる心労を味わうはめになった。

そして、その夜の食事時に彼ら二人が世話になつてる寮、一年生寮に足を運んだ。

寮ができるようになった当初はランチラッシュが朝食と夕食を届けると言う話であつた

が、校長が独り立ちした時の為に朝食と夕食は生徒達に作らせようになった。

一年生寮で二人の様子を見ると二人はあまり食べてなかった。

ランチラツシユは気になり、管理人の亀仙人に聞くと何と亀仙豆を10粒以上食べて無理矢理腹を膨らませた上で普通の食事を取っ手いたので。

確かに腹の膨れ具合は良いがランチラツシユは思った。

「これは違うと」

実際、ベジータは平気で何も問題はないと言っていたが、悟空はご飯をたらふく食べたいとぼやいていた。

しかも二人とも昨日の事を亀仙人に怒られたらしく、暫く昼は亀仙豆で何とかすると言っているのだ。

自分が食事を管理してる雄英で食事をたらふく食べられないなんてのは恥も良いところだ。

ランチラツシユは二人に「明日も来て良い」と言い。

その明日である「今日」、ランチラツシユは昨日敗れたサイヤ人の胃袋にリベンジするのだ。

急遽、1週間の食料の半分が消えた状況になったで学園が一日で何とか消えた食料をもう一度注文した。

ランチラツシユはサイヤ人二人ように特別メニューを作る炭水化物系で腹が溜まるように麺類、丼もの、ライス系、芋類で構成した。

狙いは見事予想通りだった。

二人のサイヤ人は100人前で満腹になったのだ。

こうして、ランチラツシユは二人のサイヤ人の胃袋に勝ったのである。

「ランチラツシユ、この食費の大赤字どうするの?」

「はっ!?!」

ランチラツシユとサイヤ人の戦いは続くのであった。

【亀仙人は何処に行った?】

ランチラツシユがサイヤ人に勝った日の夜、天津飯は亀仙人を探していた。

これからの事も兼ねて、亀仙人に自分が考えた生徒達の修業法が正しいかどうかを確認するために亀仙人を探していたが、中々見つからなかった。

「天津飯さん」

寮の中をウロウロしていると、梅雨が天津飯の元にやってくる。

「蛙吸か」

「どうしたんですか？」

「いや、武天老師様を探しているんだが見てないか？」

「亀仙人さん、ここ数日、この時間帯はいなくなってるから」

「そうなのか？」

「何々？何の話してるの？」

三奈と透が二人の所に来る。

「三奈ちゃん達は亀仙人さんが何処にいるか知らないかしら？」

「透、見た？」

「見てない」

「そうか、三人ともありがとう」

「でも、亀爺ちゃん何処だろうね？」

「そうだね？」

「どうかしましたか？」

「何かあったのか？」

百と焦凍が集まつてる天津飯達の所へ行き、他の皆もぞろぞろと来る。

いないのはベジータとピッコロと悟空、実、目蔵、甲司、勝己、猿夫ぐらいだ。

「こんなに集まるとはな、この際都合が良いが、誰かすまない武天老師様を見た人はいないか？」

「あれ、そう言えばこの時間になると消えるよな」

「そうなのか、瀬呂？」

クリリンが瀬呂に聞く。

「はい！ここの二、三日はいないっす」

「俺達が来てからか、そう言えば緑谷」

「はい」

「武天老師様の悪癖治ったのか？」

「いえ、治ってないです」

出久の言葉にクリリンは顔に手を当てる。

全員が頭を傾げる。

「クリリン、悪癖とは？」

「武天老師様の弱点、煩惱です」

全員が全員があーつと納得の声を出した。

「そう言えば、俺達、今武天老師様と一緒に部屋で寝てるけどエロ本は一冊も無かった

な」

「そう言えば・・・」

天津飯とクリリンが不思議がる。

「それ、燃やしたんです。A B組の男どもの持ってた奴と一緒に燃やしたんです」

クリリンと天津飯は互いに顔を見合わせる。

「なあ、女子達で武天老師様のセクハラに会った子っていないよな」

女子達は首を横に振る。

「クリリンさん、いくら師匠でも流石にセクハラは・・・」

「いや、甘い！武天老師様が戦闘時ならともかく普段も煩惱を抑えられるなんてのはありえない！」

「断言するんスカ」

「出来る、ひよつとしたら、女子達が部屋にいない間に部屋の中に入って色々物色してるかもしれない」

クリリンのあんまりな一言に女子全員、身の毛をよだせて、急いで自分の部屋に戻っていった。

「クリリンさん、そんな脅しを」

「いや、可能性は高い。いつもばふばふとかツンツンさせてとか、尻を触らせてとかやっ

てるからあり得る」

出久と電気はどんだけスケベなんだと改めて思い知った。

「そーいや、エロ本出したら弟子にしてくれたな」

「確かに電気はそうだったね」

出久と電気は最初の頃の懐かしい話をする。

クリリンはその話を聞いて驚く。

「どうしたんですか？クリリンさん」

「い、いやー別に・・・」

「クリリンも同じ事やってたよな」

悟空が風呂から上がって来て、そう言う。

「え？クリリンさんですか？」

「まあ、恥ずかしながら」

「やつぱりじいちゃんならこれで何とかなるって思いますよね！」

「わかる、わかるぞ上鳴！」

互いに共感しあう、クリリンと電気。

すると、女子達が降りてきた。

全員、心安らかな顔をしていた。

「その様子だったら大丈夫だったんだ」

「はい！」

「もちろん！」

「ベランダ所か、ベッドの下までくまなく探したよ」

「しかし、こうなると武天老師様はどこへ？」

全員が悩むと電気がとある事を思い出す。

「わかった、峰田の所だ。エロ魔人同士気があつてるに違いない」

「確かに二人ともそれに関して是人並み以上だしね」

「「「そんな人並み以上は嫌だな」」」」

天津飯とクリリン、そして女子達が峰田の部屋に進む。

「お前達、別に来なくて良いぞ」

「いえ！もしもエロ本が峰田の部屋にあつたら、燃やすためです！」

響香が気に入ったのか100トンハンマーを持って話す。

天津飯は響香のさっぱりとした気質に好感を持つと同時に物騒なハンマーはどうかならないんだろうかと思つた。

実の部屋の前に行き、天津飯はノックする。

すると、亀仙人が部屋の中から出てきた。

「武天老師様、ここにいらつしやいましたか」

「天津飯よどうしたのじゃ？」

「いえ、ちよつと聴きたいことがあつたので探しておりました」

「そうか、すまんが後にして貰えぬか？」

「いや、外せない事があつて・・・」

「亀仙人さん、ちよつと退いてくれますか？」

「ど、どうしたのじゃ？ 耳郎よ」

「中を見させて下さい」

笑顔で答える響香、続いて他の女子も亀仙人に笑顔を向ける。

背筋が凍るほどの笑顔だ。

「じいさん、絶対に入れるなよ！」

実の言葉が聞こえる。

何か、慌ててるようだ。

「峰田！ あんたまだエロ本持ってたか！！」

「持ってねえよ！」

「中を見せな！」

「良いぜ！ そつちの方が速いや！」

「わかった」

亀仙人は女子達を中に入れる。

峰田の部屋は予想に反して普通だった。

普通に机があり、棚には参考書だらけだった。

「あ、あれ？」

「オイラだって、変わるんだよー」

実はあらぬ疑いを掛けてきた女子達を睨む。

女子達もまさかの展開に罪悪感を覚えて謝る。

「武天老師様は何故ここへ？」

「峰田は凄く小さいからの体の動かしかたも他の者とは違うので特別に教えてたの

じゃ」

凄くまともな理由だった。

こつちの浅はかさが最低だと思えるほどまともだった。

女子達は部屋から静かに出ようとしたら、クリリンはベットの下に手を入れる。

「げっ!？」

そして、クリリンが引っ張ってきたのは大量のエロ本とAVが入ったスーツケースだった。

しかも開けられてる上に乱雑に重なってるエロ本。

明らかにさつきまで見てたようだ。

突然、現れたエロ本に女子達は自分達が馬鹿だったと気がつき、亀仙人と実に詰め寄る。

大量に説教された後、二人を追い出し、棚とかを徹底的に探ると本カバーだけはまともだが、中身はエロ本だったり、ブックカバーをしている官能小説だったり、極めつけは実のタンスの中の下を調べると外れるようになっていてそこにもエロ本があった。

結局、それらは全て拘束された二人の目の前で燃やされた。

血の涙を流していたのは言うまでもない。

天津飯がクリリンに何故ベットの下にあることがわかったのかと聴くと、

「18号さんやマーションと一緒に暮らしてた時でさえ変わらさずに見てたのにこんなあからさまに皆の目から隠れて、それがエロ以外なんて絶対にあり得ないって確信があった」

と答えた。

なんとも嫌な信頼である。

【悟空の未熟者！】

出久と電気が悟空とクリリンにかめはめ波で敗けてからわずか10分後の事だ。

悟空は正座をさせられていた。

「じっちゃん、足が痺れて来たぞ」

亀仙人は悟空の頭を杖で小突く。

「そんなのが言える立場か！超サイヤ人ブルーになりおつて」

「そうだぞ、悟空！なに考えてんだよ!？」

亀仙人とクリリンの怒りに悟空は縮こまる。

流石に反省しているのだろう。

「悟空、始めての若い同門の後輩で嬉しくなったのだろうか？」

「へへ、まあなピッコロ。けどホラこれからオラ達も教えていかねえといけねえしな、オ

ラ達の事、知ってほしくて」

「たわけが！自分を抑えきれぬ奴が何を言うか、馬鹿者！」

「厳しいのは良いだろ？ピッコロもそう思うだろ？」

「お前と俺を一緒にするな」

「何だよ？」

「俺は少なくともガキに対して彼処まで力を出さん」

ピッコロは悟空を睨む。

三人に怒られまくる悟空はその後もずっと正座で足を痺らせながら説教を聞いていた。

【サイヤ人】

悟空は説教をされまくった後、風呂にゆっくりと入っていた。

頭にタオルを置いて熱い湯の中に入り、肩までグツと浸かる。

「ふうー」

幸せな悟空。

その時、風呂の扉が開く。

入ってきたのは猿夫だった。

「あつ、悟空さん。入ってたんですか？」

「おう、尾白だったつけ？」

「そうです」

猿夫は体を洗いに洗い場に行く。

悟空は猿夫の後ろに生えてる尻尾を見てた。

「尾白、お前の個性ちゆうやつは何なんだ？」

「この尻尾が俺の個性です」

頭を洗いながら答える猿夫。

「そうなんか」

「どうしたんですか？」

「いやなに、懐かしいなって思つてよ」

「懐かしい？」

「オラにも昔、尻尾が生えてたんだ」

悟空の言葉に猿夫は嘘だと思つた。

これはただ単純に悟空と猿夫では尻尾の意味が違う。

悟空にとつての尻尾は体の一部であると同時にまた生えてくる物だからあろうが無

かろうが別にどっちでも良い。猿夫の場合は個性と言う概念で斬られたら、悟空と違って生え変わる物ではない。

互いの当たり前の差が地味に出ていた。

「そうですか」

「あつ、その声は信じてねえな」

「信じてますよ」

「本当か？」

「もちろん」

「なあ、尾白の尻尾は斬られたらまた生えるんか？」

猿夫はずっこけた。

何を物騒な事を言っているのだろうかとう心から思った。

「そんなビックリ箱みたいな構造をしてみせんよ、俺は！」

「そうなのか？」

「そうです！」

猿夫は悟空はそもそも違う宇宙から来たんだとこの時、改めて強く感じた。

「悟空さんは生えてきたのですか？」

「おう！今でも尻の上に尻尾の後があるぞ」

悟空は猿夫にそれを見せる。

確かに小さい丸い後があつた。

「ホントかよ」

「へへ、オラはサイヤ人つて種族だからな」

「サイヤ人・・・悟空さん達がですか？」

「違う違う、オラとベジータだけだ、オラ達は本当に宇宙人でオラは赤ん坊の時にクリリン達の星に来たんだ」

「・・・本当ですか？」

「ホントなんだけどな・・・」

猿夫はこのスケールのデカイ話を信じるかどうか悩む。

こんなスー◯マンのような話を普通は信じることが出来ないが破壊神とかが出てくるスケールだから、それに比べればまだ信じやすかったが、悟空達と出会って常識なんて物が破壊されつばなしの猿夫はこれ以上聞くのは止めた。

精神的に疲れるので・・・

風呂から出て、天津飯や怒られてる亀仙人、クリリンらに聞いて裏を取り、猿夫は考えるのを止めた

雄英体育祭編

迫る、雄英体育祭!そしてやってくる強き二人。

5月もそろそろ終わりが近づいてくる頃、出久達は悟空達から修業を受けていた。

修業の内容はかなりキツかった。

これには理由があり、出久達は高校生朝の9時から授業が始まり、どんなに早くても平日は16時位じゃないと終わらない。

亀仙人とピッコロと天津飯は頭を悩ます事になった。

何故にこの三人かと言うと、亀仙人はまあ出久と電気も合わせて7人を鍛えあげており、ピッコロは本人が自慢するぐらいに悟飯を鍛えあげて、天津飯は道場を構えてるからだ。

他の三人はこの三人のサポートとして行動してる。

悟空は亀仙人のサポートとして、クリリンは天津飯のサポートとして、ベジータはピッコロのサポートである。

まず、亀仙人は全員の四肢に合わせて20キロの重りをつけさせた。出久と電気は100キロだが・・・

次に毎朝5時から10キロ走ただし、スキップや全力疾走を混ぜて遅れたら殺人ボールの餌食になると言う物である。

次の朝の修業はセメントスが作り上げた凸凹壁の往復、これも殺人ボールが追い掛けてくる過酷な物になっている。

そして、学校で勉強し放課後になる。

放課後の授業は二時間だけでまず一時間は天津飯主導のチームワークアップの為に尻尾鬼をやる。

ただし、クリリンもやり、二人の尻尾を取らないといけないのがみそだ。

出久と電気も参加してるが、二人の力を持つてしても全然奪えない。

そして最後の一時間はベジータとピッコロによる地獄の追跡である。

元悪人で恐怖を味わうの也會わせるも知り尽くした二人がグラウンドβで生徒らを追い掛けると言うもので、嫌なのが捕まったら必ず強烈な拳を喰らわされる。

しかもやられたら痛く、悲鳴を出すのに影響が無い場所をやられる。

その悲鳴はサポート科が改造した殺人ボールのスピーカー機能でグラウンドβ中に流れて残ってる生徒が恐怖し、より本気で逃げ惑う内容だ。

しかも二人ともやる前に必ず何か物を素手で破壊しており、本気でやらないと殺すと脅しまくっているのだ。

勿論、この二人は手加減を知っているのでやり過ぎる事はない。

そして、それが終わり晩飯を食べると自由時間である。

まあ、8時までは皆、勉強をしているがそれ以降は本当に寝るまで自由である。

この時間配分は実は大揉めに揉めて出来ており、悟空とベジータは修業を寝る前にもう一回させようとしていたが、亀仙人がやらせなかった。

ただでさえ、皆は自分の時間を削り強くなる道を選んで戦う道を選んでいるのにこれ以上は体は壊れずとも心が壊れると言い、やらせなかったのだ。

悟空はほぼ1日修業だけど壊れてないと言ったが、亀仙人は学校に行っておらんじゃろ?と言った。

学校とは自分以外の人間と強制的に触れ合う場所。将来のコミュニケーション能力を鍛える場所であり、頭を使った生き残る方法を学ぶ場所でもある。

それはどんなに友達がいて楽しくてもストレスが溜まりやすく、一度発散を人に八つ当たりする方法でやったら永遠に苦しむ人間が出てくる。

それは大人として決して進ませないようにする外れた道であり、それを回避するには発散するために自分の時間をキチンと持たせるのが重要である。

亀仙人は修業に伴い、校長に就寝時間を10時から12時に延長するように申し出た。

生徒の自由時間を上げるためだ。

校長もそして生徒の健康を管理するリカバリーガールも嫌がったが、消太とブラドが亀仙豆を二人に食べさせて効果を確認させて渋々OKした。ただし、生徒の健康に問題が有り次第、すぐに修業方法も含めて改革をしようという前提である。

そして、毎朝走る前に亀仙豆を食べさせて疲れを消して修業をしている為に無くなるのが早くなってきており、亀仙人は頭を悩ませているのはまた違う時に語られる。

因みにUSJの件は敵が襲撃して見事撃退したと言う事になってる。それ以上の情報は混乱を呼ぶからだ。

もつとも何人かの優秀なヒーローや記者は何かあったと感じてはいるが、証拠もなく責め立て出来ないので雄英の発表を一応鵜呑みしてる。



1年A組の教室では朝のSHRの時間になった。

「皆ー！朝のHRが始まる！席につけー！」

「着いてるよ、着いてねえのはお前だけだよ」

天哉がいつも通りのフルスロットルで皆に言うが空回りしてる。

そして、全員が席に着くと消太が入ってくる。

「さて、皆に言わなければいけないことがある。また戦いが始まる」

消太の言葉に全員が首を傾げる。

敵が遂に攻めてきたかと悩む者もいる。

「雄英体育祭だ」

「「クソ学校っぽいギター!!!」」

凄い熱狂である。

当然だ。

「ここ最近は何学校?なにそれ?美味しいの?みたいなノリで地獄を見てきたのだ。」

とてつもない熱狂である。

「待つて待つて、敵に侵入されたのに体育祭をやって大丈夫なんですか?」

「逆だ。例年通りに開催する事によって雄英の危機管理能力は万全だと世間に広めるのが理由だ。勿論、警備は例年の5倍で行う」

消太の言葉に更に熱狂が加速する。

「いや、そこは中止にしようよ。体育の祭りだよ」

「もしかして峰田くん、雄英体育祭を見たこと無いの!？」
ここで説明しよう。

雄英体育祭とは個性が発展した社会において一部のマニアしかやらなくなつたかつてのスポーツの祭典である。オリンピックに変わる祭りである。勿論、日本だけの話ではある。

アメリカやイギリスでも似たような祭りがある。

まあ向こうは大学生で高校生でやつてるのは日本ぐらいだが、若きヒーローの卵が伸び伸びと活躍できる数少ない行事の1つで3日間に分けて行われる。

一日事に一年生、二年生、三年生に分かれて行われる。

一年生の日は初日である。

そして、この体育祭はプロのヒーローがスカウト目的で見に来る。それは日本だけでなく各国のヒーローでもある。

「卒業したら、プロの事務所にサイドキック入りが定石だよな」

「そこから独立できずに万年サイドキックも結構いるけどね。上鳴、あんたそうなりそう」

「何でだよ？腕は立つぞ！」

「いや、サイドキックを抜けるって腕だけだと無理だろ、人気だつたりなんだから諸々必

「要じゃん。あんた腕だけだし」

電気は腕だけと言われてかなりショックを受けてるようだ。

出久は耳郎の斜め後ろの席なのでその様子を嫉妬100%で見ている。

はつきり言ってる怖いよ。

引くぐらいにビビるよ。

「当然、名のあるプロの所に入った方が人気も高くなり、独立しやすい。高校の三年で三回の年に一回の貴重なチャンス。絶対に逃すな」

消太はその言葉で終わり、出久達はこのチャンスを物にしようと熱を入れた。



放課後、1年ヒーロー科の前に大勢の普通科や経営科、サポート科の生徒が集まってくる。

「な? 何事だあー!!」

「出れねーじゃん、何しに来たんだよ!」

「敵情視察だろ」

勝己はごった煮してる生徒達の前に来る。

「敵の襲撃から生き残ったヒーロー科を敵情視察に来たんだろ？・・・意味ねえから止めとくんだな」

「爆豪君！君はまたそんな喧嘩口調で」

天哉が勝己の口調に怒るが暴言を吐かないだけマシである。

因みに組の中で一番勝己の暴言を受けてきた出久は勝己の変化に感慨深い思いをしていた。

「随分と喧嘩腰だなあ、ヒーロー科に所属する生徒は皆こんなかい？」

紫色の髪の生徒、心操人使が勝己に対して何とも言えない目で見える。

「何だ、てめえは？」

「知ってるか？普通科の生徒は体育祭で優秀な結果を残せばヒーロー科に編入できなくて、勿論逆の場合もある」

勝己は人使を睨む。

互いに睨み合う。

「俺は少なくとも足元を疎かにしてる人間に対して “宣戦布告” のつもりだけだな」

「今、ここにやるか？」

勝己は右手を少し引く。

完全に爆破を浴びせる気である。

「ちよつとすまねえ、そいつウチの組でも三番目か四番目ぐらいでイライラしてんだよ」
「んだと、この野郎!!」

電気が勝己を挑発して注意をこつちに引く。

「うるせー!ヘイトを集めんなよ、こつちはいいい迷惑じやい!」

「上にながれば関係ねえだろ!」

「人付き合いつてもんを考えろ!」

喧嘩する電気と勝己。

勝己は電気に詰め寄る。

その隙に久が人使達の前に来る。

「ごめんね。彼、キレやすくて」

「いや、俺もムキになってた。すまない」

「じゃ、お互いに当日まで不干涉って事にしない。君のさっきの一言で気合が入った人もいるし」

「受験は機械相手だから、本領を發揮できなかった普通科の生徒は多いぞ」

「わざわざ、宣戦布告して来たつてのはそういう事だと思ったよ。でも僕達ヒーロー科

も負けてないし、疎かにしてるつもりもない、決着は体育祭で着けよう」
「悪かったな、急に来て」

人使はそう言つて去つていき、他の生徒達も去つていく。
因みに勝己と電気の喧嘩は出久が二人に気弾を撃つて強制的に止めた。



放課後、ヒーロー科のいつもの修業を終えた出久達は悟空らと晩飯を食べる事になつており、グラウンドβから

寮に戻ると大量の食事が置いてあつた。

「おおー！どうしたんだ!?!こんなにくさん!」

「スゲー!」

「豪勢だ!」

あまりの豪華な料理に生徒達は驚く。

乙戦士達も誰が作ったのかと首を傾げる。

「悟空さー!」

「ベジータ!」

突然の女性の言葉に悟空とベジータは冷や汗を流す。

そして、二人の女性が全員の目の前に現れる。

悟空の妻 ッチチ ッとベジータの妻 ッブルマ ッだ。

「チチ!」

「ブルマ!」

驚く悟空とベジータ。

そんな二人に生徒達は困惑する。

「申し訳ありませんがお二人は悟空さんとベジータさんとういうお関係ですか?」

「妻(だ/よ)」

「!!!妻?!」

「貴方達が雄英の生徒達ね。いつもウチのがお世話になってます」

「今日はいつもお世話になってるからオラ達が飯を作ったからジャンジャン食べてくれ」

「ただし、全員、綺麗になってからね」

生徒達は突然の事にどうすればいいかわからない。

「皆、早く風呂に入ってくださいなさい、料理は絶品じゃ」

「「「わかりました、いただきます！」「」」」

「よし、久しぶりにチチの飯だ、急いで入るぞ！」

悟空は一番先に風呂に向かっていき、生徒達も他のZ戦士達も向かっていく。

ベジータ以外は・・・

「あら、ベジータどうしたの？」

「何故ここにいるんだ？」

「別に愛する妻が夫の所にいて何が悪いの？」

「ここにはフリーザもいるんだ。早く帰れ邪魔だ」

ブルマの口説きに落ちないベジータはブルマを邪険に扱うが、ブルマにとってみれば

こんなのは日常茶飯事で気にしない。

「それは食事の時に話すからあんたもさっさと風呂に入ってくださいなさい」

「フン」

ベジータはブルマに言われて、不機嫌になりながらも風呂に向かった。



全員、風呂から出て来て席に着く。

ブルマとチチは互いに自分の夫の隣である。

「それじゃ、皆、お腹空いてるだろうから先に食べましょ」

「んだんだ」

ブルマとチチの言葉に全員手を合わせる。

「「「「いただきますー!」」」」

豪勢な晩飯を食べる生徒達。

美味しいため、かなりの勢いで食べるが、一番勢いがあるのは悟空とベジータだろう。

あまりのスピードで生徒達の持つてる晩飯まで強奪してるのだ。

しかし、何人かの生徒達は取られないように必死で頑張つて抵抗してる。

「皆、よく食べるだな」

「元気があつて良いじゃない」

チチとブルマはその姿を見ても平行運転である。

最早、完全に慣れてる。

流石はサイヤ人の妻達である。

因みに亀仙人は煩惱をたぎらせてブルマやチチの胸を揉もうとしていたが、二人にフライパンで頭を叩かれて沈んだ。

((((そこまでやったら死ぬんじや?))((

と、男子の生徒達は思い。

((((カッコいい!))((

と、女子の生徒達は思った。



豪勢な料理を食べて落ち着いてる生徒達は一先ず、後から話を聞ききたいと言って勉強に行った。

「若いのは偉いな、確り勉強して」

「ホントね」

「おい、ブルマ!何で来たんだ?本当の事を言え!」

「チチも教えてくれ」

悟空とベジータの言葉にチチとブルマは何気ない顔をする。

「ウイスさんに孫くんとベジータが学校の一週間分の食材の半分を食べたから、何とかしてほしいって言われたのよ」

「もう、その話を聞いたとき顔から火が出るほど恥ずかしかっただ」

「だから、食材を集めてカプセルに大量に入れて持って持ってきたのよ」

「フン、そんな量を置いとける冷蔵庫があるか」

「安心して一週間に一回、ウイスさんが届けに来るって事になってるわ」

そう、ブルマとチチはウイスから食材を集めて欲しいと言われてついでに一緒に来たのだ。

「トランクスやブラはどうした？ブラはまだ赤ん坊だぞ」

「チチ、悟天は？」

「安心して良いわよ」

「もうそろそろだな」

突然、光が寮の外に降りてきて、そこからビルス、ウイス、ブラが現れる。

ブラはビルスに抱かれている。

そして三人は寮の中に入る。

「ビルス様」

「ベジータ、お前の嫁を何とかしろ、破壊神をベビーシッター代わりに使いやがって」
ブルマはビルスからブラを渡してもらおう。

「おい、ブルマ！何を考えてるんだ？」

「だってブラがビルス様に抱きついちゃって離れようとしなかったもん」

ベジータはその事実には頭を抱える。

「恐らくはブロリーさんとの戦いの際にビルス様にお守りされてたのを気に入ったかと」

ベジータは父親の自分よりもビルスの方を気に入られた事にとてつもなくショックを受けていた。

「それで、ビルス様は何しに来たんだ？」

「何って……「あー！」……またか、何で一回もスムーズに言えないんだ？」

ビルスの言葉を遮ったのは生徒達で勉強が終わった為にぞろぞろと降りてきたのだ。

そして、全員が降りてきてやっつとビルスが話せる状態になった。

「お前達に話す事が出来た。知恵の育成に各宇宙の人間も見学する事になった」

（（（何でまたスケールが上がるんだよ！）））

「ビルス様、どうして各宇宙の人間が来るんですか？」

「ウイス」

「私ですか? ビルス様が言ってくださいよ」

「良いからやれって」

「しょうがないですね。では私が説明します。第7宇宙と第6宇宙でやった格闘試合から力の大会になったように各宇宙の神々や戦士達がこの知恵の育成がいつ全宇宙を巻き込むかわかりませんので、見学したいと言われたのです。一日だけですが・・・校長先生と相談したら、今度開かれる雄英体育祭なる催しなら来ても良いとの事で各宇宙に伝えた事を伝えに来たのです」

「おおー! てことはウイスさん、ジレンもヒットも来るのか?」

「それはわかりませんが、二人とも各宇宙のエースなので恐らくは」

「楽しみになってきたなあ!」

「ただし、全員あくまでも対策と言うなの仕事で来てるので戦闘は禁止ですよ」

「ええ、ちよつと位・・・」

「駄目です、ビルス様が絶対にやるなと」

「ビルス様」

「もしやったら破壊するぞ」

ビルスの目は本気だった。

どうやら相当ストレスが溜まっているらしい。

流石の悟空もそんなビルスには黙って従うしかなかった。

「それでは私達はこれで」

「お邪魔しました」

ビルスとウイスは帰っていった。

生徒達は結局、学校に来るお客が増えた事を知らされただけなので、一気に興味を失い、チチとブルマの方を見た。

「ん?どうしたの?」

生徒達がブルマと抱えてるブラを見る。

「ブルマさん・・・ですよね?その赤ちゃんは?」

「私とベジータの娘のブラよ」

「「「娘?!?!」」」

生徒達はブラの方を見る。

ブラは一斉に知らない人が見たので怯えて泣く。

「ああ、よしよしブラいい子ねえ、ベジータちよつと変わって」

ブルマはベジータにブラを渡す。

「お、おい」

「お願い」

「フン、ブラー：よしよし一緒に遊ぼうな」

ベジータはブラを連れて皆から離れる。

悟空も赤ん坊をあやすベジータが面白いのかベジータとブラに着いていく。

「よし、これで話しやすくなったわ。改めて自己紹介させて、私はブルマ。ベジータの妻で二児の母よ」

「オラはチチだ。悟空さの嫁で二児の母で一児の祖母だ」

生徒達は悟空とベジータに奥さんがいるだけでなく、二人とも二児の親で悟空に至ってはお爺さんな事実に驚く。

「何でも聞いて良いわよ」

「はいはい！お二人はどういう風に悟空さんやベジータさんと出会ったんですか？」

恋ばな大好きな三奈が二人に聞く。

いつもは男子生徒はあまりこういう話題には興味を示さないが、あの二人の話になるとやっぱり興味は出るのか、全員聞いていた。

勝己も含めてである。

「オラは悟空さんと小さい時に会って悟空さが大きくなったら嫁にもらいに来るって言って貰っただ」

「「キヤーー！」」

チチは頬を赤らめてそう言う。

あまりにもロマンチックな出会いに生徒達は一気に顔を赤くする。

「私はベジータに殺されそうになったわ」

「「えっ?」」

衝撃的な事実にもう一度は顔を青くする生徒達。

「い、一体どのような敬意でご結婚成されたのですか?」

「オラは全然、悟空さが全然迎えに来ねえから行ったらオラの事なんか忘れてただよんで悟空さに言ったら、結婚するかって言われて結婚しただ」

「私はまだベジータと結婚してないわ」

「「「ええ!?!」」」

先ほどとはうって変わって何のムードもクソもないプロポーズと結婚してない事実
に声を出して驚く。

「で、でもお二人は奥さんなんですよね? どうしてそんな人たちと一緒にいるんですか?」

悟空とベジータが三奈からそんな人呼ばわりされる。

当然である。

「どうしてって、一緒に居たら悪いの?」

「オラが悟空さんと一緒に居たら悪いのか？」

ブルマとチチが三奈を見る。

「い、いえ、気になってしまっただけ」

「そうねえ、一緒にいるのが当たり前になってわからないわ」

「んだんだ」

奥さん二人から言われた生徒達は何か納得出来ない様子だ。

「貴方達も結婚したら、わかるわ」

「そうだな、これはオラ達しかわからないだ」

幸せそうに話す二人。

その姿は夫の二人に対して深い愛情を感じてるようだった。

「あの、お二人はしばらくここに？」

出久が二人に対して聞く。

「雄英体育祭が終わるまでは要るわよ」

「んだ！」

「何ー!?」

奥さん二人の言葉にベジータと悟空が飛んで来る。

「あら、ベジータどうしたの？」

「お前、仕事は？それにトランクスはどこだ？」

「チチ、悟天は？」

「二人とも父さん達や悟飯君達、サタン達と一緒に旅行に行ってるわよ」

その言葉を聞いたベジータはとりあえず安堵の息をする。

トランクスの事が知れて良かったのだろう。

それにブルマの父親達は子供の扱いには慣れてる。

ブウとサタンが心配の種であるが、悟飯もいるなら大丈夫だろう。

「私は暫くの休暇よ」

「オラもそれで着いて来ただ」

「でもチチ、寝る場所はどうするんだ？」

「何でも相澤先生つちゆう人に空いてる部屋があるからって言われてそこを貸して貰う

だ。後で悟空さの布団も引いてやるだ」

悟空はチチからの言葉に嬉しくなった。

別に亀仙人達と一緒に寝るのは良いがやはりチチと一緒に寝たいのである。

「ベジータ、あんたも久しぶりに一緒に寝る？」

「俺はいい」

「もう照れちゃって」

「照れてなどいない」

「はいはい、用意しとくからね」

「お、おい」

「あ、あのでしたら私が布団を出しましょうか？」

イチヤついてる二組の夫婦に百が話す。

チチとブルマは百を見る。

「私の個性は創造で何でも創れますの」

百はそう言ってマトリョーシカを一つ作る。

チチもブルマもそれを見て驚く。

「へえ、便利ね」

「魔法みたいだ」

百は自分の個性を誉められた事に頬を緩める。

「んじや、お願いしようかしら」

「お願いしますだ」

「わかりました、頑張ります！」

「ヤオモモ、手伝うよ」

「私も」

百は一佳と切奈と一緒に空いてる部屋に向かった。
ずっと話を聞いていたクリリンがチチとブルマに近づく。

「ブルマさん、18号さんは？」

「そうだった、クリリンこれ18号から」

ブルマはそう言つて二通の手紙を渡す。

18号とマーロンからのだ。

クリリンはそれを懐に入れる。

「クリリンさん、それは？」

電気がクリリンに聞く。

「へへ、俺の奥さんと娘からの手紙だよ」

「「「奥さん!?娘!」」」

「何だよ！何でそんなに結婚してるんだよ!？」

悟空らの結婚率に実が普通に羨ましがる。

「さて、他に聞きたい事ないかしら？」

「オラ達も若い子達と話すのは久しぶりだから、何でも言いそうだ」

「お、おい、あまり話すなよ」

「ハハハ、ベジータ。ブルマとイチヤイチャしてるのが言われるの嫌なのか!」

「俺はイチヤイチヤなどしておらん！」

この日、ブルマとチチは悟空とベジータとの結婚生活を生徒達に饒舌に話していた。クリリンは一人、離れた所でマーロンからの手紙に心を癒されて、18号のツンデレな手紙に笑った。

雄英体育祭が始まるそして各宇宙からやってる客は出久達に何をもたらすのか？

続く！

雄英体育祭、開幕！

体育祭の準備期間が過ぎて、待ちに待った雄英体育祭初日である。

出久達は早朝の五時に起きた。

各宇宙からのお客さん達が来るので、一年生ヒーロー科は挨拶をする事になった。

当事者だし、彼らにしてみれば早朝五時はいつも起きる時間だし、問題はなかった。

一年生ヒーロー科だけでなく、消太とブラド、校長、そしてZ戦士達も一緒にいる。

ビルスとウイスでもある。

「第6宇宙到着です」

「シャンパかよ、嫌だなあ」

光の柱が降りてきて、中から破壊神シャンパ、天使ヴァドス、界王神フワ、ヒット、キャベが出てきた。

「よう、ビルス！相変わらず厄介な事をしてんなあ」

「うるさいデブ」

ビルスとシャンパは間合いを詰めて睨み合う。

それをウイスとヴァドスがやり過ぎないように見てる。

はつきり言っていていつもの事なので、フワがヒットやキャベと一緒に校長の方に行く。

「私は第6宇宙の界王神と呼ばれる神の一人、フワと言うものです。今回は急に言っ
ご迷惑を掛けてしまい申し訳ありませんでした」

「いえいえ、ウチとしても今日に来てくださり、対応しやすかったので大丈夫でしたよ」
校長とフワが平和的に話し合ってる。

最初が最初だった為か身構えてた先生や生徒達はあつけを取られて、悟空はヒットと
ベジータはキャベと話していた。

「第2宇宙到着です」

光の柱が降りてきて、破壊神ヘレス、界王神ペル、天使サワア、リブリアン、カクン
サが現れる。

「ビルス、相変わらずのようだね」

「うるさい、厚化粧女」

「こう見えて第7宇宙には助けて貰ってるから感謝はしてるのじゃが」

ペルは校長の元にヒソヒソと行き、粗茶と茶菓子を渡していた。

リブリアンとカクンサは力の大会で助けて貰った礼を悟空達にしていた。

「第10宇宙、第3宇宙到着です」

破壊神ラムーシ、界王神ゴワス、天使クス、ムリチム、オブニの第10宇宙。

破壊神モスコ、界王神エア、天使カンパーリ、パパロニ、カトペスラの第3宇宙が現れた。

((((ロボット?)))

全員がロボットな破壊神のモスコに疑問を感じる。

ゴワスとエアは校長に粗茶と茶菓子を出していた。

「第1宇宙到着です」

光の柱から、破壊神ベルモット、界王神カイ、天使マルカリータ、トツポ、ジレンが現れる。

「第9宇宙、第12宇宙、第1宇宙、第5宇宙、第8宇宙は見学をしない意向ですので、これで全員です」

合計25人の各宇宙の神々と人間が来た。

「皆様、ようこそ雄英体育祭へ、本日は我が校の一年生の生徒達が死に物狂いでナンバーワンを目指す日ですので、どうかごゆっくり見学して行って下さい」

「ヒーロー科一同、挨拶」

「「「よろしくお願ひします」」」

一年生ヒーロー科の挨拶に各宇宙のメンバーも笑う。

最初が最初だっただけに不安だらけの挨拶になるかと思つたが、想像以上にマシだつ

た為、全員ビルスに対する印象が更に悪くなった。

ビルスの自業自得である。

「ピコピコピコ」

「では、そのようにします」

カンパーリが第3宇宙の人間だけ、スーツ姿にさせる。

突然の行動に全員、戸惑う。

「突然、申し訳ありません。モスコ様曰く『この星の礼服にしろと』のお達しがあつたので」

それを聞いた他の神々も天使に言い、自分の宇宙の人間をスーツ姿にさせる。

どうやら力の大会以降、どうやつても人間レベルを出来る限り上げたくてマナーを徹底してる宇宙が多いらしい。

第3宇宙と第10宇宙、第2宇宙、第11宇宙はすぐにやり、遅れて第7宇宙と第6宇宙がやった。

不満が多かったのは勿論の事、悟空であった。

「ビルス様、こんな格好しなくてもいいじゃんかよ」

「うるさい、ちようど良い。お前にマナーを叩き込んでやる!」

「絶対に無理だと思えますよ。悟空さんですから」

「ウイス？」

「ただ、あの格好は目立ってしまい。他の無関係な人も何か勘づくかもしれませんから、それの方が良いと思いますよ。天使の力でやってますのでそつとやちよつとでは破けませんので」

悟空は少し動いて何も問題ないことを確認すると黙った。

こうして体育祭前的一幕は終わった。

「そう言えば、ウイスさん。あのおっちゃんに連絡しといてくれたか？」

「はい、中々聡明なお方でしたのですぐにやりたいと言ってくれましたよ」
「ならしいや」

悟空が言った「おっちゃん」とは一体誰だ？



そして、午前8時40分。

ヒーロー科一年A組は待機室で待機していた。

全員、これから始まる大会に胸を緊張しながらも踊らせていた。

「一年A組!準備は良いか!」

天哉がA組全員に確認する。

その時、焦凍が出久と電気に近づくと。

「緑谷に上鳴、ちよつと良いか?」

「どうした轟?」

「どうしたの?」

「お前らは凄いな、正直言つて逆立ちしても勝てないと思う。けど今日は勝つぞ。俺はこの雄英高校一年全員に勝つ、お前らも含めて」

急な宣戦布告だった。

普段、こんなことは言わないクールな印象を焦凍は皆に与えていた為にこの宣戦布告は驚きしかなかった。

空気が一気に張り詰めて緊迫してくる中、鋭児郎が焦凍の肩に手を掛ける。

「おいおい、急に喧嘩腰でどうした?」

焦凍は鋭児郎の手を払いのける。

「別に仲良しごっこじゃねえんだ。何だっつていいだろ」

焦凍はそう言つて離れる。

「待つて、轟君。君が何を思つて言つたのかはわからないけど、全員が頂点を目指してるこの体育祭。僕も本気で取りに行く」

「俺もだ。負けてたまるか!」

出久と電気は真つ直ぐな目で焦凍を見る。

焦凍もそれを黙つて見る。

「君達、時間だつて言つてるじゃないか!」

天哉がもう一度、三人に言い、A組は全員部屋を出た。



プレゼント・マイクの実況と共に入ってくる生徒達いや選手達。

それぞれ、緊張してて個性が漏れてる人もいた。

鋭児郎は硬化を腕だけやってたり、勝己は小さな爆破をしてたり、電気も体から稲妻が少し出てたりしていた。

「選手宣誓!」

「ミツドナイト先生、なんちゆう格好だ・・・」

「流石は18禁ヒーロー」

「18禁なのに高校にいて良いのか?」

「いい!」

「選手代表、上鳴電気君!!」

電気が壇上の上に行く。

「選手宣誓、私達雄英高校一年生一同は各々が理想に向かうため、全力で取り組む事を誓います」

電気の宣誓に知ってるヒーロー科生徒は意外な顔をした。何故なら、調子のりの電気にしては非常にまともだったからである。

「なんか、普通だな。緑谷」

「フフ」

実はこの宣誓を出久は昨日の内に知っていた。

電気が一人で考えてて、昨日出久に予行として内容を確認した上で手直しを一緒にしたのだ。

宣誓が終わり、何でもさつきと始める雄英らしく、ミッドナイトが第一種目の説明を始めた。

「多くの生徒が毎年ここで、グティアドリンク、今年の運命の第一種目は……これ！」

会場のスクリーンには「障害物競争」と出ていた。

「オー組全員参加のレースよ。コースはこの会場の外周を四キロ。雄英の自由な校風に乗っ取り、コースを守れば何をやってもかまわないわ！ さあ、皆位置について！」

生徒達が一齐にゲートに向かって走る姿勢になる。

出久と電気は前ではなく後ろの方に行く。

理由は単純で焦凍を含めた無差別攻撃ができる個性の生徒がスタート同時に無差別攻撃をすると思つたからだ。

それに二人とも少し出遅れてもリカバリーできる脚を持つてる。

六年もボロボロになりながら牛乳配達で鍛えた下半身には誰にも負けないと言う自負があつた。

「スタート!!」

生徒達が一斉にスタートし、ゲートは大混雑になる。

更に焦凍が氷を大量に足下に発生させて更に動けなくなった生徒達が続出する。

やった本人は一人、ゲートを突破して一位になる。

『さて、司会はこの俺、プレゼント・マイク! 解説はイレイザーヘッドがお贈りするぜ!

んでイレイザー! 見処は?』

『今だろ?』

『そう! 第一関門はこれだ! ロボ・インフェルノ!』

入試試験のロボットが大量に現れる。

あの巨大ロボットも含めて。

「入試のロボット!」

「ヒーロー科はあんなの相手にしてたのか!」

「嘘だろ?」

「お金はどこから出てるのかしら?」

それぞれが反応するなか、焦凍は巨大ロボットを睨む。

「もつと凄いのが欲しいんだかな、なんせ 母さん が見てるからな」

焦凍は巨大氷結で一気に巨大ロボットを何体か凍らす。

本人はそのまま足の間をスタコラサッサと進んでいく。

他の生徒も後に続くこうとしたが、不安定な状態で凍らされた為に倒れてしまう。

「やべー、倒れたぞー！」

「捲き込まれなかったか!？」

生徒達が心配しながら、巨大ロボットの下から鋭児郎と徹鐵が出てくる。

「俺じゃなかったら死んでるぞ!!」

見事にハモる二人。

個性も含めてだだかぶりの二人である。

生徒達も巨大ロボットのの上を飛び越えたり、個性を使つて工夫をしながら進んでい

く。

出久と電気はまだ後ろの方にいた。

二人とも後ろから前のロボットが溢れてる状況を見ながら進んでいた。



一方その頃、各宇宙から来た人間達と乙戦士と一緒に観客席から見ていた。神々もそれぞれの宇宙の人間の近くに座っている。

(第6宇宙と第11宇宙が互いに端にいますが主にそれはヒットとジレンやトツポとの関係の都合である)

「ほお、中々凄いなあの氷結は」

「どれ程のエネルギー量があるのだ?どれくらいまで温度を下げれる?デメリットはなののか?」

「あれが私達の宇宙にあれば私がもっと美しくなる!」

それぞれが驚きのパフォーマンスをした焦凍に対して称賛していた。

そんな中、亀仙人は未だに後ろの方にいる出久と電気を見ていた。



第一関門を突破した生徒達の前にはかなり巨大な谷が出来ていて、所々にロープが張り巡らされていた。

『第二関門は落ちればアウト!ザ・フォー』

一番最初に通過した焦凍はロープに氷を張り巡らして、狭い道を作り、その上を走っていた。

ロボットの頃から突破した連中はその要領を変えずに谷を難なくと通過していった。他の生徒達もそれぞれ進んでいくなか、一人異彩を放つ生徒がいた。

身体中に多くのサポートアイテムを着けたサポート科の生徒 発目明だ。

「ふふふ、きましたアピールチャンス！私のサポートアイテムが脚光を浴びる時！」

「えー！サポートアイテムの着用とかありなの!？」

三奈が異彩を放つてる明に抗議する。

「ヒーロー科は常日頃、実践訓練を受けているでしょう？公平を期すために私達も自作のサポートアイテムの着用を認められています。そして体育祭はサポートアイテムを製作してる企業に自分売り込む場なのです!!」

自分のサポートアイテムを使いながら、難なくクリアする明。生徒達は負けないうように意気込みをし、会場の方では実際に会社の人間の目に止まっているが、一番集中して見ているのは第3宇宙の神々と人間である。

自分達の十八番な為か見方が違っていた。

冷静に考えて欲しいのはロボットとおっさん達が一人の少女を目玉が食いついていのかと思うくらい見てるのだ。端から見れば不審者の集まりである。

出久と電気は谷の前で黙って谷を見ており、谷の間にある中間地点をよく見ていた。



一方、先頭集団は最後の関門に到達した。

『早くも最終関門、一面地雷原！地雷の位置はよく見りやわかる仕様になってんぞ！目と脚酷使しろ！威力は安心しな！失禁する程度だ！』

『人によるだろ？』

焦凍はスローペースになるが、地雷を踏まずに進んでいた。

そんな中、勝己が爆破を使いながら、地面に足を着けずに飛んで来る。

焦凍と勝己は互いに並び、妨害しながらも進んでいく。

『喜ベマスメディアア！お前ら好みの乱闘だぞ！どっちが一位だ!?』

『よし、行くぞ出久!』

『今さらだけど師匠に怒られるよ?』

「俺達が目指すのはヒーローだ。それに俺に対して万年サイドキックになりそうだって言った耳郎の鼻をあかしてやる!」

「仲いいね」

出久は電気から響香の名前が出たとたんに棒読みになるが、電気はそれに気づいてなかった。

出久もすぐさま、気合いを入れ直して電気と一緒にクラウチングスタートの体勢になる。

『おおっと?後ろにいた二人が急に体勢を変えた!一体何をする気だ?』

『マイク耳栓あるか?』

『ねえよ。何に使うんだよ?』

『熱狂が来るぞ』

出久と電気は消太の言葉を聞くなり、猛スピードで飛び出した。

軽々と谷を越えて突き進む。

前にいた生徒達も急に何だと思い後ろを見ようとすがその間に二人は追い抜かしていた。

『何だ!?!ありや!?!速すぎるぞ!!』

『エンタメ気質と言うか、カッコつけと言うか、非合理的な生徒らだ。まあ注目を浴びるには合理的だがな』

事実、突然のスタートを切った二人に会場は注目していた。

速すぎるのだ。

あまりの速さにどンドン人を抜いていく様は会場から驚くことも奪い取って観客は全員、二人に注目していた。

一人、亀仙人は二人に対してどんなお仕置きをしようかと考えながら見ていた。



地雷原に突入した二人は高速に動きながら、突破して行く。地雷を踏もうがお構いなしだった。

しかも、二人は地雷の影響を全く受けてなかった。

『どうなつてんの!?!』

『二人が速すぎて起爆するよりも先に前に行つてんだ』

『無茶苦茶だろ!?!』

司会と解説のコンビのお陰で会場も二人の凄さを目の当たりにする。

まあ、二人とも初っぱなから見せてなかったのは人によつては手を抜いてたと憤慨する物だが、パフォーマンスとしてこれほど有効なのはなかった。

二人の家族も自宅のテレビの前で号泣である（因みにこの時は両家族とも一緒に見ている）

「耳郎、俺凄いだろ!」

先頭集団よりも少し後ろにいた響香に対して自慢をしながら抜いていた。

親しく話してた電気に隣を走つてた出久は嫉妬の力で電気の前に行く。

速度に於いては電気の方が速い為、隣の電気は素直に驚いた。

またすぐに抜かしたが・・・

そして二人は一位争いをしていた焦凍と勝己の二人をあつさりとは抜く。

二人とも妨害しようにも速すぎて妨害する気になつたら遙か先に行つていたので。



『雄英体育祭、一年ステージ!誰が予想できた!?!こんな誰も予想できねえよ!上鳴電気と緑谷出久が帰ってきたー!!!速いのは上鳴だ!!』

出久と電気はほぼ一緒のタイミングで会場に戻ってきたが、速いのは電気だった。出久の嫉妬パワーを持ってしても速さでは電気には勝てない。

電気がゴール紐をちぎり、出久はその後にゴールする。

『上鳴電気、一位通過!緑谷出久、二位通過!』

プレセント・マイクの実況で始めて会場は大熱狂に包まれた。

電気は調子に乗つて観客に大きく手を振っていた。

出久も結果は二位で電気に負けだが、この熱狂を聞き、次は勝つと後に引つ張らないことにした。

五分後に焦凍と勝己が帰つて来て他の生徒達も帰つてきた。

観客席での各宇宙の神々や人間達も二人のパフォーマンスには素直に感心し、予想外のスピードでやった事に驚いた。

別に全員、あれくらいは朝飯前だがそれでもあそこまで速かつたのには驚いた。

しかし、反応には賛否両論であつた。

第2宇宙は個々として素晴らしいパフォーマンスをした二人を絶賛。

第3宇宙は想像以上の実力を発揮した二人を称賛。

第6宇宙は面白い物を見れたとして好評。

しかし、第7宇宙は最初からやってなかつたことに不評（亀仙人とピッコロが怒気が籠つた目で見てる）

第10宇宙は二人の目立ちたがりな氣質を批判。

第11宇宙は結果的に多くの生徒達に対して不義理をしたと判断して大酷評であつた。

見事なまでの『賛否両論』つぶりである。

雄英高校の経営科は二人のパフォーマンスに対して、人気は上がるが批判も多く集まり結果的に人としての根っこが重要視されると全うな評価をしていた。



大勢の生徒が帰って来て一先ず落ち着いている。

「この個性で遅れを取るとは……」

「凄いね、緑谷君!速かったね!」

天哉が走る個性を持つていながら負けた事に悔しがり、お茶子が出久を称賛していた。

出久もお茶子の言葉に照れていた。

電気はその様子をじつと見ていた。

そんな電気の元に響香が来る。

「上鳴、あんた速かったね」

「耳郎!どうだ?万年サイドキックにはならねえだろ?これで人気も急上昇!このままだと優勝間違いなしだ!」

拳を挙げて叫ぶ電気に響香は少し引いていた。

「いや、人気があるサイドキックも普通にいるから」

響香の現実を突きつけるかのような言葉に調子に乗った電気は普通に落ち込んだ。

出久はそんな二人のイチャツキを黙って見ていた。

「さて！第2種目に行くわよ！」

スクリーンに上位42名の生徒の顔が映し出される。

「次の種目は騎馬戦よ！2〜4人のチームを自由に作って貰うわ！基本的なルールは普通の騎馬戦と一緒だけど、第一種目の結果に従ったポイントが各自に振り分けられていてその合計ポイントを奪い合って貰うわ！」

「入試みたいなポイント稼ぎ方式か」

「つまり、それぞれの騎馬によってポイントが違う」

ガヤガヤと計算を始める生徒達。

「あんた達！私が喋ってるのにすぐ言うね！」

ミッドナイトが怒って静めた。

「与えられるポイントは下から5ポイントずつ。42位が5ポイントで41位が10ポイントと言った具合よ」

生徒達が自分のポイントを計算する。

出久は自分のポイントが210ポイントだと計算しておえて、電気に215ポイントになることを言った。

「そして一位のポイントは1000万よ!!」

桁が違う数字に出久も電気もひっくり返った。

一体何を思っただんな数字にしたのか二人とも全く理解できなかった。

周りの生徒達も電気を獲物として見る。

「出久、どうすれば?」

「電気・・・調子に乗った罰だよ」

出久は一位通過に調子に乗って更に響香とイチヤイチャしてた電気に鬼の言葉を

言った。

「嘘だろ!!?」

電気の絶叫が響き渡る結果になった。

激闘 騎馬大合戦!

殆どの生徒から狙われるようになった電気は未だに意気消沈していた。隣で出久が引いた目をして見ていた。

「制限時間は15分、それでは約5分間のチーム決め、スタート!」

ミッドナイトがそう宣言し、上位42名が組分けを始める。

出久も電気もすぐに始めたが、二人の元には誰も来なかった。

「何故だく!!」

「まあ1000万ポイントなんてずっと守ってるよりも終盤で取りに行く方が合理的だからね。んじや頑張つて」

出久は電気から離れようとするが、電気は驚いた顔をしながら、出久の足を掴む。

「ちよつと待て、何処に行く!!」

「僕もチームを・・・」

「俺を見捨てる気か!?親友だろ、友達だろ、竹馬の友だろ、心の友だろ、魂の友だろ!!」

電気は出久の首を絞めながら捲し立てる。

「電気・・・それ・・・どれも一緒・・・」

「頼む、助けてくれ！」

抱きついてまで懇願する電気。

「わかった、わかった」

出久は電気を取り敢えず離れさせる。

しかし、それで状況が変わるわけでもなく、

依然として誰も近寄って来なかった。

理由としては死ぬほど簡単で、殆どのヒーロー科は雄英体育祭の頂点を目指している。

そんな彼らが一番嫌なのは最後のトーナメントで二人のどっちかと一対一で戦うことだ。

パフォーマンスで自力を見せすぎたのだ。

そのせいでもしも騎馬戦を終えてトーナメントになってボコボコにやられたら、全国に二人の凄さを教える宣伝マンになってしまう。

そんなのは誰でもごめんである。

他の科の生徒も似たり寄つたりの状況であり、故に人が来ないのである。

「どうしよう、このままだと二人でやるしかないよ」

「……まで人望がないのか？俺は……」

電気が自らの人望の無さを嘆いているがこの状況だと誰でも似たような結果になってしまうと思う。

二人とももう二人でやることを考えて計算し始める。

そんな中、サポート科の明がやって来る。

「私と組みましょう！一位の人に二位の人！」

「え？」

「うえい？」

「私はサポート科の発目明、貴方達の立場を利用して下さい」

「はい!？」

明け透けな事を言う明に二人は驚く。

確かにサポート科に取っ手すればこの二人を上手く自分のサポートアイテムで援護して強化できれば更に目を引くことは間違いないのだ。

出久と電気は全く知らないが来てくれた明にお礼を言おうと思っただが、明はどうやらかなりの自分本位な性格な為、二人の言葉を聞かずに自分のサポートアイテムの紹介を始めているのだ。

「それですね、二人をサポートするにはこのホバーソールが役に立つと思うんです。靴底についてるプロペラが着地の衝撃を和らげて空中から降りてもすぐに次の行動に

移ることができません」

「凄い！確かに僕達は高い空中へジャンプできて耐えられるけど地面には衝撃が伝わってめり込まないわけじゃないから和らげるこれは本当に使える」

出久も明の宣伝を大真面目に分析して有効と判断している。電気は二人の会話に着いていけずに残りの入ってくれそうな生徒を見るが、誰もいない。

三人でやるしかないと思っていたら、一人だけ余ってる生徒を見つけて入ってもらった。



「よし、行くよ。電気、発目さん、常闇君！」

「よっしや！」

「はい！」

「任せろ！」

電気、明、踏影の三人が上に乗ってる出久の声に合わせてる。

電気が前で後ろに明と踏影がいる状態だ。

踏影としては天敵の光を扱う出久と電気を助ける事になるとは思ってもいかなかったが、その前には確実にトーナメントに入らないとそんな事を考えても意味はない。焦凍や勝己の所には行つたが二人の目指してた騎馬の理想に踏影の黒影は合わなかつたので、確実に入ると断言できる出久達の騎馬に入ったのだ。

何とか相性について倒さないといけないなど頭の隅で考えながら協力する。

『よゝし組み終わつたな！準備はいいかなんて聞かねえぞ！さあ行くぜ、関の声を挙げて挑め！残虐バトルロイヤルカウントダウン！』

「スタート!!!」

ミッドナイトの声と同時に周りの騎馬が突つ込んでくる。

「実質1000万の取り合いだ！」

「ハツハツハー！行くよ、緑谷君！」

血気盛んな騎馬達である。

「来たな、出久。どうする？」

「選ばれし者の運命」

「逃げの一点！」

電気は動こうとするが足が沈んで上手く動けない。

「骨抜か！」

「寄越せー！1000万！」

徹鐵達が突っ込んでくるが、出久は冷静に背中に着けたバックパックを作動させる。すると上空に飛び、危機を脱出する。

出久と電気だけなら要らないが騎馬と言う特性で四人も同時に飛ばすなど出久と電気には無理である。

ましてや、全然練度が違う二人を自分達と同じくらいに上げるなど出来ない。

故にこのサポートアイテムは有効だった。

「待てやー！あー！」

飛んでる出久達に勝己が空中で襲う。

「黒影ー！」

踏影の黒影が勝己の攻撃を防ぐ。

勝己は黒影に攻撃を防がれた事にイライラしながら、範太のテープで自分の騎馬に戻る。

まだ響香のイヤホンだったり、茨の蔓だったり、様々な攻撃が来るが黒影が全て叩き落とす。

「凄いよ、常闇君！死角のカバーも出来て完璧だよ、発目さんのバックパックもかなりの力だ！」

「当然」

「でしょ！私のドツ可愛いベイビーは最高でしょ！」

「俺にはないのか？」

「電気はいつも通りじゃん」

「辛い、評価が辛い！」

漫才を繰り広げる出久と電気。

この四人は無事にトーナメントに進出できるのだろうか？



ー少し戻るー

焦凍が百、天哉、お茶子に向かって話している。

何故、自分が三人と組んだかについてだが、天哉のスピードで突っ込み、百の多彩な装備で翻弄、そしてお茶子の浮遊で重さのデメリットを軽減するという方法だった。

「そこで轟君が氷と炎で牽制か」

「・・・ああ、そうだ」

焦凍は自分の左手を見た後に天哉にそう答える。

そのまま観客席を見る。

大嫌いな父親が一人したり顔で見ている非常に腹が立ち不愉快な気分になりながらも騎馬戦の準備をする。



―話を戻して―

出久達はその後も上手く立ち回って逃げていた。

1000万の数を良く守ってる方だが理由がある。

まずは踏影の死角へのカバー。

そして、電気の電撃。全然打ってないが、殆どの人間が大量放電を受けたことがあるため、動けなかった。

受けていない生徒は明と人使ぐらいであり、明は自分達のチームに所属、人使に至っては他のチームのポイントを取っている為、出久達の方には目もくれてなかった。

更には明のサポートアイテムで騎馬の運動性能を上げて出久の分析による筋立てをしているために中々に攻めにくくなってる。

「よっ、よっ」のまき

「待て、緑谷！足が動かん！」

出久は踏影の足を見ると下に実のブドウがあった。

「峰田君か!?!何処から?」

「寄越せ!1000万!」

峰田の声と共に目蔵が突っ込んでくる。

ただ、前屈みで触手で背中を覆ってる目蔵だけしか見えずつに出久達は困惑する。

「あれ?障子君一人?なんで?」

すると目蔵の触手の間から舌が飛び出してきて、ポイントを掠める。

「うわ!」

「私もいるわよ」

触手の間から梅雨と実が顔を出す。

「そこに二人も!?!凄いな障子君」

「寄越せ!」

「常闇君、発目さん、無理やり出るよ!」

出久はバックバックの出力を最大にして脱出する。

踏影の靴も脱げた。

「常闇君、足は大丈夫?」

「心配いらん、黒影！」

【個性使いが荒いぞ】

黒影が踏影の足に纏う。

明がホバーソールを使い、柔らかく着地をして次に動く。

『さて、各チームのポイントはどうなっているのか？7分経過した現在のランクをスクリーンに表示するぜ！』

一位 緑谷チーム

二位 鉄哲チーム

三位 物間チーム

四位 拳藤チーム

五位 轟チーム

六位 鱗チーム

他は全部0ポイントになっていた。



ポイントを取られた勝ちチームは奪った寧人チームと戦っていた。

「返せ！」

「誰がそんな間抜けをすと思う？」

勝己が爆破で攻撃するも、寧人は鋭児郎の硬化をコピーして耐えていた。

「この物真似野郎〜」

「おお！本性で出るよ？猫かぶり君！」

「誰が猫だ!?!」

寧人の煽りに引つ掛かり捲つてる勝己はそのまま戦いを続ける。本来（原作）ならば、勝己が寧人の煽りにぶちギレて奪い取れるのだが、寧人は勝己の人間性を修業で良く観察していた為に見事にそこら辺のバランスを上手くやっていた。

勝己自身、段々と丸くなつてる為と心も成長してる為、あと容赦なく煽りをやる電気の相手もしていた為か、悉く煽り耐性がついてしまい、結果的に怒りが爆発しないでいた。



「かつちゃん、荒れてるな〜」

「ありや、しょうがねえよ」

出久達は離れた所から勝己と寧人の争いを見ていた。成長とは恐ろしい。

「皆、このまま逃げ切るよ！」

「（おう！／はい！）」

気合いを再び入れ直して最後の勝負だと思った次の瞬間、突然出久達の周りに氷の壁が出来た。

「そろそろ獲るぞ！」

「轟君」

焦凍チームが出久達に勝負を挑んで来た。

周りを氷の壁で囲んで逃げられなくされたが、出久はすかさずバックパックで飛ぼうとした瞬間、一気にその場に影が出来た。

出久は空を見上げると大量の鳥が羽ばたいて、氷の壁の唯一空いていた空を遮っていた。

「これは!？」

出久が驚いていると、突然バックパックが壊れた。

「「「なっ!?!」」」

バックパックには響香のイヤホンが刺さっていて、イヤホンが離れると焦凍達とは反

対方向に、響香と甲司、力道を入れた透のチームがいた。

「葉隠さん！」

「ポイントがゼロだからね、取らせて貰うよ10000万！」

「そのアイテムは壊させて貰ったよ、厄介なんでね」

「ベイビーが!!改善の余地あり！」

「不味いな」

出久チーム、透チーム、焦凍チームの三つ巴の戦いが始まろうとしていた。



影も形も忘れられてた各宇宙の神々と人間は非常に楽しく騎馬戦を見ていた。

良くも悪くもやったことがない戦い方であるために全員が注意深く見ていた。

「欲しい!あの少女が欲しい!」

「ドクターパパロニ、落ち着いて下さい!」

「界王神様、止めないで下さい!あの発目明なる少女の発想と商魂逞しい性格は我が第3宇宙に必要ですぞ!」

「他の宇宙の人間ですからダメです!」

「是非とも我が助手に!」

「ダメですつて!」

「落ち着けドクターパパロニ!」

「ピコピコピコピコ」

「モスコ様曰く、『死んでもパパロニを抑えるのだ。でないと第3宇宙のプライドに関わる』との事です」

モスコやカトペスラも加わり、完全にパパロニは抑えられたが、目はまだ諦めてなかった。

「ぬおー!何としてでもあの発目明を助手にしてやる!」

不審者顔負けの執着力である。

当の狙われた本人は身震いしていた。

「あの、物間違ってやつ気に入ったぞ！」

「シャンパ様、彼の個性は一人では何もできませんが？」

「そんなの天使の力でどうにかなるだろ？」

「考え方が安易です」

「うるさい！」

シャンパは寧人を気に入ったようだ。

しかし、ヴァドスから安易と言われてすぐにまた夫婦漫才を繰り広げていた。（夫婦じゃないけど）

因みに他の宇宙の神々や人間もこんな風に楽しく見ていた。

そして興奮しやすい悟空はチチの手によって抑えられていた。

チチ的には折角の珍しいスーツ姿の悟空を堪能する為であった。



三つ巴を行って三チームは膠着状態であった。

互いに互いの距離がどんどん近づいて来るが、攻められない状態であった。

理由は甲司の個性で大量の鳥が三チームを囲んでほとんど円を狭めて来ているがそのせいで焦凍は炎も氷も使えないでいた。

両方とももつと広い場所なら出せるが、この状況下では避けられたら鳥に当たってしまい傷つけてしまう。

個性によって傷つけられた事がトラウマな焦凍は出来なかった。氷はガンガンやって来たが相手はいつも人で鳥とかにやった事がないため、出来なかった。

透チームは焦凍の炎や氷を警戒しつつ、出久達の1000万を狙っているが、響香のイヤホンは踏影の強力になった黒影で防がれていて、透の透明も騎馬の上に乗っているとバレバレなので、攻められない。

出久達は攻められない二チームを見ながら警戒しているが、鳥が影を作った事で踏影の黒影が力を上げて踏影はコントロールするのに精一杯であり、電気は持ち前のスピードを出せずにいて出久も気弾を撃とうにもそれが騎馬への直接攻撃になって失格になった時を考えると出来なかった。

しかも1000万は自分の手にあるためにそこまで積極的に二チームの相手をする気はなかった。

「轟君！確り取ってくれ。10秒の勝負だ」

「飯田？」

「レシブロバースト」

突然、天哉が電気に比べると遅いが出久の全力よりも速い速度で騎馬ごと動いた。

あまりの突然の出来事に一瞬だけ反応出来なかった。

焦凍はその一瞬を見事について1000万をもぎ取った。

「しまった！」

「飯田、俺の十八番で勝負とは良い度胸だなー」

出久は取られた事に歯軋りし、電気は十八番で奪われたことに憤慨していた。

別に天哉がやった事を電気は出来ないわけではない。

ただ、天哉よりも速すぎるのだ。

それでは踏影はともかく明がついていけないのだ。

また電気の超高速は全身に稲妻を纏わせる為、他人がその状態の電気に触ると感電するのだ。

故に電気は超高速を使えないでいた。

「上鳴君、速いのは君だけじゃないぞー！」

「クソツタレ！」

焦凍は1000万を取れたことに喜び、油断せずに首にそのポイントを巻こうとした

瞬間、響香のイヤホンがそのポイントを奪った。

焦凍は氷をすかさずにぶつけようとする。

「翼を持つ者達よ、私達を中心に旋回して守るのです」

鳥が透チームの周りを旋回して出せなかった。

「クソッ！」

焦凍はその状況に悔しがる。

当然だ。

油断なんて一瞬もしてなかったのに取られたのだ。

警戒が甘すぎたのだ。

奪われた出久達に集中しすぎたのだ。

そのせいでやられたのだ。

「よし、これなら！」

透が急いで1000万を首に捲く。

そして二チームから離れようとする。

ドン！

突然、大きな踏み込み音が聞こえる。

そして鳥達のドームを無理やり突き破った出久が1000万ポイントに手を着ける。

「緑谷君！」

「油断大敵だよ！」

出久は1000万ポイントを手に取る。

しかし、手に取った所で飛び込んできた出久はいずれ地面に落ちてしまう。

透達はそれを取れば良いと思った次の瞬間、出久は空中でかめはめ波の姿勢になった。

「翼を持つ者達よ！急いでその男から離れるのです！」

甲司が急いで出久の近くにいた鳥達を離れさせる。

出久が何をするのか本能的に察知したのだ。

自分が勝つのではなくて大好きな動物を守るためにとつきに働いた本能は批判できない。

「かめはめ波！」

出久はかめはめ波を出して、その勢いを使って自分の騎馬に戻る。

先ほど勝己がやってた方法だから、問題は一切ない。

その事に透チームは啞然する。

こうして10000万は出久チームに戻った。

透達は油断してしまった。

鳥を自分達の周りに囲めば飛び込もうが推進力は落ちるし、騎馬で突っ込んでも目眩ましになるから逃げられると思った。

勿論、出久や電気は最大限の警戒をしていた。

しかし、かめはめ波を推進力にして戻る方法など発想すらしてなかった。

出久自身、飛び込む一瞬は勝利を確信した時だと思っていた為にそこをすぐさま突いた。

故に10000万を取ったのだ。

「まだだ!」

「まだ終わってない!」

焦凍チームと透チームが全力で奪いに行く。

『タイムアップ!』

しかし、勝負は無情にも終わった。



『それじゃ、波乱の騎馬戦の結果発表だ!』

プレゼント・マスクが結果発表をする。

『一位 緑谷チーム 10000390ポイント!』

『二位 いつの間に!?心操チーム 2390ポイント!』

『三位 爆豪チーム 955ポイント!』

『四位 轟チーム 635ポイント!』

『以上の四チームが決勝進出!・・・って直前まで二位だった鉄哲チーム、どうした!』
『どうやら、人使チームが根こそぎポイントをかっさらったようだ。現に殆どのチームのポイントを奪っている。』

しかも、どうやって奪われたかやられた本人たちもわかっておらず、頭を悩ましていた。

『それじゃ、一時間ほど休憩を挟んでから午後の部だぜ!イエー!』

こうして雄英体育祭の騎馬戦が終わった。

選ばれた16人!

騎馬戦が終わり、昼休みになった。

それぞれが昼食を食べる中で出久と電気は焦凍に連れられて人影が少ない所にいた。

「それで、話ってなに？」

「緑谷に上鳴は自分の力で人を傷つける事をどう感じる？」

「どうって……どうしたんだよ、急に？」

「俺の親父は知ってるよな？」

「No. 2 ヒーローのエンデヴァーだよね？」

「そう、万年二位のヒーローだ。オールマイイトにずっと勝てない万年二位。自分でオールマイイトを越せないからあいつは個性婚をしたんだ」

出久も電気もその言葉に顔をしかめる。

個性婚とは出久達の二三世代前に社会問題になった物で、自分の子供に強い個性を与える為に強い個性を持つ人間と結婚する一種の品種改良である。

個性黎明期を過ぎて、ヒーローと言う職業が人気を帯始めた時期に増加してしまい、世界中で今もなお続いている問題の一つである。

中南米の麻薬麻薬カルテルでは強制的にされてその子供達は産まれた時から、殺人術と強い個性を操るように洗脳される。

アメリカのとあるヒーローがカルテルを壊滅させようとしたが洗脳された強個性の子供達によつて返り討ちに会い、1週間後には死体が吊るされていると言つた前例がある。

「金で母さんの親族を言いくるめた。金と権力はある男だからな。俺の他に兄貴や姉貴がいて、あいつの理想通りの個性になつたのが俺だ。・母さんにお前の左が憎いつて言われて煮え湯を浴びせられたよ」

焦凍は自分の左側の火傷を触る。

「まさか、氷の個性だけで俺達に勝つてか? ・・轟の意思や怨みはわかるけどそれで俺達は・・・」

「そんなんじゃない、あの桃白白にやられてからその誓いは粉碎されたからな」
「轟君・・・」

「あいつに殺されかけて、母さんと久しぶりに話した。漸く前に進めると思つたら・・・まさか使うのにびびつてこんな事になるとは思つてなかつた」

膝に手を着ける焦凍。

出久と電気はそれを真つ直ぐただ見る。

「だから、教えてくれ。お前らはどうやって力を使ってるんだ？」

焦凍は救いを求めるように二人を見るが二人は何も言えない。二人とも力を使う云々を考えなくても師匠の亀仙人の教えを受けてこうなったのだ。

何も二人は焦凍にアドバイス出来ないのだ。

使う事に恐怖を感じないわけではない。

ただ、使っても大丈夫だと確信しているのだ。

何故なら、大事に育ててくれた亀仙人の愛情を二人は感じているからだ。

「悪かったな、急に变なこと聞いちまって」

「ちよつと待って」

焦凍はそのまま去ろうとする。

二人はそれを止める。

焦凍は二人を見る。

「俺達は何も言えねえけど・・・」

「僕達は君と全力で戦う。だから全力で来て欲しい」

「わかつてるよ」

焦凍はそのまま去った。

少し離れた所では勝己が聞き耳を立てていた。

特に何も思わず、勝己は去った。
出久と電気は食堂に向かった。



「カツ丼と・・・」

「またカツ丼かよ」

「そういう電気はバーガーじゃないか」

「バーガーのどこが悪い」

「ならカツ丼でも別に良いじゃん」

出久と電気が軽く話し合いながら、自分の昼食を取る。

席を探していると、また大量に食べてる悟空達を見つけた。

他の各宇宙の人達はおらず、Z戦士と奥さん二人だけいた。

出久と電気はその空いてる席に座る。

「出久に電気、先ほどの競走は何じゃ？」

明らかに怒気を含んだ亀仙人の言葉に出久と電気は顔をしかめる。

「ああ言うパフォーマンスが必要なのは理解するが、谷をまだ越えていないのに自らの

速さに過信したのは駄目じゃ」

(怒るところそこかよ!?)

そう、亀仙人はパフォーマンスをした事ではなくて、始めた場所が不満だった。

最終的に全員を抜かせたから良かったが、あまりにも自分の足に過信しすぎていた。

そこを亀仙人は怒っていたのだ。

「天哉の速さもお主達に負けてはおらん。現にさっきの騎馬戦ではお主達に一泡吹かせておったではないか?やるならもつと良く周りを見てから確実に問題ないようにするんじゃ」

「はい」

実際に一泡吹かせられたので、出久と電気はこのありがたい小言を素直に聞くことにした。

「まあ、じつちゃんもそんな硬い事言うなって上手く言ったから良いじゃん」

「過信は悟空も陥り易いぞ」

亀仙人はサングラスをキランと光らせて悟空を見る。

悟空はなに食わぬ顔で食べるのを再開した。

実際に悟空が油断しなかった事はあまりない。

セルの時は勝手に悟飯と相談せずに悟飯を戦わせ、ベジータの時は後一步をわざわざ

逃がした。

ピッコロの時も仙豆を食べさせたり、フリーザと地球で戦った時も光線銃を受けたりと油断を結構しやすい。

「あんなパフォーマンズをしてわざわざ目立つなんてバカ丸出しだな」

ピッコロが出久と電気の二人に言う。

二人ともバカと言われてピッコロを睨むがピッコロは更に眼光を鋭くし、二人を睨む。

天下一武道会で目立ちまくったピッコロが言えた義理ではない。

「まあ、二人ともあまり過信し過ぎるなよ」

クリリンが二人に言うが力の大会で過信して落ちた人に説得力はない。落ちた故にのアドバースではあるけど……

出久と電気の二人はさっさと昼食を食べて、一先ず休憩する。

悟空とベジータは食べ終わり次第、チチとブルマに連れていかれた。恐らく始まるまで外の売店を一緒に見回らるだろう。残ってる亀仙人、クリリン、天津飯、ピッコロと一緒に二人はお茶でも飲んでのんびりする。

「お前達、のんびりし過ぎてないか？」

天津飯が二人を心配して聞く。

「大丈夫ツス」

「寧ろ、この後の事を考えると今の内にのんびりしとかないと集中出来ませんから」

本人達が問題ないと言った為、天津飯はこれ以上言うのを止めた。

そんな中、実が近づいて来る。

「どうしたのじゃ、実?」

「爺さんに上鳴もさ、あれを見てくれ」

実が指差す方向を見る電気と亀仙人。

他の四人もそつちを見る。

そこにはアメリカから来た本場のチアガール達がいた。

「チアって良いよな」

「ああ、ユニホームからはつきりわかる美しい体つきだけじゃなく、元気さ、技の難易度、

正確性、完成度、それを実現する為の日々の努力を全力で魅せてくれるから美しく格好

いい、そして何より美人だ」

「中々に美人揃いじゃの・・・。パフパフしてくれんかの」

「爺さん、パフパフって?」

「昔、ブルマにやってもらったんじゃ、胸の間に顔をうずくめてこうパフパフっての」

鼻血を出しながら話す亀仙人。

実はパフパフを想像し鼻血を出して、電気は思いつきりにやけ面になる。

出久と天津飯、クリリン、ピッコロは想像したのか顔を赤らめるか呆れる。

「二人は見たくねえか？ A組とB組のチア姿を！」

電気と亀仙人は想像した。

美人でナイスバディが意外にいるA組とB組の女子がチアをする姿を……

きつと目の保養になる！

三人は互いに頷き会い、A組とB組の女子がいる方に行つた。

「ちよつと待つた！」

いや、エロ魔人三人を止めるヒーロー出久がいた。

三人の前に立ち、手を広げて行かせないようにする。

「どくのじゃ、出久！」

「そうだ、どけ緑谷！」

「俺達の夢の実現の邪魔するな！」

「そんな女子に迷惑をかける夢があつて堪るか！ 死んでも通さないよ！」

三人の物言いに出久は睨みで答える。

さすがは出久である。

しかし、電気は余裕の顔で出久に近づき、肩に手を回す。

「良いか、出久。良く考えてみる？ お前の好きな女子は誰かは知らないがその子がチア姿になったら」

「え？ うーん」

出久は大真面目に響香のチア姿を想像した。

きつと恥ずかしがって顔を赤らめると思う。

そう言うのは苦手だと思うし、んでスラツとした生足と生腕、短髪による見えるうなじ。

見てみたいと出久は心から思った。

「・・・見てみたい・・・はっ!」

出久はポロツと本音を出した事に気付き、三人を見ると三人とももう消えていた。

恐らく女子達を言いくるめてチアの格好をさせに行つたのだ。

出久は本能でもう止められないと悟った。

電気と実だけならともかく煩惱がフルパワーになった亀仙人を止められるとは到底思えないからだ。

止められなかった悔しさに地面を叩くがクリリンがそこに来て出久の肩をポンポン

と叩く。

「クリリンさん……」

「誰だって好きな子で想像すると見たくなるよな」

「クリリンさんですか？」

「……いや、うちの奥さんは死んでもやらないから想像したら鉄拳も追加される」

クリリンは顔を青ざめながら話す。

18号的にはクリリンがやって欲しいと言ってくればやってあげる気マンマンなのだが、クリリンとしてはやって貰えないと思っている。

クールビューティーを地で行く18号には似合わないとクリリンは感じてるのだ。

まあそれで鉄拳も追加で想像する辺り、羞恥による怒りへの恐怖が強いのだろう。

「確かに18号はやらないな」

「天津飯さん、止めてください」

「無理だ。煩惱で動く武天老師様を止められる人間などいない」

「諦めるんだな」

「そんなピッコロさんまで」

「こうなったらもう無理だ」

凄まじいエロ魔人三人衆に出久は歯を食い縛るのだった。



昼休みも終わり、生徒達を始め、多くの観客達も戻ってくる。

各宇宙の神々や人間達も屋台のたこ焼きやらなんやらを持って戻ってきた。

『さあ昼休憩も終わっていいよ最終種目発表!とその前に予選落ちのみんなに朗報だ! あくまで体育祭、ちゃんと全員参加のレクリエーション種目も用意してんのさ! 本場アメリカからチアリーダーも呼んで一層盛り上げ……ってどうした!? ヒーロー科それはどんなサービスだ!』

『あいつら、何やってんだ?』

一年生ヒーロー科の女子が全員、チアの格好をしていた。

全員、顔が死んでいる。

「峰田さん、上鳴さん、武天老師さん! 私達を騙しましたね!」

百が実と電気、そして観客席にいる亀仙人に怒る。

三人ともサムズアップをしてるのが腹立たしい。

全員、実と電気だけなら信じる気は全く無かったが、亀仙人と言う明確な講師がいたため信じた。

職権乱用である。

「うう、どうしてこうなりますの？服もキッチンと作って・・・」

落ち込む百。

一佳が百を慰める。

「あいつら、アホだろ」

響香がポンポンを捨てて電気と実を睨む。

職権乱用しまくった亀仙人も睨む。

「やっぱ、ウチは似合わないな」

響香が周りの女子を見ながら言う。

「でも耳郎さん、綺麗だよ。スラツと綺麗な足でスマートで似合ってるし・・・って何で!?!」

出久が響香をフォローしようとしたが、響香はイヤホンを出久の耳に刺して止めた。

顔がリンゴのように赤かった。

「うっさい！」

「まあまあ、本戦あるまで気張ってるのもしんどいしさ、いいじゃんやったるー!」
透の言葉に響香は苦虫を噛み潰した顔になり、結果的にヒーロー科女子はやることにした。



『みんな楽しく競えよレクリエーション!それが終われば最終種目進出4チーム総勢16名からなるトーナメント形式!』

『一対一のガチンコバトルだ!』

プレゼント・マイクの実況に観客も熱狂で応える。

毎年、一般の観客もプロのヒーローもこれを楽しみにして来ているのだ。

そりゃ凄まじい熱狂である。

「それじゃ組み合わせ決めのくじ引きしちゃうよ!組が決まったらレクリエーションを挟んで開始になります」

ミッドナイトが壇上でくじ引きの箱を持ちながら話す。

「レクに関しては進出者16人は参加するもしないも個人の判断に任せるわ。んじゃ1位のチームから」

ミッドナイトがそう言い終わると猿夫が手を上げる。

「すみません！俺、辞退します」

突然の言葉にいた全員が猿夫を見る。

こんな夢を叶える舞台でとんでもないことを言っているのだ。

「尾白君、何で!?!」

「折角、プロのヒーローに見てもらえるチャンスなのに!」

「騎馬戦の記憶、終盤ギリギリまでほぼボンヤリとしかないんだ。多分奴の個性で…」

猿夫は騎手をやっていた人使を見る。

人使はどこ吹く風で大した反応をしない。

「チャンスの場だつてのはわかつてる。それをふいにするなんて愚かなことだつても。でもさ、皆が力を出し合つて争つてきた場なんだ。こんな…わけわかんないままそこに並ぶなんて俺には出来ない」

猿夫は確りと言う。

そこには確かな決意があつた。

「気にしすぎだよ！本戦でちゃんと成果を出せばいいんだよ!」

「そんなん言つたら私だつて全然だよ?」

「違うんだよ…俺のプライドの問題なんだ。後…何で君達、チアの格好なの?」

悔し涙を流しながらもツツコミを入れる猿夫。

ツツコミを入れられた女子達は顔を暗くする。

普通に騙された為に笑い事にもならない。

また猿夫の言葉に同じチームだった二連撃も辞退を表明した。

優雅はそのままであったが・・・

『何か妙な事になってるが・・・』

『ここは主審ミッドナイトの采配がどうなるか』

実況の二人が主審のミッドナイトに判断を委ねる。

「そう言う青臭い話は・・・好み！二人の辞退を認めます!!」

「「「好みで決めた!」」」

こうして二人脱退したために、二人分の枠ができた。

本来なら、五位のチームから入る筈だが、人使チームが無双して殆どのポイントを

奪ったため、五位以下が全員同じポイントになっていた。

そして、直前までポイントを稼いでいた徹鐵チームから二人選ばれた。

徹鐵と柔造である。

以上、16人でトーナメントをすることになった。

そして、くじ引きの結果、組分けが発表された。

『一回戦 爆豪勝己VS心操人使!』

『二回戦 芦戸三奈VS青山優雅!』

『三回戦 上鳴電気VS骨拔柔造!』

『四回戦 飯田天哉VS発目明!』

『五回戦 轟焦凍VS瀬呂範太!』

『六回戦 緑谷出久VS切島鋭児郎!』

『七回戦 常闇踏影VS鉄哲徹鐵!』

『八回戦 麗日お茶子VS八百万百!』

『以上の選ばれた16人によるトーナメント!!これは実況の遣り甲斐があるぜ!』

プレゼント・マイクが実況室で盛り上がる。

『トーナメントはプレゼント・マイクに変わって違う人が実況します』

『ハアイ!!』

プレゼント・マイクは突然の消太からの言葉にマイクの電源を一先ず切る。

「え?何それ?どゆこと?」

「校長から説明があつただろうが」

「ジョークの一種じゃねえの?」

「いや、マジだ。では入ってきて下さい」

実況室に一人の男が入ってくる。

金髪で少し髭の生やしたナイスミドルな男だ。

「あんた誰？」

「私は司会者（しかいしゃ）と言います。孫悟空さんから頼まれて来ました」

そう悟空がわざわざウイスに頼んでまで来て貰ったのは天下一武道会でお世話になったアナウンサーである。

（この名前はウイスと根津校長が考えた偽名である）

「げっ!? 悟空さん達の知り合いかよ」

「ええ、まあ」

「では、後は頼みましたよ」

消太はそう言ってプレゼント・マイクを引っ張って外に出る。

「え？ 嘘だろ!？」

「お前がいると絶対にマイクを奪うからな。そっちの方が合理的」

「俺の神実況は!？」

「明日に持ち越しだ」

「嘘だドンドコドーン!？」

司会者は出ていった二人に申し訳ないと思いつつも始めての違う星で悟空達の教え子達の試合は低レベルな試合に飽き飽きしていた自分には最高の恵みだ。

そして、実況室にクリリンが入ってくる。

「どうもお久しぶりです」

「ああ、クリリンさん、お久しぶりです」

「今日は悟空のわがままに付き合っておりがとうございます。悟空の奴、『どうせ実況してもらうなら、おっちゃんが良い』って聞かなくて」

「いえ、悟空さん達には色々と刺激を貰ってきましたから、寧ろ私の人生で一番の司会をしてみせます！」

「隣には俺が待機して空に行こうが消えようが状況を教えますので」

「ありがとうございます！」

司会者とクリリンは握手をする。

クリリンは16人の名簿を司会者に渡した。

「クリリンさん、これは？」

「個性が記録された名簿です。それぞれ違った個性がありますから」

「それならご安心してください。ウイスさんに連れられながら午前中の競技を見ていたので、名前も個性も把握しております。彼らの名前の読み方も今の組分けの時にメモし

ましたので大丈夫です」

司会者はクリリンに名簿を返した。

まさに司会者のプロである。

クリリンもそのプロっぷりに感心して、二人は一緒に実況席に座った。

『えー、皆さま、私はプレゼント・マイクさんが変わって実況をすることになりました司会者と言うものです。先程のプレゼント・マイクさんに負けない実況をしてこの雄英体育祭を盛り上げていこうと思います。続きましては、解説をしてくださるのはこの人……』

『クリリンです。詳しく解説するぜ!』

観客は突然の実況と解説の交代に戸惑う。

そりやプレゼント・マイクは自分でラジオ番組をするほどに声の人氣が高い人。

それが突然、知らない人間になったら困惑するに決まってる。

因みに根津校長がプレゼント・マイクの実況を変えたのはただ単純にプレゼント・マイクの実況に飽きただけと言うわりと適当な理由であった。

変えようにもプレゼント・マイクの人氣もあつて変えられなかったが、今回は各宇宙からお客も来てて衣食住を提供してて、ヒーロー科をレベルアップしてくれてる悟空から推薦して貰ったから心置きなく変える事ができた。

『それでは雄英体育祭、午後の部開始！』
こうして、午後の部が始まった。

激動!雄英体育祭!!

レクリエーションがすんなりと終わり、それまでの間、トーナメント参加者の16人は精神をそれぞれの方法で養っていた。

全員、トーナメントに勝ち上がる為に死力を尽くす。

その為に集中して自分のモチベーションを最大に上げていた。

『それでは皆さん!お待たせしました。本日最後にしてメインイベント!第三种目一対一のトーナメント戦です!』

観客が司会者の言葉に熱狂で答える。

何だかんだ言って観客もすぐにこの司会者の実況に慣れた。

プロゆえにである。

因みに実況を取られたプレゼント・マイクは先生方の席に座りながら、実況席に恨みがましい視線を送っていた。

『ルールは簡単です。武舞台の上で戦い、相手を降参させるか場外に出すと言った戦闘不能にさせれば勝ちです。また故意に急所を狙った攻撃は禁止とさせて頂きます!』

司会者の十八番の実況は観客を盛り上げていく。

『それでは第一回戦を始めます！選手の方は入場をお願いします！』
勝己と人使が違うゲートから入場する。

『爆豪勝己選手は先程の騎馬戦で物間寧人選手率いる騎馬と激戦を潜り抜けた実力も個性も充分素晴らしい選手です！』

『対する心操人使選手は緑谷選手、轟選手、爆豪選手以外の騎馬から全てのポイントを取った騎馬を率いておりました！』

両者が対面する。

互いに体育祭前から因縁があるためか非常に緊迫した雰囲気になる。

『それでは第一回戦始め！』

解説役のクリリンが何処からか持ってきた銅鑼を叩く。

武舞台では勝己と人使が始まりの合図があったのに睨みあっているだけで何も仕掛けない。

互いに出方を伺っている。

「随分とパットしない成績だな。体育祭前に偵察は無駄だつて言うてはわりには」

人使の煽りに勝己は何も答えないし、動かない。

人使の個性が人を操る類いの個性なのかはわかるが一体それがどうやって発動されるのか全く分からないのだ。

触れたらアウトか？

話し合ったらアウトか？

どうやったたら解除されるのか具体的な情報が一切無いために勝己は動けなかった。

「次の試合はあの黒目か金髪のどっちかか、まあこの試合よりも楽勝だがな」

勝己はその煽りを聞いて、即座に人使に向かって突っ込んだ。

一番言われて嫌な煽りは自分が何の障害にもなっていないと言われる煽りを勝己は一番嫌う。

出久に今までやって来たのに凄いダブルスタンダードではあるが、一番言われて腹が立つのだ。

勝己は無口のまま、人使の鳩尾に爆破をぶつける。

やられた人使はそのまま後方に吹き飛ばされる。

『爆豪選手の強烈な攻撃が決まった！心操選手はもろに喰らい後方に吹き飛ばされた！』

人使はそのまま耐えて前を見るが怒りでブーストした勝己が鬼の形相で向かってくる。

「やるなあ」

膝が笑っているが人使は立ち上がる。

しかし、亀仙人を始めとする乙戦士達の修業を受けてきた勝己の攻撃はかなり上がったおり、人使が一発喰らって立ち上がられただけでも奇跡と言えるレベルだ。

「キレたか・・・やべ、想像以上にキツイ」

鳩尾を押さえながら勝己を睨む。

「どうした!?!随分と弱いなへっほこー!」

勝己は今度は人使の顔面に爆破を当ててまた吹き飛ばす。

武舞台に落ちるギリギリで何とか武舞台にしがみついてもう一度立ち上がる。

「死ねえ!!」

勝己が勝利を確信して叫びながら、突っ込んでくる。

人使は漸く待っていた状況に嗤う。

(よし!喋った)

「強烈なのをお見舞いしろよ!?!またへっほこだったら直ぐに立ち上がるからな、俺は!!」

「上等だ!」

(単細胞のバカが)

勝己が人使の煽りに答えると勝己は急に止まった。

人使が大きなため息を吐く。

『ああーと!これはどうしたことだ!?!猛攻で心操選手を攻めていた爆豪選手が突然止

まっけてしまった!?!』

『ええ恐らく心操選手の個性“洗脳”を受けたのでしよう。爆豪選手はさつきまで心操選手の煽りに対して何も答えていませんでしたが、最後に自分の勝利を確信した気の緩みから煽りに答えてしまい洗脳されたようです』

クリリンが丁寧で解説する。

言葉で受け答えすると洗脳できる個性持ちの人使はこうやって煽って冷静さを欠かせていけないとまともに洗脳出来ない。

特に勝己のような人間は・・・

始まりの勝己に油断はなかった。

しかし、二回も爆破を諸に喰らい、膝が笑っていた人使がどうやって洗脳しようとも爆破の相討ちで吹っ飛ばせると見た目で判断したのだ。

決して観察が甘かった訳ではない。

寧ろ確りやり過ぎて自分よりも下だと確信してしまったのだ。

結果は見事に洗脳されて、相討ち狙いさえも無にされた。

「悪いな・確かに無茶苦茶強い化け物だ、まともに戦闘をやったら逆立ちしても勝てないがそれで勝てるほど甘くない、足元を疎かにすると掬うって言っただろ?」

人使は地面に膝を着く。

予想以上にダメージが体に来たのだ。
寧ろ良く耐えた方である。

人使もヒーローを目指して人間であるが故の根性か？

それともヒーロー科への下剋上をする為か？

何にせよ、この状態から洗脳が解けるのは強い衝撃を喰らわないといけない。

生憎と戦場なら兎も角、この武舞台ではそんなのはありえない。

「武舞台から降りろ」

人使は勝己にそう命令する。

洗脳された勝己はそのまま武舞台を降りた。

「爆豪選手、場外！心操選手の勝ち！」

ミッドナイトの判定が下されるが観客はその結果に熱狂しなかった。

あまりにも予想外すぎてあっけなさ過ぎたのだ。

『これは何と言う結末でしょうか!?!とんでもない逆転劇です!』

『爆豪選手も決して悪くはありませんでしたが、最後まで粘って一瞬のチャンスを物にした心操選手を称賛するべきでしょう』

(解除)

「なっ!?!」

人使が洗脳を解除すると勝己は自分が武舞台から降りてることに困惑した。

そして結果的に見下げた状態で見ている人使を勝己は睨んだ。

「てめえ……」

「悪いな……試合の勝ちを貰う」

人使はそのまま来たゲートに向かっていく。

勝己は悔し声も上げれないほど悔しく地面を叩く。

観客はこの結末にどんな反応をすれば良いか困惑する。

その時、突如として拍手が会場に鳴り響く。

「誰だ?」

「拍手なんて今できる状況じゃねえだろ?」

「何処のバカだ?」

会場で拍手をしていたのは各宇宙から来た神々や人間たち、そしてプロのヒーロー達だった。

悟空たちも人使に拍手を送っていた。(ベジータはやってないが)

全員、圧倒的格上の勝己に粘って自分の得意状況に持ち込んで勝った人使を純粋に称賛したのだ。

そしてそれに続くように普通科の生徒達も同級生の人使に拍手を送る。

人使はその反応を嘯み締めながら、武舞台を後にした。



まさかの勝己の一回戦敗退にヒーロー科は言葉を喪っていた。

悔りも無くなり持ち前の戦闘センスでドンドン力を上げていつていた勝己がこんなにあっさりやられるとは思っていなかったのだ。

「何て、タフな精神力だ」

「一瞬の隙を上手く突いたな。喋ったとたんにやられたぞ」

「かつちゃんは元々ヒートアップすると喋る癖があったから・・・けど今の爆破を二回も受けて立ち上がった心操君が凄い。どんな精神力で耐えたんだ？けど間違いなく相性は最悪だった。個性も性格も・・・」

出久と電気は冷や汗を掻きながら、生唾を飲む。

それほどまでに人使がやったことは衝撃的なのだ。

戦闘に向かない個性でバリバリ戦闘向きの個性に勝ったのだ。

内容がどうであれ驚嘆に値する。

「くそっ!」

猿夫が歯軋りする。

彼は勝己に人使の個性を教えようと言いに言ったのだが、勝己から要らないと言われたのだ。

「向こうが一人で勝負しに来てるのにこつちが二人じゃ不公平だろうが、敵相手なら勝つことが前提だから全然良いがトーナメントは自分だけの力で勝たないと意味ねえだろうが」

と言われて助言できなかった。

地面を叩いていた勝己が立ち上がる。悔しさはあるが、向こうが頭を使って自分の個性をキチンと使っただけで不正は一切して来なかった。

始まりの合図がなってから煽り始めたし、勝己は負けたのは油断した己のせいだと感じて、自分の頭の中で反省会を始めながら会場を後にした。

「爆豪、もつと暴れるかと思っただけど意外だな」

「まあ不正はやってないし、向こうの作戦勝ちだから何も言えないしね」

出久は中学生のチンピラだった勝己から成長してる事に感慨深い思いを抱いた。

●●●
―各宇宙の神々と人間達―

「中々、良い試合をしたな」

「見事な煽りじゃねえか、見てて腹は立ったが終われば結構面白かったぜ」

「しかし、素晴らしいがああ煽りの連発は美しくないぞよ」

「ピコピコピコ」

「モスコ様曰く『あれはしようがない』との事です」

「俺達、神とは存在自体が違うから効かないがもしも同じ存在であれをやられたらと思うと冷や汗が出る」

「うむ、望んでいた肉体の極限戦いとは違ったが良い試合じゃった」

破壊神の評価が高い。

全員、格上の存在に身一つで文字通りジャイアントキリングをやった人使のやり方に

は称賛していた。

それに心操の個性に腕っぷしは関係ないのだ。

こんな反応になっても不思議ではない。

「これはシンプルな戦いかと思いましたがこの個性のバラエティーさは知力がそうとうないと勝てませんね」

「何を言う、確かに見事であったが最後は己の肉体じゃ」

「何ですって?」

ペルとエアがまた言い争いを始める。

「心操選手も良かったが素直に敗北を受け止めた爆豪選手の精神も素晴らしい」

「心操選手も爆豪選手を称賛していた為に根は良い人なのでしょう」

「しかし、あの個性では偏見も強いでしょう。これからが少し心配でもあります」

界王神達もそれぞれ思った事を口にする。

ゴウスはかつてザマスが人の暗さに暴走した経験を通じて人使の個性に対する一般の偏見を感じていた。

「それこそ時が経つてどうなるかでしょう」

「フワ様・・・」

「焦ってサポートしても拗れますから気楽に待ちましょう。少なくとも同級の方々には

受け入れられています」

「・・・そうですね、ザマスの件があつて少々気負いすぎました」

ゴワスにフワはアドバイスする。

流石は界王神と言える存在だ。

人間の捉え方は千差万別だが、見る目はある。

「ひゃく、あいつ良く勝己に勝てたな」

「フン！あんなしょうもない手に引つ掛かりやがつて」

「ベジータ、お前も引つ掛かりそうだな」

「言えてる」

ベジータが挑発するピッコロと天津飯を睨む。

「しかし、腕つぶしの強さに関係のない個性は厄介じゃな」

「あんなもの受け答えしなれば一発だ」

「へえー、じゃあベジータじゃ無理ね」

「何だと!?!」

「今の煽りで受け答えをキチンとしてる内はね」

ベジータが隣に座っているブルマの軽い煽りに律儀に反応してしまったことに気づいて黙った。

ブルマは夫相手に一本取れた事に笑った。
ブラも一緒にである。

「ははは、ベジータ形無しだな」

「悟空さも無理だべな、働かねえから」

「チチ、それは今関係ねえだろ？」

「ホレ見ろ」

「あつ」

悟空もチチの安い挑発に引つ掛かりサイヤ人の夫二人はそれぞれの妻に形無しだった。
た。

他の宇宙の人間もそれぞれ思った事を口にするがどれも二人を称賛していた。

少なくともここにいる戦士達で戦った人間を貶す者などいない（ベジータは称賛をしないだけで貶しはしない）



『さあ皆さん！続きまして第二試合を始めます！選手の方は入場をお願いします！』
三奈と優雅が武舞台上上がる。

『芦戸三奈選手は多くの男性達が出場したトーナメントで数少ない女性選手です！どのような戦いをするのでしょうか！』

『対する青山優雅選手はこれまで堂々とした風格で観客に向かって余裕のように手を振っています！サーブミス精神が旺盛だ！』

「青山余裕こき過ぎじゃない？」

「僕の眩さをアピールしないとね」

こんな状況になっても自分らしさを強調する優雅の大物さに三奈は素直に感服した。

と言うか完全に心臓に毛が生えてるとしか思えない。

「よっしゃ！青山、服をビームで破れ！」

「頼んだぞ優雅！この古い先短い老人の目に祝福を！」

観客席からエロ魔人二人のヤジが飛んでくるが、そんなのは二人とも綺麗さっぱり無視する。

『それでは第二回戦始め！』

銅鑼が鳴り響く。

先程の試合とは売って変わって直ぐに両者が動いた。

「先手必勝」

優雅は三奈に向かってレーザーを放つ。

しかし、三奈はそれを避ける。

「流石にもう読めてるよ!」

「それは僕もだよ!」

優雅はなんとビームを小出ししまくり、まるで気弾のように大量に武舞台にばら蒔く。

「げっ!」

三奈はそれを何とか頑張つて避けていく。

右に左に上に下に

酸を出して地面を滑りやすくしてより避けやすくする。

全然、ビームが当たらない。

『芦戸選手、青山選手の攻撃を華麗に避けていく!凄い身のこなしです!』

しかし、ドンドンとビームが擦ってくる。

それに三奈は冷や汗を流し始める。

『芦戸選手、ドンドンとビームが擦ってきました!これはどういう事なのでしょう!』

『青山選手のビームは常に同じ速度で攻撃して細かく小出しをしているためか青山選手

はあまり苦しい表情をしません、対する芦戸選手は万が一でも当たらないように大きく避けてます。結果的に無駄に動いている事になりより体力の減りが激しいんです』

『解説のクリリンさん、ありがとうございます！これは芦戸選手にはやや不利か!?!』
しかし、三奈の顔は笑っていた。

そして地面を滑って避けようとした瞬間、足を滑らせて転んだ。

「隙あり！最大出力!!」

極太のビームが転んでる三奈に向かう。

誰もが当たると思ったその時、三奈はドロドロと粘土のような物を出してビームの軌道を反らした。

『芦戸選手、まさかの危機を回避した。これは一体何だ!?!』

「新必殺技 アシッドベール粘土100%」

そう自身の個性の酸の溶解度を上げてほぼ粘土のような物を作り、その酸が太陽の光に屈折して軌道を無理矢理変えたのだ。

勿論、本人は反らすつもりではなく完全に防ぐつもりであったが、反らしたと言う事實は優雅に衝撃を与える。

「う、嘘?」

驚く優雅。

その時、腹が下る音になる。

「しまったお腹の具合が……」

「隙あり!」

腹を両手で抑える優雅に三奈はすかさず彼のベルトに酸をぶち当てる。酸はベルト処か下にあつた服まで溶かした。

ブリーフが見える。

「ひえええ、ズボンが!?!」

「これで終わり!」

慌てて冷静な判断が出来なくなつた優雅の顎にアツパーを入れる三奈。

クリーンヒットである。

優雅はその一撃で倒れて気絶した。

「青山選手、気絶! 芦戸選手の勝ち!」

「やった!」

『芦戸選手、見事に新技を披露して青山選手に勝ちました! 一瞬の隙を上手く突いた強烈なアツパーには誰も耐えられないでしょう!』

観客がこの試合結果に熱狂で答える。

三奈も観客席に手を振る。

やられた優雅は担架に乗せられて武舞台を後にし、三奈はいくら試合とは言え、思いつきりアツパーを入れて気絶してる優雅にごめんと手を合わせていた。

こうして第二回戦も終わった。

第三回戦の選手である電気と柔造がそれぞれ違う待機場所でストレッチをする。

「さて、次は俺の番だ！」

電気はそう言つて武舞台に向かった。

まさかの敗北?上鳴電気VS骨拔柔造

第二回戦も終わり、会場は熱狂に溢れる。

とてつもない熱狂だ。

例年に比べて特別レベルが上がったかと言われれば確かに上がっている。

しかし、それ以上に出久と電気が障害物競争の時にやったパフォーマンスが観客を盛り上げていて、騎馬戦での無双もしかり……

そしてこれから戦うのはそんな盛り上げをやってくれた一人の電気が戦うのだ。

多くの観客が心待していた優勝候補の一人だ。

『さあ皆さん!続きまして第三回戦を始めます!選手の方は入場をお願いします!』

電気と柔造が武舞台に上がる。

二人とも気力も充分でリラックスしていた。

『上鳴選手は障害物競争や騎馬戦で一位を取り続けている今体育祭の文字通り優勝候補の一人です!』

『対する骨拔選手も所要所で活躍を見せており、まさに縁の下の力持ちと言っても過言ではありません!』

両者の間に緊張が流れる。

「悪いな骨抜、圧勝させて貰うぜ」

「勝つてから言つた方が良いぞ」

『第二回戦、始め！』

銅鑼の音が鳴り響く。

電気が柔造に突つ込んで行く。

柔造は突つ込まれる前に個性の軟化で武舞台を軟らかくする。

すると超高速が自慢の電気のスピードが落ちた。

前に進めてないわけではないが目にも写らない速さの電気のスピードが天哉並の速

度に落ちたのだ。

そして、普段の修業で電気の超高速を知ってる人間からするとこの速度はどうつてこ

となひ。

ましてや、超高速が十八番な人間と知っているなら尚更である。

電気が突つ込みながら右拳で殴りに来るが、柔造は難なく避けて鳩尾にカウンターす

る。

電気は耐えて今度は左で殴りに掛かるが足が地面に沈んで行くために上手く拳に力

を入れられずに空を切つた。

柔造の足も地面に沈んでるが小さいときからこの個性を使い続けてきた慣れで上手く立ち回っていた。

がら空きになった電気の左頬に拳を撃ち下ろす。

撃たれた電気は直ぐにやり返す為に右拳を当てに行くが柔造はすいすいと上手く避けて離れた。

そして、地面の軟化を解く。

電気の足は完全に地面に沈んでいた状態で軟化が解けた為に足が動かなくなる。

『骨拔選手！上鳴選手の超高速を自らの個性を使って柔軟に対応しております』

「どうだ？いつもの十八番が使えないと流石にキツイんじゃないか？」

その言葉に電気はコメカミに血管が浮うぶがすぐに深呼吸して落ち着く。

「まだまだ」

電気は足に気を溜めて脱出する。

柔造は脱出したと同時に再び地面を軟化する。

「またさつきと同じ結果になるぞ」

「そつちこそ俺にこの手があるの忘れたか？」

電気は身体中に稲妻を走らせる。

バチバチと稲妻の音が大きくなっていく。

「無差別放電200万ボルト!!」

電気の大放電で武舞台に大量の稲妻が走る。

かなりの出力で光り、多数の観客はまともに武舞台を見れなくなる。

サングラスをかけてる人間は平然と見ていた。

主審のミッドナイトはあまりの大放電なのでセメントスに少し隙間のある壁を作つて貰い、隙間から武舞台を見ていた。

自身のコスチュームのマスクをサングラスタイプにして・・・プロである。

『上鳴選手、大量放電で武舞台を埋め尽くします! 凄い! これは一体町何時間分の電力だ!?!』

『ツッコむ処、そこ?』

司会者の言葉にクリリンが目を手で隠しながら喋る。

約5分間の大放電が終わり、武舞台から稲妻も消えて電気が膝に手を着ける。

「どうだ?」

電気は柔造が立っていた所を見る。

しかし、そこには誰も居なかった。

「ウエッ!?!」

すると地面から柔造が飛び出て、軟化を解除して地面の上に立つ。

肩で息をしていた。

「もう少し経ってたら、窒息する所だった」

「冗談だろ!？」

『何と!骨拔選手、上鳴選手の放電を地面に潜って避けていた。凄まじい肺活量です!』
そう、柔造は軟化した地面に潜って放電から身を守っていた。

軟化した地面は別に水になったわけではなくただ軟らかくなっただけなので、電気は通さない。

電気も別に電気を纏えるだけで光の中でも問題なく見える特性つきではない。

故に地面に潜られているのに気がつかなかった。

気を探れないの弊害が出ていた。

電気はまた突っ込んでいく。

柔造もすかさずに地面を軟化する。

さつきと同じ光景だが、大量に放電をした事により、バカになる弊害が出始めていた。

「このーこのーこのーこのーこのー!」

何回も殴りに掛かるが柔造は華麗に避けていた。

それは観客席から見れば電気が滑稽に見えるほどに避けていた。

「何だ?あの上鳴ってそこまで凄くねえのか?」

「いや、骨拔が上鳴を翻弄してるんだ！」

「すげえ！あの高速を抑えてやがる！」

「あの個性で!?!なんてセンスだ!?!」

骨拔柔造は天才ではない。

強い個性だけが生き残れるこの世界で柔造は生物以外を “軟化” できる個性を持った。

色々と制限があり、1つの物を軟化するともう1つの軟化が解除され、密集地帯や住宅街で地面を軟化して動けにくくしても軟化してない所を踏み場になれば意味がなくなる。

何ともピーキーな個性である。

しかし、柔造は柔軟であった。

一人の個性が例え弱くても使い方次第では何とかなると早い段階で至った。

故に彼は小学二年の時に雄英高校の推薦を取ると決めたのだ。

まず、最初に入試の実習試験を調べてすぐに無理だと判断した。雄英の入試のロボットの撃破は軟化で動けなくすれば合格出来るとは思えなかった。しかもネットで調べると撃破の他にまだ受験生に知らされていない謎のポイントもあることに気づいて、自身

の軟化では勝ちにくいと早々に悟った（実際には動けなくすればOKで人を助ければボーナスポイントありであるがそこまで詳しく書かれた物や情報はいくら国立とは言え載つてなかつた。）

故に個性の強弱があまり関係なかつた推薦のマラソンで入学を取るべく勉強と個性に慣れる事に心血を注いできた。

そして数少ない推薦枠を補欠で合格した。

一位の推薦合格者が土傑高校に行つた為である。

なけなしの首皮一枚繋がった文字通り柔造の実力で取つた合格である。

柔造はそれで満足はしていない。

誰かを助けるヒーローに憧れて来て成るために入学したので。

弱い個性も頭を使えばどうにかなると思つた。

“桃白白にやられるまでは”

桃白白に文字通り真正面から潰された。

地面を軟化したのが平然と動かれてやられた。

あの怪物を倒すために鍛えているものの一向に軟化で桃白白をどうにか出来るイメージは思い付かなかつた。

“皆に任せつきりでは意味がない。”

そんな時にこの雄英体育祭が始まった。

憧れの舞台である体育祭だが、桃白白をどうにか出来るイメージさえ浮かばない状態ではあまりやる気も起こらなかったが出久や電気を見て彼は発想を変えたのだ。

修業では全員で一緒に鍛えているために個人でどうなってるかは把握しにくかったが、出久と電気ならば必ずトーナメントに上がる。

トーナメントで一對一ならば自分の個性でどうやって桃白白に挑めるか分かるからだ。

普段の修業ではグラウンドβで追われまくり、組手を頼んでもその場の環境に左右されやすい軟化は全然歯が立たない。

しかし、この武舞台ならば違う。

この何もない武舞台ならばいけるとイメージできた。

現に今、電気が柔造に翻弄されている。

電気の速度は桃白白に匹敵する。

その電気をこும்翻弄できれば、柔造に取って手応えありだ。

おまけに今まで目立ってきた電気が相手だからこそ、この翻弄はこれからの進路でも目立つ一つの実績になる。下手なプロ以上の電気が相手ゆえにだ。

そう上鳴電気にとってこの骨抜柔造の個性「軟化」は少なくともこの何もない武舞

「！」

『完全に骨抜選手のペースですね。自分のペースにしないとこれは思うよりもアツサリやられますよ』

実況の痛い言葉が耳に入り、電気はまた放電をして柔造を放すが柔造はまた地面を潜って避ける。

「くそつたれ」

「降参するか？」

「何を!？」

電気は手に稲妻を溜めて柔造に放つがまたもや地面に潜って避ける。

電気の個性は纏うだけで放てる個性ではない。

手に稲妻を溜めると手全体から稲妻が出るがそれを電気は気で何とかしてるのだ。

気と個性は同等の存在である。

すなわち、電気はこのような電撃を放つ場合は必ず電撃が出る場所以外を気で抑えている。

簡単に言うと掌以外の手の部分に気をバリアみたいに張って放っているのだ。

雷龍かめはめ波になるとそれが全身になる。

全身から漏れないかと思われるが出口を失った電撃は体の唯一空いてる場所まで

行き、そこに大量に出るのだ。

しかし、この気と個性を大量に使う方法は出久の気の扱い方とはレベルが違う。

電気にとってこの電撃は一つでも出久の気弾三つ分の消費である。

故に電気は徒手空拳で戦うのだがそれを判断する頭が個性の使いすぎで機能してなかった。

対する柔造は冷静な頭で極めて淡々と避けていた。

「ヤバイ……」

電気は電撃を放つのを止めた。

もうこれ以上放つと完全にアホになり負けると確信したからだ。

柔造はそれを見逃さなかった。

地面を泳いで電気の元まで行き、電気を殴る。

電気は大きく仰け反るが倒れない。

(倒れて手まで拘束されてら起き上がれねえ)

(倒して顔以外全部埋めないとこいつは出てくる)

二人とも真逆の事を考えていた。

柔造は連打で電気を殴る。

電気も柔造の胸ぐらを掴み、御返しにと殴り返す。

連打と一撃。

いくら腰が入らない拳であっても電気の拳は弱いわけでない。

寧ろ柔造の拳よりも強い。

しかし、電気は逃れられないように胸を掴みながらに對して柔造は二本の連打。

起死回生の電撃もこれ以上はアホになるため出来ない。

電気は確信したこれ以上個性を使えば勝てるものも勝てなくなると・・・

『おおーっと！武舞台で殴り合いだ！凄まじい攻防が武舞台で繰り広げられてます！』

『ちよつと上鳴選手が不利ですね』

『うおおおー!!すげえ!!』

「やれ、骨抜!やっちゃまえ!!」

「負けるな上鳴!逆転しろ!」

「行けえ電気!勝てえ!」

「負けんな、骨抜!」

観客席から声援が両方に贈られ、そして二分後に拮抗は破られた。

「はあはあはあはあ・・・」

「くそ!やっぱ強い・・・」

この拮抗に勝ったのは電気だ。

柔造は二三歩後ろに下がる。

膝に手を着けて鳩尾を擦る。

いくら柔造が鍛えているとはいえ、相手は常人を越えて常識を粉碎する修業をやつて来た電気だ。

いくら片手で不馴れな足場とはいえ勝てない。

しかし、電気もダメージがないわけではない。

いつ倒れても可笑しくないのは電気の方だ。

(くそ、どうにかしてやらないと負ける!けどどうやって地面に足が着いたら動けなくなるし、かといって空中でも避けられる。せめて空中で動け・・・そうだ!)

柔造は電気から離れて地面の軟化を解除する。

いくら慣れてるとはいえ、体力を消耗するからだ。

この雄英体育祭に時間制限はないがこのままいくといずれ体力が尽きるのは電気の方が早い。

それは電気も良くわかつてる。

電気は最後の攻撃として柔造に突っ込む。

『上鳴選手! ともや骨拔選手に突っ込む! このままいくと最初の二の舞だ!』

『体力的に恐らく最後の攻撃でしょう』

柔造は地面を軟化する。

しかし、電気は飛び上がって避ける。

(こうなったら賭けだ！)

しかし、いくら電気が飛んで突っ込んで来ても自由度がない空中では避けやすい。

(よし、防御して終わりだ！)

すると電気はなんと足で気の衝撃波を放つ。

衝撃波の威力でスピードが加速される。

(嘘だろ!?)

(喰らえ！)

柔造が防御するよりも早く、電気は柔造の顔面を思いつき蹴った。

柔造は武舞台の上を転がる。

何とか場外になる手前で止まった。

電気はこの方法を悟空から学んだ。

正確に言うとう悟空が昔の天下一武道会でやった方法を聞いていたからやろうと決めたのだ。

なけなしの気を使って・・・

一発で出来たのは電気の今までの経験と下半身を徹底的に鍛えてきた亀仙流の教え

だからである。

この二つがなければ気は上手く足に伝わらなかつただろう。

『上鳴選手! 空中で加速し柔造選手に今までの鬱憤を晴らすかのよう蹴った!!』

『本人も足を見てる状態からぶつつけ本番のようです。これは予測できない』

電気は地面に立ち、足をブラブラさせてまだ行けるか確認する。

柔造もそんな電気を見ながら立ち上がる。

「よし! 反撃開始だ!!」

意気込む電気。

会場の熱狂も羽上がる。

そしてそれに対する柔造の答えは……

「参った!! 降参する!」

降参である。

会場の全ての存在がひっくり返った。

神々も含めてだ。

特に第十宇宙のひっくり返り方がド派手である。

「骨拔選手、降参! 上鳴選手の勝ち!」

『何と!?! 骨拔選手、まさかの降参です!! こそぞと云うときなの!』

『寧ろ、ここぞと云う時だからこそその降参だと思えます。あのままやれば骨抜選手は確実に場外に吹き飛ばされていたでしょう。何はともあれ降りる判断は間違つてないと思います』

柔造が武舞台から降りる。

確かに降参はしたが、柔造にとって別にこれ以上戦つても意味がないと思つた。

何故なら・・・

「骨抜つて野郎、強かつたな」

「ああ、あの上鳴を終始手玉にしてたからな」

「あの蹴りを喰らつてたぞ？」

「あんなラツキー避けれる方がむずいぞ」

「最後までやつて欲しかったがまあキツイな」

「それに俺達ヒーローは終わつて死んだら、意味がねえ。寧ろ、良く下がつた！」

会場の殆どが柔造に関する話題で持ちきりだ。

これ以上戦つて負けたらこの自分に関する話題の時間が無くなる。

全て電気の話題になってしまう。

なら、降参してもこの試合の殆どで電気相手を手玉にした事実を優先させるために降

参した。

それにあのままやってたら負けるのを柔造は確信していた。

そしたら、自分が負けたという事実が観客に残る。

人は敗北よりも勝利を記憶するからだ。

しかし、降参は時と場合によっては勝利以上に記憶に残る。

これから柔造達が進む道は危険極まる死と隣り合わせの道。

冷静に撤退出来る選択肢も頭も必要である。

現に会場の反応がその答えである。



各宇宙の神々や人間もこの柔造の判断を絶賛していた。

ベジータを含めてである。

確かに最後までやって欲しかったと心の底からほぼ全員が思っているが時には撤退も必要である。

ジレンは降参と言う事実に訝しげになったが、時には逃げて体勢を立て直すのも立派な戦略と考えて素直に柔造を称賛することにした。

それは他のヒーロー科の生徒も一緒だ。

勝己以外の全員が柔造のやり方を素直に褒めたり、感心していた。

出久に至つてた柔造の精神分析を事細かくノートに書くくらいである。

しかも一回戦や二回戦に比べて明らかに書く量もスピードも違った。

一人武舞台に立っている電気は会場の話題や人の反応、親友すらも勝つた自分に目もくれずに柔造の事を分析する事実に対して・・・

「チクシヨヨヨヨヨヨ!!!」

慟哭することしか出来なかつた。

柔造はゲート前でその慟哭を聞きながら笑う。

この試合、最後の電気の新技を除いて全て柔造の掌の上だつた。

その事に柔造は笑つた。

自画自賛しても良いくらいに会場全てに見せつける事が出来たのだ。

正に「戦いに負けて勝負に勝つた」のだ。

果たして電気が活躍する時はあるのだろうか？

激闘!緑谷出久VS切島鋭児郎

意気消沈状態で電気がヒーロー科の所に戻ってくる。

顔は疲れて寝れ気味で何よりも全身から漏れ出ている怒りの感情と敗北感溢れる黒いのが出ており、これ以上刺激したら何かに変身しそうなほどだ。

「か、上鳴君、大丈夫?」

「ああ、麗日か……ハハハ……」

(暗っ、コワッ!)

お茶子が電気に聞くがもの凄く暗い。

お茶子は周りを見るがほぼ全員が目を反らした。

この電気に関わるとめんどくさくなるのを直感したのだ。

「み、緑谷君……」

お茶子は電気の親友である出久に尋ねるが、出久はずっと柔造の分析に夢中だった。

「出久、俺、頑張ってたよな?」

「ごめん、電気。後にして」

電気の言葉をまともに聞かない出久。

よっぽど今は柔造の分析の方が優先のようだ。

電気はこの追撃にタライが頭に当たる衝撃を感じた。

「出久なんて大っ嫌いだ!!」

電気はそのまま走って何処かへ行った。

出久は突然の電気の行動にポカーンとなった。

「どうしたんだろう?」

「緑谷君、最低や・・・」

「えっ?」

お茶子はそのまま電気を追いかけていく。

出久はわけがわからないと言った表情でお茶子の後ろ姿を見る。

「僕、何かした?」

首を傾げてる出久に隣の響香は信じられない物を見るような目で見る。

「最低」

「えっ!?!何で!?!」

響香にまで言われて出久は本気で悩むのだった。



『続きまして第四回戦、選手の方は入場をお願いします!』

天哉と明が入場してくる。

『飯田天哉選手は騎馬戦で上鳴選手に負けず劣らずの超高速を見せてくださったあの現在活躍中の若手ヒーロー「インゲンウム」を兄に持つ今大会の期待の星です!』

『対する発目明選手は本大会の第一種目、第二種目で自らが製作したサポートアイテムを使いその性能の凄さをアピールしました。これは期待……あれ? 飯田選手もサポートアイテムを付けてるぞ? これは一体!』

『飯田選手、説明をお願いします』

「はい! このサポートアイテムは彼女のスポーツマンシップに心打たれたのです! 彼女はサポート科でありながらここまで来た以上対等だと対等に戦いたいと俺にアイテムを渡してきたのです! これを無下には出来ないと思っただからです!」

「本来、ヒーロー科はサポートアイテム禁止よ。使うなら申請と使わないといけない診断書があるわ……けど、青臭いのは好み! 許可するわ!」

「ありがとうございます!」

ミッドナイトの個人的な嗜好にあつた為、許可が降りる。

天哉は知らない。

明がそんなスポーツマンシップを大事にする人間ではない事を彼女の内心は「私のベイビーの宣伝にうってつけの人です。速くて効果を教えやすく、そしてバカ真面目：フフフ私のベイビーを良く見てくださいよ。サポート企業！」と一緒にチームを組んだ出久と踏影はそう思っている。

『それでは第四回戦始め!』

(因みに司会者は生徒の家族関係で有名処は押さえずみです)

〜10分後〜

明が非常に爽やかな笑顔を観客席に向けて武舞台から降りた。

「発目選手場外! 飯田選手の勝ち!」

『何と! 10分間の時間を全て自分のサポートアイテムの宣伝に使った! 凄まじい商魂です! 相手の飯田選手を利用して、スポーツマンシップの欠片もないく!!』

『心臓に毛が生えているのは間違いありませんね』

「騙したな!?!?」

見事に宣伝マンとしてマスコット兼モルモットにされた天哉は明に対して怒号するが、明はこれに対して笑顔を向ける。

「すみません、貴方を利用して貰いました!」

「嫌いだ、君!!」

またもや、勝者と敗者の感情が入れ替わった状態で試合は終わった。

超高速系は敗者になってしまいう星の下で生まれたのだろうか？

各宇宙の神々や人間はこの状況に大爆笑していた。

特にブルマの大笑いは凄かった。

試合中にお茶子に手を引かれながら帰って来た電気は天哉のこの状態に物凄く共感していた。

「わかる！わかるぞ、飯田!!」

「ちよつと、上鳴君。そんなに叫ばんといて」

「悪い、麗日!」

電気之魂の叫び声に隣で耳を押さえるお茶子。

二人とも妙に楽しそうである。

それを見た出久は悟った。

少なくとも電気好きな人は誰かわかったからだ。

「緑谷」

響香が出久を見て言う。

「耳郎さん?」

響香は電気とお茶子を見ながら、人差し指を自分の口に当てて、ウインクする。

出久はそれを見てウインクで返事をする。
好きな人にこうやられたら、からかったら偉い目にあうと直感したのだ。



『続きまして第五回戦、選手の方は入場をお願いします！』

焦凍と範太が武舞台に上がる。

『轟焦凍選手は第一種目、第二種目ともに目まぐるしい活躍をされており、あのNo.2ヒーローエンデヴァーのご子息であり、今大会の優勝候補です！』

『対する瀬呂範太選手は第一種目、第二種目でも確固たる実力とサポートを見せつけている実力派、これは名勝負が期待されます！』

『聞いたか轟？名勝負が期待されるってよ』

『瀬呂？』

『まあ勝てる気はしねえが負ける気はさらさらねえ』

『俺もだ』

『両者共に意気込む。』

互いに気合い十分。

『第五回戦、始め!』

範太の攻撃は早かった。

焦凍を自らのテープでぐるぐる巻きにしてそのまま場外に放り出そうとした。

『瀬呂選手、巧みな早業で轟選手を捉えた。これは早々に決着か?!』

後、少しで場外。

ジャイアントキリングに会場が沸き上がる。

しかし、焦凍は極めて冷静だった。

そして極めて冷静に……

巨大な氷山で範太を拘束した。

会場があまりの凄さに言葉を喪う。

各宇宙の神々や人間は少し感心した程度であるが、この星の人間からすればそんな物ですまないほどの強烈な凄さだ。

「せ……瀬呂君。動ける……?」

「む……無理です……身体中が……寒くて痛いツス」

「瀬呂君……戦闘不能!!」

『何と轟選手、圧倒的な火力で瀬呂選手を一瞬の内に凍らせてしまった!凄まじい氷で

す。かき氷何杯食べられるのでしょいか!？」

『これはやられたら辛いですね』

司会者の実況に言葉を喪っていた会場も話し声が出始める。

「悪い、やり過ぎた」

氷を溶かす焦凍。

会場は一気に範太へのドンマイコールが溢れる。



「轟君、強烈だな・・・」

出久は控え室でモニターを見ながらそう感じた。

(控え室にはサポート科とブルマが協同で作ったモニターがあります。主にサポート科はモニター関連、ブルマは撮影機材関連)

圧倒的な力で一気に優勢にした。

それは脅威的で驚異的だった。

次は自分の試合だから、再び集中を始める。

軽く体を解して、出久は武舞台に向かった。



『続きましては第六回戦!選手の方は入場をお願いします!』

出久と鋭児郎が武舞台の上上がる。

『緑谷出久選手は第一種目の強烈なパフォーマンス、そして第二種目ではブレインとして活躍しております!』

『切島鋭児郎選手は自身の硬化を上手く使い登ってきた実力者です!』

出久と鋭児郎が構える。

二人とも初っぱなから飛ばす気だ。

「行くよ、切島君・・・」

「こつちも行くぜ、緑谷・・・」

『それでは第六回戦始め!』

銅鑼の音が鳴ると同時に、出久は鋭児郎に突っ込んでいき、思いつき殴る。

ゴン!

とてつもなく鈍い音が響く。

出久の拳の先には鋭児郎の頭がある。

自身の硬化を使つて頭で拳を防いだのだ。

「御返しだ！」

今度は鋭児郎が出久を殴る。

ゴン！

こちらも負けず劣らずの鈍い音が響く。

鋭児郎の拳の先には出久の頭がある。

出久は気を使つて頭で拳を防いだのだ。

「俺の十八番を……取るな！」

鋭利児郎が大きく体を反らして出久のデコに目掛けて頭突きをする。

いくら気で耐えてるとは言え、これは効く。

「負ける……か！」

出久も負けずに頭突きによつて大きく体が反れたのを利用して鋭児郎のデコに目掛けて頭突きをやり返す。

鋭児郎は頭だけでなく体全身を硬化させて耐える。

「嘗めん……なあ！」

鋭児郎が出久の鳩尾を殴る。

いくら気で耐えてるとは言え、そこは人間の弱点。

今までにない痛みが襲う。

「嘗めてない……よー!」

出久も鋭児郎の鳩尾を殴る。

これはいくら硬化を持つていえるとは言え、鋭児郎はたまたらず後ろに二三步下がる。

出久も鋭児郎も互いに笑って気合いも熱もまだまだまだ上がっていく。

『これは序盤から凄まじい!殴り合い!それを制したのは緑谷選手だ!』

『まだ序盤ですから集中は両方とも途切れないでしょう。まずはペースを緑谷選手が奪ったと言う事ですな』

クリリンの解説は見事だった。

出久が鋭児郎相手にわざわざ殴り合いをしたのは電気と柔造の試合を見たからだ。

柔造は電気の十八番を崩してから手玉に取った。

現に電気は手玉に取られ続けていた。

それを出久は真似たのだ。

自分の硬化で殴り合いが十八番な鋭児郎はこの状況にシヨックを隠せていなかった。

(よし、これならいける)

出久は鋭児郎から離れて、両手に気弾を作る。

そして鋭児郎に目掛けて大量に気弾を放つ。

グミ撃ちと言われるヤツだ。

何発かは地面に潜らせる。

「ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ!!」

鋭児郎はその大量の気弾を諸に喰らう。

当たった衝撃で煙が大量に出て鋭児郎の姿が隠れてしまう。

出久は気が読めないので気弾を放つのを止めて様子を見る。

煙が晴れると鋭児郎が全身を硬化させてまま、ピンピンしていた。

「これじゃやっぱり駄目か・・・」

「全然効かねえな!」

鋭児郎が見栄を切ってる所を狙い。出久は地面に潜らせた操気弾を隙が出来たら鋭児郎の顎に全て当てる。

隙だらけの顎に効いたかと出久は思ったが、仰け反るだけで倒れなかった。

「うおおお!!」

鋭児郎が全身を硬化させて突っ込んでくる。

出久はこのまま付き合おうとペースが奪われると直感し、両手を合わせて気を溜める。

「豪龍・かめはめ波!!」

完全に決めにかかる。

硬化を持っていて対人しか取り柄のない個性なのにそれが全然出来なかった。故に鋭児郎は誓った。

今度は必ず皆を守ると折れないと、どんなに強烈な技が来ようともただ殺人術が来ようとも絶対に折れないと誓った。

彼は鍛えたそしてその成果が今出ているのだ。

「みーどーりーやー！」

かめはめ波の中を歩いてくる鋭児郎に出久は素でビビる。

と言うかビビらない方が可笑しいのだ。

その一瞬の恐怖が判断を鈍らせて、出久は鋭児郎に腕を掴まれて、肘を極められた。

「いのー！」

鋭児郎の鳩尾に気弾をゼロ距離で当てる出久。

しかし、鋭児郎にはさほど効いていなかった。

鋭児郎はお返しに出久の鳩尾を殴る。

先程に比べると明らかに攻撃力が増していた。

出久は耐えてお返しに鳩尾を殴るが先程よりも固かった。

気で力をあげているのに手が少し痺れる出久。

鋭児郎の個性の硬化はただ固くなるだけではない。

筋肉を自ら痛め付けたら更に強くなるというのと同じ原理で鋭児郎の硬化は打てば打つほど固くなる。

そう結果的にだが、かめはめ波は鋭児郎の硬化をただ単純に上げてしまったのだ。

腕を極められたせいで腕に出来る限りダメージがいかないようにしたために体が不安定になるのとそのせいで超接近戦になっているために蹴りを出してもベストな当たりが出来ないからえらく中途半端な状態になり、見事に封じられた。



ヒーロー科の観客席では鋭児郎の捨て身戦法に全員が息を飲んでいた。

「あの緑谷を完全に抑えてやがる」

「マジかよ」

「緑谷の弱点が超接近戦だなんて・・・」

「こんな盲点が・・・」

「盲点なんかじゃねえ!」

実の一言に全員が耳を傾ける。

「お前らはあの緑谷の攻撃の中を突っ走れるのかよ!あの気弾を耐えられるのかよ!」

実の一言に全員が黙った。

そうこれは硬化が使える鋭児郎だから出来た戦法なのだ。

これをするには出久の気弾を耐えて心を折っていかないといけない。それがどれ程危険なのか分かったのだ。

「俺には分かるんだ。ビビりな俺には・・・今、切島が振り絞ってるのは個性でも力でもねえ・・・勇氣だ」

超接近戦で派手な事をし続けているため、会場のボルテージが上がる。



出久は腕を極められて、鋭児郎の猛攻に対応出来なかった。

どれだけ殴っても綻びが出ないのだ。

恐らくはZ戦士達の修業でスタミナが上がった為だろう。

出久は猛攻をなんとか凌ぎながら考えた。

どうやれば勝てるかと言うことを・・・

自分でもこうなるとは思っていなかった。

まさか自分の弱点が超接近戦でそれが出来る鋭児郎が自分とは相性が最悪な

天敵だと言うことを今初めて理解した。

しかし、それは電気と柔造ほど相性が最悪なわけではない。

「うおおお!!!」

「今さら、顔面にやっただって拳を砕くだけだぜ!」

出久は確かに鋭児郎の顔の方を目掛けて拳を放つ。

しかし、捉えたのは鋭児郎の顔面ではなくて顎の先端である。

「薄皮一枚程度、出久の拳が鋭児郎に当たる。」

鋭児郎はなんてことない攻撃と判断して、出久を殴りに掛かるが、極めていた腕を離してしまい出久に凭れるように倒れていき、地面に膝を着ける。

出久はこの間に鋭児郎から離れる。

『これはどうした!?切島選手、優勢だったのにまさかの逆転が起こってしまった!解説のクリリンさん、お願いします!』

『顎の先端の薄皮一枚程度の部分を擦ったのでしよう』

『それはどういう事でしょうか?』

『切島選手は顔面に拳が来ると思った、けどそれは顎を掠めるだけになった。切島選手は完全に避けれたと思ったでしょう。しかし、その心の隅にこびりついてる油断に薄皮一枚の打撃は効くのです。その一撃は脳を高速に揺さぶらせて平衡感覚を奪います』

『なんとという技術!緑谷選手、このピンチを力ではなく技で回避しました!凄まじい達

人です!』

会場もこの逆転に熱狂で応える。

やられた鋭児郎は歯を食い縛って立ち上がる。

(くそ!大丈夫だと過信しちゃった!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!くそ!!)

鋭児郎は猛省するが誰だつて優勢になれば気が緩む。

特にそれがジャイアントキリングの真つ最中なら尚更である。

もしも出久が終始優勢だったら鋭児郎はこんなあるかないかわからない過信をすることはなかった。

ボクシングのカウンターのような物だ。

相手の攻撃に合わせて避けて体勢を立て直していない内に攻撃する。

鋭児郎は出久からカウンターを貰っただけだ。

ただし、超技巧的カウンターを貰った。

これは出久の腕の方が一枚上だと言うことだ。

出久は鋭児郎から離れる事が出来たが、膝を着いている鋭児郎を攻撃しない。

何故なら、出久にとつて接近戦は自信があったからだ。電気と亀仙人との修業で鍛えてきたから自信があった。それを真正面からやられてプライドが傷つかない人間はい

ない。

『緑谷選手、切島選手から離れて攻撃をしない!これはどういう事だ!』

『もう一回接近戦をやるつもりでしょう。奪われたペースを全て戻す気です』

この判断に会場は大盛り上がりだった。

各宇宙の神々や人間達も盛り上がり上がっていた。

第十宇宙なんて何処から取り出したのかビデオを神々と人間と天使の合わせて五人がそれぞれ回してる程だ。

鋭児郎が立ち上がり、出久がそれを見て構える。

「緑谷ありがとうな・・・待ってくれて・・・」

「切島君・・・君に勝つ!」

出久の意気込みに鋭児郎は笑う。

「上等だ。漢らしく決着を着けようじゃねえか!」

出久と鋭児郎が互いに走る。

そして武舞台の中央で殴り合う。

出久は気を使い体を強化して、鋭児郎は硬化を使って体を強化して殴り合う。

『武舞台中央で凄まじい殴り合いだ！力と力！個性と個性！漢と漢のぶつかり合いだ！！』

『これを制した方が確実に勝ちます』

会場の熱狂も最高になる。

各宇宙の神々も人間もこのシンプルで単純明快で簡潔な戦いに熱狂していた。

出久は鋭児郎の攻撃なんてお構いなしで殴りまくる。

どんだけ硬化して鋭くなった拳でもお構いなしだ。

ペースを握っていたり、出久がもつと達人ならダメージを貰わなく出来たかもしれない。

けど、ペースは奪われた。

下手に避けたら、二度と勝てなくなると出久は直感したのだ。

鋭児郎も出久の気を纏った攻撃もお構いなしで殴りまくる。そもそも避けられない。

寧ろ、ここでそれすらも耐えてペースを完全に奪い取る気だ。

五分以上の殴り合いが続き、どんどんと差が出てくる。

出久が「優勢」だ。

鋭児郎がどんどん後退していく。

『切島選手、この凄まじい殴り合いに負けるのか!? どんどん後退していく!』

『寧ろ、一人ともよくここまで拮抗した方ですよ』

理由は鋭児郎の個性に綻びが出始めたのだ。

体を全身力を入れ続けられないといけない鋭児郎の個性の性質上いつかはスタミナ切れを起こす。

Z戦士との修業で改善されたが、それは出久や電氣の無尽蔵と云えるスタミナの量に比べるとまだまだ少ない。

更に先程まで鋭児郎は出久の攻撃を超接近戦で抑えていたが今は超接近戦から離れたミドルレンジと呼ばれる距離の戦い、それは出久の攻撃を最大限に引き出す距離である。

「おおおおおおお!!!」

「うおおお!!!」

出久の猛攻にとうとう鋭児郎が腕をクロスする。

出久はすかさずに手に気弾を溜めて鋭児郎に向かって放つ。

ボロボロの状態から受けた鋭児郎は吹っ飛ばされていくが武舞台から落ちる直前、腕を硬化して無理やり勢いを殺し、立ち上がる。

体はへろへろで動けないがその目はまだ死んでなかった。

鋭児郎は足を硬化して地面に突き刺す。

完全に出久の猛攻に耐える気だ。

(この状態でかめはめ波を撃つても勝てない……絶対に耐える。なら悟空さんに教えて貰ったあの技しかない)

出久は両足に気を溜める。

鋭児郎は出久の行動に最大の警戒をする。

「切島君……この一撃で君を倒す！」

『緑谷選手、ここに来てKO宣言だ！一体何をするつもりだ!?』

(ここで逃げたら漢らしくねえ、迎え撃つて勝つ！)

「掛かってこい!!!」

鋭児郎の気迫を見て、出久は力の限り目一杯空へ飛んだ。

『これは緑谷選手、上空に飛んだ！豆粒に成る程です！凄まじい跳躍力!』

『この技は……』

クリリンは出久が何をするつもりなのかわかった。

その技を喰らった悟空を間近で見たことがあるからだ。

観客席の悟空、亀仙人も何をするかわかった。

司会者もクリリンの反応を見てわかった。

しかし、司会者は余分な情報を観客に与えて混乱しないようにその技の事を口にしな

い。

空高く飛んだ出久がやがて重力に従い落ちていく。
そのスピードがどんどん速くなってくる。

「天空×字拳南無阿弥陀仏!!!」

天空から落ちる速度で相手を10日間は眠らせる技を使う（この技は修業中に悟空達の昔話で出た）

対する鋭児郎も再び全身を硬化する。

そして両手を後ろに引く。

「打舞流叛魔!!!」

出久の技がぶつかると同時に鋭児郎も放つ。

両手で殴るシンプルな技だ。

力と力、技と技が激突する。

そして敗れたのは鋭児郎の方だ。

出久の南無阿弥陀仏が鋭児郎の首に決まり、倒れる。

出久は倒れたのを確認すると離れて武舞台の中央に戻る。

『緑谷選手の技が決まった！切島選手、起き上がることが出来ません！』
会場が沈黙する。

まだ勝つたと確定してないからだ。

全ては主審のミッドナイトの判断だ。

鋭児郎を見るが倒れたままだ。

「き「待つてくださいい！」・・・えっ？」

ミッドナイトの判断を出久が止めて指を指す。

指した方向をミッドナイトが見ると、鋭児郎が立っていたのだ。

「俺は倒れてねえ・・・」

鋭児郎はそう言いながら、仰向けに倒れた。

ミッドナイトは暫くその姿を見て今度こそ・・・

「切島選手、気絶！緑谷選手の勝ち!!」

勝敗を決めた。

『決まった〜！この漢と漢の熱い戦いを制したのは緑谷選手だ!!』

『あそこまでの真正面からのぶつかり合いは最高に見応えがありましたね』

会場が素晴らしい戦いをした二人を祝福する。

担架で運ばれて武舞台を降りる鋭児郎。

自分の足で武舞台を降りる出久。

二人とも全力を出し、敗けないために死力を尽くした。
二人の顔は非常に満足していた。

最速王決定戦！そして轟家大作戦！

出久と鋭児郎の熱い漢の鬪いが終わり、出久は鋭児郎よりも先に観客席に戻ってきた。

「お疲れ様」

「いやあ、凄かったなあ」

「後、一歩で切島にやられる所だったじゃねえか」

それぞれが思ったことを口にする。

出久は一人違う方向を見てる電気の方に行く。

「電気、見てくれたんだね」

「.....」

電気は出久を無視する。

そりゃそうだ。

電気はさつき出久に同じ事をされたのだ。

これで謝りもせずと言われたら誰だってキレる。

出久はとりあえず自分の席に座る。

「緑谷」

「どうしたの耳郎さん?」

「あのノート、上鳴が持ってる」

「えっ?」

出久は試合が始まる前に自分の席の下に置いといた。

ヒーロー科で取る生徒はいないし、見られても問題ないかと思つた趣味のノートだからだ。

まあ電気に取られていたのは予想外で席の下を見るが確かにノートは無かつた。

「さっさと謝りなよ・・・怒らせただから」

出久はさっきの電気に対する自分の行いを省みる。

確かに最低である。

いくら衝撃を受けてノートを取るのに忙しくてもそれが人を無視する理由にはならない。

出久はもう一回電気の近くに行く。

「電気・・・ノート持ってきてくれたんだ」

「・・・・・・・・・・」

「ヤっつきはめん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「僕の本当に悪い癖だね・・・・ごめん」

「分かつてるなら良いよ」

電気はそのまま振り向かず、ノートを出久に差し出す。

出久はノートを見る。

中をなんとなく見ると自分と鋭児郎の試合の事が細かく載ってあった。

「電気・・・・これ」

「下手だけどな・・・・お前、絶対書くし」

そう電気は出久のノートに出久の試合の事を書いていたのだ。

勝手にノートを書かれた事に対する怒りと云うものは存在しなかった。怒らせたのに頼んでないのにやってくれた電気の優しさに嬉しくなった。

出久は電気にもう一回向き合う。

「電気、ありがとう」

「もうするなよ？俺だつて落ち込むからな」

「うん」

電気は出久に手を伸ばす。

出久は電気の手を取る。

そして電気から出久にお仕置きの電気が流れる。
急な電撃に出久は痺れる。

手を離し、電気の顔を見る出久。

その顔は見事にしてやったりの顔だった。

「あー、スツキリした!」

「己、電気〜」

「天誅だ!」

「この場合は人誅だよ!」

恨み言を言う出久。

電気の顔は笑ってる。

憎たらしくなるが、それを見ていると出久も笑い出す。

二人揃って笑う。

変な関係である。

周りも変な二人だと思う。

出久は立ち上がる。

「電気、こんな事に個性使っていないの? バテない?」

「亀仙豆が試合前に食べれるから問題なしだ」

「んじや、次の試合は期待してるね」

「おう！驚かせてやる」

「飯田君に速さで敗けたら良いところ無しだしね」

「んだと、このやろう！」

ヘッドロックを笑いながらかける電気。

出久も笑う。

この二人にはこの関係が一番である。

そして次の試合が始まる前に出久も電気も席に座った。



あれから二試合が終わった。

鉄哲徹鐵と常闇踏影の試合と麗日お茶子と八百万百の試合は面白くないほど普通に終わった。

金属化した徹鐵を踏影の黒影が近づくと前に連打で武舞台の外にぶつ飛ばし、お茶子と

百の試合に関して女子同士の闘いとあってエロ魔人の三人がエロを求めたが、そんな展開なんてあるわけなく、乙戦士によって鍛えられたお茶子と百の戦いは古いカンフー映画バりに中々拮抗して百が勝った。

そして第九回戦 芦戸三奈と心操人使の闘いが始まろうとしていた。

『続きまして第九回戦が始まります! 選手の方は入場をお願いします!』

三奈と人使が武舞台の上に立つ。

『心操選手は先程の試合、見事に爆豪選手を退いて勝ち上がった実力者!!』

「けっ!」

司会者の実況に勝己はイライラしていた。

『対する芦戸選手は先程の試合で青山選手を翻弄して勝ち上がった実力者!! これは今までの試合に負けず劣らず凄い闘いが期待できます!!』

互いに互いを見る。

『それでは第九回戦始め!』

銅鑼の音が鳴り響く。

三奈は構える。

人使が何をやって来るかわからないからだ。

八人に絞られてからの第九回戦はそれぞれの個性が相手にばれてる。

初見殺しの個性になればなるほどどんどん不利になってくる。

しかし、これで油断するほど三奈は馬鹿ではない。

ぶつちやけ言つてもしも煽られて全力で受け答えをしないように頑張るが、それを貫ける自信なんてないが、何を言つてくるかわからない人間に突つ込むほど能天気なわけではない。特に勝己をやられた後では尚更だ。

暫く、睨み合う。

「随分とヒーロー科は拍子抜けも良いところだな」

人使が挑発する。

三奈は怒りを声に出さずに行動で表す。

突つ込んで行き、鳩尾を殴る。

そしてくの字に折れ曲がつた人使の頬を殴る。

乙戦士に鍛えられた影響で少し飛ぶ人使。

しかし、すぐに立ち上がる。

「こんなもんか？へっぽこも良いところだな。さっきのあの切島つて言うバカの拳よりはキツそうだな」

三奈が人使の所まで行き、殴りまくる。

もうボコボコと言えるくらいに同中出身の三奈に取つて鋭児郎が頑張っていたの

は知っているその拳が強く重いのも知っている。

それをこうも言われたら怒りが出てくる。

(人選ミスったか?)

人使が鋭児郎をネタにしたのは良い試合をしたからだ。それどころか戦闘向きで漢らしい鋭児郎は良くも悪くも自分の個性のコンプレックスを付いていた為にネタにしようとして、バカにすれば怒りで声が出るだろと思っただが、ここまで強烈に無言になるとは思っていなかった。

『芦戸選手、恐ろしい猛攻だ!心操選手、手が出せません!!』

『女性を怒らすと怖いのは世界の真理ですね』

三奈の飛び蹴りが人使の顔面を捉える。

吹き飛ばされるがなんとか武舞台にしがみついて立ち上がる。

顔は口からも鼻からも血が出ているだけでなく、目には青タンが出来て、片方の目が腫れ上がった瞼によって隠れていた。

三奈は最後の押しとして突っ込む。

地面に酸をかけてスピードを上げて人使に向かう。

絶対にどんだけ煽られてもクラスメイトを罵倒されても喋らないと心に誓って、互いの声が普通に話しても聞こえる距離になる。

「おんたカワイイね」

「?!?!?!」

「人使は煽る事を止めて口説き始めた。」

「流石の三奈も煽りや罵倒には堪えようと誓っても口説かれるとは予想外も良いところだ。突っ込んで行く足が止まり、顔が赤くなる。」

「いや、マジでカワイイよ。ほらその桃のような肌に黒真珠みたいな綺麗な目、それに行動も天真爛漫で元気があって」

三奈は顔を赤くなっているのが見られないように隠す。

「ねえ、今度お茶しない?」

「ちよつと今試合中!.....」

(上手く行くもんだな)

三奈は受け答えをってしまった為に洗脳に掛かってしまう。

『あー!! 芦戸選手、洗脳に掛かってしまった。心操選手まさかまさかの試合中に口説くとはなんと豪胆な作戦を仕掛けたのか! 正直に言いますが私は今、心操選手の個性が非常に羨ましいです!』

三奈は何も油断はしてなかった。

人使が一步上だったのと自分がナンパに対して耐性が無かったのが運のツキである。

「そのまま、場外へ出る」

三奈は場外へ出る。

「芦戸選手、場外!心操選手の勝ち!!」

会場がまたもや困惑する。

そりやまあこんな勝ち方は古今東西中々ない。

相手にナンパして勝つ方法を実践で試した奴がいたら歴史に名を残すレベルである。

(解除)

「へ?・・・ああ?!ええええ?!しまった!!」

頭を押さえて地団駄する三奈。

人使は三奈に近づく。

「おい」

人使の言葉に三奈は嫌な顔をしながら向く。

「悪かったな色々と言って、これでしかお前らに勝てねえんだ」

歯切れ悪そうに言う人使。

三奈はその姿に拍子抜けする。

あんなに憎たらしかったのが薄れていった。

「今度は勝つ!」

人使に指差して宣言する三奈。

人使はその言葉に何も言わずに武舞台を去りながら手を振った。



三奈がぶっ飛んだやられ方をしたのでまたもや困惑していた。しかも今回は勝己の時と全く同じ展開なのに全く違う勝ちかたをしたために困惑していた。

ヒーロー科の女性陣の人使に対する評価がうなぎ登りではなくてエンジェルフォー
ル並みの深さに下がっていった。

出久がノートに三奈の弱点としてナンパを含めたお世辞と書いているのを隣で見
いた響香は素で引いていた。

エロ魔人の実と亀仙人はよからぬ事を考える前に気絶させられた。

そして女好きである電気は人使の個性ならナンパしやすいと羨ましがり、隣にいたお茶子が面白く無きそうな顔をして電気を見てた。



天哉は先程の試合を控え室で見ている。

そして次は自分と電気との最速王決定戦、意気込みをする。
すると天哉の携帯がなる。

それは敬愛するヒーローインゲニウムである兄の天晴からだ。

「もしもし、兄さん?どうしたんだ?まだ勤務中の筈だ?」

「何だ?兄が大事な弟に電話をしたらいけないのか?」

「そういう事ではない!勤務中に私事を挟むなど持つての他だ!働いてくれるサイドキックの方や兄さんのファンの皆様に対する酷い裏切り行為だ!」

「ハハハ、天哉は相変わらず真面目だな。でどうだ?次の試合、勝てそうか?」

天晴の言葉に天哉は黙る。

「どうした?」

「上鳴君の速度は僕より速い。全ての実力で敵わない」

「珍しく弱気だな」

「彼は本当に凄い人なんだ。僕なんかとは比べるのも烏滸がましい位に」

天哉の弱気に天晴は電話越しで笑う。

「ハハハ、良かったよ。上手く雄英に揉まれてるな」

「兄さん？」

「挑め挑め！雄英の教訓は『P U L S U L T R A 』だろ？」

「兄さん……ああ、挑戦してくる！」

「そうか、急にかけて悪かったな」

「兄さんも仕事頑張ってる」

天晴はそう言って電話を切った。

天哉は軽く屈伸をして、武舞台に向かうために部屋を出た。



天晴は体を解しながら、手配中の敵『ステイン』の搜索を続ける。

ステインは犯行を路地裏で人知れずやっている。

その情報を元にしらみ潰しに路地裏をサイドキック達と協力して探していた。

そしていくつかの路地裏を確認してる時に見つけた。

刀を背負いナイフを持った敵「ステイン」を見つけた。

天晴は急いでステインの前に入る。

「見つけたぞ、ヒーロー殺し「ステイン」」

「インゲンウムか・・・お前も偽物だ」

天晴がいざステインに向かい攻撃するがステインは避けてすれ違い様に刀で天晴の腹を斬る。

天晴も負けずに避けるが反応が少し遅れて掠り傷を負う。

天晴が再度、突っ込んでいくが届く前にステインは刀に着いた天晴の血を舐める。

すると一切の自由を奪われて天晴は動けなくなる。

「これは!？」

これがステインの個性の「凝血」。

相手の血を舐めると自由を奪う個性である。

「じゃあな、偽物・・・」

ステインが動けない天晴に近づき、天晴に向けて刀を抜くと何処からか拍手が聴こえてくる。

ステインは天晴を刺さずにその拍手の元を見る。

そこにはフリーザがいた。

「誰だ、貴様は？」

「私の名前はフリーザ。ヒーロー殺しさん、ビジネスの話をしましょう。小物は相手をせずに」

フリーザは動けない天晴に近づき、思いつきり蹴る。

天晴は路地裏から飛ばされて外の道路に出された。

多くの通行人やサイドキック達が動けなくなった天晴に近づく。

天晴は動けないながらも路地裏を見るがそこには誰も居なかった。



『さあ、続きまして第十回戦、選手の方は入場をお願いいたします！』

電気と天哉が武舞台の上に立つ。

『上鳴選手は持ち前の超高速でトーナメントまで勝ち上がり、先程の試合では新技を編み出した今大会の超新星です！』

『対する飯田選手も高速でこのトーナメントを勝ち上がり、第二種目で超高速を見せた

「最速候補!この戦いで今大会の最速が決まります!」

会場も熱狂する。

誰だつてシンプルな闘いが見たいのだ。

最速VS最速。

速い方が勝つ、一瞬の気の緩みが命取りになる真剣勝負。

「飯田、俺の高速の対策したか?」

「いや、上鳴君は?」

「まさか」

「だろうな」

二人とも直感で理解していた。

この相手に対策は立てようがない。

何故なら二人とも闘い方が似てるからだ。

高速で動いて相手を一瞬で倒すやり方は対策を立てにくい。相手も同じなら尚更だ。

故に考えていることは一つ、相手よりも早く速く動いてノックアウトさせるのみ。

『第十回戦、始め!』

天哉は開始と同時にレシプロを使い一気に詰め寄る。

10秒以内に終わらせないとどうやっても天哉には勝ち目がない。

短期決戦である。

しかし、それを狙っていたのは天哉だけでなかった。

電気も最高速度で突っ込んでいく。

天哉は電気に蹴りを入れる為に足を引くが電気はそのまま飛び蹴りを天哉の鳩尾に放つ。

何処のライダーだと見間違えんばかりのキックを放つ電気。

電気は先程の試合で物のいいように手玉に取られた。

それ故に電気は心から誓ったのだ。

『度肝を抜く』と開始早々の最速蹴り。

天哉の体はそのまま場外へ吹っ飛ばされた。

そして会場の壁に激突した。

この間、僅か5秒である。

「い、飯田選手、場外！上鳴選手の勝ち!!」

ミッドナイトの判定が会場に響き渡る。

そして大熱狂が会場にあふれでる。

『凄い！もの凄い速さを見せつけた上鳴選手！速きこと風の如しいや、雷の如しだ』

『飯田選手も悪くはありませんでしたが、上鳴選手の方が地力は圧倒的に上でした』

天哉は負けた事に悔しさで一杯になるが、これもいい勉強になったと思い、会場を後にした。

控え室に戻ると天哉の携帯がなる。

母親からだった。

「もしもし母さん、試合に負けてしまい申し訳ありませんでした」

「そんな事良いのよ。それより天晴が・・・」

「兄さん?」

天哉の頭に天晴がまさか敵にやられて重傷なのかと言う最悪の展開が過る。

「兄さんに何か?」

「代わるわね」

携帯越しに母親が天晴に携帯を貸すのがわかる。

「天哉・・・負けちまったよ」

「兄さん・・・大丈夫なのか?」

「ああ、医者からは二、三日安静って言われてるが大丈夫だ。手足を折ったわけじゃない・・・天哉、折角お前の憧れなのに負けて悪いな」

天晴の言葉は試合前に比べると弱々しかった。

それほど天晴にとってショックだったのだ。

あんなにも呆気なくやられた事がショックなのだ。

「兄さん、僕も負けてしまった・・・たったの5秒しか持たなかった。」

「そうか・・・」

「ここで言わせてくれ・・・僕は強くなる。強くなっていつか兄さんに最高の誇りだつて思えるように強くなる！最高のヒーローになる！」

天哉は静かに泣きながら、兄にそう宣言する。

「天哉、俺も強くなる。お前に最高のヒーローって胸はって誇れるようなヒーローになる！」

天晴の誓い。

天哉は涙を拭いて、元気よく答える。

ここからこの兄弟のヒーローの物語が始まる。



病院で焦凍の母親である冷は焦凍からの手紙を見ていた。

封はまだ開けていない。

焦凍は会いに来てくれたあの日以降、休日になるとほぼ必ず来てくれるようになった

た。

冷としては非常に嬉しかったが、非常に申し訳なかった。

焦凍の火傷は冷が負わせた。

気にしてないと焦凍は言ったし、冷は謝り共に前に向いていくと決めた。

互いに前に進めると思った。

しかし、焦凍は自分の個性の恐怖がまだ残っていた。

何故ならその炎は他でもない母親の人生を狂わせた炎だからだ。そのせいで焦凍が炎を使おうとすると母親の怯えた顔を思い出すようになった。

自分の個性。

しかし、それは「個性の呪い」を受けた個性である。

焦凍は自分の問題に冷を捲き込めず、自分の今の思いを手紙に書いた。

今、冷が持つてるのがその手紙である。

しかし、冷には開けられなかった。

口下手な焦凍がこの手紙を渡すときに、

「これ書いたから読んでくれ」

とだけ言つて病室から出たのだ。

休日に来るといつも学校での話だったり、自分の趣味だつたりを喋つてほとんど話す

内容が無いからだ。

しいてあるとすれば焦凍が母親を恨んでいるかどうかの話だけある。

最初に来た時に解消出来たと思つたが、冷にしてみればまだまだ謝り足りないのだ。

中身を言わずに渡された手紙に何が書いてあるのだろう。

自身に対する怨みか？

それならまだ良い。

けど、もしも生きてる事に苦しんでたら、どうしたら良い？

そしたら、また辛くなる。

焦凍にとつても・・・自分も。

冷はそんな事を考えていた。

(焦凍、本当に私を恨んでないのかな？・・・けど、あんな事した私はもう母親じゃない

よね)

「お母さん、どうしたの？」

焦凍の姉の冬美が病室に入ってくる。

冬美が焦凍の開けられてない手紙を見る。

「お母さん、まだ開けられてなかつたの？」

「うん・・・怖くて・・・焦凍が恨んでたらどうしよう？」

冬美は冷から手紙を取る。

「冬美?」

「お母さん大丈夫だよ。焦凍は恨んでないから!」

「でも・・・あんな酷いこと・・・」

「お母さんが開けられないなら私が開ける」

冬美はそう言つて手紙の封を破り、冷に渡した。

「それじゃ、私はちよつと下の自販機で飲み物買つてくるから、読んであげてね」

冬美はそう言つて部屋を出る。

冷は震える手で手紙を読み始める。

そこには恨み言なんて何一つ書いてなかった。

『お母さんへ』

今日は手紙を書いたのは、お母さんに相談したい事があったからです。内緒にして冬姉や夏兄にも話してないけど、お母さんに会いに行つた前の日、俺、死にかけてんだ。物凄く強い敵が授業中に現れて先生もクラスメイトも殺しかけた。それから色々あつて怪我也問題なく治つた。けどその時に後悔したのは俺、母さんの個性だけ使つてあいつの力使わなかつた。もしもあの時使つたら守れたのかなつて本当に思った。母さんに会いに行つたのはもう会えなくなると本気で思ったから、会いに行つた。今はいつ

か会えなくなるまで一生懸命やってるよ。先生もクラスメイトも優しいし今の生活は楽しい。キツイ事もあるけどそれでも楽しいんだ。

お母さんは俺の火傷で本当に辛いと思う。

けど、俺はその事で恨んでないし憎んでいない。

冬姉からお母さんの資格がないって聞いた。

俺にとってお母さんはお母さんだよ。

もう俺は大丈夫だから、だからお母さんが大丈夫だったら病院のテレビで俺を見て欲しい。絶対に優勝するから、そしたらもう一度、お母さんになつてくれますか?』

冷は読みながら泣いた。

恨んでなかった。

焦凍は立ち上がろうとしてた。

臆病なのは自分だけだった。

冷は直ぐ様、病院服から私服に着替える。

棚から冬美が持つて来てくれた服に着替える。

そんな時、冬美が病室に戻つてくる。

「お母さん、何してるの?」

「冬美、お願いがあるの」

冷は冬美に近づき、手を握る。

いつもと違う状況に冬美は買ってきた飲み物を置く。

「私を雄英に連れてつてお願い」

震えてる母親の手。

冬美は優しく握り返す。

いつも優しくいつも甘やかしてくれた母親の我が儘。

それを断る選択肢は冬美にはなかった。

病院には多大な迷惑を掛けるが、火消しはお父さんに任せようと心に決める。

「うん、行こう。雄英に！」

今、轟家一世一代の逃亡が始まる。

轟け熱き焰、轟焦凍VS緑谷出久！

電気と天哉の高速戦が終わり、出久と焦凍がストレッチをしながら、司会者の合図を待つ。

(絶対に優勝するんだ)

焦凍はこの大会で勝ち上がる為に戦う。誰もない自分のために優勝する。そしてもう「大丈夫」だからと声を上げて言うため、自分の左手を見る焦凍。未だに炎は上手く出てこない。攻撃をしようとすると絶対に出てこない。自分の氷を使い続けて低温になった時の調整ならば、出来るが攻撃の時は出なかった。

『続きまして第十一回戦が始まります、選手の方は入場をお願いします！』

焦凍は武舞台上に上がる。

『轟選手は第五回戦で巨大な氷を出現させた個性だけでなく、判断の素早さも我々に見せつけて貰いました！』

『対する緑谷選手は第六回戦で切島選手と熱い試合をしてくださり、近接戦では今大会最強候補です！』

焦凍と出久が武舞台上に上がり、司会の声を聴きながら構える。互いに油断も隙もな

かった。

「轟君……」

「緑谷、さつきは本当にすまない。手加「すると思う?」……良かった、安心したよ」

『第十一回戦、始め!』

出久と焦凍の戦いが始まる。



く約20分前

冷が私服のまま病室で座っていた。

すると冬美が病室に入ってくる。

「冬美、出来そう?」

「うん、夏が今、車を飛ばして来てるからお母さん、出よう」

「うん」

冬美は帽子を取り出して冷に渡す。

冷は帽子を深く被る。

春用のコートに帽子にマスクを着用した状態が出る。

「よし、お母さん。出よう」

「うん」

冬美は冷を連れて病室を出る。

そして受付の横を通って出る。

忙しかったのか受付には一人しか居らずその人は別の作業で忙しそうにしていた為、これを機にせつせとエレベーター前に行き、エレベーターに乗る。

エレベーターで、冷は帽子とマスクを取ろうとする。

「お母さん、ダメだよ」

「ごめん、ちよつと暑くて」

「車に乗ったら脱いでいいから今は我慢して」

「わかった」

携帯のバイブが鳴り、冬美は携帯を見る。

弟の夏雄からだ。

車を駐車場に停めたと言うメールだった。

「お母さん、夏から駐車場に車を停めたって一階に着いたら急いで駐車場まで行こう」

「うん」

エレベーターが一階に着く前に停まる。

扉が開き、中に入って来たのは冷の担当をしてくれてる先生だった。
冬美と冷に緊張が走る。

「こんにちは轟さん、もうお帰りですか?」

「は、はい、あの母を宜しくお願ひします」

「任せてください……そう言えば弟さんは雄英生でしたね。これから体育祭を見に行くのですか?」

「そうです」

「そうでしたか」

先生は冷を一目見る。

冷は体を少し縮める。

エレベーター内に緊張が走る。

するとエレベーターが止まり、扉が開いて先生が降りる。

「轟さん、ではまた後日。それと息子さんの試合を楽しんできて下さい」

先生はそう言って去っていった。

見逃した理由は冷が病室から出ようとした事が一切なく、10年も続くといつそのこと出した方が良くないと思いやったの事。後日、クビを言い渡された。

「バレた？」

「お母さん、急ごう！」

エレベーターが一階に着き、二人は病院を出て駐車場に向かう。そして、夏雄が乗ってる車に乗り込む。

冬美は助手席に冷は後ろに乗る。

「夏、早く出して！バレた！」

「ええ!?マジかよ！」

「ごめんね、夏君……」

「母さんは謝らなくて良いから、急いで焦凍の所に行こう！」

車をバックさせて病院の敷地を出る。

冷と冬美は安堵の息をする。

「二人ともありがとう」

「良いよ、お母さん」

「母さんの頼みなら断れないよ……でも会場にはあいつもいるよ。姉ちゃん、どうする？」

冬美は頭を抱えた。

父親のエンデヴァーがいることを完全に忘れてのだ。

見つけたら冷に何をするか分かったものではない。

「冬美、私は、大丈夫……」

「お母さん、無理は止めて」

冷が虚勢をはっていたのを冬美は一発でわかった。

彼女にとってエンデヴァーは恐怖でしかないのだ。

エンデヴァーが冷を苦しめた結果が焦凍の火傷なのだ。

「母さん、病院に戻つ」「良いから行つて」……でも「お願い、焦凍が待つてるの」……
わかった」

「夏、どうするの?」

「あいつが来たら、殴つて近づかせない」

夏雄の言葉に二人の顔が青くなる。

「ねえ、そんなのダメ!」

「姉ちゃんは無言で。殴つても止まりそうにないならこうするしかねえじゃん」

「夏君、そんなのダメ、夏君が危険よ」

「母さん……焦凍の活躍が見たいんだろ?」

「それは……」

「だったら、こうするしかない。上手く行きさ。あいつは俺には関心ねえから、そんなに

しないよ」

「わかった」

「お母さん!?!」

「夏君、ありがとう」

冷の言葉に夏雄は頬を緩めます。

冬美は助手席で頭を更に悩ませるがこうなると夏雄が止まらないのは知っている。

このまま行くしかないかと腹を括った。

折角の母親からの貴重な我が儘を叶えられなくなる方がもつと嫌だからだ。

こうして冷達は雄英に向かった。



冷の病院逃亡から10分後。

エンデヴァーは非常に嬉しく思いながら、トイレを出る。自慢の最高の息子が遂に炎

の個性を使うとこの前、冬美からの会話で分かったからだ。第一種目でも第二種目でも使っていないし、トーナメントでもまだ出てないが次は必ず使う。

何故なら相手が出久だからだ。

エンデヴァーは今日初めて出久を見たが一目でわかった強いと直感した。

氷だけじゃ天地が引っくり返っても勝てない。

焦凍は必ず炎を使う。

オールマイトを超える使命を背負っている焦凍のデモンストレーションには最高の相手だ。

こんなに清々しくなったのは久しぶりだ。今ならキャラではないがスキップをするほど嬉しい。

そんな頭が花畑になってるエンデヴァーの携帯になる。何だと思い、着信画面を見ると病院からでエンデヴァーは嫌々でた。

入院してる冷に何かあると面倒だからだ。

「もしもし、轟ですが？」

「すみません、奥様の轟冷さんが消えました」

「消えっ!?!」

「今、搜索中ですが心当たりはありま・・・」

エンデヴァーは携帯をすぐに切り、冬美に掛けるが出ない。冬美は病院を出た瞬間から携帯の電源を切ったのだ。理由は冷を焦凍の所へ送り届けるのに邪魔な物は全部切ったのだ。学校からの連絡は無いことを祈りながらではあるが。

エンデヴァーは焦凍の試合か冷を探すかどちらか迷った挙げ句、冷を探しに会場を出た。

●●●
（約10分後）

『第十一回戦、始め！』

銅鑼の音が鳴り、出久と焦凍は構える。

焦凍はすぐに氷で出久を捉えようとする。出久も負けずにかめはめ波を撃ち、氷を粉砕する。

『これは序盤から凄い火力同士の戦いだ!』

『遠距離戦は今のところ、互角ですね』

出久は焦凍に突っ込む。

焦凍は来る前に氷の壁を作る。

出久の拳が氷の壁にぶつかり、罅が入るが壊れない。

焦凍は牽制が上手くいったと思ったが下から気弾が出て来て、焦凍の顎をかち上げる。

出久の操気弾だ。

『あーっと、これはどういう事だ!?!』

『緑谷選手のエネルギー弾が地面を回って轟選手の顎に炸裂しました』

すると氷の壁が出久の拳によって破壊される。

『緑谷選手、氷の壁を力づくで壊した!』

『凄い、ゴリ押しですね』

出久は焦凍の顔面に拳を放つ。

焦凍は炎で牽制しようとするが、出せない。

拳が顔面に入り、焦凍は後ろにぶっ飛ぶ。

ゴロゴロと転がり続けるが、氷を作って勢いを殺す。

氷の使いすぎで体が冷えてきた為に炎で暖める。

こう言う事なら全然問題ないのだが、攻撃をしようとするのと全く出てこなくなる。体の問題ではない、精神的な問題だ。

氷は冷の個性でそこには愛情がある。しかし、炎はエンデヴァアの個性で一方通行な愛情はあるが、焦凍にとっては憎しみしかない。

頭では受け入れているが、心がまだ受け入れていない。受け入れていないと云うよりも恐怖している。その炎を使おうとすると焦凍の脳裏に過るのは冷の怯えた顔と煮え湯をかけた時の絶望の表情。その二つが焦凍の中で消えない限り、炎が使えることは永遠にない。

(くそーなんで炎が出ねえんだよ!?)

焦凍は心で自分に毒づきながら出久を見るともう目の前に迫って拳を引いていた。そして拳を放つ。焦凍は当たる寸前のスレスレで顔を横にずらして避ける。出久は避けられた事に特に驚く様子もなく、避けてがら空きになつて焦凍の脇腹を殴る。

横にふっ飛ぶがまた氷をはって止まる。

素早く立ち上がり、氷で出久を捕まえようとするが出久は気弾を放ち、全力で斜めに動きながら、焦凍の氷を相殺しつつ向かっていく。

焦凍は一先ず、後ろではなく、横に逃げる。

正方形のデカイ武舞台でこじんまりとした逃げではすぐに退路を潰されて追い詰められるからだ。

しかし、出久はその動きに対応して焦凍を追いかける。焦凍は氷で攻撃する。対する出久も操気弾を放ち、氷を粉碎しながら焦凍の鳩尾に入る。

そして出久がすかさずに殴り、また吹き飛ばす。

今度は氷で止まる事が出来ずにゴロゴロと転がるがやがて勢いが落ちて武舞台の端で止まる。

『轟選手、緑谷選手の猛攻を凌げません!』

『緑谷選手が有利ですね』

出久は追撃をせずに武舞台の中央に立つ。

今なら焦凍を追撃すれば確実に落とせるがやらない。何故なら出久は正真正銘の焦凍の全力とぶつかりたいのだ。家族の問題に首を突っ込む気はないが、個性を上手く出せない焦凍を出久はなんとかしたいのだ。

故に出久は武舞台で焦凍が立ち上がるのを待つ。この行動が手を抜いている様に見えるか、それとも全力の戦いをする為の行為と見るかは人によって違う。

各宇宙の神々や戦士達や電気は全力でやるための行為として判断しヒーロー科の面々は手を抜いたのか?と見る。

『これは緑谷選手、一体どういう事だ!? 武舞台中央で止まったぞ!?』

『手を抜いてるかそれとも何かを待ってるか・・判断するには難しいですね』

司会者やクリリンも恐らくは全力の為の待ちだと思っただと二人とも実況と解説と云う仕事をしているために自身の考えを押し付けるのではなく、両方の解釈を出さずだけに止めた。

両方とも間違っていない。

間違っていないがやられてる方の怒りは上がる。

焦凍は立ち上がり、怒気の籠った目を見る。

「緑谷・・・今の落とせただろ、緑谷!」

「落とせたね・・・けど言ったでしょ、全力の君に勝つて」

出久は拳を構える。

焦凍は先程とはうって変わって自ら攻めに行くが徒手空拳では出久に一日の長がある。

空を切る焦凍の拳。

軽々と避けていく出久。

『轟選手、近接戦を仕掛けたが全く掠りもしない!』

『緑谷選手に一日の長がありますね』

出久はそれを避けて焦凍の腹にカウンターを決め、くの字に折れた所にハイキックをぶちこみ、地面へと叩きつける。

しかし、焦凍も負けておらず、倒れたまま氷で出久の足を掴まえようとすが逃げられる。

焦凍は立ち上がり、出久を睨む。

出久は右手の人差し指を上を指先に集中する。

そしてそのままドーナツ状の気弾を作る。

気弾を放り投げると焦凍を中心にドーナツが広がり、そして出久が拳を合わせるとドーナツ状の気弾が焦凍を締め上げる。

焦凍は締め上げに苦しくなる。

「見たか！名付けて気輪縛！」

『これは凄い！緑谷選手、エネルギー弾を拘束具として使った！柔軟な発想だ！』
『動けないようですけどね』

この技はゴテンクスのギャラクティカードーナツである。修業中に悟空、ベジータ二人による強烈な技の批判を出久達は徹底的に聴いていたので、真似たのだ。

やった出久は意外に簡単だと思いつながらやってくるが、締め上げていると動けなくなつた。

ゴテンクスがやれば動けるのか、それとも動けなくなる技かわからないが捕縛には持つてこいの技だ。

苦しむ焦凍。

「轟君……のまま参つたと言つて貰うよ！」

「くそー！」

焦凍は気輪縛から脱け出せないでいた。



一方、冷達は漸く雄英高校の体育祭会場に来ることができた。そして何とか会場に入るが、行けないでいた。

エンデヴァーがいると思つたからだ。

実際にはエンデヴァーは会場を出て冷達を探しに行つたが、そんな事を冷達は知らなかった。

「どうしよう?！」

「早く、観客席に行こうつてアイツなら俺が」

「だから、夏の身が危ないじゃん。出来る限り、会いたくないよ！」

「じゃ、どうすんだよ！このままだと終わっちゃうよ」

焦る夏とどうしようかと悩む冬美。

そして冷は一人、二人から離れて歩いていき、選手関係者以外立ち入り禁止のドアを見た。

そこに冬美と夏が来る。

二人とも流石にここに入る気はなかった。

冷でもある。

「流石にここはダメだつて」

「お母さん、ここはやめよう」

「うん、ちよつと見えたから気になっちゃつて」

三人で意を決して観客席に向かおうとするとそこに何故かオールマイトがやってくる（怪我が消えたのと鍛え直しの為に筋肉ムキムキです）

「おや、君達は確か・・・」

「オ、オールマイト!?!」

「嘘!?!」

オールマイトは轟家の家の事情は全く知らない。そもそもエンデヴァーが漏らすわけがない。

見覚えがあるのはエンデヴァーと冷のマスメディア用の結婚式には一応呼ばれて冬美は焦凍の保護者として知っている為である。

「そうだ、エンデヴァーの奥様の・・・轟冷です」・・・すぐに思い出せずに申し訳ありません」

「いえいえ」

社交辞令の挨拶をやる二人。

「早く行こうぜ」

「うん、お母さん・・・」

「そうだね。ではまた後日・・・」

「宜しく、お願いします・・・これから息子さんの試合を？」

「ええ、少し遅れてしまったので・・・」

「でしたら、此方から見た方が良いでしょう」

オールマイトは関係者以外立ち入り禁止のドアを開ける。

「良いんですか!?!」

夏がオールマイトの行動に驚く。

「大丈夫ですよ、私も此方から見ようと思っていたので、立ち見になってしまいましたが一緒にどうですか？」

「いきますー！」

冷がオールマイトの言葉に力強く答える。

そして冷達はオールマイトと一緒に入っていった。

通路は途中で控え室があったのと医務室があった位で何も無かった。

(オールマイトは医務室の万人であるリカバリー・ガールに掴まり、説教の為に冷達と離れた)

これより先は武舞台だけだったから、リカバリー・ガールも口うるさく言うつもりは無かった。

その役目はオールマイトになった。



焦凍が気輪縛に捉えられて締め上げられている。

これを脱出するには純粋な力でどうにかするしかない。つまり、個性で何とかするしかないのだが、強烈な締め上げと焦凍の内心抱えている問題のせいで脱け出せないでいた。

「轟君！参ったと言え！」

「言うもん・・・か」

『轟選手、意地を見せるがこの状況は絶望的だ!』

『あれを解除すると強烈な氷が来ますから、緑谷選手は解けませんね』

観客も焦凍のこの意地に感心しつつももう無理だと感じていた。

司会の声も観客の声も焦凍を蝕む。

この締め上げのせいにより加速されていく。

(も、もう無理だ・・・)

「焦凍!!」

突然、焦凍の耳に声が聞こえる。

顔を動かして周りを見ると自分が入ってきたゲートには冷が立っていた。

冷だけでない、冬美も夏もいた。

「お母さん・・・」

「焦凍、頑張つて・・・お母さんも頑張るから!・・・負けないで!!」

「焦凍、頑張れ!」

「俺の弟だろ!?!諦めんな!」

焦凍は嬉しくなった。

大好きな家族からの声援。そして冷がこの会場の何処かにいるエンデヴァーを恐れ

ずに来てくれた。

その事実に焦凍は嬉しくなり、そして諦めかけていた心に再び焰が燃え上がる。

(負けてたまるか!!)

「うおおおおお!!!」

焦凍の叫び声と共に左から燃え広がる炎が左から美しい巨大な氷が右から出て来て気輪縛を破壊する。

『轟選手、緑谷選手の拘束を破った!!』

会場がこの意外な脱出に喜ぶ。

更には先程なかった炎の力も出て来てまた興奮が出てくる。

冷は焦凍のその姿を確り見る。

「やっぱり壊れたか・・・」

出久が気輪縛が破壊された事に対して特に慌てずに焦凍を見る。

「緑谷・・・お前、これを持ってきてたのか?」

「言っただろ? 全力でやろうって・・・炎を出せるようになったじゃないか」

「敵のパワーアップを待つ奴が何処にいんだよ・・・余計なお世話をしやがって・・・」

「君の全力と戦いたかったからね」

笑い会う二人。

出久はかめはめ波の体勢になる。

焦凍も左の炎の火力を上げていく。

(緑谷・・・ありがとな)

「豪龍・かめはめ波!!!」

「膨冷熱波!!!」

出久は最強の技を焦凍は熱膨張の原理を使い巨大な氷の後に超高温の炎をぶつけて爆風を起こす技をぶつける。

そのぶつかり合いは会場を騒然とさせた。

特大の技がぶつかり合い、会場は轟音と爆風に包まれる。

主審のミッドナイトはそれに耐えて武舞台を見るとそのには落ちる寸前の出久以外誰もいなかった。

相手の焦凍は場外で倒れていた。

「轟選手、場外！緑谷選手の勝ち！」

主審ミッドナイトの采配はやつと武舞台を見ることができた会場の観客を興奮させた。

『緑谷選手の勝利だ!!一見優勢かに思われた緑谷選手、しかし負けずにパワーアップした轟選手。それすらも吹き飛ばした緑谷選手、なんと見所が多かった試合でしょうか』

!!
』

『凄い戦いでしたね、それにしても何と言う威力でしょうか』

クリリンは二人の最大火力に少し冷や汗をかいていた。

各宇宙の破壊神や天使は平然とし界王神は冷や汗をかいて人間達の反応は疎らだった。

出久がボロボロになりながら、武舞台を降りて焦凍の方を見ると、焦凍は立ち上がって出久を見ていた。

「緑谷……優勝しろよ」

その言葉と共に拳を前に出す焦凍。

出久も拳を前に出す。

それを見た焦凍は笑いながら、冷の待つゲートの方に向かっていった。

出久も武舞台を後にした。



焦凍がゲートに入り、外からここが見にくくなると焦凍は冷に抱き締められた。

「お母さん?」

「焦凍・・・手紙読んだよ・・・ごめんね、遅くなっちゃって・・・今、答えを言わせて」
冷は一旦、離れて焦凍の目を見る。

焦凍の目には不安が出ていた。

「焦凍が赦してくれるなら、もう一度チャンスをくれるなら、もう一度、焦凍のお母さんになっても良いですか？」

冷の言葉に焦凍の目から自然と涙が溢れてきて静かに頬を流れていく。

「俺の・・・お母さんは・・・お母さんだけだよ・・・ごめんね・・・優勝出来なくて・・・」

「来年、今度は最初から観客席で冬美達と見るからその時まで待つてるね」

「うん・・・うん」

互いに涙に溢れてもう一度抱き締め会う。

冬美も夏も二人のこの状況に嬉しくなった。

轟家の物語は・・・轟焦凍の物語はここでもう一度始まった。



その様子を影に隠れながら見ていた男がいたエンデヴァーである。

あれから必死に探して冷達が見つからず、もしかしたらと思つて会場に戻り、探して

いかなかったここを探してたら、抱き締め合っていた冷達を見つけた。

冷達には何も言わずにその場を静かに離れたがその心情は穏やかではなかった。

冷達が逃げたことに対する物ではない。

焦凍が冷達の言葉によって炎を使えるようになったからだ。自分の最高の息子の問題が自分でも焦凍自身でもなく冷達によって解決された。

どんだけ自分が一方通行の愛を捧げても治らなかつた物が冷によっていとも容易く治された。

その事実インデヴァーは冷に嫉妬し、怒りが溢れてきた。

同時に悲しくなった。

何故自分ではないのか・・・何を間違えていたのか・・・インデヴァーはそんな事を思いながら、観客席に戻っていく。

そして、観客席に続く階段で座った。

単純に疲れてしまった。

心身ともにである。

そしてこれからどうしたら良いか、インデヴァーには分からなくなってきた。

「ここにも迷える若者が一人いたか」

インデヴァーは声のした方を見るとそこには亀仙人がいた。

「何のようだ？ご老公は誰だ？」

「何、少しお節介な老人じや、何やら悩んでいるようじゃったのでな。年寄りからも口うるさいアドバイスをと思つてな」

飄々と喋る亀仙人にエンデヴァーはイライラする。

「結構、ほつといてくれ。俺は45だ。もういい年でアドバイスなぞいらん」

「まあ堅苦しい事はいうでない。聴くだけならすぐに終わるぞ」

エンデヴァーはイライラしながらも聴くことにした。そしたら消えてくれるだろうと思つたからだ。

「さつさと言つて、何処かに行つてくれ」

「では一言、お主の人生で楽しかったのは？」

「は？」

「それがわかれば悩みも解決するぞ」

そう言つて亀仙人は去つていった。

エンデヴァーはすぐに忘れようとしたが、亀仙人の妙な含蓄のある言葉を忘れられず、その事を思い出しながら観客席に戻つていった。

ここからエンデヴァーは変わるのだろうか？

それはまだエンデヴァー自身も知らない。

激突!準決勝

体育祭もいよいよクライマックスを迎えてきた。

出久と焦凍の戦いの後、踏陰と百が戦い結果は速攻に掛けてクラスでも強い踏陰の勝利。

これで、準決勝まで進んだのは出久、電気、人使、踏陰の4人。今年の体育祭はレベルが桁外れだった。亀仙流を使う出久と電気だけではない。普通科から話術と精神力だけでのし上がってきた人使、黒影を使って勝ち残ってきた踏陰。降参こそしたが終始電気を手玉に取った柔造。大爆発を起こさせた焦凍。出久と接近戦で盛り上げた鋭児郎など初めとしてかなり盛り上がった。

『さあ、皆さん!お待たせしました!いよいよ雄英体育祭も大詰めに近づくと、準決勝1回戦の始まりです!』

アナウンサーの声に観客も熱狂で応える。オリンピックが昔ほど熱狂出来なくなり、その代わりとして雄英体育祭があると云われるほどなのだ。観客は見たいのだ次世代のヒーローのNo.1を

…控室…

そこには出久、電気、踏陰、人使がいた。

4人は和氣藹々とはしてなく、それぞれが自らのパフォーマンスを上げる為にイメージしていた。

『それでは選手の方は入場してください!』

アナウンサーの言葉に1回戦目の電気と人使が控室から出ていく。何も話さないが電気は出久に対して親指を立てて笑っていた。出久もそれに対して親指で返す。

「お前達は本当に仲が良いんだな」

踏陰が出久と電気の関係を見て率直に言った。

「うん、僕も電気も何も無い所から一緒にやって来たから」

「感傷に溺れては俺に敗北するぞ」

「そうだね、だから優勝するまで浸らない」

「ほう」

互いに目を交わし火花を散らすのが口角を上げていた。バチバチとする敵相手とは違い、自分に自信を持ち相手よりも上に行きたいと云う感情が占めていた。

…会場…

『選手が入場します！まずは入試1位、そして障害物競走1位、騎馬戦も1位のチームとここまで文字通りトップで走り続ける上鳴電気選手！1回戦目は辛くも上る結果になりましたが続く飯田選手との最速決戦では完封と印象に残る試合をしています！』

『続きましては！騎馬戦では2位のチームを率いていましたが、その精神力と話術によつてここまで上がってきた唯一の普通科、心操人使選手！1回戦目は爆豪選手の猛攻に耐えて一瞬の隙を付き、2回戦目の芦戸選手を口説いて倒すというトリッキーな戦法が目に見え付いております！』

舞台上上がり、対面する2人。

互いにノーガードで構えていない。

（こいつは爆豪や芦戸を一瞬の隙を突いて倒してる一撃でやるしかねえ。でねえとなんかの言葉に反応しそうだ）

（この雷野郎は超スピードで一発でさつきの試合を終わらせてやがるが、耐えれば勝機はある）

互いに相手を分析していた。電気は人使の戦闘から判断して一撃で決めると、人使は電気の一撃必殺から判断して必ず耐えると、

『それでは準決勝 1回戦始め！』

銅鑼の音が鳴り響き、会場が静まる。

相手の一瞬の隙を突こうと下手に動かずにその時を待っていた。

(一撃で決めねえと勝機はねえ)

(一撃を耐えれば勝機はある)

それはまるで西部劇の決闘のように静かに相手だけに集中していた。極度の緊張により電気と人使の体力がドンドン削られていく。

会場も静かにそれを見守り、各宇宙の神々や戦士たちもそれを静かに見ていた。

電気と人使が汗を欠き、互いの汗が地面に落ちた瞬間。

“閃光が弾けた”

一瞬だけ、舞台に特大の雷の閃光が光り、何も神々や戦士、そして会場にいたトップヒーロー達以外目を覆った。閃光が消え会場の人々が見たのは、舞台のど真ん中の水溜りの上に立ち、足に稲妻を走らせてる電気と場外に吹き飛ばされていた人使の姿だった。

審判であるミッドナイトは静かに電気の方に手を向けた。

『けっ、決着!!電気選手の勝利!!』

アナウンサーの言葉に漸く会場が追いついたのかざわざわとし始める。あまりにも一瞬であまりにも早く、全ての感情を置き去りにしていた。

だが、徐々に拍手が鳴り始める。

電気の足元にある水溜りに気がついたのだ。

それは電気の汗だ。

一瞬で終わったがそれは呆気ない物では無かった。互いになんとか隙きを付いて倒そうとした。精神を削り、汗を多分に流して電気はこの勝利をもぎ取ったのだ。

(一撃で決まって良かった・・・)

電気がそう思っていると場外に吹き飛ばされていた人使が立ちあがる。肋を抑えていて苦しそうだったが懸命に立ち上がった。

そして人使は黙って入場口に戻っていった。

「やっぱり、俺がヒーローってのは無理なのか・・・」

人使が静かに誰にも聴こえないように呟くと、

「良くやったぞ!心操!!」

人使と同じ普通科の面々が人使に対して称賛を贈っていた。

「流石は普通科の星!」「頑張ったな!!」「スゲエぞ、ヒーロー科相手にここまで勝ち上がるなんてな!」「心操、おつかれ!!」

それは普通科の面々だけでなかった。

「しかし、雄英も勿体ないよな。あんな凄いのをヒーロー科に入れないなんてな」「あの

試験じゃ、突破出来ないだろうな」「雄英だけじゃなく他の高校でも似たような事例はありそうだな」「凄かったぞ!」

ヒーローも称賛していた。

「良い物を見たぜ!」「ピコピコピコ」「モスコ様曰く、『中々の心理戦だった』とのことです」「一瞬を狙った勝負とは中々美しかったぞ」「随分と鈍かったが、まあ良い戦いは違いないな」「良い試合だった」「思ったよりも楽しめたぜ」

破壊神達を筆頭に各宇宙の戦士達も二人を称賛していた。

・・・控室・・・

出久と踏影があまりにも早く終わった試合に驚きつつも互いに体を解していた。

「良い試合だったな」

「うん、負けてられないな」

「それは上鳴に対してか?」

「二人に対してかな? 良い試合で応えたい」

「それは同意しよう・・・緑谷、俺は負けるつもりなんてサラサラない。数多の人民達が熱狂してるこの祭り事で無様に地を這う気はない」

それは踏影からの宣戦布告だった。

だが出久はそれに対して真剣に目を見て応えた。

「僕だつて負けないよ。亀仙流の名にかけて」

互いに自信を持ちながら、二人は入場しようとして控室から出ると舞台から戻ってきた電気がやって来た。

「出久……」

「電気、お疲れさま」

「……常闇も聞いてくれ、俺はどつちが決勝に来るかわからねえ。けど、俺は決勝で先に待つてるぜ！」

「俺もか……てつきり緑谷だけかと思つたが……」

踏影が出久だけでなく自分にも同じように宣戦布告した電気に対して少し意外な顔をする。

「関係ねえよ。誰が来るかわからねえじゃん」

電気はそう言つて踏影の肩を叩いて控室の中に行き、出久と踏影は通路を歩いていく。

二人とも無言だった。

互いにどうすれば良い結果を出せるか、相手より一步前に進む事が出来るのか、真剣

に考えていた。

「緑谷、お前は俺よりも強い。その強い光は俺には出せない。だが俺の闇は光すら呑み込む。絶対に負けない」

「なら、ぶち破る」

二人はそう言いあい、会場に出た。

・・・舞台・・・

『おまたせしました！続きまして準決勝第2試合、緑谷出久選手対常闇踏陰選手です！』
アナウンサーの言葉に会場が熱狂で応える。

『緑谷選手は第1回戦からここまで激戦を勝ち上がってきた選手です！先程の轟選手との戦いは非常に見応えがございました！』

『対する常闇選手は第1回戦からここまでほぼ瞬殺と云う驚異的な速さで上り詰めて来ました！』

向かい合う出久と踏影。互いに自分の力に自信がある。

出久は接近戦と遠距離戦に自信があり、踏影は中距離戦と遠距離戦に自信があった。

（中距離は黒影の間合い。そこで僕が戦っても勝てないわけは無いと思うけど未知数で

やりたくない)

(近距離はどうやっても緑谷には勝てない。奴は必ず懐に入ろうとする。なら懐には潜り込ませない)

『準決勝 2回戦 始め!!』

合図と共に出久は踏影の懐に入ろうと突っ走った。

電気ほどではないが出久も下手な高速系の個性よりは断然に速い。長期戦にせず、一気に懐に入って倒そうとしたが踏影とて腐ってもヒーロー科1年、黒影を操り飛び込んでくる出久を弾き飛ばす。

(やっぱり黒影がやっかいだな)

(下手に遠距離戦を狙ったらやられる。このまま黒影を近くに居させて少しずつ選択肢を潰していく。どこかでボロが出るはず)

出久は果敢に攻めていくが黒影が行く手を阻む。

上からだろうが下からだろうが高速だろうが全て阻む。

(慢心するな。すれば一気に奴は首を取りに来る)

(くそっ、中距離じゃ分が悪い)

踏影は決して自分から攻めてこない。

下手にやったら負けると悟ってるからだ。舞台のほぼ中央に黒影で陣を張っている。

出久はそれをぶち破ろうと両手に気を溜める。

「かめはめ波!!」

特大のかめはめ波が踏影に向かって飛んでいく。

「黒影!!」

踏影は黒影を使い、かめはめ波にぶつけた。

黒影は光には弱いかめはめ波にぶつけたとしても相殺も出来ずに必ず負ける。だが踏影の狙いはそこではなかった。個性持ちは気を上手く操れない。言うなれば「個性」と「気」相反するということ。踏影はその性質を逆に利用した。黒影に対して天敵の光ではあるが性質は相反する気。ぶつかつたとして負けるがその性質を利用して踏影は黒影を使ってかめはめ波を少しだけ上にずらした。

ほんの数センチくらいだがそのズレは徐々に大きくなって踏影の頭上を通った。

「不味い!」

出久は観客席に当てないために軌道を変えてなんとかスレスレでぶつからずに済ませた。出久にとつてかめはめ波を防がれたのは痛い。黒影に気の攻撃は有効だと云うのは良い情報だった。

『凄い!!一進一退で素晴らしい攻防戦です!!』

アナウンサーの言葉に観客も遅れつつも湧き上がる。だが出久と踏影はそれを聴い

てる余裕がない。

2人とも瞬殺出来る力を持つてるがゆえに気を引き締めていた。

(やっぱりあの作戦にするしかないな)

(黒影なら気弾はある程度防げるのが分かった。分が悪い掛けどが撃つてこい!)

踏影は黒影を自分の周りに居させてドームのような亀のように全身防御の体制を取る。

出久は踏影を中心に俯瞰で見れば円を描くように動きながら気弾で攻める。

やられてる踏影は幾ら黒影で守つてるとはいえかなりの衝撃を感じていた。

『凄い苛烈な攻めだあ!!緑谷選手、このまま常闇選手を倒し切るのかあ!?!』

(凄まじい光だ。やはり勝てない!!だがそれは準決勝の勝利ではないぞ!!)

踏影はその辛い状態で一步前に進む。

出久もすぐに修正して円を描く。

だが踏影は間髪入れずにまた一步一步と少しずつ進んでいく。

すると最初は綺麗な円だった出久の軌道が徐々に歪になつていく。

俯瞰の位置で観てる観客やアナウンサーはすぐにその事に気がついた。

『こ、これは出久選手が攻めてる筈なのにその動きが徐々に苦しくなってきたぞ!!解説

のクリリンさんこれは一体!?!』

『舞台を利用した良いやり方ですね。舞台はほぼ正方形と言って良い形です。その中心にあんな風に陣取られて円を描くように攻めるとなると先程の緑谷選手のようになりますが常闇選手はそれも込みかつ被弾覚悟で少しずつ緑谷選手の技量や性格を逆手に取って移動範囲を狭めてます』

『な、なんとという戦法!!脳筋に見えますがその地道な詰み方を感じます!!』
『脳筋というよりも根気戦法ですね』

アナウンサーとクリリンの解説で多くの観客が踏影有利

だと思った。それは今、角に追い詰めてる踏影自身もだった。

だが神や乙戦士、各宇宙の戦士達は観客とは違った感情で試合を見ていた。

踏影の地道な努力の賜物か出久を舞台の角に追い詰めていた。一撃入れれば落ちる程だった。

(この試合、貰った!!)

踏影は黒影を出久に向けて放つ。出久もそれを見て左手に気を溜めた。

(構わん、相撃ちならばやつの方が速く落ちる!)

踏影は出久が気弾を撃つてると身構えたが出久はその左手を後ろに向けて放った。

それは気弾ではなくブーストだった。

出久はそのブーストで黒影を躲し、踏影の懐にまで入ってきた。

(しまった!まさか・・・)

踏影は最後の悪足掻きにと右拳を振るうがそれよりも速く出久の右拳が届き、踏影は舞台の外まで吹き飛ばされた。

『けっ、決着!!緑谷選手の逆転勝利!!』

吹き飛ばされた踏影はアウンサーの言葉を聞きながら考えていた。一体いつから自分は出久の作戦にハマっていたのか。頭で幾ら考えても答えは出ない。

立ち上がり、踏影は舞台の上で膝に手をつけていた出久を一目見た後、退場した。

(差はかなりあるが無敵ではないか)

踏影は黒影がかめはめ波を弾いた事をしっかりと胸に刻みながら次に繋げようとした。

観客席では界王神や破壊神達が実に呑気そうに話していた。

「やは最初から緑谷さんの作戦だったようですね」

「変に意固地に同じ事をやってたからわかりやすかったけどね」

ウイスの言葉にビルスが欠伸をしながら答えた。

「アホだなあ、折角油断せずに追い込んでたのに」

「シャンパ様はこういう時、必ず油断しますものね」「一言多いぞヴァドス!!」

「まあまあ二人とも」

「しかし、準決勝はどれもこれも心理戦が素晴らしいです」

「ピコピコピコ」

「モスコ様曰く『対照的な試合だった』との事」

「確かに始まる前の心理戦が重要だった最初の試合と始まった後の心理戦が重要だった今回は対照的でした」

「4人とも傲らずに出来る範囲で相手を追い詰めようとしていたのは素晴らしいかったです」

「うむ心理的でもあったが肉体的にも良い動きだった」

「相手を見下さず、かと言って自己を下げず、残った緑谷さんと上鳴さんの精神の状態は
だいたい良いですね」

「これは次の決勝戦は見ものじゃぞ。肉体的にはほぼ互角で精神も良い状態の戦いは面

「白い」

「陰謀の宇宙と呼ばれる第4宇宙の少年達。少し見誤っていました」

「俺もだ。まあ破壊神があれだからなんだが肉体面では全然足元にも及ばないが精神だけは我ら第一宇宙のプライドトルーパーズの新米くらいはありそうだなトツポはどう感じた？」

「彼らがプライドトルーパーズなら教えがいがありそうです」

界王神達も破壊神達も最初の頃の知恵の育成の見学という事を忘れて純粹に体育祭のトーナメントを楽しんでいた。勿論、彼らにしてみればかなりレベルの低い戦いではあったが暇潰しにはもってこいの上に育成の部分の考えると良い参考資料になっていた。

『決勝戦は今から三十分後に始まります!!それまで皆様、暫しお待ち下さい!!』

友情の決勝戦 前編

出久は控室で亀仙豆を食べた後、そのままシユミレーションを始めていた。

（電気の速度には追いつけない、無理に速さ勝負をするんじゃないやなく行動範囲を狭めるように気弾を打って予想しやすいようにするのが恐らくベスト・・・）

ブツブツと集中しながら電気のをどうするか考えていた。そんな中でコンコンと控室のドアがノックされたので出久はドアを開けるとそこには電気がいた。

「電気どうして？電気の控室は違うはずじゃ？」

「試合前に出久と話したかったからな」

「？」

「出久、俺は負けない。心から尊敬してるし大切な親友だから俺は本気で行く」

「電気・・・」

「組手じゃない本当の勝負だ。雄英体育祭とか亀仙流は関係ない。俺はお前に勝つ!!」

「僕も負けない。体育祭とか亀仙流じゃなくて僕は親友だから負けたくない」

出久の言葉に電気が笑うと2人はその場で笑いあった。それはこれから戦う者同士とは思えないほど明るくそしてお互いへの信頼があった。

互いに暫く笑いあうと時間だった事もあり、舞台に向かう。



電気はゲートに入る前に屈伸をして足の調子確かめていた。帯電を使って超高速を得ている電気にとって足の不調なんて死んでもごめんだったからだ。出久はすでに反対側のゲートへ行ってた。これから始まる決勝戦に電気は緊張しつつもワクワクしていた。

そして反対側のゲートにいる出久もまた己の状態を確認しつつこれから始まる決勝戦にワクワクしていた。

お互い何年も一緒に修行してきた仲で喧嘩もして仲良くなって雄英を共に目指し合格した仲であり、大切な親友でもある。

だからこそ、2人は気兼ねなくやりたかった。

体育祭や亀仙流は関係なく思いつきりぶつかりたく、それが今日出来る。

1回の本気の勝負。

故に2人はワクワクしていた。

『大変長らくおまたせしました!!それでは選手の入場です!!』

アナウンサーの言葉に出久と電気は会場に入った。

『障害物競走で見事に1位。騎馬戦で1位。そして1回戦では苦戦しつつも勝利し、それ以降は全ての試合で雷の如き速さで相手を瞬殺し続ける雄英高校ヒーロー科1年最速の上鳴電気選手!!』

『障害物競走で惜しくも2位。騎馬戦で1位。そして1回戦での熱い漢の戦いに勝利し、2回戦でも力比べに勝ち、3回戦で見事な頭脳戦を繰り広げた雄英高校ヒーロー科1年緑谷出久選手!!』

『今大会きつてのまさに最強のカードが組まれ、今決勝戦が始まります!!ここで決勝戦のルールを改めて説明します。勝敗は舞台から落ちるかそれとも主審のミッドナイト先生によって戦闘不可能と判断された場合のみです!!』

出久と電気は舞台上がって軽く調子確かめつつも相手を見ていた。互いに笑みを浮かべつつも冷静に相手を見ていた。

お互いにあるのは早く戦いたいワクワク感と言うあの純粹な感情しかなかった。

『決勝戦、始めえ!!』

アナウンサーの言葉に銅鑼が鳴った。

決勝戦が始まった。

2人とも構えた。

出久も電気も腰を落としたが出久は左手を前に出し重心を少し前にして電気は左手を前に出して重心を少し下にしていた。

その構えは天下一武道会で悟空とクリリンが戦った時に似ていた。出久はクリリン、電気は悟空。

亀仙流だからなのか親友だからなのか誰にもわからないが兎に角似ていた。

暫く緊張が続いたがそれを破ったのは出久の蹴りだった。

出久の鋭い蹴りが電気の顔面に向かっていくが電気はそれを難なくと左手で受ける。出久はすぐに電気の腹に目掛けて突きを出す。それも左手で受けられ、電気はお返しにと蹴りを出久の腹に目掛けて放つ。

出久はそれを飛んで避けて無理にそのまま電気の頭に目掛けて蹴りを放つが左手で防がれた。

出久は無理に蹴りを放った為に少し着地にもたついてしまった。

それを電気は逃さず、超高速で迫り手刀を出久に入れて吹き飛ばした。

オーピンググヒットは電気だった。

吹き飛ばされた出久はなんとか衝撃を上手く逃して向き直すが電気はすでにそこには居なかった。

しかし、電気の超高速に伴う音がしていたので出久はそれを確り聴いて後ろから来た電気の蹴りを避けた。

避けられた電気は瞬時に体制を立て直し、出久に蹴りの3連打を浴びせるが出久はそれをなんとか後退しつつも受け止めて先程の手刀のお返しにと云わんばかりに腹に突きを放つて電気を止めた。

「やるな出久」

「電気こそ・・・準備運動はこれくらいで良いんじゃない？」

「だな」

互いに一撃ずつ入った2人はもう一度構え直した。

『す、凄い戦いです！素人の私には一撃ずつ相手に喰らわせたという事しかわかりませんでした!!』

『両者ともに互角ですね』



解説席からの説明を受けて漸く会場が湧いた。

それほど観客にとつてみれば速く凄い戦いだつた。しかし、神や各宇宙の戦士達やヒーロー科の1年達は違つた。

「けつ、あいつら遊びやがって・・・」

「準備運動じゃねえか？」

「よつぽど嬉しいんでしよう。お互いに仲が良いですから」

勝己の言葉から皆、出久と電気が準備運動をやったただけとすぐに理解していた。それほど悟空達に鍛えられた事で目も感覚も全て上がっていた。

そして差があるように感じていた2人に近づいた。

決勝戦は始まったばかりだった。

出久と電気の戦いはより複雑になった。

先程までの準備運動とは違い、今度は更に突きも蹴りも当たらなくなった。それどころか2人とも完全に躲して受けてすらいらない。

（電気はやつ、速さに自信があるからって余裕かいちゃって）

（この俺の攻撃を完全に避けるって挑発か出久！）

2人ともまだまた若いゆえに相手に負けたくない。そんな状態ゆえに2人はほぼノーガードで相手の攻撃を避けていた。しかも2人とも段々と速くなってくるがそれでも避ける避ける。

『何という速さでしょう！ノーガードの打ち合いです!!』
『お互いに自信に溢れてますね』

会場が熱狂に包まれつつもどつちが先にヒットするののかされるのかという状況は緊張感を生み、観てる者を集中させた。一挙手一投足に観客が翻弄される均衡だった。

だがそれは徐々に崩れてきた。

電気の速さが出久を超え始めてきた。

段々と出久が避けられなくなり、遂に腹に突きを喰らって吹き飛ばされた。

「手応えありー」

電気はすぐさまに追撃をするが出久はジャンプして避けた。頭を飛び越えるようなジャンプではなく、下手すると40m位は飛んでるかのようなジャンプだ。

電気もすぐさま追撃の為にジャンプした。

それだけではなく帯電を使って出久よりも上に行こうと超高速で飛んでいき、出久の上に来ると電気は地面に叩きつけようとオーバヘッドキックを出久にするが出久はその蹴りを受け止めて逆に下に向って電気を投げた。

電気は帯電でなんとか地面に激突せずに着地すると落ちてくる出久に飛び蹴りをした。

だが出久は下方方向に気を放って数秒間浮いてそれを避けて着地した。そしてすぐさ

まに電気に近づき、突きを放つ。その突きは電気の腹に見事に刺さり、吹き飛ばされた。出久は追い打ちにと気弾を放つが電気も超高速で避けるどころかそのまま出久の方に向かってくる。

電気を止めようと気弾を放つがそれは軽やかに避けられる。顔面に向けて電気の拳が迫ってくるが出久はそれをギリギリで躲し腕を掴み背負投をして地面に電気を叩きつけた。

無防備な顔面に拳を打ち込もうとする出久だが電気は仰向けの状態から右膝で出久の顔を蹴りに行く。出久は寸前の所で避けたが肩を思いつき蹴られた事で折角掴んでいた腕を離してしまった。

電気はすぐに立ち上がり、超高速で出久の周りを周る。

あまりの超高速により出久には超高速による轟音と帯電の個性による稲妻しかわからなかった。

だが出久はどちらかという技巧派であるので視覚ではなく聴覚で判断する為に目を閉じた。

聴こえてくるのは超高速による轟音だった。

緊張しつつも冷静に出久は音のみで判断し、後ろから迫ってくる音に右拳に溜めて打ち出す。

鈍い痛みを伴う衝撃と空気が張り裂けるような音がして出久は目を開けた。それは自分の右拳と電気の右拳がぶつかり合って拮抗していた。

互いに引く気が全く無いのでそのまま接近戦を始める2人。先程と違うのが2人もちやんとガードしていた。ぶつかり合う音が鈍器と鈍器をぶつけてるような轟音で会場を轟かせていた。

お互いに次に進めるために相手を掴もうとするがは相手の手を掴み合わせてしまい、手四つ状態になる。

下手に逃げると追撃されるので2人は押し返そうと力を込めるがまた拮抗するが2人の足元があまりの下半身の力に耐えきれずびび割れを起こし始める。

(負けてたまるかあ!!)

2人はそのまま相手を怯ませようと頭突きをぶつけ合う。

鈍い音と共に2人の額から血が流れたが引かない。

それどころか笑い合っていた。

『お互いに一步も譲らない白熱した試合に私、興奮しております!!』

『中々、熱い試合ですね』



観客席にいるヒーロー科の1年は額から血を流し始めたのに“笑い合い”ながら戦ってる2人に引きつつも驚嘆していた。一体なぜあそこまで戦えるのか、なぜ親友なのに躊躇しないのか、なぜあんなにも楽しそうなのか、それぞれ感情が追いつけないでいた。

「ヒイ、血い出てるじゃねえか」

「怖つ、ウチちよつと怖くなってきた」

「私もです。ここまで一步も引かないとは……」

「ケロ……でも、何だか2人とも楽しそうね」

「うん、心から楽しんでるって感じがする！」

「行っけえ緑谷、負けるなあ!!」

「上鳴も負けるなあ!!」



互いに額をぶつけたまま、血が出てようが頭が痛かろうが2人は引かない。

「楽しいな出久」

「ああ、僕も電気とやるのがここまで楽しいなんて想像もしてなかった」

「俺もだ・・・だから楽しい状態で終わらせる為に勝つ!!」

電気が体に電気を纏わせ始める。出久も瞬時に体に気を纏わせて帯電による電撃を防いだ。

「調子に乗ると痛い目に合うよ!!」

出久はもう一度、電気に頭突きをして右手を離れさせ、思いつきりぶん殴って吹き飛ばそうとするが電気も左手でぶん殴って来た。

2人の拳はそのまま互いの頬に刺さり、互いに吹き飛んだ。

「電気〜!!!」

「出久〜!!!」

瞬時に2人は立て直し、相手に向かって走り飛び蹴りをする。

お互いの飛び蹴りがまたもやぶつかり合い轟音が会場に響き渡った。

まだ2人の決勝戦は終わらない。

友情の決勝戦 中編

出久と電気の決勝戦が白熱している最中、TV中継でその光景を見ている存在がいた。

自身の仕事場にしてほぼ家であり、宇宙船でもあるフリーザの船の中にある司令室でフリーザは桃白白、そしてベリブルとキコノも一緒に中継を見ていた。

「ほほほ、流石キコノですね。司令室に無かった大画面を僅か数分で取り付けられるのですから」

「お褒めに預かり光栄でございます」

「桃白白さんも気楽に見ましよう。知恵の育成で当たる相手の中で一二を争うとは言えどもまだまだ貴方には追いついてませんからね」

「はっ!・・・フリーザ様、1つ気になることがございます」

「ほう?何ですか?」

「なぜ、フリーザ様はこの育成を? AFOもフリーザ様からすれば格下の筈ですが?」

「確かにAFOさんも甘く見積もっても力の大会の下級くらいでしかありませんがそれよりもこの星の個性と無個性に興味があるので・・・」

「お教え願いませんか？」

「・・・今はこの余興を楽しみましょう」

フリーザはそう笑いながら出久と電気の決勝戦の中継を観ていた。

○○○

出久と電気の戦いは更に白熱していた。

先程までと違い、お互いに残像拳をしながら相手の攻撃を避けて反撃してを繰り返していた。

当たると思ったら残像。

多くの観客どころかやっつてる本人達でさえ、一体どこに本体があるのかわからなかった。

（電気はどこ行った!?!）

（くそ、出久はどこだ!?!）

『緑谷選手、上鳴選手！共に残像を使うほどの速さで戦っておりますがお互いに相手を見失ってしまったようです!!』

アナウンサーの言葉に出久と電気は少し羞恥心を感じつつもどこかにいるであろう本体を探すが見つけれなかった。殴っても蹴っても相手は残像。

気を感じ取れない2人。

音で判断してもすぐに避けられて見失う。

状況はまさに膠着していた。

先にこの状況を打破しようとしたのは出久だった。出久は突然、立ち止まり全身に気を溜めた。電気は罨かと疑いつつも好機と狙って最高速度の飛び蹴りを思いつきり出久に喰らわした。

出久は数メートルくらい後退りしてしまうが気と頑丈な体の2つを使って電気を止めて脚を掴んだ。

「やべっ」

電気が気付いた時には既に遅く、出久は電気を地面に向かって思いっきり叩きつける。舞台が壊れようが関係なく出久は何回も電気を叩きつけた後、ハンマー投げのように回り始めた。

『緑谷選手、ハンマー投げのように上鳴選手の脚を掴んだまま回り始めた!!』

『投げますね完全に』

(飛んでいけ!!)

出久は電気を思いっきり投げた。

しかし、電気は投げ飛ばされる瞬間に腹筋を使って体を反転させて逆に出久の腕を掴

である。

しかし、出久は電気と違いかなりの技巧派である。

速さも威力も負ける出久は電気の攻撃の要である超高速を使えない超接近戦では負けない。

1回戦の時に鋭兎朗に遅れを取ってしまったがそれを逆転したのも接近戦の技だ。

接近戦に於いては出久の方が上である。

出久はフェイントを巧みに使い、電気の手を取って小手返しする。投げられた電気はすぐに稲妻を体に走らせてバチツと出久の手を放させて離れる。

また超高速の攻撃を仕掛けようとする電気。

出久は両手に気弾を作り電気に向かって放った。

「繰気弾!!」

2つの繰気弾が電気に向かって来る。

電気は超高速で逃げようとするが繰気弾の特性状何処までも追ってくる。出久は繰気弾で挟み撃ちにしようと1つを電気の進行方向から来させるが電気はそれを避ける。

出久は電気が予測できないように1つを地面の下に潜らせた。

追われている電気はやられっぱなしは癪なので出久との距離を詰めて殴りに来るが地面に潜っていた繰気弾が飛び出て防がれた。

攻めようとしても練気弾に防がれて距離をおいても練気弾に追われる。電気にとつては鬱陶しい戦法だった。

(いずれ電気は燃料切れになる！そこをついて勝つ!!)

(このままじゃ、ジリ貧だ!!)

『上鳴選手、出久選手のエネルギー弾を避ける避ける!!凄まじい速度と反応だ!!』

『しかし、このままだと不利になるのは上鳴選手ですから打開しないと危ないですね』

アナウンサーとクリリンの解説に一般の観客はどっちが優勢で劣勢か判断しにくい状況から打開される瞬間を見逃さぬように凝視していた。

出久は決して慢心しない。

基本的にビビりな性質と思考する性質、そして一線を超えることとん肝が据わる性質と修業のおかげでついた自信が出久の精神をより堅牢にしていた。

(電気のを速度を考えると僕の懐に入るのに1秒も掛からない。視線や稲妻の走り方をしっかり見て対応しないと一気にやられる。電気の集中力を削ぐ為にもこの追跡して練気弾は変えられない)

出久はしつこく練気弾で電気を追っていた。

電気は自分の精神の脆さを理解していた。

基本的小調子者な性質に短絡的な性質、そして危機的な状況になると表面化する散漫さ。だが修業と出久のおかげで電気はそこを理解していた。

（慌てるな。出久の事だから狙うのは俺のキャパオーバーだ。後ろの練気弾はその為に慌てさせるやつだ。なんとか隙きを突きてえが長丁場はこつちが不利だ。あの方法をやるしかねえ!!）

電気は勝負を仕掛けた。

練気弾に追われつつももう一度出久の懐に飛び込もうとしていた。出久はまた近距離で下からの練気弾で顎をかち上げようと狙う。

出久の狙い通りに超高速で飛び込んでくる電気。

出久は下からの練気弾で電気を退けようと放った。

しかし、練気弾は電気の体を擦り抜けた。

残像拳だ。

だが出久はそれを予想していた。すぐに電気の後ろを追っていたもう一つの練気弾を自分の頭越し後ろへ回す。電気は残像拳をやると後ろから回ってくるからだ。

出久は電気が我慢できなくなつて飛び込んできたと思つた。だからこの2重残像拳に対応すれば練気弾は電気に当たると思つた。

だが練気弾はまた電気の体を擦り抜けた。

(3重残像拳!?)

出久は擦り抜けられた事実混乱しつつも電気を探そうと見渡す瞬間、上から来た電気に頭を思いつきりぶん殴られた。

うつ伏せに倒れる出久。

電気はすぐに倒れてる出久に蹴りを入れてくるが出久はすぐに両手でそれを受け止めて捻り電気を倒れさせる。

また出久が電気を投げようとするが電気は体を捻り、出久の手を思いつきり踵で蹴つて脱出する。

「やるね電気」

「相変わらずじょうぶいな」

「電気に言われたくない」

互いに構え直す2人。

お互いにダメージは五分五分といった所だ。

2人は接近戦では埒が明かないので離れて遠距離戦に変える。

出久は気弾で電気は雷で。

互いに修業して手に入れた遠距離攻撃で相手を狙うがそれも互角だった。

大量の気弾を雷で相殺する電気。

速い雷を気弾で迎撃する出久。

(ここでも互角か・・・ならこれはどう!?)

出久は気弾を変えた。

今までのような直線的な気弾ではなく野球で云うとカーブのように曲がって向かって来る気弾だ。

急に来た変化球に電気はビックリしつつも雷で相殺した。

電気は修業で雷を放てるようになった。

それは掌以外を気で軽く体を纏って雷の出る場所を1箇所にして出す方法だ。だがそれは雷を操れるようになったわけではない。出久のような変化球は電気には無理なのだ。

出久は全気弾を変化させて電気に放つ。

『緑谷選手、多種多様なエネルギー弾で上鳴選手を狙う!! 凄い変化の数です』

『これはやられてる方は疲れますよ。あちこちから飛んでくるのでさっきの直線的な軌道の方が遥かに楽に感じるでしょうね』

クリリンの解説は実に的確だった。

電気は迎撃出来なくなりまた逃げる事になった。

出久はさらに直線的な気弾も混ぜた。

この事により電気は2つの異なる性質の気弾の雨に晒されることになった。線気弾よりも単純ゆえに避けにくい。

避け続ける電気だが徐々に体に掠り始めて捉えられるのも時間の問題だった。

(こうなったら賭けだ！)

電気は高く飛び上がった。

そして空中で足から気を放つて出久目掛けて落ちてくる。

出久は一瞬避けるかと考えたが足から気を放てる電気なら修正して必ず来ると予想した為、迎え撃つことにした。

「か……め……は……は……波!!!」

出久のかめはめ波が電気に向かって放たれる。

そのかめはめ波は出久の必殺の豪龍かめはめ波では無かったがかなり極太だった。

電気はそのままかめはめ波に向かっていく。

だが当たる前に電気は全身に稲妻を走らせながら両手を前に出して縦回転し始めた。まるでそれはドリルのような感じだった。

そしてかめはめ波と電気はぶつかった。

多くの観客は電気が吹き飛ばされると思ったが実際は回転の力でかめはめ波を貫くような感じで突き進んでいく。

落下速度もドンドンと速くなって遂にかめはめ波を真つ向からぶち破つて電氣の両手は出久の腹にめり込み、吹き飛ばした。

肋が二、三本やられたことを出久は理解しながらも舞台にしがみつき何とか場外にならずに済んで立ち上がるが肋の痛みが強かった。

「見たか出久！これが俺の新技、回電撃だ!!」

『上鳴選手！まさかの新技で緑谷選手のかめはめ波をぶち破つた!!』

『一步間違えればやられてたでしょう。何とも分が悪い賭けに良く勝ちますね』

クリリンは冷や汗を欠いて解説した。そうだ、クリリンにとつてかめはめ波は自分や悟空、ヤムチャや亀仙人の技であるし、切り札的な側面も多少もあった。

勿論、氣の高い者には通じないのもザラだが少なくとも出久や電氣の歳でここまで完全にぶち破るのは初めて見た。

電氣は両手を前に出して稲妻と氣を溜める。

一氣に決着を付ける為に自身の切り札で勝負に出る。

出久も電氣のようにまた両手を前に出して氣を溜めた。お互いに氣も容量的にもこれが最大かつ最後の大技の勝負になるのを理解していた。

そして親友だからこそ、下手に余力を残したら勝てないのをわかっていた。

「豪龍・かめはめ波!!」

「雷豪・かめはめ波!!」

螺旋に突き進む出久だけのかめはめ波と雷のように突き進む電気だけのかめはめ波。

2つの強烈な攻撃が舞台の中央でぶつかり火花を散らした。

2人とも相手に負けない為に相手のかめはめ波をぶち抜こうとして力を入れていた。全身から全ての力をかめはめ波に使っていた。

相手を恐れない。

相手に負けたくない。

相手に勝ちたい。

自分に負けたくない。

2人はそんな感情で心と根性に火を入れながら撃っていた。

『両者のかめはめ波が舞台の中央でぶつかりあった!!』

『これはどうなるかわかりませんよ』

『技巧派の緑谷選手か！超高速の上鳴選手か！勝者は一体どっちだ!!?』

アナウンサーの魂を掛けた実況と眼の前で繰り広げられてる激戦に会場は熱狂で応えた。

友情の決勝戦 後編

出久と電気のかめはめ波のぶつかり合いは続いていた。

(負けられない!!)

(負けてたまるか!!)

2人とも意地張って自分の出せる限りの全てを出していた。

そしてそれは突然終わった。

かめはめ波同士がぶつかっていた所が爆発したのだ。

気と個性の相殺する関係が作用したのか原因はわからない。

だが確かに爆発し、舞台を黒い煙で覆った。

○○○

「なんて凄い戦いだ。オイラとんでもねえ奴らと同じクラスなんだな」

実が出久と電気の激戦を思い出しつつ今の現状についてポツリと呟いた。

「ああ2人とも凄いや。俺も漢として負けられねえな!!」

「ちよっと、負けられないのは女子も同じだよ!」

「お二人の所に早く私も追いつきたいです。負けられませんか」

「おい爆豪。さつきから静かだが大丈夫か？」

「うるせえ半分野郎。話しかけんな見逃しちまうだろうが！」

勝己が昔の暴言が出つつも2人の戦いを決して見逃さないように食い入って見ている。いつも後ろにいた出久はいつの間にかかなり先に行かれた屈辱はありつつも彼処のレベルまで行きたいという少年のような純粋な感情に溢れていた。

「これがA組・・・じゃないなヒーロー科1年最強の2人の戦いか・・・凄いな」

「珍しいな物間。素直に褒めるなんて」

「そりゃこんだけ凄いの見せられてるからね」

「ここまで凄いとはな。俺の追い詰めがビギナーズラックに思えてきた」

「骨抜氏、何を弱気になっておりますか。あそこまで追い詰めた骨抜氏がビギナーズラックなどありえませぬ」

「宍田ありがとう。けどまだ時間はある。追い抜いて追い越すだけだ」

「ノコノコ、けど2人とも楽しそうノコ」

「んっ」

A組、B組は関係なく全員が1年最強の2人の行末を見守っていた。

○○○

煙が晴れて舞台や出久と電氣の姿が現れる。

2人とも体操着の上はボロボロで舞台には中央に大きなクレーターまで出来ていた。互いにボロボロでギリギリで立っているのがわかるほどだった。

『緑谷選手、上鳴選手！共に大きなダメージ!!』

『立ってるのもやつとのおうです。ダメージは五分五分でしょう』

観客が終わりが近づいていることを理解し集中して2人を見ていた。この激戦の終わりを見逃したくないからだ。

2人はそのまま重い足取りで中央に歩いていく。

互いにフラフラしてるが千鳥足ほどではない。

中央で向かい合うと2人は相手の目を見て少しだけ笑った。

そしてボロボロの体操着の上をビリビリと破り捨てて互いに拳を構えた。

剥き出しになる2人の肉体はかなり鍛え上げられつつも動きに支障がない程でよく絞り込まれていて見る人が見ればかなり良い肉体だとすぐにわかるほどだ。

そんな肉体はあちこちが痣だらけで2人の激戦を物語っていた。

2人とも足を少し拵げてそこから殴り合いを始めた。

防御も回避もクソもない。

殴られたら殴り返すだけ、出久が電気の顔面を右拳で殴ったなら電気も同じことをする。

今までのような技術や気、個性が際立っていた戦闘ではなく、シンプルに肉体だけで行う戦闘。

出久も電気も負けない為に踏ん張りが効くように足を拵げてるのだ。

『シンプルな殴り合い!!制するのはどっちだあ!?!』

『互いに防御や回避に使う力も全て拳に使ってますね。これは制した方が確実に勝ちます』

最後の最後でシンプルな殴り合い。

観客は何回目かわからないがここで1番の熱狂で応えた。

「いけえ!どっちも負けるなあ!!」

「緑谷、根性見せろ!!」

「上鳴君、頑張れ!!」

「いけえ、緑谷!漢を上げろ!!」

「負けるな上鳴!漢を見せろ!!」

「上鳴、俺との1回戦で足元が悪いと弱いのを知ったんだから意地でも踏ん張れ!」

「緑谷、顎狙え顎!!」

ヒーロー科の1年もそれぞれが全力で2人を応援していた。

2人は観客の期待に応えたいのかそれとも負けたくない意地なのか1発1発の拳がドンドン大きくなっていき、出久の左拳と電気の右拳がぶつかった瞬間、鈍い轟音が響いた。

○○○

電気・・・僕は電気に会えて良かった。

師匠が新しい弟子として電気を紹介した時、僕は怖かった。また1人になるんじゃないかって不安で怖くてでも電気と喧嘩して笑いあつて1人じゃないってわかつて凄く嬉しかった。

だからなのかな？

電気には全力で行きたいんだ。

嘘をつけない。

自分の全身全霊でぶつかりたい。

それが僕の「親友」^{相棒}に対する敬意だ。

負けたくないし、まだ終われない！

○○○

出久・・・俺は出久の親友で良かった。

そう心から思ってる。最初はオドオドしてて苦手だった。気だつて俺よりも上手いからまだ羨ましく感じる。でも喧嘩して笑いあつてダチになつて心から嬉しかったし胸を張つて誇れる。

出久は自分の事を過小評価してるけど俺にとつてお前は“天才”だよ。

だから負けなくねえ。

全力でぶつかつて勝ちたい。

それが俺の“親友”^{ライバル}に対する敬意だ。

終われない勝つのは俺だ！

○○○

2人の殴り合いは壮絶を極めていた。

口から血を吐いて鼻血を出して顔面に血塗れどころか拳も血だらけになり、その拳で

体とかも殴つてゐるため上半身が血だらけだった。

下手なスプラッターよりも血だらけな状況なのに観客は不思議とその光景に嫌悪しなかつた。

それほど2人の全力を出してゐる姿が美しく見えたのだ。

ゴンツと鈍い音と共にお互いの胸を殴つた2人は倒れる。踏ん張つて立ち上がろうとするが何回もコケてしまうほど限界な2人。

「負けるな!」「まだ行ける!」

「立て!」「諦めるな!!」

「頑張れ!!」「いけえ緑谷!」

「頑張つて!!」「やれ上鳴!」

色々な声援が飛んでくる。

だが2人は立てない。

限界が来たのだ。

そんな2人を亀仙人は黙つて見ていた。応援はしてるが口出しする気はない。そんなのは不粋だと感じてゐるし実際にそうだからいらぬ。師匠は黙つてこの試合を見ていた。

(出久、電気。負けるな)

亀仙人はそう思いながら真剣に2人を見た。

そんな師匠の想いを通じたのか2人は立ち上がった。だがもう少しでも突けば子供でも倒せるかと云うくらいだった。

「うおおおお!!出久!!」

「電気い!!!」

右拳を振るう電気に出久は左拳でカウンターしようとした。だが2人は予想以上のダメージで一瞬ガタついてしまいお互いの拳が頬に突き刺さる形になり、またノックアウトした。

『緑谷選手、上鳴選手!またもやダウン!!お互いに立ち上がろうとしていますがキツソウだ!!』

『死力を振り絞ってますね』

中々立ち上がれない2人。

審判のミッドナイトはダブルノックアウトにするべきか迷っていたがまだ意識のある状態でそれをやると心残りになるだろうと判断し止めなかった。

「うおおおお!!!」

先に立ち上がったのは出久だった。

出久はまだ立ち上がれない電気を見て手を上げた。

「僕の・・・勝・・・」

だが勝利宣言をやる前に出久は倒れて気を失ってしまった。そんな出久を尻目に電気は立ち上がり拳を突き上げた。

「俺の・・・勝ちだ」

なんとも弱い勝利宣言だった。

それこそ審判にも聴こえないくらい小さかった。

そんな電気にミッドナイトは手を向けた。

「勝者、上鳴電気!!」

その言葉に会場は熱狂ではなく拍手で応えた。

2人に対して暖かく優しく応えた。

電気はそれが少しだけ耳に入ると気を失い倒れた。

倒れてる2人がロボット達の持つ担架によって医務室に運ばれていく。

そんな2人を会場は盛大な拍手で祝った。

『勝者は上鳴選手!!素晴らしい激戦でした。技術、個性、そして最後の肉体戦!間違いなく最低でも十数年は語り継がれる激戦でしょう!!』

『今は彼らに対して盛大な拍手で祝いましょう』

『なお、表式はお2人の意識が回復しだい行われますので暫しお待ち下さい』

○○○

出久と電気に拍手を贈っていた各宇宙の神々は良い余興だったと想いながらも限界を超えて戦った2人を讃えていた。

「敗因は腕の長さだな」

「ええ、上鳴さんは緑谷さんよりも少し高い故に少しだけ手が長い」

「最後のカウンターは右手でやるべきじゃったな」

「ピコピコピコ」

「モスコ様曰く『2人のダメージが少なければ結果は逆だった』との事です」

「そりゃあんな状態で同時に殴れば長いやつの方が深く刺さる」

「慢心ではないがああ緑谷という小僧は少し慎重すぎるな。最後にカウンターをしたのも確実に倒す為だろう」

「だがダメージが大きすぎてガタつき結果として同時に殴る事になるとは本人にも予想外だろうな」

破壊神達はなぜ電気が出久に勝ったのかを軽く言いながらも拍手を続けていた。自分達にしてみれば下級どころか子供の兇戯のような物だが破壊神ゆえに敬意を払って

いた。

「やはり最後は肉体が物を言う。あそこまで傷ついてる状態では心理戦の力も拳に使った方が良いからのう」

「しかし、最後の肉弾戦だけがこの決勝戦の全てではございません。最初の方もですが中盤の遠距離戦は相手の上を行こうとお互いに思考し実行するその冷静さや大胆不敵さも考慮しなければ」

「フワ、上鳴さんの速さによる戦闘は素晴らしいですがそれを一つ一つ丁寧に対処していた緑谷さんの精神力は素晴らしいですね」

「ええ、後ほんの少しの差でしたから悔しいと感じるでしょうが彼ならより精進するでしょう」

「2人とも第1宇宙のプライドトルーパーズに入隊させたいですね」

界王神達はそれぞれの戦いの組み立て方に賛辞を贈っていた。それは各宇宙の戦士達もだ。

ベジータやヒットにジレンとかは普段なら拍手はしない。だが限界を超えて戦った2人に短いながらも多少は手を叩いてやった。

〇〇〇

あれ?・・・僕は・・・ここは医務室?

さっきまで舞台に居たはず・・・

そうだ試合は!?

朦朧としていた頭でも試合を思い出してガバツと起き上がると急に肋に激痛が走った!

い、痛い!!

「ぐうう!」

電気の蹴りは強力だな。

無茶苦茶痛い。僕はベツトにまた倒れるように音を立てながら横になった。

「出久、起きたか?」

声のした方を向くと電気が僕と同じようにベツトの上で横になっていた。しかも包帯グルグルだった。

・・・あつ、僕も今気がついたけど一緒か

「電気・・・優勝おめでとう」

「知ってたのかよ？倒れてたのに」

「なんとなくね・・・本当におめでとう。やっぱり電気は凄いな」

僕はそう言うとすぐに電気から顔を背けた。それに対して電気は何も言わなかった。良かった。

だつて「泣いてる」所なんて見せられない。

負けた・・・全力だったのに・・・なんで負けたんだ？なんで僕は最後まで立つてなかったんだ？なんで？なんで？なんで？

ちくしょう・・・ちくしょう・・・

泣き声を出すとみつともないから僕は必死に声を抑えながら泣いた。

○○○

出久が隣で泣いてる。

けど俺からは何も言うことはないな。別にこれで出久がどうなるか思ってたねえ。今はゆっくりさせとこう。

俺はそう思いながら出久に背を向けた。

そしたら涙がポロポロって出てきた・・・

勝った・・・出久に勝った・・・

真つ向からぶつかって勝てた・・・やべ、涙が止まなくなっちゃった。ずっと出久に憧れてた。どんな時でも冷静で気も俺より上手く使えてずっと羨ましかった。

どんなに個性で自分だけの戦い方してもそれでも憧れてた。

出久は俺からすれば天才だ。

今日の気弾だって練気弾よりもキツかった。なんであんなどこぞのアニメのサーカスみたいな事をする羽目になって余計にキツかった。

だから勝てたのは凄く嬉しい。入試や障害物競走みたいな一定のルールがあるやつじゃないので勝てたから本当に嬉しい。

勝てなかつたら多分これから一生出久には追いつけなくなっても知れねえ。

俺は嬉し涙を流しながら暫く横になった。

○○○

出久と電気が泣き止んで暫くするとリカバリーガールと亀仙人が入ってきた。

「漸く起きたか」

「師匠」「じつちゃん」

「全く2人とも無茶しすぎだよ。下手すればそのまま体力切れで命の危険もあったのに
兎に角亀仙豆を食べな」

リカバリーガールが小言を言い、亀仙人は2人に亀仙豆を渡した。2人ともすぐに食
べたが何分怪我也多かったのでそつちは治ったが体力は戻らなかつた。

「その疲れは大事にするんじゃ。亀仙豆にばかり頼つてたら本当に疲れた時の動きが悪
くなる」

「ええ〜」

「これも修行じゃ、よく休みなさい。2人とも素晴らしい試合じゃつたぞ。電気優勝お
めでとう。出久も惜しかったな」

「でも師匠、僕達はまだ追いついていない」

「出久：：そうだな、まだ悟空さんらの足元にもいけてない。休んだらまた頑張るよじつ
ちゃん」

亀仙人はそこで少しだけ笑つた。こういつたトーナメントで優勝や良い成績を残し
たら後の人生で挫折するかもしれないと思つたがどうやら悟空らに修行をつけて貰つ
てる事自体が良い傾向に行つていて亀仙人は嬉しかった。

「良くぞ言つた。主らよりも強いのはまだまだゴロゴロという。それこそ世界だけでは

ない宇宙にもだ。これからが主らの修業が始まるのじゃ」

「はい」

「では会場に戻るぞ。皆が表式を待つておるんのでう」

亀仙人がそう言うのと2人は忘れてたと言つて急ぎ足で戻ろうとするが2人は地面に倒れた。まだそこまで回復してないのだ。

2人はなんとかベツトに手を掛けて立ち上がりゆっくりと歩いて会場に向かう為に医務室を出た。

「随分と無茶する弟子達だね」

「ああ、わしの弟子は全員無茶をする弟子達じゃから」

「長生きしてないと心配で死ねないね」

「全くじゃ」

亀仙人もリカバリーガールも苦笑して呆れつつ、亀仙人は医務室を出てリカバリーガールは事務処理をし始めた。

○○○

「結構しんどいな出久」

「ホントだね。まさかこんな感じで舞台に向かうなんて思わなかったよ」

2人はお互いに支えながら会場に向って歩いていった。

ゲートの方から観客の声が聴こえてくる。

「電気・・・次は負けないよ」

「出久・・・次も勝ってやら」

「そんな強気で良いのかな？今度は僕が圧勝するかもしれないよ」

「それって俺も可能性あるだろ」

「試してみる？」

「やるか？」

互いに顔を向き合わせて離れてる拳を見せあうと笑いあった。そしてそのまま2人はグータッチした。

次も全力で戦う約束として・・・

○○○

『おまたせしました！今年度雄英高校体育祭の1年の全日程が終了しました!!それでは皆様、最後にガチンコトーナメントの受賞式で締めたいと思います!』

アナウンサーが審判のミッドナイトの台詞を取るかのように宣言した。

会場の中央にある表彰台に4人の生徒が乗っている。

3位 心操人使

3位 常闇踏陰

2位 緑谷出久

1位 上鳴電気

4人ともそれぞれ実に爽やかな顔をしていた。

「それではメダル授与よ！今年メダルを贈呈するのはこの人!!」

「ハーハッハッハッハッ!!」

「私がメダルを」「我らがヒーローオールマイト!!」来た〜!!!」

((((被った〜?!)))

会場もヒーロー科の1年も全員そう思った。酷く締まらない感じの雰囲気の流れがオールマイトは持ち前のポジティブさと空気の読め無さで進めていく。

「常闇少年おめでとう。強いなく君は」

「もったいないお言葉」

「ただ相性差を覆すにはもっと肉体面を強化した方が良い。そうすれば取れる選択肢も増えていくだろう」

「御意」

「心操少年おめでとう。普通科でここまでの成績はここ数年は無かったよ」
「ありがとうございます」

「心理戦に関しては確かに素晴らしかったが君も肉体の強化をしたほうが良い。取れる選択肢も増えるだろう」

「はい」

「緑谷少年、最後は惜しかったな。君に関してはもう自己分析を始めてるだろうから個人的な敗因を一つ教えてくれないか？」

「やはり超高速対策の気弾の使い方です。もっと行動を狭めれば次の攻撃を予測出来た筈なのに甘かったのが敗因の一つです」

「うむ、良い分析だ。しかしそれに囚われすぎても視野を狭めるだけだから注意しながら精進しなさい」

「はい！」

「上鳴少年優勝おめでとう。一つ今の気分を教えてくださいませんか？」

「嬉しいです。何よりもこの場に立てた事とダチとここまで戦って負けなかった事に」

「良い感想だ。だがこれはヒーローの養成学校の一行事に過ぎない。君のヒーローアカデミアはまだまだ続いていくから溺れずにカッコイイヒーローになってくれよ！」

「はい！」

「会場にお集まりの皆さん！今回の受賞者は彼らでしたがここに立つ可能性は全員にありました！競い高め合いさらなる先に飛び立とうと次代のヒーロー達の芽は確実に伸ばしています！つて感じで最後に皆様と一緒に合唱下さいませーのっ！」

『プル「お疲れさまでしたー!!!」・・・ええ!?』

「オールマイト、そこはプルスウルトラでしょ!？」

「いや皆疲れたと思って・・・」

何とも締まらない閉会式になったが雄英高校体育祭1年の部はこれで終わった。

○○○

あの後、全員着替えて寮に戻り談話スペースに集まっていた。

消太やブラドが何時もの格好をしつつ、悟空たちも集まっていた。

「おつかれ。明日、明後日は2年と3年の部になるので1年は休校だ。そしてここからは武天老師さんが説明する」

「まずはお疲れ様じゃ。良く頑張った。それぞれが限界を超えて高みに昇ろうとする姿はやはりいつ見ても良いものじゃ。まあ堅苦しい話は抜きにして明日と明後日の修行

は休みじゃ」

「『『ええー』』』?」

亀仙人の言葉にヒーロー科の1年全員の声が重なる。そりやそうだ。どんな時でも修行をやつてきて丸々2日も休みだなんて天変地異の前触れじゃないかと疑うレベルだ。

「頑張つからの。それにゆっくり休むのもまた修行じゃ。よく動き、よく学び、よく遊び、よく食べて、よく休む。これが我が亀仙流のモットーじゃ。明日や明後日は遊び食べて休みなさい」

「『『ヤッター!!!』』』」

大声を上げて喜ぶ1年。

そりやスケールのデカい話になって気が休まなくなつてたから余計に嬉しい。

「差し当たつて注意事項がある。ヒーロー科は特に中継もあつて顔バレしてるので敷地外へ行くのは禁止だ。だがまだ体育祭は2年、3年の部があるから出店や食べ歩きは下手な商店街よりは良いから楽しめる筈だ。後は休みと言えども羽目を外しすぎないよ
うに」

「『『はー』』』』」

ブラドからの注意事項に返事する1年。

皆、それぞれ明日何をしようか話し合っていた。

「まあまあ難しい話も後だ。今は晩飯にするだよー!!」

チチがそう言つて1年は声の方を向くとそこには凄い御馳走の山があった。それこそ中華や洋食、和食まである上に学生大好きバーガーなどのファストフードなどもあった。しかもそれが富豪のパーティで使われるような専用のカートの上に沢山あった。

「頑張つた皆にオラが腕によりをかけて作つた。それにバーガーとかはオラもあんまり作つたことなかったから楽しかっただ」

「!!!」
「!!!」
「!!!」
「!!!」

全員がすぐにコップにジュースを入れて全員に回るようにした。

「よしではここは優勝した上鳴君に音頭を取ってもらおう!」

「よっしゃ任せろ!!」

天哉がそう言うのと電気はいい笑顔で周りを確認して全員がコップを持ったか見ようとしたが身長とかキャラデザの関係上わからないやつも多くて困つてると百が立ち台を出してくれたのでそれに乗って皆を見渡した。

「早く食べたいと思うからグタグタグ言わねえ。今日はお疲れ様!!来年も負けねえが今は楽しむぞ。乾杯!!」

「「乾杯」」

パーティーが始まった。

それぞれが楽しく和気藹々と話してる中で電気は唯一手玉を取られた柔造の所に
行った。

「骨抜」

「上鳴」

近くにいた面々はどうなるかわからない雰囲気困惑していた。だが・・・

「次は絶対にド肝抜かしてやる」

「生憎ともう抜かされ続けてこれ以上は肝が無いよ」

「んだと（笑）」

「優勝おめでとう」

「ありがとう」

2人とも笑い合いながらグラスをカランツと当てた。

そしてそのまま軽く会話を初めて心配だった周りの面々もパーティーを楽しんでいく。

出久は踏陰と話していた。踏陰としてやはり何時から畏に嵌められたのか知りたい
からだ。

「何と最初のかめはめ波から嵌められてたのか」

「うん、あれを見て弾けると思ってくれればいけると思ったから」

「クソ、切り札を1つ潰せたと考えるんじゃないかった」

「でもゆつくり来られたから冷や汗は止まらなかったけどね」

「やはり接近戦を上げるのが良いか・・・今度教えてくれないか」

「勿論！」

新しい約束をする出久と踏陰。

亀仙人はそんな様子を見ながらこの日常が続けば良いのにと心の底から願っていた。

○○○

数時間前、フリーザの宇宙船は決勝の結果を見てすぐにモニターを消した。フリーザや桃白白、そしてフリーザよ教育係だったベリブルは実に楽しそうに見ていたが戦闘がからつきし駄目なキコノは少し冷や汗を欠いていた。

「なかなか良い余興でしたね。さて我々もビジネスを続けましょう。ベリブルさん彼はどんな状態ですか？」

「はい、食堂で食べてる最中、絡んできた戦闘タイプの兵士を3人無力化してます」

「殺したのですか？」

「いえ、動けなくなってるだけです。恐らく個性かと」

「・・・その3人は辺境の銀河に左遷です。昔なら消しましたが今はどんな小さな戦力も欲しいので代わりに辺境の銀河の戦闘員3名をこちらに」

「第7宇宙に戻り次第手配します」

「お願いしますよ」

フリーザがベリブルにそう言つてポッドに乗りながら司令室を出る。桃白白もそれに着いていく。

暫く進んでいくとフリーザはある部屋に入った。

そこには大柄の男がいた。

「AFOさん、気分はどうですか？」

「絶好調だよ。フリーザさん」

そいつはオールマイトの宿敵であり、全ての個性を奪い与える事が出来る存在AFOだった。

「貴方の弟子はどのような状態ですか？」

「弔は今は修行中だよ。彼も優秀だからドンドン強くなっていつてるよ。そしてドクターから気と個性の関係は思ったよりも深い繋がりがあるらしい。君のところのアボ

とカボという戦闘員が弔の個性を気のバリアで防いだからね」

「おや、それはそれはさぞかし死柄木さんもシヨックだったでしょう」

「久しぶりにダダを捏ねてたよ。けどそれで良い」

「死柄木さんは任せます。では失礼しました」

フリーザと桃白白はA F Oに軽く頭を下げると部屋から出て通路を進んでいく。桃白白は緊張していたがそれと同時に落ち着いてもいた。

長年の殺し屋としての経験からか殺気を受けても動じないが自分よりも明らかに強いには緊張する。

まさにこの場の空気はその中間だった。

「そう言えば私がなぜA F Oさんや破壊神と手を組んだのか知りたかったのですたね」

「ええ、そうでございます」

「まだデータが足りませんが……あの緑谷出久さんという少年は……恐らくサイヤ人の遺伝子を持っています……私、サイヤ人が大っ嫌いなんですよ」

フリーザのその大嫌いという言葉の時に放たれた殺気は桃白白の動悸を加速させた。

ブルマの買い物

雄英体育祭2日目。

ベジータは非常にイライラしていた。

最初はフリーザをぶつ飛ばさないと行けないから悟空やピッコロにクリリン、天津飯と共に来たら自分達はぶつ飛ばせずその役目は亀仙人が教えてるまだ15、16のガキとなれば苛つく。

だがベジータも亀仙人に力の大会で非常に認めたくはないが助けられた。別に亀仙人を下に見てるとかではなく助けられた事が凄く屈辱であり、あれで落ちた場合自分は新たな世界へ突き進めなかったと思うと多少の感謝もしてる。口には死んでも出さないがちゃんと感謝はしていた。なのに・・・

「ブルマさんこれとかどうですか？」

「あら、結構良いわね。次はこれにしましょ」

何故かブルマとブラだけでなく三奈や透といった面々と一緒に買い物していた。

雄英体育祭はオリンピックと呼ばれるかつてのスポーツの祭典に代わる日本の風物詩と化した行事。最初は地域の活性がメインだった出店も今では一流企業がプレハブ

の店を構えて3日間臨時店を開いている。

それは何も客目当てではない。

様々な個性持ちが雄英高校にはいるのでそういった服飾業界の人間はニーズに応えられるようにする為に開いていたり、雄英体育祭で上位の面々でスタイルが良ければヒーローかつモデルとして使えるからだ。

現にメディア系で活躍してるウワバミなんかは雄英高校出身ではないがそれなりの養成学校出身なのでモデルとヒーローを兼任してる(ただし最近はメディア露出が多い)

そんなわけで服飾業界だけではないが体育祭はそういう数多の業界のスカウトも兼用されて行われてる。

因みにとある3年の女子が初日にモデルも兼用しないかとスカウトされてたが断った。

で、ベジータは買い物好きでもあるブルマと何故か付いてきた三奈や透と一緒にいた。

「おい、ブルマ」

「なんで芦戸や葉隠も居るんだ？」

「私を手伝ってって誘ったの。カプセルコーポレーションも服飾業界に進出してるとけど頭打ちみたいな感じで若くてカワイイ娘達と一緒に回れば何かアイデアが出るんじゃないかな〜って」

「だからなんで俺が服をコロコロと変えないといけないんだ!？」

そうベジータはブルマと三奈と透の3人によって試着室から出して貰えずコロコロと服を着替えては3人に見せる羽目になっていた。

因みに今の格好はピンクシャツに黄色いスラックスと昔ブルマに渡された服とほぼ同じ感じだった。ブラなんかそれを見て笑っていた。

「ベジータさん、かっこいいです」

「普段の怖い感じが薄れて親しみやすいですよ」

「やかましい!」

「これから年下に怒鳴らないの・・・中々良いわね。じゃ次はこれね」

ブルマは新しい服をベジータに渡す。

ベジータは何か言いたげだったがこうなるとブルマには敵わないので呆れながら服を着替えた。

今度は黒シャツに革ジャンにジーパンだった。

「相変わらずこういう服は抜群に似合うわね。三奈と透はどう思う?」

「カッコいいですけど怖いです」

「似合いますぎてちよつと近寄りがたいです」

「なるほどね・・・じゃ次は孫君と同じ山吹色で」

「何!? カカロットと同じだど!?」

「そうよ」

「冗談じゃない、なんで俺がカカロットと同じ色を着なければならん! 死んでも断る」

「じゃ、重力室を壊すわよ」

「何、重力室を・・・壊す・・・だど!?」

「ええ、母さんがお菓子専用の料理部屋がほしいって言つてたから」

ブルマがそう言うのとベジータは無言で悟空と同じ色である山吹色の服を震えながら取った。ベジータは理解していたのだ。ブルマの母親のマイペースさは絶対に勝てないところまで何度か話してもまるで動じない姿がベジータは苦手だった。父親のブリーフ博士はまだ色々通じやすいが母親のマイペースさは異次元レベルだった。

ベジータは内心葛藤しながらも何とか頑張つて悟空と同じ色の服を着た。

それは紺色のシャツに山吹色のパーカーに少しダボついてる深緑のズボンと先程までのきつちりした感じとは違っていた。

「案外似合うわね」

「ブルマさんこれにしましょう！」

「カツコよさも親しみやすさも良い感じですよ！」

「そうね、これにしましょう。それじゃベジータ、今日はその格好で居てね。でないと重力室が無くなるわよ」

(なっ、くっ、クソつたれ!!!)

ベジータは内心叫びながら絶望に打ちし枯れる事になった。

○○○

山吹色の服のせいで終始不機嫌なベジータとブラを抱えたブルマ。そして2人の買い物で買った品を持つてる三奈と透。

ブルマは最初ベジータに持たせようとしたが三奈と透が進んでやってくれた。というかこれ以上ベジータを不機嫌にさせるのは不味いと直感が働いた。

体育祭用に設置されたベンチ・テーブルに座る5人(ブラはブルマが抱えてる)

ベジータはあまりの不機嫌さに周りを睨んでいた。今の服装を見たものは抹殺する

かのように鋭い目つきだった。

「いやあ、2人とも今日は本当にありがとう」

「いえいえ、私も役に立てて良かったです」

「それに楽しいです」

「私もよ。この人つたら普段は戦闘服ばかりでこうしてファッションショー出来たのは良かったわ。山吹色が似合うの分かったし」

その言葉にベジータはまさか戻っても着せるつもりなのかと少し震えた。

「お腹空きましたね。何か買ってきますね」

「三奈ちゃん私も行く」

「だったら私が行くわ。折角の休日を使ってくれたんだからそれくらいはさせて」

ブルマはブラを持ったまま立ち上がろうとするがベジータがそれを止めた。

「俺が行く。欲しいのは何だ？」

ベジータはブルマから財布を貰うとそう言った。三奈と透はベジータのそんな姿に呆気を取られてるがブルマは慣れた感じで出店にあるたこ焼きを頼んだ。ベジータはなんとも不機嫌そうな感じでそこに向かっていった。

「全くもうちよつと愛想が良かったらなあ」

「え!?!ベジータさんが行った!?!」

「こういうのやらなさそうだったの!?!」

三奈も透も結構酷い事を言ってるが2人の知ってるベジータは家庭的な男ではなく、いつも修行で容赦なく徹底的になる怖い人というイメージなのだ。

「ブラが居たからね。ああ見えて結構家庭思いなのよ」

「そうなんですか?」

「ええ、さて2人は付き合って貰ったお礼をしなくちゃね。何かやって欲しいのとかある?」

ブルマがそう言うのと三奈が元気よく手を上げた。

「はいはいはい、私。ベジータさんとの馴れ初めを聴きたいです!この前聴いた時はあまり聴けなかったから」

「私も聴きたいです!」

ブルマは別にそんな良い話ではないと前置きした上で話始めた。

ベジータが仲間を連れて最初は敵として地球にやってきた事とその時に自分の元カレや仲間を殺した事、元カレや仲間を蘇らせる為にナメック星に行った事、ブルマはここで初めてベジータにあつて脅された事をあつけらかんに話した。

「ええ!?ベジータさんってそんなに悪い人だったんですか!?!」

「もう極悪よ。今でもあんまり中身は変わって無いんじゃないかしら？」

「そんな最悪な状態からどうやって結婚まで!？」

ブルマはそこから話を再開した。ナメック星のドラゴンボールでピッコロが蘇った事を話した。

「そんな魔法みたいなのあるんですか!？」

「ええ、ちよつとお肌の手入れに使うには最高なのよ」

「ええー勿体なく感じます」

「あんた達も年取ったら分かるわよ」

ブルマは若い肌を持つてる贅沢さをまだ知らない三奈や透に小言を言いつつもまた再開した。

ピッコロが蘇った事で地球のドラゴンボールが復活。

またそれを使ってフリーザ軍に殺されていたナメック星人や死期が速まったナメック星人を蘇らせた事で少しの間だけナメック星のドラゴンボールが復活し、それを使って悟空とフリーザ以外は地球に転送された事。そして悟空を蘇らせるつもりが実は生きていたのでベジータは残った宇宙船で悟空を探しに行った事。ただそれでも見つかから結局戻ってきて自分の家で少し休憩していたらフリーザがやってきたが未来から来た自分の息子が倒した事、そしてその時に人造人間って新しい敵が現れる事を教え

られベジータが自分の家に住み込みながら3年間鍛えた事、そして自分はその間に元カレとは分かれてなんとなくほっとけなかつた事、そして子供であるトランク스가出来た事を言った。

「これが馴れ初めよ。ね、ムードもクソも無いでしょ」

「なんか壮絶過ぎて凄い話でした」

「どうかベジータさんが酷すぎて・・・」

ヒーローを目指して三奈や透にとつて元悪人であるベジータの過去は簡単には受け入れられる物ではなかった。それを聞いたらブルマは大笑いした。

「でしよ？本当に酷いわよね。けどそんなあの人でも今は結構マシなのよ。父親としても頑張ってるしね」

「・・・なんか素敵です。そうやって信頼出来るブルマさんも変わろうと頑張ってるベジータさんも」

透の言葉に三奈も頷いた。

そんな事を話しているとベジータがたこ焼きを3つ袋に入れて戻ってきた。

「あら、早かつたわね。自分の分は買わなかつたの？」

「今はいい、それにさつき食堂のやつが俺とカカロットに3度目のリベンジと言ってきたからそっちに行ってくる」

ベジータは果敢にもサイヤ人の異次元の胃袋を満たすことをまだ諦めてなかったランチャツシユからの挑戦を快く受けた。何故なら腹が一杯溜まるからだ。

「ベジータさん、聞きたいことあるんですが」

「何だ？」

「ベジータさんってブルマさんのどんな所が好きになったんですか？」

透からの質問にベジータは素でビックリした。

こんなこつ恥ずかしい事を平気で聞かれるのとなんでそうなったのか先程からいるブルマの顔を見るとニヤニヤと笑っていた。

「どうしたの？美人で優しい妻のどこが好きになったのか教えなさいよ」

「自分で言うのか・・・そんな恥ずかしいこと言えるか」

ベジータはそう言うのと逃げるように去った。

はぐらかされた事に三奈と透は不満気だったがブルマはそれを見ながら笑っていた。3人はその後、たこ焼きを食べながら買い物続けた。

一方、ベジータと悟空はランチャツシユからの挑戦を見事に受けて完食した。また負けたランチャツシユはショックのあまり暫く寝込んだ。

煩惱3人組の奮闘

峰田実は一ロー科の1年A組であり、座学の成績も優秀である。だが元来のモチベーションと性欲のせいであまりそれがわからない残念さがあった。

そんな実は最近、欲求不満だった。

理由としてはまず持ってきたエロ本やAVが入学したその日に廃棄された。

そして秘蔵してた物も廃棄された。

以来、毎日クタクタになってるおかげで致す体力が無いのが幸いだったがここ最近では体力も莫大についたせいで溜まっていた。

そして2日間の休暇。

実は完全に莫大になっていた体力を消費しようと考えた。一応妄想でも出来るがどうせなら見ながらやりたい。

実はどうしようかと考えた。

ネットに上がってる体育祭の光景でやるかと一瞬考えたが流石にそれは色々と萎えて出来なかった。

実は昨晚のパーティが終わってそういった事を考えた後でどうしようかと悩んでた

ら、亀仙人と電気がやってきた。

「爺さんに上鳴じゃねえかどうしたんだ？」

「いやじつちゃんから大事な話があるって事で呼ばれたんだ」

実は一先ず2人を部屋に入れて粗茶を出した。

一息つくくと亀仙人が口を開いた。

「実は体育祭の出店の中には実は“如何わしい物”を売りつける店があるらしい。そこでじゃ、2人とも・・・明日、その店を探すのを手伝ってくれ」

2人はズッコケた。

何を言うかと思えばエロ本を探すのを手伝ってくれとは・・・気が微妙に張っていた2人は脱力してしまった。

「どうしたんじゃ？喜ぶと思つたのに・・・」

「じつちゃん。そりや気が抜けるよ」

「爺さん、今までの雰囲気ですく言えたな」

「何を言うか！ピチピチギヤルはわしの生き甲斐じゃ！それに主らだと色々問題になるかも知れんがわしだと買えるのに・・・要らんと言うことでもいいんじゃな？」

実と電気の行動は早かった。

有無を言わさぬスピードで即刻土下座した。

「お願いします。どうかお恵みを」
「うむ」

○○○

こうして3人はエロを求めて出店を探すことにした。

それが昨日の話で今現在3人は迷っていた。

「どこにもねえな」

「やっぱりガセネタだったんじゃない？」

「いや、ワシの探究心は真実と申うておる！まだまだ探すぞ！」

実と電気は亀仙人の底なしの欲に少し引きつつ、協力する。なぜなら2人ともエロには人一倍興味があるからだ。

バレたら退学とかも含めて色んな意味でヤバいがそれに対してスリルすらも感じていた。

だが流星にこれだけの大きなイベントかつ現役のヒーローが見回りをしてる状況でそんなのを売る輩は見つからない。

3人とも諦めかけたその時、亀仙人のサングラスがキラリと光った。

「こつちじゃ、こつちに行けとわしの本能が騒いどる！」

亀仙人が持つてる杖を掲げながらある方向に向けて歩き始めた。実と電気は何処からその自信が来るのか疑問に思いつつも付いていく。

出店で人混みの中を通つていくと駐車場に出た。

そして亀仙人が自分の本能に従いながらノシノシと歩いていくとそこにはトレイラーが止まってあつた。しかもかなり大きなTV局のトレイラーだった。

「じつちゃん、幾らなんでもこれはマズいつて」

「爺さん、これは本気で怒られるやつだ。オイラ、退学だけはしたくねえ」

「何を言う!? 主らはそこに求める物があるのにそんなのに怯えて手を伸ばさぬのか!? そんな情けない育て方をした覚えは無いぞ!」

「オイラはあんたに育てて貰つた覚えはない! せいぜい2、3ヶ月くらいだ」

3人はトレイラーの近くで騒いでるとトレイラーのドアが開いて中からディレクター風の男が出てきた。

「うるさいぞ! 中継の邪魔だ!」

「す、すみません!!」

怒鳴られたのですねに謝る電気と実。

しかし亀仙人は平気な顔をしていた。

「お主、ここに如何わしい物を売っているな。正直に述べよ。わしは心を見る個性の持

ち主じゃ」

実と電気は最悪退学になると直感した。

雄英生徒がTV局員と問題行動。

しかももしそれでお咎めなしの場合、TV局からやいのやいのと言われて顔を晒されなくてもネットでは住所を特定され、本名がバレて根も葉もない噂や罵言でネットは溢れ炎上し、家の壁には落書きをされて近隣トラブルになって住めなくなり、親や仕事を辞めざるを得なくなって引越すと同時にくる一家の崩壊。そして両親は離婚して自分は疎まれて捨てられてホームレスになり、騒動のせいで就職できず社会を憎むようになってヴィランに墜ちて犯罪を繰り返し、やがてそれでも首が回らなくなって自殺するんだと非常にナイーブな妄想をしていた。

「・・・あ、あります」

しかしその妄想はその一言で無くなった。

それに目当ての物が手に入る事で2人は天にも昇る心地になっていた。

「うむ、わしにも1つくれんかの？内緒にしておくから」

「・・・なら、その後ろにいる2人は外してくれ」

「わかった」

実と電気はその言葉を聴くと有無を言わずにとっと離れた。これから目当ての物

が手に入るゆえにウキウキしてる亀仙人を睨みつつ、従った。

○○○

暫く経つても全然出てこない亀仙人に2人はかなり苛立っていた。1時間過ぎても出てこないののでどれだけ自分1人で楽しんでるのかを考えるとより腹が立っていた。

「君達、ここに何をしている？」

だから後ろから来た人に気づかなかった。

「ギャ!？」

2人はビツクリしながら後ろを向くとそこには若手ヒーローのシンリンカムイと新人ヒーローのMテレディ、そして中堅のデステゴロがいた。

「げっ!? デステゴロ、シンリンカムイ、Mテレディ!!」

2人はガチの現役ヒーローに見つかってしまった事を焦り、ビツクリした。

「ププ、ヒーローなのにギャ!？って、色んな意味で残念ですね〜センパイ」

「貴様、いい加減にしろよ? そろそろ本気で怒るぞ」

「おいおい、お前ら若いもの同士仲良くしろよ」

3人は気軽に話していた。しかし、実と電気は焦った。何故なら2人は亀仙人と共に

如何わしい物、つまりエロ本を買いに来たのに警備をやってるヒーロー達に見られたのだ。しかも雄英高校内で色んな意味でアウトだった。

「あ、あの。デステゴロ達は何故ここに？」

「ん？ああ、実は雄英高校内で如何わしい物を買ってる輩が居るってんで見廻りにな……つで2人はなぜここにいるのかな？」

デステゴロを含めた3人の目が変わった。完全に獲物を見つけたような目つきになり、電気も実も萎縮する。

（やべっ、こんな白昼堂々とエロ本をしかも非正規の方法で手に入れようとしてるってバレちまう）

（終わる、オイラの桃色の青春計画が灰色のズンドコになっちまう！）

「さつき、俺達を見てげっ!?!って言ったのはなぜかな？」

デステゴロの言葉に実と電気は余計に固まった。冷や汗が出まくる。

「まさか、1年の優秀選手がそのような事はしないよな？」

「も、勿論です」

「なら何故、驚いたのかしら本当なら私の目を見て言えるよね？」

Mテレディは電気の目をじっと見た。電気は気まずさから目を逸らす。

「目を逸したという事は気まずい証拠よ。何を隠してるのか言いなさい」

Mtレディの言葉に実も電気も年貢の納め時かと腹を括って言おうとした。

「二度と来んわ!!」

その瞬間、トレーラーの方で怒号が聴こえたのでそっちの方に全員が向くと亀仙人が苛立ちながらこつちの方に歩いて来る。

「じつちゃん、どうしたんだ?」

「電気い!ワシは悔しい!本能に従って如何わしい物を手に入れる筈があんなのに引つかかるなんて悔しすぎる!!」

「爺さん、今は不味い!」

亀仙人が嘆いたのを見て3人のヒーローはトレーラーの方に向かった。実と電気はこれからたつぷりと指導される事に怯える。

「ああ、これで優勝したのに永遠にヒーローになれない暗い未来が始まるんだあ・・・」
「終わった・・・オイラの青春・・・」

しかし、そんな2人に対して亀仙人は落ち着いていた。

「2人とも落ち着くのじゃ。あれはそんなに良い物では無かった。わしもあまりのシヨックに暫く気絶しておったくらいじゃ」

「「え?」」

2人はその言葉に呆気を取られるとトレーラーの方はヒーロー達によって制圧され

ていた。

そしてトレーラーの中から出てきたのはエロ本ではなく『異能』と付けられた差別思想たつぷりの禁書であった。

著者の名前はデストロと書かれていて彼が逮捕される前のテロリストとして活動する前に書かれた本であり現在は危険思想と無個性差別による社会的影響も考えて禁書になってる本だ。

「・・・エロ本じゃなかったのか？」

「ガセネタだったと言う事じゃ」

「オイラ達・・・何やってたんだろなあ」

○○○

あの後、無事に目当ての輩を逮捕したデステゴロ達は亀仙人を含めた3人に事情聴取をした。

そしてエロ本目当てだった事も言ったら大爆笑された。

そもそも別にエロ本くらいでそんな事をするわけもないと指摘されて3人はやっと気づいた。

雄英高校に入学してエロ本を燃やされてから3人は勘違いしてたがそもそもそんなんで逮捕と言う展開になるほどの物でもない。

デステゴロ達から大爆笑された3人はすぐに解放された。

「なあ、今気づいたけどこれって爺さんが外で買ってくれば良かっただけの話じゃ」「あつ」

「確かにそうだな。俺達・・・今日一日何やってんだ？」

「これも青春じゃ」

亀仙人が良いこと風に纏めようとしたがそんなんでは纏められないほど3人に疲労感が来てなんとも残念な1日になった。

その後、亀仙人が外でエロ本を買って3人は実の部屋で晩飯になるまで読んでた。

3人とも1日中無駄に過ごしながらかも溜まっていたので大いに感動しながら読んでた。

出久の葛藤とお茶子とチチ

出久は部屋で黙々と自己分析をしていた。

(切島君との戦闘で下半身の踏ん張りがないと拳に力が入らず、硬化系の個性には不利だったのを考えるとやっぱり腕の力を上げる方が良いのか？けどそれよりも気弾の方が・・・いや防がれる可能性が高い。どうやればあれに対処できるのか、真正面勝負や顎狙いは危なすぎる。硬い上に向こうは威力が高いから多分6対4くらいで分が悪い。そう仮定すると攻撃される前に何とかしないと・・・難しいぞ)

切島戦の時に露呈した下半身の問題をなんとか対処しようと頭を悩ましていたが一向に良い方法が思いつかなかった。

「うーん、やっぱり難しいな」

出久はそう言いながら部屋を出た。

いつもの分析は個人的な趣味も入っているが折角の休みなのでそれは程々にして出久は談話スペースに行くとも居なかった。

折角の休みかつプログラムを終えた一年生にはもう完全に祭りなので皆、出店に行ったり、2年生のプログラムを観に行ったりと楽しんでいた。

「僕も皆と行けば良かったなあ」

電気以外友達ゼロの生活をしてきた出久は完全にタイミングをミスったのと趣味を優先したのでまた一人になっていた。

出久は気を取り直して、自分も出店に行こうと思ひ部屋に戻ろうとすると勝己が上からボデイバッグを背負って降りてきた。

「かつちゃん」

「なんだ、お前は上鳴とかと一緒にじゃなかったのか」

「電気は峰田君と師匠と一緒にだよ」

「いつものかよ」

「かつちゃんは皆と行かなかったの?」

「ああ!?!さつきまで寝てたんだよ!文句あるか!?!」

「いや別に・・・ねえ、これから出店に行くなら・・・一緒に行かない?」

出久は勇気を出してそう言った。昔に比べたら互いに壁は薄くなってるが出久は勝己にやられた事を忘れたわけではない。だがそれに囚われてる自分からは脱却したいので思いつきで誘ってみた。

勝己は暫く出久を鋭い目つきで見た後、談話スペースのソファに座った。

「5分で降りてこい。でねえと置いてく」

勝己の返事に出久は驚き固まった。

「さっさとしろ！本気で置いてくぞ!!」

出久は勝己に怒鳴られたので急いで準備する為に部屋に戻った。

部屋着から外行き用に着替えてリュックを背負って準備した。この時間わずか3分。せつせと談話スペースに降りるとちゃんと律儀に勝己は待っていた。

「かつちゃん、遅れてごめん」

「・・・行くぞ」

（昔なら『遅っせんだよ！クソデク』って罵倒してたのに

・・・本当が変わろうとしてるんだなあ・・・）

出久は勝己の変化に色々と感じていた。

まだ苦手な部分はあるが本気で変わろうとしてる姿を見て自分も頑張ろうと決意した。

○○○

外は賑わっていた。

昨日のトーナメントでの盛り上がりもあり、より賑わっていた。2人は一緒にいるの

は良いが会話がなかった。

(き、気まずい・・・な、なんか言い出さないと・・・)

出久はこの状態を打破しようと色々と考えたが何を言っても罵倒された記憶しかなく言い出しにくかった。

そのまま続くかと思つたが不意に勝己が止まった。何かと思つて勝己が見てる方を見るとクリリンがアクセサリーショップの前で悩んでいた。

「何やつてんだ？」

「困つてるみたいだね・・・行く？」

「・・・このまま当てもなく回るよりはマシか・・・」

出久と勝己はそのままクリリンの方へ向かった。

「うくん、どうしようかな・・・ん？出久に勝己、どうしたんだ？」

クリリンは悩みながらも気で2人が来たことを察知した。出久は相変わらず凄く便利な技と思い、勝己はまた察知されたと苛立った。

「いえ、クリリンさんが悩んでるのが見えて、どうしたんですか？」

「いや、18号さんとマーロンにお土産でも買おうかなって考えたけど俺つてこういうアクセサリーの類は苦手で悩んでたんだ・・・そうだ！2人も暇なら考えてくれねえか、こういうのつて決めにくくて」

「自分で決めねえと駄目だろが」

クリリンの言葉に勝己は間伐入れず答えてそのまま去ろうとしたが出久は止まっていた。

「おいさつさと行くぞ」

「でも困ってるし、それにお世話になってるから・・・」

「バカ、そういうのは自分で選んでこそ価値があるに決まってるだろうが」

「それはそうだけど・・・ちよつと待って、アレ見てー」

アクセサリーショップを一目見た出久がはつきりした声で勝己を止めた。

勝己はうんざりしながらも出久が指差した方を見るとポスターが貼ってあった。

『当店の品物をお買い上げのお客様には本日限定オールマイトヤングエイジ風ブレスレットをプレゼントします』

ポスターにはそう書かれていた。

出久と勝己の目が変わった。2人ともオールマイトのファンであり、出久は諸にフィギュアを始めとした数々の限定品を買うほどのオタク、勝己は出久ほどでは無いにしろタオルとかマグカップとかそう言った実用性もあるものや小物は買っていた。

(ほ、欲しい！)

出久はキラキラとした目で見たが勝己は欲しいと思いつつも顔には出さないように

していた。出久と同じ行動は癪に障るからだ。

「かつちゃん、行こう！」

「……わーったよ」

2人はクリリンと一緒にアクセサリーショップの中に入った。

○○○

「いやあ、2人ともありがとな。助かったぜ」

「いえ、僕は自分の欲しい物があつたので……」

クリリンは2人に助けてもらいながらも18号とマーロンに似合う物を買えたので満足だった。出久もヤングエイジ風ブレスレットにうっとりしていて勝己はニヤけ面を見られるのが嫌なので顔を強張らせてより機嫌が悪そうに見えた。

「勝己は機嫌悪そうだけど大丈夫か？」

「ああ!?!どう見たら機嫌悪く見えんだよ!?!」

「……充分悪そうに見えるよ」

「黙れクソナード!!」

出久はクソナード呼ばわりされたが平気だった。何故なら本人に自覚があるからだ。

「おい、落ち着けて。そうだ！俺がなんか買って来るよ。何か欲しいのあるか？」
「自分で買ってくるわ！」

勝己はそう言つて自分で買いに行つた。

これ以上いるとニヤけ面が出てきそうだったからだ。

「うゝん、悪いことしたかな？」

「大丈夫ですよ。嫌な奴だけど照れ隠しが下手なんで」

「良く知ってるな・・・昔からの知り合いか？」

「家が近所だったんで」

出久の言葉にクリリンはキチンと座り直して出久と向き合つた。

「聞きたいんだが、出久と勝己の仲が悪いのってなんでだ？」

「え？」

「だって出久つて勝己に対しては微妙によそよそしいから気になつてよ。もし良かったら教えてくれるか？」

クリリンは優しい声でそう言つた。

出久はもう乗り越えた事だからと自分を納得させて勝己との関係を話した。

常に凄かつた事で一番だった事、自分が無個性でイジメられてた事、デクと呼ばれ続けていた事、けどそこから修行して最初の戦闘訓練で勝つた事で乗り越えた事を赤裸々

「勝己と一緒に買い物してたのもそんな自分を変えたくてか……出久、無理して体を壊すなよ」

「はい……でもこのままじゃいけない気がして……」

「……自分が後悔しないならそれで良いけど体を壊したら元も子もないぞ。心配してくれてる人も居ることを忘れちゃ駄目だ。忘れるなよ?」

「……はい!」

出久は少し涙が出てきそうだったがそれを堪えて確りとした返事をクリリンに返した。

クリリンもそれで嬉しくなったのか笑うと勝己が色々な食べ物を持って帰ってきた。

「凄い買ってきたな」

「ああ!? 3人で食べるんだから当たり前だろ」

「相変わらずそこら辺は……人がいいね」

「……今、みみっちいって言おうとしたな?」

「自覚あるんだ」

3人はそうやってワイワイしつつ、勝己が買ってきた食べ物を食べた。

「辛あ〜!!!」

但し、激辛であり出久とクリリンは火を吹いた。

〇〇〇

麗日お茶子は元気だった。

体育祭では負けてしまったがこれから鍛えようと決心していた。そこら辺はさっぱりしていた。

今日は折角の休みなのでお茶子は少しだけ羽目を外して楽しんでいた。

梅雨や響香、百と一緒に楽しく出店を回っていた。

「こここのたこ焼き美味しいね」

「確かに美味しいわ」

「焼いてる人がヒーローとは思わなかったけどね」

「ファットガムさん、警備に来ていた筈では？」

4人はなぜかたこやき屋をやっていたファットガムからたこ焼きを買って食べていた。

満喫し終わるとまた新しい出店を探す。

祭りのようなタイプの出店からプレハブの店を構えている所まで沢山あり、楽しく回って遊び歩き、気がつけば昼も過ぎて夕方になっていた。

「うくん、遊んだ！楽しかったね」

「そうね、私も楽しかったわ」

「ウチもヤオモモは？」

「楽しかったです。私、あまりこういった事をしてこなかったので新鮮でした。友達と遊べて嬉しいです」

百の純粋な発言に嬉しくなったのか3人は笑ってそのまま寮に戻った。

寮に着くとお茶子は自分の部屋に戻ってベッドの上に横になった。

そんな風に気楽にしていると携帯が鳴ったのでお茶子は電話に出た。

「もしもし、お父ちゃん。どうしたん？」

「いやー、昨日の今日でお疲れって言いたかったんやけど寮やから行けなくてな。ホテル代なんか無いし、寂しくしとると思って」

「んなことないよ。もー、心配性やな。お父ちゃんの方は元気？」

「おう、元気やで。お茶子もヒーローになるために元気だな」

「それ昨日も言うたよ」

「あれ？そうだったけ？」

「氣いつけてな。ヒーローになってハワイに行かせるまで」

「はは、楽しみにしてるで」

電話が終わり、お茶子はなんとなしにベランダに行つて外を見てみた。夕方と夜の中間辺りで薄暗かった。

そのまま休みなのでなんとなしに外を見ようかとのんびりしていると寮の外で悟空と秀子が戦っていた。

(?!?)

「お茶子は一体なんなのか氣になつて、ベランダから自分に浮かせて降りて近くまで行つた。」

(何なんかな?まさかの夫婦喧嘩!?けどそんな怒号とかも飛んでへんしな)

うぐんと悩みながら近くに行つて物陰から見のお茶子。

そこで見たのは、悟空に攻撃してるチチだった。しかもかなり強い蹴りと突きをしてた。悟空はそれを軽くあしらっていた。

「チチ、オラそろそろピッコロとかベジータとかとやりてえぞ」

「駄目だ。ピッコロさやベジータさんとやると絶対に迷惑が掛かるからオラで我慢するだ」

「ちえ、チチはケチだな」

「悟空さ、いい加減にしねえと飯抜きにするだよ」

「いい!? それは嫌だ! わかったよ」

悟空とチチは夫婦喧嘩ではなく、悟空の欲求不満の解消をしていただけだった。

お茶子はそれを見てホツとしつつ、その様子を見ていた。8割が暇なのが理由でもう2割はチチの動きが綺麗だったからだ。

(綺麗だなあ)

「お茶子も見るんだったら出てきた方が良さぞ」

悟空がチチの相手をしながらお茶子の方を向いて言った。言われたお茶子はドキツとしながらも物陰から出た。

「あら、お茶子ちゃん。どうしたんだ? そしたら所から見て」

「い、いや〜・・・それよりチチさんって凄く動けるんですね! 綺麗です」

「いやだなあ、オラも面白い歳なのに若い子から綺麗だなんて」

お茶子からの言葉にチチは純粋に照れた。悟空は言ってくれず、悟飯や悟天には言われるがやっぱり自分よりも若い子に言われるのは嬉しかった。

「そうだ。お茶子もやったらどうだ? 結構楽しいぞ」

悟空の提案にお茶子は驚き、そしてチチは反対した。

「ダメだ悟空さ! お茶子ちゃん達は、今日休みなんだ! 疲れさせてどうするだ!? オマケ

に悟空さは加減が下手なのにそつたらことさせるか！」

チチは悟空に詰め寄って大声で叱るが、悟空は一切顔色を変えなかつた。段々と悪くなってくる雰囲気の中でお茶子はこの雰囲気をなんとかしようと言言ってみた。

「私、やってみたいです。悟空さんに教えて貰えるなんてラッキーですし」

「待つだ！悟空さは見ての通り、加減が下手でオマケに人の事なんて全然気にしないんだ。悟空さとやつたら絶対に危ないだ」

「チチ、酷えぞ」

「酷えのはどつちだ？」

「だったらチチがやるのはどうだ？別にチチもそう簡単にはやられねえだろ？」

「そりやまあそうだけどさ」

お茶子はこの悟空の案に首を縦に振つた。

先程から見ていてチチの動きが綺麗だった事と悟空がヒートアップしてくると止まらない事は良く知っていたからだ。

こうしてお茶子とチチの軽い手合わせが始まった。

2人とも互いに向かい合つて構える。

「それじゃ、5分で終わりだべ。晩飯の準備もあるから」

「はい、よろしくお願いします」

こうしてお茶子とチチの組手が始まった。

最初に動いたのはお茶子だった。先手必勝、すぐに決めようとしてチチに突っ込んで行くがチチはそれを避けた。お茶子は自分の五本指で触れば浮かせられるので触ろうとするが一向に触れない。

チチはそれを全て軽々と避けていた。

こうもやられてくると少しムキになるものでお茶子は一か八かチチに突っ込んでいった。

するとチチはお茶子の頭を飛び越えてお茶子の肩に手を置いた。

「はい、これ以上は休みなのに疲れるから終わりだよ」

「ええ、チチ。もうちよつとくらい良いじゃねえか」

「ダメだ！」

先程と同じように言い争いを始める悟空とチチ。

すると悟空は観念したのか一人で鍛え始めたのでお茶子はチチと一緒に寮に戻っていく。

「チチさん、凄かったです！手も足も出なかったです！」

「いや、ちよつと危なかつただ。やっぱり歳たべ」

「・・・でもあんなにスイスイ避けて、触れなかつた」

「あれくらいなら基本を覚えれば簡単に出来るようになるべ」

「本当ですか？」

「んだんだ、ちよつと体の使い方を覚えれば色んな事が出来るようになるだよ」

チチの言葉にお茶子はまず体の使い方から始めようと新たに決心したのだった。

〇〇〇

響香はノビノビとしていた。

久しぶりの休暇で修行も無しで皆と遊べた事を喜んでいた。明日は何をしようかと考えながら談話スペースでノンビリしていくと電気と実と亀仙人がコソコソと上にかつていくのが見えた。

響香はまた如何わしい物を手に入れたなと思い、呆れて無視した。

「今、あの3人。絶対に邪な事を企んでたね」

透が3人を見ながらそう言った。

「そうだね。って透、何するの？」

「いや、ちよつとね」

透はそう言つて部屋に戻つていった。

響香は別に特に気にする事でもないので自分も一回部屋に戻ろうと少し遅れて3階に行くのと、透のドアが独りでに開いた。

「透？」

そして独りでにドアが閉まった。

個性の影響で聴覚が鋭い響香は自分の隣をペタペタと歩いてる音を聴き逃がさなかつた。

「って、あんた何してんの!？」

「ちよつと、3人が悪い事をしてないか見てくる！」

「本音は？」

「ちよつと面白いこと起きそうだから！」

透はそう言つて走つていった。響香は1人全裸な透が欲望まみれな3人の所に行つて万が一にでも見つかつたら、鼻血まみれの倒れてる3人の中で返り血を浴びて浮かび上がる透明人間というスプラッターコメディみたいな状況が思い浮かんだ。

響香はさっさと連れ戻そうと透を追い駆ける。

聴覚の鋭い響香は必死に追いかけて実の部屋がある2階に来るが運悪く踏影、優雅、それに久とクリリンがほぼ同時に部屋に入ったのと同じタイミングで透を見失った。
 (あいつ、何処に行ったんだ？まさか、ウチから逃げるために何処かの部屋にどさくさに紛れて入ったんじゃない？)

響香は辺りにイヤホンを伸ばして聴いてるが全く分からず、非常に気が進まないのもあつて帰ろうか考えた。

(このまま帰った方が良いか？いや、他の人らも男だし、流石に透明人間とはいえ全裸の娘を放っておくつてのは駄目か・・・皆、ごめん。頼むから変な事はしないでよ・・・)
 響香は謝りつつも自分のイヤホンをドアに突き刺して探す事を決めてまず、踏影の部屋に刺した。

物静かで落ち着いてるイメージの踏影だがイヤホンを刺して聴こえてきた声はそんな響香のイメージを吹き飛ばした。

「おお、素晴らしい！これぞバッドボーイのアズラエルブレードの決定版だ。美しい。俺もいつかこれに負けなくらいの剣を。ブラックノールシルシユバルツ暗黒深淵闇夜剣を作つてやる」

(いや、黒々黒つてどんなネーミングセンスス!?)

響香は踏影の言葉を聴いて内心ツツコミながらも透を探したが見つからなかったの
 ですぐにイヤホンを抜いた。

色々と聴いては行けなかつた気がする物を聴いてしまつて響香の精神は削れた。

だがさつきと透を見つけて帰つて忘れようと決めて次に優雅の部屋にイヤホンを刺した。

「ああ、このキラメキは誰にも止められない！」

(・・・)には居ないな

あまりにも普段と変わらない言動に響香はもはや何もツツコむまいと心を無にして透が居ないのを確認するとさつきとイヤホンを抜いて今度は出久の部屋に刺した。

「だから俺としてはアタックをかけた方が良くと思うんだ。でないと好きつて感情はわかんないだろう？」

「でも、そんな接点もないし・・・迷惑だと思われたら・・・やっぱり、もつと親しく・・・」

(うわあ、恋愛相談じゃん)

恋愛事が苦手な響香は一先ず抜こうとした。

「でも、そんな悠長な事を言つてると響香ちゃん。他の誰かと付き合うぞ」

「クリリンさん！そんな大きな声で言わないでください!!」

「出久の声の方が大きいからな」

だが、イヤホンを抜く前にそんな話が聞こえてしまい、響香は固まった。

「ワオ、緑谷君は耳郎ちゃんが好きなんだ」

透は出久の部屋の片隅で隠れながら、それを聴いていた。単純に響香から逃げる為に入ったが予想外の面白情報を収穫できたと内心面白がっていた。

クリリンは透の存在に気付いていたが何も言わなかった。何故ならクリリンは透のイタズラ・・・ではなく透が出久に気があると勘違いを起こしたのと透が透明人間とはいえ、全裸なのでそれを言っただけならば気が引けたからだ。

思いもよらない状況で恋心がバレた出久。

そしてそれを知ってしまった響香。

2人はどうなる？

そして、この事を知った透はどう動く!?

出久と響香のデート!? part 1 恋愛道中

響香は予想外のカミングアウトを聴いてしまい、逃げるように部屋の中に入った。

そして落ち着くようにベットのの上にダイブして枕に顔を埋めた。

(緑谷はウチが好き・・・夢ってオチは・・・流星にないよな・・・うわ、どうしよう? ウチ、こういうの苦手なのに・・・)

響香は自身の性格も相まってかそう言った話題は少し苦手だった。本人にしてもカッコいいヒーローになるために日々勉強に努めてるのでそういった事になることはないと思っていたし、そういうのはまあ追々につて感じかなと思っていたが、まさかの出久からの言葉を聴いてしまい、響香はパニックっていた。

「よし、ウチ。冷静になれ。落ち着け、こんなのUSJとか紫猫に睨まれた時に比べればなんてことない・・・」

深く深呼吸しながら、USJやビルスに睨まれた時を思い出して落ち着こうとした。幾分か経って動悸が収まってきた。

(はあ、ええ?これどうしたらいいの?つか緑谷がウチの事を好きって・・・うん、こんなの初めてだけど緑谷は別にタイプでも無いし、これからどう付き合えば良いんだ

よ・・・)

響香にとつて好きなタイプはゴリゴリのパンクロックバンドみたいに先陣きつて引つ張つていく感じが好きなのであつてどちらかと云うと引つ張られるみたいな印象の出久は好みとは違つた。

(・・・兎に角、なんとかして緑谷にはそれとなしに無理つて伝えないと・・・それでピッチになつたら危ないし)

響香は出久をどうやつてフツてこのままの関係を維持するか考えていた。ヒーローが恋愛に夢中になり、スキャンダルを暴露されてその恋が終わつてヤサグレてヒーローだつたのに刑務所に入ることになつた者は割といふ。ヒーローとて人間なのだ。

恋は盲目という言葉があるようにのめり込むと大変な目にあう。雄英高校という難関校に入つてゐる響香はその事をちゃんと理解していた。

(どうやつてふるか、私から行つて・・・いや、己惚れてる感じに見える。それでふるつてどんな嫌な女だよ・・・けど、すぐに元に戻つた方が良いな・・・)

コンコンツ

悩んでる響香だつたが部屋のドアがノックされたので開けるとそこには透が服を着た状態でいた。

「あつ、透。なんでここに？」

「実はさっき、緑谷君の部屋で面白い事聴いちやって・・・」

透のその言葉を聴くと問答無用で響香はイヤホンで透をグルグル巻きにして部屋の中に連れ込み、詰め寄った。

「アンタのせいでウチは面倒くさい事に！」

「あー、耳郎ちゃんも聞いてたんだ・・・ええ、何これ凄くレアな状況過ぎない？」

「レアすぎて混乱してるわ！」

「落ち着いて落ち着いて、誰にも言つてないよ・・・まだ」

「まだって言ったな!?!もしもこれを言いふらしたら本気で怒るよ」

「言わないよ・・・絶対に言いふらしたりしない」

響香はその言葉を聴くとヘナヘナと座った。

顔が真っ赤で気が張つてたのが漸く解けたのだ。

「どうにかして緑谷と関係を拗れさせないようにしないと・・・」

「え? デートとかもしてないのに? 結構良いと思うんだけどなあ緑谷君。ちよつと真面目過ぎるのとオタクムーブがたまにキズだけど優しくして良い男の子じゃない」

「・・・そりゃ、確かに強いし性格も優しいけどさ。タイプじゃないし・・・ウチ、こういう事つて苦手だし・・・」

声が少し弱々しい響香。

透は屈んで響香と目線を合わせた。

「けど、折角の学生生活なんだからやってみるのも良いんじゃない。私達、ヒーロー候補生で大きな事を選んだけどその前に高校生じゃん。プルスウルトラ！日々新しい事に挑戦だよ！」

透の言葉に悶々としていた響香のロック気質に火がついた。苦手だと言って逃げるようにそのままにしておくのは響香の価値観に合わなかった。

（・・・プルスウルトラか・・・そうだよな、折角雄英高校に入ったのに苦手で終わるつてのはロックじゃないな）

そう考えたら、響香にやる気が出てきた。

透はそれを見て単純に良かったと思った。

「ねえ、それは良いんだけど・・・デートって何やんの？」

「私もやった事ないからあんまり・・・」

2人は今度は違う事に頭を悩まし始めた。

出久は悩んでいた。クリリンに恋愛相談をしたがクリリンからその奥手な性質が新しい関係作りを邪魔していると指摘されて、どうするべきか悩んだ。

明日は折角の休日でのままいつも通りで過ごしたくはなかったが何をどうすれば良いのか恋愛経験ゼロの出久にはさっぱり思いつかなかった。

夕飯を食べてから行動しようと思っていたがチラチラと耳郎から鋭い目つきで見られて行動出来なかった。

(うう、なんか耳郎さんに睨まれて誘えなかった・・・やっぱ、まだ止めたほうが良いのかな・・・)

正確には、出久の行動に対して気になった耳郎がチラチラと見てただけで、緊張で目つきが鋭くなったのだ。

(いや、やっぱり行かないと！クリリンさんにも自分からアタックしないと言って言われてたし、それにグダグダしたままはかっこ悪いし！)

出久は一念発起して3階にある響香の部屋に向かった。

もうすぐ自習時間になるし、その後は大体、講談スペースに集まるので今しかなかった。

コンコンッ

出久は響香の部屋のドアを叩くが反応がなかった。

（お風呂かな？．．．やっぱり後にするか．．．）

「緑谷？」

響香の声があった方を向くと風呂上がりでタオルを頭にかけていた響香が立っていた。湯上がりで頬が少し紅潮していて出久はその姿に見惚れていた。

「何？．．．ウチになんかよう？」

「えっと．．．あ、明日の体育祭の最終日、良かったら僕と一緒に回ってくれませんか？」
「はっ!!」

（ヤベツ、ド直球に言っちゃった!!僕のパカ!）

なんともベタ過ぎなもろアートの誘いを言ってしまった、出久は恥ずかしさで顔を真っ赤にした。

言われた響香もまさかこんなド直球に来るとは思ってたなく、顔を真っ赤にしていた。恥ずかしさで2人とも暫く膠着していた。このままずっと続くかと思われた気まずい雰囲気壊したのは響香だった。

「い、いいよ．．．明日のクイーンガンズのライブを一緒に見るなら．．．」

「も、勿論です！ありがとうございます!!」

「じゃ、じゃ．．．えと、こ、校門前で10時に集合で．．．いい？」

「は、はい」

響香の返事にキョドリながら頭を下げてお礼を言う出久。自習時間になるので出久は自分の部屋に戻ろうとしたが嬉しさと恥ずかしさとビックリした事でぎこちない動きになっていた。

響香も恥ずかしさで似たような動きをしながら、すれ違い部屋に入る前に立ち止まった。

「み、緑谷」

「は、はい！」

突然呼ばれた出久は響香の方を見た。彼女は出久に対して真っ赤な顔のまま微笑んだ。

「う、ウチ・・・こういうの初めてだから、明日はちゃんとリードしてよ・・・」

「は、はい」

響香はそれを言った後で逃げるように部屋に入り、出久はまだぎこちない動きで戻る。

こうして2人はデートの約束をしたが実はそれを聴いていた者が“2名”いた。

(へえ、緑谷君。あんなド直球に行くんだ。見ててちよつとドキッってしちやつた！明日は面白いことになりそう)

1人は透で出久が響香の部屋の前に来た辺りから透明人間の特性を使って全裸で全

て見ていた。本来なら響香が気づきそうだが、あまりの緊張で気づかなかつた。

——数分前——

実はこのまま自習の準備をしていた。

座学の成績A組で9位は伊達でなく、そこら辺は普段とは違い大真面目だった。

キチンと準備してると隣の出久のドアが開いた音が聴こえてきた。

(何だ? 緑谷がこんな時間に出るなんて・・・トイレか?)

最初は気にしてなかった実だったが3分くらいしても出久が戻ってきた感覚がなく、実はドアを開けて周りを見た。

(腹でも痛えのか?)

そう思いながら実はドアを閉める前にもう一度なんとなしに周りを見た。その時、偶々なのか3階の響香の部屋の前で立っている緑髪の出久を見つけてしまった。

(なんだ? まさか・・・野郎!! 抜け駆けしてたのか!?)

欲に忠実な実は出久が響香と付き合っていたのかと勘違いをした。自習時間直前という人が居ない時に女子の部屋の前に居るのは実的にもう既に有罪だった。

実はすぐ素早く人がいなくなった講談スペースを通って、3階の階段を上ると聴こてきた。

「ウチ……初めて……明日は……リードしてよ」

（初めて……リード……明日……アイツラまさか明日、卒業する気か!? この寮内では……それとも初っ端から野外プレイか!? ……許すまじ緑谷!! ……あのムツリ野郎……絶対に明日、阻止して台無しにしてやる!!）

嫉妬100%に染まった実は血の涙を流しながら、カップル（付き合ってください）の初体験（デートだけ）を台無しにする事を誓った。

○○○

体育祭最終日、デート当日。

出久と響香はアメリカのヒーローチーム『クイーンガンズ』の毎年恒例の雄英ライブデートをするが、2人はクラスメイトに見られるのが恥ずかしいのでバラバラに寮を出た。

（皆、今日は早いな）

何時もなら何人か講談スペースに居るのだが今日は最後の休日というのもあってか人が居なかった。

出久はそのまま疑問に思いつつも寮を出た。

クリリンから普段の文字シャツは流石に止めとけと言われて緑のパーカーに黄色いシャツに白パンと明るめな感じの服装だった。

(よし、ちゃんとクリリンさんに言われた通りに普段の服装とは違う感じで、けど勝負服のオールマイトパーカーじゃなくて大丈夫かな?)

自分の服装に不安を感じつつも出久は響香が待つてる入場門前に行った。

体育祭を見に来る客が多く、校門とは別に入場門がありそこは人で賑わっていた。朝早くから大勢の人間がぶった返していた。ここを待ち合わせ場所にしたのは響香だ。人が大勢居るならばヒーロー科の面々に見られないと思つたからだ。

響香も人生初のデートで色々と悶々としていた。

黒の前開き半袖。パーカーに紫のシャツ、黒デニムのホットパンツと何時もならホットパンツの下にストッキングを履いてるのだが今日は生脚を出していた。

(うう、恥ずかしい!! やっぱりストッキングは履いてくべきだった。透のやつ)

最初は色気のない格好だったのだが透に見つかり、今の格好になっていた。響香は顔には出さないようにしていた。

「耳郎さん」

「み、緑谷……おはよ……その服装……良いね」

「じ、耳郎さんもその……き、綺麗だよ」

「緑谷は・・・可愛いって感じ」

出来ればカッコいいと言われたかった出久は可愛いと言われて少しショックを受けた。その姿を見て耳郎は少し気が緩んだのか笑った。

「よし、じゃ出店に行くよ！昨日遊べなかった物を遊んでやる！」

「じゃ、じゃ行こう！」

共にまずは出店へと歩いていく。緊張で2人に変な間が出来ていたがそれでも2人はなるべく平常心で行こうとしていた。

「クソカップル共があゝ」

「峰田、やはりこういうのは止めよう。2人に対して失礼だ」

「うるせえ障子！あのカップルを絶対に別れさせてやる！」

実とそして実连接到こられた目蔵は実を止めようとしていた。昨晚、実から連絡があり、目蔵としては珍しく誘われたので一緒に行動したがまさか目の前で出久と響香がデートするとは思ってなく、目蔵は実が暴走したときのストッパーになろうと決めた。

○○○

出久と響香は出店を楽しんでいた。

緊張しつつもお互いに食べたり、買い物したり、遊んだりして少しずつ緊張が解けて

いた。

「え？じや、緑谷もクイーンガンズのライブに行ったことあるんだ！」

「うん、アメリカのヒーローチーム。趣味でバンドをやつてて全てカバー曲だけなのはプロの音楽家じゃなくヒーローであるがゆえにどんなリクエストにも応える為」

「敵退治も出来るけど、本領発揮は災害救助と支援つて公言してるタイプのヒーローでウチ、無茶苦茶好きなんだよね。去年の体育祭のライブは見に行けなかったからなあ。超楽しみなんだよね！」

「僕も7歳くらいの時以来だから楽しみ！」

「へえ、何処で聴いたの？」

「田等院公共両義館の20XX年の8月1日のライブ。お母さんと一緒に見に行つただ」

「うそっ？、ウチもそれで見に行つたんだ！マジか」

「そうなんだ、電気も見に行つてたつて言つてたなあ・・・」

「ひよつとしてたらニアミスしてかもな」

「そうかも・・・」

他愛もない話をしているが2人ともまだ緊張はしていた。響香に至つては慣れてない服装でまだ脚が気になっていた。

「ね、ねえ耳郎さん。今度は服とか見に行かない？」

出久からの申し出は響香からすれば嬉しかった。良い加減、恥ずかしいのでロングソックスを買おうか迷ってたくらいだ。

「うん、行こうか」

少し嬉しくて速歩きになっている響香を出久は少し笑みを浮かべて見ていた。

（やつぱり、恥ずかしかったんだ。綺麗な脚なんだけどな〜って流石に色々と変態っぽい！後ろは不味い！）

出久はこのまま後ろにいると響香の脚を凝視してしまいそうだったので響香の隣を歩く。

「何、イチャついてんだゴラァ・・・」

「峰田止めろ」

そんな2人に実は個性のモギモギを当てようとしたがその前に目蔵が実を拘束していた。このまま離れるのが1番かと考えたが下手すると脱出される危険性と実の嫉妬深さを考えこのまま2人にバレないようにしながら付いていく方が安全と判断して付いていく。

実がより嫉妬の炎を燃やしてるがそれはどうでも良かった。

例え血涙を流してもどうでも良かった。

出久と響香のデート!?

part 2

DEKU : ZER

O

(耳郎ちゃん、大丈夫かな?)

「葉隠さん、どうしたの?」

「ううん、何でもない! さ、楽しもー!」

透は猿夫と一緒に周っていた。昨晚、響香にあれこれと言っていたが透も別にそこまですぐと知ってるわけではないので、今度聞かれた時の為に友達の猿夫と一緒に楽しんでいた。

(何で葉隠さんは俺と一緒に?)

猿夫は透に誘われて周っていたがなぜ普通な自分なのかと内心色々と考えながらも楽しんでいた。そこは健全な男子高校生だった。

○○○

響香はトイレの個室でロングソックスに履き替えていた。無事に脚を隠せる為に買えたのですぐに響香は出久に言って履き替えていた。

「うう、恥ずかしかった。緑谷もチラチラと見てたし……」

響香は確りと出久からの視線に気づいていた。チラチラと見てていじらしさを感じ、響香的にはマイナスだった。

「綺麗な足か……恥ずかしいこと言いやがって……」

響香は初日に久に出久に言われた事を思い出しながら、悪態をつくが不思議と嫌な感じはあまり無かった。外見に多少のコンプレックスはあるし、褒められたのは恥ずかしいが嬉しかった。

少しだけ浮足になりつつもちゃんとロングソックスを履いて準備万端になり、響香はトイレを出ると見たのは……

「ねえ、初日のカッコよかったわよ」

「ホントホント、ファンになっちゃった」

「ねえ、私達とお茶しない」

「色々聞きたいなあ」

「え?! いや、その僕は今……人を待ってるので……」

出久が大勢の女性に絡まれている所だった。

イラッ……

しかも、絡んでいたのは自分よりもプロポーションの良い女性ばかりだった。

ちよつと楽しさを感じていた心が一気に冷めてきた。

しかも出久は大勢の女性に言い寄られた事がなく、恥ずかしさで顔を赤くしていたのでそれがより響香を苛立たせた。

「じ、耳郎さん！す、すみません。僕、彼女と今は楽しんでるので!!」

出久は響香を見るとすぐに響香の手を取ってその場から離れた。後ろで女性たちが何かを言ってるが脇目も振らずに去った。

○○○

「よっしやーこれで成功だぜー!」

実はその様子を見ながらガッツポーズを出していた。あまりにもイチャイチャして出る出久と響香に実は目蔵の拘束を抜け出してトーナメント2位が居ることを広めた。

トーナメント2位は伊達ではないのとオマケにかなりワイルドな戦いに最後はなったので人気があつた。

自分好みの女性に広めたのは些か屈辱的だったがなんとか耐えて実は出久と響香の仲を引き裂くことに集中した。

出久が女性に絡まれていて苛立っている響香を確りと実は見た。

「峰田、いい加減にしろ」

一足遅れて目蔵は実を捕まえた。逃してしまった事に恥じながら、今度は実を完全に拘束した。

「フハハハハハハハ!!もう既に計画は成功したのだフハハ!!」

「緑谷、耳郎・・・すまん」

目蔵は2人に詫ながらそのまま実を連れて離れた。

○○○

暫くして漸く人目が少ないところまで来れたが響香は何時までも握ってる出久の手を振り払った。

「あ、そのごめんなさい」

「は?ごめんって何?」

「え?いや、その・・・」

「はつきり良いなよ・・・大勢の女に囲まれてさぞかし嬉しかっただろうね」

「そ、そんなわけないよ!」

「どうだか・・・アンタも男だし・・・ウチよりも発育良い人達だったし・・・内心嬉しかっただろ?」

「う、嬉しくは……」

「音がホントだつて言つてんだけど？」

響香は静かに睨んだ。イヤホンで出久が実は少しだけ喜んでるのはわかつていた。それをすんなり認めればまだ許してやろうかと考えていたが嘘をつかれてより腹が立った。

（……つてウチは何をこんなに怒つて八つ当たり……いや、悪いのは嘘ついた緑谷だし……ウチが悪いのか……いや、そんなわけ……なんか疲れた……）

響香は一人、歩き始めた。

「じ、耳郎さん!?ま、待つて!」

出久は追いかけるが2人に気まずい雰囲気の流れる。

どうするかと悩み始める2人。

（どうすれば許して貰えるんだろう）

（この空気やだなあ）

「ねえ」

出久と響香は突然聴こえてきた声の方を向くと3人の子供が出久の服を引っ張つてた。

「?どうしたの?」

「お前、緑谷デクだな。2位の。個性見せろ！」

出久は急に1人の勝ち気そうな子に言われて頭を混んがらせた。響香もそれを見ながら、不思議そうにその子を見る。

「俺は気弾操児。お前よりも上手く弾を操れること証明してやる！」

ビシツと出久は宣言と共に指をさされた。

「操児君、止めようよ。困ってるよ」

「そうよ、それに緑谷出久よ！名前間違えないでよバカ！」

「うるせえ、見人も冷奈も見てみてえって言ってたじゃないか！」

「ちよつとちよつと喧嘩しないで」

「ほら、こつちも困るでしょ？」

出久と響香は3人の言い争いを止めて話を聞くことにした。なんでも操児がトーナメントで強かった出久に対抗心を燃やしていてそれで見人と冷奈を連れてきたと言う事らしい。

「なるほどね。僕のアレに挑みに来たって感じか」

「そうだ！俺と勝負しろ！」

「気弾って言ったっけ？それ無理だ。個性の使用は基本的に禁止になっててヒーロー免許を持ってないと出しちゃ駄目」

「ほら、操児君。やっぱり駄目だつて」

「だから言ったじゃない」

「うるせえ、俺は絶対にやるんだ!!」

それでも勝負すると言い続ける操児に困る出久と響香。操児は操児で少し涙目になりかけていた。困った面々だがそこに一人の男がやってくる。

「H e y H e y、お前から待て待て!」

「プレゼントマイク先生!」

そこに現れたのはプレゼント・マイクだった。出久と響香はこの時間だと実況席に居てそうなのがこの場に居ることに疑問に思った。

「先生、実況は?」

「聞いてくれよ緑谷、それが校長つたらあの人の司会が気に入ったみたいで全部交代にしちまったんだ!それでここでヤケ食いしてた!」

「ありやま・・・」

半分泣きながら言ってるマイクに出久も響香も憐れみを感じた。エンターテイナーであるマイクゆえにその悲しみは大ききそうと思った。

「それよりも話は聴いてたぜ。俺の権限で使用許可OKにしてやる。その代わり、お互いに個性をぶつけるのは禁止だ。どうだ?」

「え!?大丈夫ですかそれ?」

「良いって!流石に俺も危険な事はさせねえし。どうだ?」

「サンキュー、プレゼントマイク!」

マイクの言葉に1番早く反応したのは操児だった。既に使えることに思いつきり笑ってマイクの手を引つ張ってるので出久と響香はそんな姿を見てると断れなくなり、了承し、そのまま全員、森が多くて人目に付かない森林ステージに足を運んだ。

「こういう森モリしてる所は好きじゃねえが他は危ない所もあるからここが1番安全。さあ、お前ら!思いつきりやれ!この俺が実況してやる!!」

マイクがそう宣言すると操児が両手を合わせ、空中にエネルギー弾を作った。出久の気弾と似ていたが青色の気弾とは違い白色だった。

操児はそれを自分の周りを飛ばし、それぞれどこか3個もエネルギー弾を作ってジャグリングのように自分の前で動かし、最後に遠くにある木に向かって3発当てて木の表面を削った。

「ワオ!こりや実にエキサイティングな個性だぜ!その歳でこりやすげえ!」

「先生、実況出来ないからってこんな所でやります?」

「頼むやらせてくれ!一年間の楽しみの1つなんだから!」

マイクの言葉に響香はツツコミを入れつつ、隣で目をキラキラと輝かせていた出久を

見た。

(緑谷は気とかあるけど、理屈とかじゃもうないんだろなあ)

響香は出久のそういつた部分を見ながら思った。選ばれた時に行った2対38の戦闘訓練で無個性と知り、一回負けてしまった。そして次で引き分けた後に響香は響香で多少は無個性について調べたし、勉強した。

ただ、やはりここらへんの感覚は違うのかなと改めて考える。

「へへ、どうだ!?俺の個性は凄いだろ!」

「うん、凄い!エネルギー弾の操作は僕よりも遥かに凄い。僕のあるふうにはジャグリングが出来ないからより大雑把な感じになって避けやすい。けどあれなら避けにくい軌道になればかなり有利だ。更にいうと攻撃力もあって高すぎない。高すぎると敵確保の時に余計な被害を出さなくてすむ。凄く良い個性だと思うよ!」

「お、おう」

「ひっ!」

「こ、怖い!」

「緑谷・・・やりすぎ注意だ」

「だからアンタのブツブツは傍から見ると怖いんだって!」

「あ!?ご、ごめんなさい。つい癖で・・・」

出久はそう謝ると操児と交代した。

両手に繰気弾を作ると出久は少しだけ周りに飛ばすが操児のエネルギー弾ほど操作性は良くない。より直線的であるし、威力が大きすぎてそんなに自分の近くで操れない。

適当に回して最後に操児と同じ木に繰気弾を当てて完全に押し折り、折れた木が2次災害を生まないように細かく繰気弾で砕いた。

「こりゃ、緑谷の方がやっぱ威力高えな！アメイジング!!」

「凄い。操児君よりも強い！」

「カッコいい！」

「やっぱり、緑谷のそれチート級だよ。他にも色々凄いのあるけど」

操児以外の面々は出久の気弾の強さに対して様々な反応をし、操児は出久をギツと睨んでいた。

「うう、もう一回勝負だ!!」

「操児、もう諦めなつてこれ以上は迷惑よ」

「そうだよ、わざわざデート中の所を邪魔してまでやつてもらったのにこれ以上は駄目だよ」

「うるせえ、俺は負けてねえんだ!!」

操児はそう言うのと走って何処かへ行ってしまった。見人と冷奈も彼の後を追っていった。何度も出久達に頭を下げながら。

「OH、随分と跳ねっ返りそうな子供だな！元気なのは良いことだぜ！」

「プレゼントマイク先生、個性の許可ありがとうございます」

「良いって事よ！それより、お前らデキてんの？」

マイクが逃うつもりで言った一言だが2人は実に微妙な反応をした。2人ともさっきまでの微妙な雰囲気を思い出したのだ。

「あれ？」

「別にデキてません。緑谷はもっと発育の良い女性の方が好きそうですので」

「いや、待つて耳郎さん。だから誤解だつて」

「どうだが、ニヤニヤしてたし」

「ニヤニヤなんかしてないよ！」

「いや、してたね！」

そのまま言い争いを始める出久と響香。

響香はまた怒りが沸々と出てきて、出久は言われっぱなしが癩に触り、2人とも語気が強くなってきた。

「お前ら、これはあれだな。痴話喧嘩つてやつだな！」

「痴話喧嘩じゃないです!!」

「落ち着けて、そんなんじや折角の大事な休日が台無しだぜ!」

出久と響香はマイクの一言にハツとなった。なにせ、折角の休日だと言うのを2人は忘れていた。明日からはまた色々と忙しくなるのにその大事な休みが喧嘩とか嫌な雰囲気が終わるのは勘弁だったのだ。

「耳郎さん、ごめんなさい。言い寄られた時にはつきりと断るべきだったし、内心ドキドキしてたのも正直に話すべきでした・・・ごめんなさい!」

出久は響香にそう謝った。それを受けて響香は思うところも無くはないが折角嫌な雰囲気が無くなるのを止めるほど子供でも無かった。

「いや、ウチもごめん。勝手にキレたりして・・・ちよつと冷静になれば良かったのに・・・ごめん」

「い、いや。耳郎さんが謝る事じゃ」

「このままじゃ、ウチの気が収まらないの!だから仲直りはダメかな?」

響香はそう言うと言を前に出した。

これで仲直りしてお互いにもう何も言わないという意味だと出久は受け取り、握手した。

2人ともそうやると冷静になってきて、なぜ色々と拗れたのかゆつくりと手を握った

まま考えていく。

(僕のバカ！折角のデートで休日なのに嫌な気分になんて許してくれたから良いものを絶対に嫌われた……)

(ウチっては何やってんだろ？折角の休日で初めてのデートでこんな事して……うわ、嫌な女すぎない?)

冷静になってくると2人は先程までの自分の態度に嫌悪感を覚えてきた。今度は暗い雰囲気になりながらも2人は手を握ったままだった。

「若いつて良いな」

マイクが出久と響香を見ながらそう云うと2人ともものずつとニヤニヤしながら握ってる手を見られていた事に気づいて今度は顔を真っ赤にして離れた。

「お前ら、マジで百面相的で面白いな！」

「マイク先生、からかうのは止めて！」

「そうです！止めてください！」

「悪い悪い。でもそうやって色々とお楽しみ、折角の青春だし、大事な思い出になるんだからな！俺も相澤と……それに皆との青春を楽しんだから今があるしな！」

色々とお込みがありそうな言い方だと響香は思った。不自然に消太と皆の間に誰が居そうな感じはあったがそれを無下に聞くほど無粋では無いので、素直にその言葉を胸に

しめた。

○○○

操児は森の中を走り、ガンガンとエネルギー弾で辺りの木に八つ当たりしていた。エネルギー弾の出し過ぎで手が熱かったが気にしなかった。

「クソツッ！俺の方が強いのに〜!!」

操児はそう叫びながら泣き始めた。

年齢7歳でエネルギー弾という強い個性を持っていた彼にとつて出久はまさに自分の上位互換だった。個性と気との違いはあれど自分よりも強い気弾を撃つて操れる出久に対抗心が生まれた。

そして、自分の個性に自信があつた操児は友達の見人、冷奈と一緒に来て見事に負けた。

「もう、八つ当たりは止めなさいよ」

追つてきた冷奈がそう言い、見人が個性「分析視」を使って操児を見た。

「操児君、手が熱くなってるよ！やりすぎだよ！」

「うるせえ、大丈夫だ！」

「大丈夫なわけないでしょうが！」

冷奈は呆れながら操児の手を取って個性“急冷”で冷やした。急に冷やされていくのが気持ちよく、少し張っていた気が緩んだ。

「もう、褒めてくれた個性なのに駄目にしちゃうかもしれないでしょ！」

「そうだよ、今日は負けても次の時に勝てば良いんだよ」

「俺は今日、勝ちてえんだよ！」

「もう我儘ばかり言っちゃって！」

「うるせえ、お前はママか!？」

「誰がママになるもんですか！」

「2人とも落ち着いて・・・そうだ！なら今度は3人でやろうよ！」

「はあ!？」

見人の提案はこうだった。

自分が場所の弱点を分析して見てそこに操児の最大のエネルギー弾を当てる。んで熱を持った操児の手は冷奈で冷やすという物だった。

「良いじゃん！やってみようよ。流石、見人！」

「いやあ、それほどでも」

「それって、俺と見人の2人だけじゃねえの？」

「私がいないと熱くて次なんて撃てないじゃない」

「撃てるわ!」

「2人とも止めてよく。それよりもやってみようよ!」

見人の意見に沿って3人は準備した。そして見人はまず、操兎が八つ当たりして少しポロポロになってる木を見た。

「よし、まずはあの木の外側に当てて3回当たれば良い筈だよ」

「よっしゃ!」

操兎はそのまま見人の言われた通りにエネルギー弾を連続で当てた。すると当たった部分が抉れた。操兎はそれに喜びつつも冷奈に手を出した。冷奈は単純な操兎に呆れつつも手を冷やしてあげた。

「スゲー!これなら緑谷デクに勝てる!」

「だから名前が違うって!」

「もつとやろうぜ!」

操兎はそう言ってドンドンとエネルギー弾を出しては見人の指示に従って木を抉り取っていく、冷奈は操兎の手だけでなく、たまに見人の目も冷やしたりとバックアップを頑張ってた。

そして気が済んだのか操兎が止まり、見人と冷奈の方を見た。

「見人、冷奈！これからリベンジに行くぞ！絶対に今度は負けねえ！」

「でも、木は一本も折れてないから勝てないと思うわよ」

「今度はコントロール対決だ！見人と冷奈と3人で勝つ！」

操児の意気込みに見人と冷奈もノセられて意気込む。

何だかんだ言つて2人とも個性を思いつきり使えて気持ち良い。折角、許可が出てるのにあまり使わないのは損だと考えていた。

その時、バキバキバキと何か折れる音を3人は聴いた。

それは先程からずっと挟り取っていた木が遂に折れた音だった。

3人は急な事にわけがわからず、止まってしまった。

「「うわああああ!!」」

叫んでその場に蹲る3人。

大怪我どころか命すら危うい状況だった。

「繰気弾！」

しかし、それは突然とやってきた繰気弾で殆ど粉碎された。最後に一本だけまだ操児達に向かつて倒れてきていたが、気で物凄い速さで来た出久の蹴りで吹き飛ばされた。

「君達、大丈夫?!」

出久が3人にそう聴くとホツとしたのか皆、涙を浮かべて出久に抱きついた。

「「ウワアアアア!!怖かったあ!!!」」

「よしよし、もう大丈夫だよ!」

「緑谷!」

「お前ら、無事か!」

3人とも怪我はなく、一息つくがあれだけ派手にやってしまったので純粋に警備をして駆けつけたハウンドドッグに個性の危険使用として全員怒られた。特に勝手に許可を出したマイクは減給と謹慎まで受けた。

出久と響香に関しては反省文10枚で許して貰った。操児達は怖い思いをしたのと激怒するハウンドドッグが怖すぎてキツチリ反省したので許してもらい、ハウンドドッグはそのままマイクを連行して去った。

「いやあ、大変な目にあつた」

「皆も勝手な事をするところなるってわかつた?」

「はい」

「ごめんなさい」

「もう勝手な事しません」

3人とも意気消沈していたがきつちりと反省したのがよく分かる。

「お、俺!絶対にもっと強くなる!今度は友達を危険に合わせないように強くなるし、頑

張る！そしたら、また勝負してくれるかデク兄ちゃん」

「・・・うん、その時はちゃんと色々と安全を確保してからまたやろうね」

出久がそう言うのと操児は笑顔になった。やったやったと純粹に喜んでる姿に出久は見ていて嬉しくなった。

「デク兄ちゃん、次は勝つからな！」

「僕も負けられないように頑張るよ・・・後、僕の名前は出久って読むんだ」

「デクって書いてるのに？」

「だから出久だってさっきから私も見人もずっと言ってるでしょ!？」

「操児君、謝ろうよ」

「う、間違えてごめんなさい」

「別に良いんだよ。ただ木偶の坊のデクって言われてたから・・・ちよつとね」

「でくのぼうって何？」

「役立たずって意味で悪口だよ・・・緑谷もこういうのはちゃんと訂正しないとダメだろ」

「うっ、すみません」

「ご、ごめんなさい、俺、そんなつもりじゃ・・・ごめんなさい!」

「良いんだよ。別にね・・・」

涙目になりながら謝る操児に出久は笑って問題ないと答えた。これで一々キレるほ

ど出久は子供ではなかったからだ。

「酷い悪口ね！誰がそんなの言い出したの!？」

「そうです！出久兄ちゃんは何でもできるのに！」

冷奈と見人の気遣いと優しさに出久は涙が出そうな程嬉しかった。まあ、その言い出した本人との関係を思い出すと色々複雑な感情も出てきた。

「じゃ、出久兄ちゃんがデクって名前を使ったら、デクって、何でも出来る、って意味になるな！」

「ふえ？」

「だから操児君！」

「良い加減にしなさいよ操児！」

「あつ、出久兄ちゃん。ごめんなさい!!」

「い、いや。良いんだよ！うん、ちゃんと謝れるのは良いことだし！僕は大丈夫」

その後、操児達は体育祭の出店を楽しんでくると言って去っていった。出久は最後に操児に言われた事を思い出しながら手を振っていた。

「あゝ?!?!」

「ど、どうしたの!?!耳郎さん！」

「不味い！もうすぐライブが始まる！」

「あー!?!?」

出久と響香は時間を確認するとライブまで後、5分も無かった。完全に走っても間に合わなかった。出久は時計を見た後で響香を抱きかかえる（所謂お姫様だっこ）。

「ちよ!?!緑谷、何してんの!?!」

「ごめん、掴まってる!」

出久はそう云うと気を使つて跳躍した。

「ちよ!?!緑谷、これ怖いし、恥ずしい!マジで恥ずしい!」

「ごめんなさい。でも休みで折角楽しみにしてるライブなのに間に合わないなんて勿体ない!」

出久がそう真剣な目でそう言い切ると響香は顔を真っ赤にしながらも落ちないように抱きついた。

○○○

ライブ会場の少し前につくと出久は響香を下ろして走った。

『今日は来てくれてありがとう!!』

目当てのクイーンガングズのリーダーがそう叫んでるのを見て2人はなんとか間に合ったと安堵した。

「良かった間に合った!」

「良かった・・・けど、むっっちゃ恥ずかった!マジで緑谷、ああいうのはもう止めて!恥ずいから!」

「うっ、ごめんなさい!」

「でも、ありがとう・・・」

響香は出久の顔を見ながら言った。言われた出久はその言葉に嬉しくなると同時に恥ずかしさがこみ上げてきて顔が真っ赤になった。

言った響香もそれを見てまた恥ずかしくなってきたので顔が赤くなり、2人とも相手の顔が見れなくなった。

『今日は年に一度の雄英体育祭!日本最大のイベント!!盛り上げるぜえ!!まず一曲目はコレだ!!』

クイーンガングズはオリジナル曲が存在しないコピーバンドのヒーローチーム。あくまでも本業はヒーローであると同時に音楽関係は趣味の一環でプロではなくアマチュアであるという価値観から弾くのは全て既存曲でしかもこういったライブの報酬は

貰つておらず、全てが非営利団体などに寄付されてる。

また、基本的に演奏できない曲が無いのでライブの時はくじ引きで弾く曲を選出してる。

そんな彼らが引いたクジを見て叫んだ。

『一曲目はSWEETのTeenage Rampageだ！いいねティーンエイジャーらしくて！』

そう叫ぶと出久や響香も含めて盛り上がった。体育祭に来てるだけあって老若男女様々な個性の人間がいるが若者が多いのでやっぱりこういった曲が1番盛り上がるのだ。

曲はその後も名曲や新曲関係なく続いていき、観客も熱狂していた。3年の体育祭が行われているがそれに負けないくらい熱狂があった。

出久は純粋にそれを楽しみながら響香の方を見ると彼女は今まで見たことがないほど嬉しそうに笑顔で楽しんでた。

出久はそんな響香にますます見惚れていた。

こうして2人の初めてのデートは色々となりながらも満足出来るものだった。

○○○

無事にライブが終わり、2人はバレると恥ずかしいのでバラバラに寮に戻った。

夜に最後の休日としてまた全員で盛り上がった。いつもはノリの良くない方である焦凍や勝己もどんちゃん騒ぎはしなが付き合っていた。

そんな中、出久は人目を避けて寮の屋上に上がった。

「何でも出来る『デク』か・・・」

操兎に言われた事を出久は思い出していた。

そんな風に考えたこと無かった出久にとってその考えは新鮮だった。

「どうしたんだ出久？」

後ろから声を掛けられて振り向くとそこにはバーガーを2つ持った電気がいた。

「電気、ちよつと考え事しててね」

「そうか・・・」

「ねえ、僕達は本当にヒーローになれるかな」

「どうしたんだ急に？」

「いや、桃白白に勝つために鍛えてるのに昨日と今日は楽しみ過ぎなんじゃないかって思っちゃってね。無粋なのはわかってるけど、ただ……」

「なれるじゃなくてなるんだろ？」

電気は出久の隣に来て持ってたバーガーを一つ渡した。

「楽しんでいいじゃねえか。楽しんで楽しんで大事な思い出になるから、俺たちやヒーローってのは頑張れるんじゃないかな？」

「……電気……そうだよ、僕達が守ったりする日常を僕達が分からなくなったら辛いよね」

「ああ、だから今は……兎に角楽しめ！」

電気はそう云うと渡した筈の出久のバーガーを奪った。

「ちよつと!?!それ、僕の為のバーガーじゃないの？」

「誰もそんな事、言ってるねえよ。これはのんびりしててバーガーを食べない出久に見せびらかす為を持ってきたんだよ！」

「なんていじらしいことを！待て電気！」

「待つか！」

2人はそう笑いながら、バーガーの取り合いを始めた。2人ともこの瞬間、この幸せ、この日常が続くことを心から願った。

ステインVS インゲニウムズ feat ザ・クロウラー
来たれ！ヒーローネーム!!

体育祭も終わり、少し経って出久達はまた激動の日々を送り気を引き締めていた。

「おはよう。今日のヒーロー情報学は特殊だぞ」

「まさか小テスト!?!」

「ヒーローの法律、ただでさえ苦手なのに!」

「それともまた除籍騒動!?!」

「もしくは遂に攻め込んで!?!」

「コードネーム。ヒーローネームの考案だ」

「!?!胸膨らむやつ来たあ!!!?!」

消太の言葉に皆、興奮した。

ヒーローに憧れてる彼らも一度は色々ヒーロー名を考えてたりするので純粋に胸が膨らんで盛り上がっていた。

「静粛に」

消太の言葉と眼力で静かになっても内心はまた興奮していた。

「ヒーローネーム決めは今度の職業体験から始まるプロヒーローのドラフト指名にも関わってくる。指名が本格になるのは仮免を取った辺りからで職業体験は将来性に対する興味に近い。その興味が薄れたら一方的なキャンセルなんてザラだ。そこには雄英高校とかそういう物は一切ない」

「頂いた指名がハードルになるんですね」

消太はその言葉に頷き、黒板に集計結果が映し出された。

上鳴 3482

緑谷 3180

常闇 1402

轟 543

芦戸 242

「これがウチのトップ5だ。他にも指名がいるやつはいるし、指名がないやつは紙を配るからそこから選べ。で、ヒーローネームは一応まだ仮だが適当なもんは・・・」

「付けたら地獄を見ちゃうわよ!」

消太の言葉に被せるようにミッドナイトが派手に登場しながら言った。

電気と実がやたらと興奮していたがそれはいつも通りだ。

「学生時代につけたヒーローネームがそのまま世間に認知されてプロ名になってる人多

いからね」

「その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう。俺はそういうのは出来ん」

「そうよね。イレイザーの名前ってマイクが決めたしね」

「適材適所。合理的な判断です。名前を決めてからなりたいヒーロー像が見えてきて近づくから大事にな」

消太はそう言うと言と寝袋に入って隅っこで横になった。

皆は思った、口ではあれこれ言ってるがそれってイレイザーヘッドって名前、気に入ってるって事じゃないかと・・・

○○○

「そろそろ良いかしら、出来た人から発表してね」

(発表形式!?)

(これはなかなか度胸が!)

そんな雰囲気の中、クラスで1番の度胸がありそうな優雅が前に出た。見た感じ自信満々だった。

「輝きヒーロー I CAN'T STOP TWINKLE!!キラキラが止まらない

よ!!」

((((短文!)))

「ここはIを取ってCAN, Tに省略した方が呼びやすい」

「それね、マドモアゼル」

((((良いのかよ、つか英語かフランス語、どっちかにしろよ)))

「じゃ、次アタシね。エイリアンクイーン!!」

「2!?血が強酸系のアレを目指してるの!?やめときな!」

三奈が自信満々に言ったヒーロー名が却下されて悔しそうに席に戻ったが空気が重くなった。

((((最初に変なの来たせいで大喜利みたいな雰囲気になっちゃった!!)))

誰が出るべきか迷ってるさなかに手を上げたのは天哉だった。

「飯田天哉、出来ました!」

元氣よく教壇に向かって天哉は発表した。

「ターボヒーロー インゲニウム2号!」

「あら、2号なの?」

「はい!まだ兄が現役ですの!」

「そう、2号って名前は結構色眼鏡で見られるかも知れないけど大丈夫?」

目蔵

「触手ヒーロー テンタコル」

「テンタクルとタコのもじりね!」

範太

「テーピングヒーロー セロファン」

「わかりやすい、大切!」

猿夫

「武闘ヒーロー テイルマン」

力道

「シュガーマン」

三奈

「ピンキー!!」

透

「インビジブルガール」

百

「クリエイティ。この名に恥じぬ行いを」

焦凍

「ショート」

「名前、良いの？」

「ああ」

踏影

「ツクヨミ」

実

「GRAPE JUICE」

甲司

「アニマ」

お茶子

「ウラビティ」

勝己

「爆殺王」

「そういうのは止めたほうが良いわね」

「何でだよ!？」

「爆発さん太郎ってのはどうだ!？」

「うるせえ！」

順調に行っていたが勝己で思わぬストップが掛かったがドンドンと決まってい

そして残るは出久、電気、そして再考する事になった勝己だけだった。

「よし、出来た!」

電気がそう言つて教壇に上がり発表する。

「ライトニングヒーロー センコウだ!」

「閃光、なるほど自分の雷に掛けたのね」

「他にも俺の速さなら絶対に相手よりも先に攻撃出来るつて意味で先攻とか」

「なるほど、ヴィランには威圧感を与えて市民には速く駆けつける事を示す。良いヒー

ロー名じゃない!」

ミッドナイトからのお墨付きを貰つてご満悦な電気。出久はそんな電気を一目見た

後で教壇になつて発表する。

「え?」

「良いのかそれ?」

「出久、それ嫌つてたはずじゃ!」

「うん、実はどうしようかと悩んでたし、蔑称が入ってるけど体育祭の最終日に僕が使え

ば、何でも出来る」つて意味になるつて言われて吹っ切れた。僕のヒーロー名はグ

リーンヒーロー「デク」

「敢えてデビルとかダークとか付けるヒーローはいるわ。でもそういう言葉の意味すらも変えようなんて凄い意気込みね」

「頑張ります！」

出久のハッキリとした言葉に他の面々も認めた。唯一、電気だけ少し納得しづらかったが本人が良いならと認めた。

勝己

「爆殺卿!!」

「違う。そうじゃない」

○○○

ヒーロー情報学の後の昼休み、出久は数多い指名の中から1つ選ばないといけないので冷静に見極めようとしていた。

「さて、どうしよう?色んな所から来てるな。デステゴロにシンリンカムイ、Mt.レディに加えてギャングオルカにフォースカインド、リユーキュウ、ファットガム、シシ

ド、エンデヴァー……うわっ!?ミルコからも来てる!?

「え!?嘘だろ!?緑谷」

ミルコという単語に反応したのはたまたま後ろにいた実だった。因みにこれに関しては性欲云々ではなく、単純にミルコがこういった指名を出してくること自体珍しいどころか下手すると初かもしれないからだ。

「俺はホークスやエッジショットとかもいるな」

「最速と達人系じゃん。しかも2人とも超ストイックで有名だし」

電気も自分の指名をしてくれたヒーローを選ぼうとするが2人ともあまりの多さとそしてネームバリューに苦戦していた。

出久と電気は一先ず、決めるのは後にして売店に行こうと教室を出るとオールマイトが飛んできた。

「私が独特の姿勢で来たあ!2人ともちよつと良いかな?ご飯は奢るよ」

出久と電気は突然やってきたオールマイトにビックリしつつもお誘いにのった。

○○○

オールマイトに昼飯を奢ってもらうのは色々とあらぬ噂が流れそうだったので止め

てもらい、出久と電気は昼飯を買って空き部屋で食べながら話し始める。

「オールマイト、随分と量が多いですね」

「いやあ、体が元に戻った反動かなに食べても美味しくてね。お陰で体重も筋力も5年前に戻ってきたよ」

「そりゃ、良かったです」

少し駄弁りながら食べる3人。

食べ終わりに、お茶を飲みながらオールマイトは本題に入った。

「実は職業体験で桃白白対策で良い人がいる。私の担任だった人で実践主義のお方だ。疾さなら上鳴少年以上の人だ。君達、2人にも指名を出していた。私の担任だけあってヒーローとしての心構えは良い」

「俺よりも速いんですか?」

「速いというよりも疾い。あつて直に見れば君にとつて良い経験になると思う。身体と個性の使い方と言えばプロヒーローの中でも間違ひなくトップクラスのお方だ。後、好きな物はたい焼き。ヒーローネームはグラントリノ」

「すげえ、よっしゃ!俺はその人に決めた!」

「僕もその人にします!」

出久がグラントリノを選んだ理由は幾つかある。1つは桃白白対策で疾さ対策をし

たかった事。電気も速いがそれには出久自身最近慣れてきたのと悟空やクリリン達とはまた違う視点が欲しくなった事。それと職業体験中は悟空らに鍛えて貰えないので実践主義は望んでいた物だった。

因みにそうなるミルコもガチガチの実践主義だがそこら辺はオールマイトの推薦を優先した。

○○○

フリーザは悠々自適に茶を飲みながら、のんびりしているとキコノがステインと血だらけの甲、そして黒霧を連れて来た。

「おや、それを見るに交渉は決裂したようですね」

「悪いが、俺はお前らのような騒々しい奴らはゴメンだ。それにコイツには信念がない」
ステインは親指で甲を指さしながらそう断言した。

「残念です。しかし、甲さんも随分とやられたようで」

「うるせえよ。この野郎を殺す許可をくれれば殺してやるのに・・・」

「おやおや。相変わらず血の気が盛んで……でもダメですよ。貴方の先生からも言われているでしょ」

「ちっ」

弔は舌打ちをした後、よっぽど気に食わなかったのか部屋を出ていった。廊下で弔の怒りは沸々と湧き上がっていた。5年前に現れたフリーザとAFOが手を組み、それからという物、ほぼ毎日のように殴られ蹴られて回復させられての繰り返し、我慢の限界がそろそろきていた。

（めんどくせえ、信念とかそういうった事も何もかもが全て面倒くせえ……全部、全部台無しにしたい）

弔の中に強烈なそれもかなりの破壊衝動と怒りが出来上がってきた。

○○○

空港では久しぶりの故郷の日本に奮えてる者がいた。

「5年ぶりの日本だあー!!帰ってきたぞ!!やった、もうアメリカじゃ、あの人らに振り回

されっばなしで大変でしかもなんかわかんないけど俺もセレブリティと同類に見られるしで色々辛かったけど・・・ありがとうインゲニウム!!俺を呼んできてくれて!!もう絶対にアメリカには戻らない。先輩には悪いけど、ヒーロー免許だつてもうちやんとあるからこつちでも活動も出来る。もうこれからは絶対に日本から離れないぞ!」

「ママ、変な人いるよ」

「しっ、見ちゃいけません」

一人空港で叫び、周りの人から見事に避けられてる彼の名前は灰廻航一

ヒーローネーム ザ・クロウラー

天晴と天哉

職業体験当日、A組は駅に集合していた。

それぞれヒーロースーツが入った鞆を持ってこれから出来るヒーロー活動に胸を躍らせていた。

「全員揃ったな、コスチュームは落したりするなよ」

「はいー！」

「芦戸、伸ばすな！」

「はい・・・」

「くれぐれも体験先のヒーローに失礼のないようにな。じゃ行け！」

それぞれ、改札を抜けて目的地行きの電車に乗る。出久と電気は一緒なので駄弁っていた。

「どんなヒーローなんだろうな？」

「ネットで検索してもあまり出てこなかったから、色々と気になるね」

「出久はやっぱり気を使った攻撃が主体になるから遠距離か？」

「うん、得意なのは伸ばそうと思ってけど、桃白白相手にそんな事はあまり言ってもらえな

いしなあ」

「まあ、ご教授願おうぜ」

駄弁つてると目的の駅に着いたので出久と電気は紹介された事務所の前に来て止まった。何故なら見た感じ廃墟だったからだ。

「ここであつてるよな？」

「兎に角入つてみようぜ、お邪魔します」

電気が元氣よく入ると赤い液体の上につ伏せになつてる小さい老人がいた。

「ああああああ!!死んでる!!!」

「生きてるぞ♡」

「ああああああ!!生きてたあ!!!」

老人は起き上がりながら、ケチャップをまぶしたウインターを持ったまま転んだと言つたが出久と電気にはとてもご教授出来るほど確りしてるとは思えなかつた。おまけに耳が遠いのか非常にボケているうえに勝手に出久達のコスチュームが入つてるケースを開ける始末。どう見ても介護が必要としか思えなく、出久と電気は帰ろうとした。

「ほら、さつさとコスチュームに着替えて・・・」

「すまねえ。俺達、早く進まなきゃいけないんだ」

「少しでも早く進まないと……皆を……だからごめんなさい。お爺さんの世話は……」
出久と電気はそう言つて立ち去ろうとする。老人は凄く速さで2人の上に飛んで来た。

「だつたら早く着替えんしゃい。受精卵小僧共」

出久と電気はその動きと気迫に武者震いしつつ、急いでコスチュームに着替えた。

2人ともコスチュームをバージョンアップさせた。今まで通りの武道着のコンセプトは変えず、出久は深緑の道着に黒の長袖のインナー。電気は明るい黄色に黒の長袖のインナーだった。

そしてこのインナーは防刃素材という優れもの。

「よろしくお願いします。グラントリノ」

そして教えてもらうグラントリノに2人は先程までの偏見を詫びる意味も込で頭を下げた。

「それじゃ、早く始めようか。オールマイトからは色々と聴いとるし、殺し屋の件についても教えられとる。時間はないわけじゃからな。ま、取りあえずは……」

グラントリノはそう言うのと天井まで高速で飛んだ。

「このワシに膝をつかせてみる」

グラントリノは狭い部屋の中で縦横無尽に動き回り、出久や電気を殴ったり、踏んづ

ける。

(は、早い!どんな個性だ!?)

(この狭い空間でこの速度で動けんのかよ!?)

出久と電気は背中を合わせてグラントリノを目で追おうとするが疾すぎて追いつけない。それどころか見失って頭やら足やらを殴られて膝をつく。

「ナメんな!!」

電気が飛んでくるグラントリノの上に行つて頭を殴ろうとするが空中で一回止まり、過ぎていく電気の腹に思いつきり突撃した。

出久はそんな隙だらけになつてグラントリノに向かって気弾を撃とうと構えるが瞬時に後ろに回り込まれて抑えつけられた。

「なるほど速いし、良い鍛え方をしとるが2人とも色々と甘い。金髪の方は速さに自信を持ちすぎだ。確かに下手な高速系よりは速いが疾くない。緑髪、お前は気とかいうエネルギー系の利用法がなっちゃいねえ。体育祭で多才に出せたから扱える自信もあるんだらうが特別視しすぎだ」

グラントリノはそう言うとお出久の拘束を解いてまた杖を持った。

「俺は飯を買ってくる。掃除よろしく」

そしてそのままヤケにニヒルな感じで外に行った。出久と電気はやられた所を抑え

ながら立ち上がった。

「速いが疾くないってどういう意味だ？」

「利用法がなっていないって一体？」

2人は指摘された事を考えながら掃除を始めた。

○○○

勝己はコスチュームに着替えた後で指名してきたNo.4ヒーローのベストジーニストの説明を聞いていた。

「正直に言うとな実際に会うまでは好意を持ってなかった。私を選んだのもNo.4という肩書で選んだと思った」

「指名入れたのアンタだろうが」

「しかし、実際に会ってみてそれは偏見だったと謝罪しよう。中々に己を律する気概を感じる良い目だ。体育祭での動きを見るに自分の個性や強さに自信があるようだが1回戦では逆にそれを付かれて負けた」

「わざわざ説教する・・・!？」

グチグチと言ってくるジーニストに勝己は掴みかかろうとしたが気づかない間に手

足が拘束された。

「だがそう云う驕りを捨てさせて矯正するのも私の仕事だ」

「何する気だ？」

「モラルから言葉づかい、所作に至るまで徹底して君に縫い付ける」

「生憎とそんなものに興味はねえ。No. 4 っつてのはグチグチと言葉でなんとかするヌルいヒーローなのか？」

勝己はそう挑発した。早く強くなりたいのにそんな事に時間を取られたくなつたからだ。ジーニストは拘束して勝己をこかした。

「勿論それだけじゃない。言つただろう君は己を律する気概を感じると、君のその目に対する敬意とそして偏見への詫びとして朝昼晩の3回、私が君相手に本気で特殊条件下の組手をする。制限時間は1時間。クリアする事に次のラウンドに行く。最後は限りなく無制限。さて君は何ラウンドまで行けるかな？」

「上等だ。全クリで爆破してやる！」

「よろしい。では先ずはデニムに履き替えなさい」

勝己はなんとも気が抜ける指示に半分ズッコケながらも履き替えた。

○○○

天哉は兄であるインゲニウムこと天晴の事務所に来ていた。

因みにこういう職業体験で身内の所に来るのは問題なのではないかと言われそうだが、それを言うとなo. 2のエンデヴァーが既にやっているので誰も批判出来なかった。

事務所の応接間の前で天哉は兄で憧れの天晴と共に仕事出来ることに感動しつつもキツチリ挨拶するために深呼吸してから部屋に入った。

「失礼します！今日から7日間お世話になる雄英高校ヒーロー科1年A組飯田天哉です！よろしくお願いします」

「来たか天哉。意外に早かったな」

「は！遅れては失礼だと感じ駅から走ってきました！」

「ま、堅苦しい事は抜きにして確り揉まれろ。それに紹介したい新しい相棒サイドキックもいるんだ」

「新しい相棒？」

「ホントはもう来てるはずなんだけどなあ？」

天晴は腕時計を見るがまだ来てない感じだった。すると

バタバタと騒々しい音と共に幾つかの怒鳴り声聴こえて激しく部屋のドアが開か

れた。

「遅れてすみません！本日よりここで暫くの間お世話になる灰廻航一です！」

「久しぶりだなクロウラー!!」

航一が来ると久しぶりにあつたのが嬉しいのか天晴は握手し、航一もそれに応えた。

天哉は天晴の行動に頭に？を浮かべていた。兄の交友関係はヒーロー関係だけでなく色々と聴いていたが遅刻してくる人と友人とは聴いたことがなかった。

「紹介するよクロウラー。俺の弟の天哉だ」

「飯田天哉！雄英高校ヒーロー科1年A組です！よろしくお願いします！」

「よろしく、俺はザ・クロウラー。アメリカでセレブリティの相棒をやつてて今回はインゲニウムに呼ばれて来たんだ」

天哉はセレブリティとザ・クロウラーという言葉に聞き覚えがあつた。不祥事とスキヤンダルの多さはアメリカヒーローの中でもトップで一時期はアメリカでの活動が難しくなり日本で硬派路線を築きながらも未だに訴訟の多さがトップのお騒がせヒーローのキャプテン・セレブリティ。そしてその相棒で失言の数々で度々大炎上してるザ・クロウラー。天哉はなぜ優秀な兄がそんなヒーローを呼んだのか気になった。

「兄さん、なぜ灰廻さんを？」

「そう言えば、俺も呼ばれた理由は聞いてなかったな」

「聞いてなかったんですか!？」

「いやあ、日本に帰れるのが嬉しくて」

「そんな事でどうするのですか!?! これからヒーロー活動するといふのにあまりにも気が抜けすぎてるのでは!？」

「ここら、初対面の人に失礼だろうが。すまなかつたなクロウラー。それで呼んだ理由は通称 “ヒーロー殺し”、ステインを捕まえる為だ。俺もやられてから色々調べていく内に5年前の鳴羽田で活動していた自警団が起こした殺人と似ていたとわかった。そいつの名前はスタンダー」

その言葉を聴くと先程までと違い航一は顔を引き締めた。天晴はそんな顔を見過ごさなかつた。

「知ってるのか?」

「自警団時代に2回だけ会いました。1回目は助けてもらつて2回目は人を殺そうとしてる所で会つて、それからは会つてないです。俺は鳴羽田での経験を買われて呼ばれた? だったら役には立てません。なんの個性なのか俺には検討もつかないです」

「それはある程度こつちでついてるから安心してくれ。ウチのチームIDATENに所属してる相棒やスタッフにも全員対策を立てた。君を呼んだのは今までのやり方じゃ逮捕できないからだ」

航一も天哉も逮捕できないと断言した天晴の言葉に疑問を持つ。そもそもチーム I D A T E N を始めとしたインゲニウムの犯人の追い詰め方は逃げる犯人を相棒の力で追い詰める大捕物が得意であり、そんなインゲニウムが出来ないとなると疑問しか浮かばなかった。

「まずヤツの個性は少しの間だけ相手の動きを止める物。そして全身に刃物という姿から恐らくトリガーは血液によるもの。斬られたら終わりかそれともそこから何らかのアクションがあるのかはまだわからない。サポート会社に協力を仰いで防刃対策をしたスーツで挑む。問題は止められてる間、こっちは指一本動かせない事。そのために俺と同じ速度で動ける程速いクロウラーを呼んだ」

同じ速度で動けるという褒め言葉に航一は顔をニヤけさせた。天哉は電気という自分よりも速い存在がいたのでクロウラーの速さには驚かなかったが兄に頼りにされるといふ部分が悔しかった。

しかも初つ端に遅刻をしでかすアメリカのお騒がせヒーローという点も生真面目な天哉は嫌った。

「ステインは俺とクロウラーのツーマンセルで挑む。それに下手するともっと危険なのにも出会す可能性がある」

そう言うのと今まで冷や汗を欠いてなかった天晴の顔に初めて冷や汗と少しの恐怖が

浮かび上がった。

「ステインに遭遇した時に会った奴だ。姿からして恐らく異形系の個性だと思うが幾ら軽量素材とは言えスーツを着た俺を軽く蹴り飛ばした。正直に言ってアイツを捕まえるには既存の戦力では足りない。クロウラーを呼んでツーマンセル体制にするのは最悪、どっちかを担いでの退却も考慮してだ」

「そんなにヤバいのがいるの!？」

「ああ、既に幾つかのヒーローと連携する事が決まってる。チームID A T E Nの他にN o . 2のエンデヴァー、保須が地元のマニユアル、年配だが実力者のグラントリノ、日本中を周ってるミルコの計5つの事務所が連携を取り、グラントリノ以外は明日から現地入り、約1ヶ月間の大規模な連携だ。」

「ちよつと待つてください、それはステインに対して?それともその遭遇した奴に対して?」

「・・・遭遇した奴に対してだ」

航一と天哉はその言葉に絶句した。

そんなに恐ろしい敵がいるとは信じられなかった。

「やつはフリーザと名乗っていた」

天晴の言葉に天哉は言葉を失った。それはZ戦士達からフリーザの恐ろしさを知っ

ていたただけではなく、下手をすると桃白白を始めとした敵連合も動くかもしれないと緊張が全身を走った。

「何その冷蔵庫みたいな名前」

「名前は変だが実際に会うと恐ろしさが良くわかる。フリーザは間違いなく過剰戦力とも呼べる規模で当たった方が良い。今まで凶悪敵は何人も逮捕してきたがあれはその中でもド級だ。気を引き締めて市民に安全だと示さないとこの超常社会そのものが傾く」

天晴の言葉に航一は気を引き締め、そして天哉も兄の役に立つ為に気を引き締め直した。

そこまで説明が終わると天晴は緊張を緩めせるために笑った。

「じゃ、これから保須の下見とパトロールも兼ねてジョギングだ。2人ともこっちが用意した防刃対策のアーマーを着てくれ。天哉はこっちで用意したスーツでクロウラーは大丈夫だな？」

「勿論、アメリカの敵は血の気が多くて防刃対策はバッチリ！」

天晴、天哉、航一はスーツに着替えた。

天晴と天哉はステイン対策として防刃素材のインナーを着た上でスーツを着てアーマーを少し重いが軽い刃を跳ね返し、鉄よりも軽い特殊金属のアダマンチウム製にし

た。

航一はアメリカでの経験と自警団時代からプロテクターを愛用したので全身のプロテクターを硬くそしてスーツも防刃防弾素材にしていた。

天晴と天哉のヒーロースーツの姿は腕と足の違い以外は殆ど一緒だった。

航一のヒーロースーツは紺色に白と赤が入ってオールマイトヤングエイジコスチュームに似ていた。そして安全対策のヘルメットもメットも確りと被ってた。

「お？オールマイトのヤングエイジか？」

「どうも自警団時代の名残でオールマイトに似せないとノラなくて、このままブロンズエイジ、シルバーエイジ、ゴールドエンエイジと変化していく予定！」

「おお・・・」

あまりにもオールマイトヲタクな航一に天哉も天晴も感心しつつも少し引いた。しかもそれが無茶苦茶良い笑顔で言われているので余計に引いた。

3人は部屋で駄弁るのを後にしてパトロールへと向かった。

○○○

フリーザは黒霧と一緒にステインを見送っていた。

それは保須を見渡せるいい位置にある廃墟の屋上だった。

「ここで良いんですか？」

「ここで構わない・・・一つ聞きたいことがある」

「何でしょう？」

「血は流れるのか？」

「・・・ええ、勿論。生き物ですので」

ステインはそれを聴くとさっさとその場から立ち去った。フリーザはそれを見ながら笑っていた。

（ふふふ、この私の首すらも狙おうとは良い心掛けですね）

（血が流れるなら、勝機は限りなく低くてももある。アイツは確実に殺さないとダメだ）
ステインはそう頭で考えながら降りた。

また殺人をするために・・・

○○○

天哉は天晴と航一と一緒にパトロールをしていた。人気のヒーローであるインゲニウムは街の多くの人に手を振られていて天晴も手を振り返していた。

「あ、インゲニウムだよ」

「あれ？2人いるよ？」

「もう一人知ってる。苦労マンだ」

「うわ、本当に姿勢低いんだ。キモっ！」

街の人の言葉でザ・クロウラーではなく自警団時代のしかもあだ名の苦労マンと言われて航一はより凹んだ。更に低姿勢がキモいというのも辛かった。

「そういえばクロウラーって最初の頃はザ・スカイクロウラーってヒーロー名だったけどなんで変えたの？」

「空飛べるようになって、なんというか最初の頃はそれが嬉しくてしようがなかったんですけど、一昨年にちよつとスランプになつちやつて・・・それで初心に帰るって意味を込めて直しました。低姿勢の移動に戻したのもそう言う感じで」

「なるほど・・・いやしかし、本当に来てくれて心強いよ」

「まだ相棒から脱却出来てないですけどね」

「いやあ、俺も相棒時代が長かったからな」

「あんな、3年で終わったでしょ」

「うっ！」

天晴と航一が親しそうに話していてあぶれてる天哉は実に面白くなかった。大事な兄が近くにいるのに遠くにいるようで非常に面白くなかった。

「さて、天哉……いやインゲニウム2号に問題だ。俺達ヒーローは基本的に公務員扱いだが普通の公務員とは著しく全てが違う。副業も認められてるしな。でだヒーローに必要なのは何だと思う？」

「速さです！助けを求める人達を素早く迅速に助けるために速さが必要です」

「そう、ってこれは昔から俺が言ってたからなあ。クロウラーは？」

「速さも必要だけどやっぱり親切心も必要だっと思うよ。後は言動だね。特にウチのアレを見てると本当にそう思うよ」

「そんなにセレブリティって言動酷いのか？」

「付き合ってみたらアレの酷さが良くわかるよ。もう本当に色々な意味で言葉と動きが合ってなくて腹立つから」

航一の唸るような言い方に天晴は苦笑しつつも互いにこの5年間についての話に花を咲かせていた。そして一人また蚊帳の外になった天哉は疎外感を覚えた。

しかも相手が失言過多でお騒がせヒーローの航一というのも余計に腹が立っていた。

（兄さんはなぜ、この人を呼んだんだ？他にも速い人なら大勢いるのに、なぜお騒がせヒーローのこの人を……）

折角の尊敬する兄と共に仕事が出来るかと思つたのにこれじゃ、居ても居なくても変わらないという感覚が天哉の心を蝕む。

そんな中でドカンつと爆発音が3人の耳に入った。

「今のは!？」

「現場に急行するぞ!」

「負傷者の確認!」

天哉が爆発音に驚いてる内に天晴と航一はさっさと現場に急行した。天哉も遅れて追い掛けるが純粹に速度で追いつけなかった。

天晴に追いつけないのはいつもの事だがそんな兄に余裕で追いついてる航一の姿が天哉には酷く邪魔に見えた。

(絶対に兄さんに認めて貰うんだ!)

○○○

3人が現場に急行すると6階建てのビルの4階から上が火事になっていた。

大勢の人が溢れかえっていて混乱していた。

「インゲニウムです、通してください!」

天晴はそう叫びながら航一や天哉と共にビルの前に来る。そんなインゲニウムに1人の年配の男性が近づく。

「助けてくれ。まだ中に人が！」

「分かりました、火の手はどこから!？」

「わからないんだ、急に爆発して！」

それだけを聴くとインゲニウムは男性を避難させてビルを見ながら2人に指示を出す。

「俺とクロウラーはまだ残されてる人を！2号は裏口に回って人が居ないか確認してくれ！俺は5、6階を調べる！クロウラーは4階から下だ！」

「了解！」

天晴と航一はすぐにビルの中に入り、天哉は裏に回った。裏に回ると5、6人が口や鼻を抑えて息苦しそうにしていた。

「皆さん、ヒーローです！すぐに表に来てください！動けない方は俺が運びます！」

「ヒーローだ！」

「助かった！」

「良かった！」

天哉は1人ずつ表に運びながら、事情を聞き始める。

「一体、火の手はどこから？」

「わからない、急に爆発してガス管とかも無いのに・・・」

「不審な人物は見てませんか？」

「・・・そう言えば、見たことない人が・・・」

何人にも聞いて天哉は残り2人の状態でそこまで聞いた。そして本当に放火犯の場合はたまに現場で見物してくる可能性があるのも天哉は野次馬を一回見た。そして見つけた。非常に響めつ面をしながら燃えてるビルを見ている「火傷の男」がいた。

桃白白、そしてフリーザ、さらに言う二元悪人であるベジータやピッコロのお陰で善人と悪人の感覚が鋭くなった天哉は理解した。奴が放火犯だと。天哉はまだ助ける人が居るにも関わらず火傷の男を捕まえるために追った。

火傷の男も気づいたのか逃げ始めて2人はビルから離れた。

一方、天晴と航一は裏に残されていた人達を助けていた。

「2号はどこ行った!？」

○○○

天哉は火傷の男を追っていた。

普段なら絶対に天哉は救助する人を置いてまで追いかけない。しかし、兄に認めて貰いたい感情と航一よりも上に行きたい嫉妬心が心を支配していた。

(兄さんに追いつくんのだ！)

天哉はそう思いながら、火傷の男を追い掛けるが土地勘の差か男は入り組んだ裏道を入って逃げまくり追いつけないでいた。

「おいおい、ヒーローが救助する人ほっぽりだして良いのかよ？」

男はそう呟きながら天哉に向かって青い炎を放出した。

天哉はそれを間一髪避けた。下手すると2次災害が起こるかも知れないくらいの大きな炎で天哉は他に被害がないか確認していると男はその隙に逃げた。

「しまった、逃げられた！」

「2号!!」

炎を確認した天晴が路地裏にやってきた。

その声はいつもの兄の声ではなく怒気を帯びていた。

「お前、何してんだ？」

「兄さん……僕は……放火をした敵を追って……」

懸命に事情を説明しようとする天哉の頬を天晴は思いつきり殴った。殴り飛ばされて天哉のメットが外れる。

「誰がそんなことをしろって言った!!救助する人をほっぽり出してやることか!?!ふざけんな!!」

天晴はもう一度天哉を殴ろうとするがその拳は航一に止められる。

「インゲニウム……それ以上は……」

航一の言葉を聞いてか天晴はメットを取って天哉を見た。その目は非常に冷たく、初めてみた目に天哉は漸くここで自分が何をしたのか理解した。

「天哉……お前、ヒーローに向いてねえな」

天晴はそう言うとすぐにビルの方に戻っていき、航一はまだ倒れてる天哉に手を伸ばすが振り払われた。

航一はそれ以上は何もせず自分もビルの方に戻るとだけ天哉に伝えて、天哉は一人路地裏で打ちひしがれていた。

空から落ちて

出久と電気はグラントリノから言われた事を考えていた。出久は気の使い方。電気は疾さが足りないと言われたがなまじ2人は自信があつたものなのでそれが出来てないと言われて悩んでいた。

「くそつ、疾さが足りないって分かんねえな」

「僕も気の使い方には自信があつただけどなあ」

出久はいつも通りにノートを拡げて考え始めて電気は体を動かし始めた。

（疾さ・・・速いが違う・・・難しいなあ。考え方が違うのか？俺の帯電は移動系の個性じゃねえ。けど速く動けるし、移動系の悩みである急な方向転換は兎も角、止まることは簡単に出来る・・・）

電気はそこまで考えて先程のグラントリノの動きを思い出した。速さなら負けてないがこういう個性かはわからないが急に止まって再攻撃、さらに言う急な方向転換もしていた。

（ひよつとして、急な方向転換を自在に出来れば・・・放出の量の調整を更に細かく出来たら多分いけるはず・・・）

電気はそう考えてやった方が速いと事務所に置いてあったガムテープを持って屋上に行った。屋上に着くとガムテープで3つの線を作りやるのは個性を使つての反復横跳びだ。

初日の体力テストで実に負けていこうやつてなかつたが電気はそれをやつて見る。

(放出と纏うを両方やる。ある程度まで来たら逆方向に放出して纏えれば急な方向転換も出来るはず)

電気はそう考えて反復横跳びを始めた。左端、真ん中と上手く行つた電気は右端に来た瞬間に逆方向に電流を少しだけ流して纏う事をやつたが体がついて行けず思いつきりこけた。

(イッテエ、頭ん中じゃ出来てんだけどなあ)

一方、出久はノートに取りながらブツブツと考えていた。

(気は師匠やクリリンさん達から教わつてる。気弾を出したり、かめはめ波をしたり、ブーストも出来る。繰り弾でコントロール性もあるし、それ程とはいかないけど普通の気弾も曲げられる。これから考えて気弾じゃなくて多分、気の使い方そのものだと思うけど気を纏つて殴つたり、移動したりしてて普通の人よりも身体能力は向上してる。使い方・・・これ以上の使い方って・・・)

出久はそこまで考えて体育祭の事を思い出した。それは電気が柔造と試合した時に足で気を放つて加速した事を思い出した。

（足で気を放つ?・・・いや、違う。もつとコンパクトに気と武術を組み合わせれば・・・そうか!! 師匠や悟空さん達に引つ張られ過ぎてた、ブーストと気弾と武術を上手く組み合わせれば・・・）

出久はそこから答えを導き出した。

その姿を見ていた者がいた。

グラントリノである。

（なるほど、2人とも確かに才能豊かだ。俊典、オールマイト未来のヒーローはお前の想像以上かも

知れんぞ）

○○○

勝己はジーニストにボコボコにやられていた。それこそ、地面に拘束された状態で動けなくなっていた。

「初日にレベル3まで来たのは素晴らしいと言う他ないがこのレベルはかなりキツイと言ったはず、レベル1が転げないこと。レベル2がそれを個性抜きで、だが私はこれでも手加減している。この3は個性抜きで100メートル1回も転げなければ良いが君

は既に百回は転んでるね」

「うるせえ、さっさと解きやがれ」

悪態をつく勝己にジーニストは拘束を解いた。そして勝己はまたスタートラインに戻ってクラウチングスタートの準備をした。

「それではハジメ」

「ぶっ殺す!!」

ジーニストはなんとも物騒な掛け声にこころへんの言葉遣いも直していこうと決心した。そして容赦なく勝己を個性の糸で転ばせる。

○○○

夜になり、グラントリノの事務所で晩御飯を食べる出久達3人。そんな時に不意にグラントリノが話し始めた。

「なあ、オールマイトのやつはオール・フォー・ワンについてお前ら一年坊主共に詳しく話したか？」

「いえ、その・・・僕達も詳しく知らなくて・・・」

「あのバカ！何やってんだ、全く・・・」

「そのAFOってのは何なんっすか？」

「……あのバカから聞け……まったくアイツはまだ恐れてるのか……」

「あの……オールマイトが恐れてるって……」

「詳しい事情を俺から話す気はない。だが、俺から見てアイツは人を守る気概はあつても人と共に歩んでいられない。共に歩く勇気がない」

グラントリノはそう言うのと食べ終わつていのもあつて席から外れた。出久と電気はどうするべきか悩みつつも自分の食事を食べた。2人は食べ終わり、共に食器を洗うと一緒に今日はわかつた課題点を話し合つていた。

「俺の課題点はやっぱり急な方向転換だけど体がついていかなえ。転んじまう」

「僕は気をもつと徒手空拳に混ぜる事。これについてはある程度イメージ出来た。後は実践するだけ」

「マジかよ……ぜってえ負けねえからな！」

出久に先に行かれた事に電気は一瞬呆然としてしまうがすぐにそう言うのと燃えていた。出久はそんな電気の凄い所を見て微笑む。

「でも電気つて下手な移動系個性よりも速いけどちゃんと止まれるよね。あれつてどうやってるの？」

「ああ、あれは……」

出久は電気に何気なしに尋ねて見て電気は応える前に止まった。少し止まり、電気は

途端に項垂れた。

「電気？」

「そうか、わかった!!俺、勘違いしてたんだ!!」

「ごめん、どういうこと？」

「ちよつと屋上に行こう！」

興奮してる電気は出久を連れて屋上に上がった。

電気が反復横跳びをやった跡がコンクリートの上なのに出来ていた。

電気はまたガムテープを今度は2本だけ張って出久から見て左側に立つ。

「いいか出久。ちゃんと超えてるか見といてくれ」

「わかった」

電気は集中しバチバチと体から少しだけ電気を出して右側に向かって動いた。そして見事にさつきまで出来てなかった方向転換をして左側から右側に行こうとすると思いつきり転んだ。

出久はさつきまで出来てないと愚痴ってたのに出来た事に啞然となった。

「え!?!電気、大丈夫!?!」

「大丈夫・・・けど成功だ!」

電気の顔は実に爽やかさを感じさせる清々しい笑顔だった。

「一体どうやって!？」

「俺の個性『帯電』は放出も出来るけど纏う個性だ。その放出と纏うを瞬時に切り替えて高速移動してる。つまり移動系の個性じゃない!だから移動系と同じように反対に向かつて動くんじゃないかと止まることを意識したんだ。俺が止まれるのって少しでも全身から電気を放出して止まってんだよ。それをピンポイントに出来ればホンの一瞬だけでも止まれる」

「それって無茶苦茶難しくない?そんな瞬時に放出って」

「ああ、だから今転んだ。けど出来た!出久、先に行くぞ俺は」

ニヤニヤと言う電気。出久はやっぱり電気は天才だと思いつながら負けない為にも気と武術を更に混ぜる為に体を動かし、電気もまた修行を始めた。

グラントリノはそれを物陰から見つ満面の笑みを浮かべた。

(こりゃ、想像以上だ。ライバル関係も良い感じに作用してる。明日は本気でやってやるか……流石に寝ないとヤバくなりそうだ)

グラントリノは明日の本気の組手の為に早く寝ようと寝室に行った。

インゲニウム事務所の空気は最悪だった。

天晴が天哉にブチギレ、航一だけでなく普段からいる相棒達やメカニックもここまでキレてる天晴は見たことなくどうすれば良いのか悩んでいた。

まあ完全に悪いのは天哉の方ではあるが天哉は天哉で落ち込み方が違く、1人事務所の屋上で蹲っていた。

（僕は何をやってるんだ。兄さんと一緒にヒーロー活動出来る事に浮かれて大事な事を忘れて失望させて……いつもそうだ。僕は自惚れてばかり……入試でも体力テストでも模擬戦でも……ずっと自惚れ続ける……）

天哉は後悔していた。入試では0Pの仮想敵から助けなければいけない他の受験生もいたはずなのに逃げて、体力テストでは自分の個性よりも速い個性がいる可能性があつたのに一々驚いていて、そしてあの出久の無個性が明かされた後の模擬戦ではエゴを振りかざし出久を傷つけた。

（何がヒーローだ……とんだクソ野郎だ）

天哉は蹲りながら泣き始めると不意に屋上のドアが開かれてそつちの方向を向いた。そこには航一がコーヒー缶を2つ持ってやってきた。

「隣に座っていいかな？」

航一に天哉は返事をしなかった。色々と放っておいて欲しかったからだ。けど、来る

など言うことは出来ずに天哉は航一を無視した。

航一は沈黙は肯定と受け取って天哉の隣に座って、コーヒー缶を一つ近くに置いた。「そう言えば、俺がスカイクロウラーからクロウラーになんで戻したのか言つてなかったね」

「二昨年にスランプになったと」

「そのスランプの原因」

航一は少し間を置いて一昨年に何があつたのか話始めた。

○○○

その日、ニューヨークは混乱していた。

ヨーロッパのオセオンを中心に拠点を置くヒューマライズの思想にのめり込んだ数十人の無個性の人間が爆弾を人質のいる高層ビルに仕掛けた。

航一はセレブリティや他のヒーローと共に行動していた。

「我々の任務は人質救出だ。人質はビルの10階と15階にいる。絶対に助けるぞ！」

ビルの前でそう他のアメリカのヒーローに言われてその場にいた全員に緊張が走る。そんな中で航一に駆け寄ってきた一人の少女がいた。航一は彼女に気が付き、屈んだ。

「どうしたの？」

「パパが上にいるの……助けて……」

泣きながら訴えてくる少女に航一は笑顔を見せた。安心させる為だ。

「わかった！このザ・スカイクロウラーが助ける！約束するよ、えつと……」

「……マリア」

「約束する、絶対にパパを助ける！」

航一はマリアとそう約束した。

ビルに入り、セレブリティの号令と共にヒーロー達は2班に分かれた。航一は15階へ、セレブリティは10階へ。そして人質が居る部屋に入ると見たのは1人の男性が体に時限式の爆弾を巻き付けられて口にガムテープを張られていて他に数十人の人質もいた。しかもタイマーは航一達が入った瞬間に起動した。

「ヤバイ！」

航一は瞬時に男性に駆け寄ってガムテープを剥がした。

「助けて助けて……マリアが……娘が待つてるんだ……」

「絶対に助けます！」

航一は約束を守る為に助けようと、KGDで爆弾を吹き飛ばそうとするが下手にやると爆発するおそれがあるため止まり、自力で解除しようとするがタイマーは刻一刻と迫っていた。さらには他の人質を救出しようにも拘束具が増強系個性犯罪者に使われる物

で外すことも壊すことも出来ないでいた。

そんな中、あるアメリカのヒーローが2人に近づき、航一を押しつけた。

「何を!？」

「すまない」

そのヒーローは男性を連れてビルの窓際まで来た。

航一や男性は何をするのか理解した。

「止める!!」

航一は2人に向かって飛んでいった。しかし、そのヒーローは無情にも男性を窓から落とした。すぐに助けようと飛んでいくが残酷にもタイマーがゼロになって男性は爆殺してしまった。

「ああああああ!!!」

窓際で叫ぶ航一。

彼は怒りを放り投げたヒーローにぶつめた。

何度も何度も殴り続ける航一。

「なんでなんでなんでなんでんで見捨てた!!？」

怒りのまま叫び、殴る航一。

殴られてるヒーローは一切の抵抗を見せずにただそれを受け入れていた。

航一が止まったのは上で何があったと慌ててきたセレブリティに拳を受けて漸く止まった。そして見たのは自分が殴り続けて半殺しにしたヒーローと血まみれの自分の手だった。

呆然とセレブリティに付き添って貫つてビルから出た航一を待っていたのは爆殺されて振り返り血が撒き散った自分の父親の血を浴びて「真っ赤」になったマリアの姿だ。マリアは呆然となつて居る航一を見て悟つたのか、たつた一言だけ言つた。

「嘘つき」

さらに最悪なのはこの後だった。犯人である無個性のグループは爆発したのと同時に全員自殺。そして男性を投げたヒーローは一切の反論もせず、全て自分のせいだと言つて刑罰を受けるのと同時にヒーローを引退。だが数カ月後、罪に苛まれたのか刑務所内で自殺。

無個性のグループに影響を与えたヒューマライズの指導者フレクトは今回の事件についてこう語つた。

『大変痛ましい事件ですがそもそも無個性の彼らをここまで追い詰めたのは個性を重要視し、無個性を差別してこの社会そのものではございませんか！そしてそんな彼らを一歩追い詰めているのはヒーローという病です！彼らが存在せずに個性を重要視しない社会であればこんな事にはならなかった』と言つた。

あまりにもあんまりな発言と投げたヒーローが自殺した事で航一に待っていたのはこの上ない「同情」だった。

『やれ、あれは仕方なかった』とか『君は何も間違っていない』とか歯につくような薄っぺらい同情の嵐。

いつそ敵扱いのほうはまだ良かったと航一は思った。

そして航一は「飛べなくなった」。

自警団時代のように地を這うぐらいしか出来なくなった。

しかし、彼は諦めなかった。

何故なら、どんなに苦しみ辛くても人の手助けをしたいと心の底から思い、行動するから。

彼は「ザ・スカイクロウラー」から「ザ・クロウラー」に名前を戻して再びヒーロー活動をした。

沢山の安い声援、夢に現れる血塗れのマリアと共に……

○○○

あまりにも悲惨な経験に天哉は絶句していた。

その事件を天哉は知らなかった。何故ならヒーローが飽和してる社会だけではなく

ニユースというのは悲惨であればあるほど人は忘れようとするからだ。

「君にはこんな風にならないで欲しい。君が今日やったのはそんな絶対に行つてはいけない道の一步だ」

「すみません、僕・・・何も見てなくて・・・」

「良いよ・・・さ、コーヒーでも飲んで明日から気持ち切り替えないと！ヒーローになるんでしょ？」

「・・・はい！」

天哉は渡されたコーヒー缶を思いっきり飲んだ。

「あつつい!!!」

そしてコーヒーの熱さに悶えていた。

○○○

弔は黒霧がバーテンダーをやっているカウンターで緑谷出久、上鳴電気、そして桃白白、フリーザ、ステインの写真を見ていた。

「気に入らねえな、どいつもこいつも・・・」

「死柄木弔、どうしたのですか？」

「ムカつく、どいつもこいつも……コイツラを全員殺せたらどれほど気持ちいいんだろうなあ?」

甲はそういうと全ての写真を塵にした。

「まずはあの野郎からだ。アイツの行持も何もかも台無しにしてやる」

甲の目には怒気が宿っていた。それはまるで蛇のように確実に相手を殺すような鋭さと静けさを宿していて黒霧の背筋は凍った。

インゲニウム2号

天晴は事務所の自分のオフィスにいた。

本当は相棒やメカニックとコミュニケーションをもっと取りたいので要らないと思っていたが、所長や父から説得されて持ったが正直に言つて天晴は折角のいい部屋を使い余していた。

やることと言つたら資料を読むくらいだった。

コンコンとドアが叩かれた。

「開いてるぞ」

天晴はそう言うが入ってきたのは天哉だった。

目は先程よりもマシになっていたが天晴はだからどうしたと言わんばかりに冷たい目を向けた。

「何のようだ？」

「インゲニウム。今日の事は本当に申し訳ございませんでした！僕のでかした事で顔に泥を塗つてしまい申し訳ございません！」

「言いたいことはそれだけか？・・・これはヒーローとして言う言葉だが今日のお前が

やったことは絶対に俺は許さない！どんな理由であれ、ヒーローが市民を見捨てたんだ。そんな奴の言葉も行動も価値なんてない。それにお前が泥を塗ったのは俺の顔じゃねえ。俺のヒーローとしての矜持だ。人を助ける・・・それをお前には丁寧に教えてきた筈なのに・・・お前が泥を塗ったのはもう絶対に拭えない物なんだよ・・・だが俺はお前の兄貴だ。兄として先輩として徹底的にしごくし教える。わかったらとつとと寝ろ。これで寝坊してみる？ 雄英に送り返してやるからな」

「・・・はい！」

天哉は天晴の言葉にきちんと返事を返すと部屋から出た。そして航一が入れ違いに入ってきた。天晴は暫くの相棒がやってきたので先程までと態度を変えて資料を置いた。

「クロウラーどうしたんだ？」

「いや、一緒に保須をもう一回パトロールしません？ 今度はジョギングで」

航一からの言葉に天晴は気分転換も兼ねて一緒に走ることにした。

共にジョギングの格好と緊急時の為に免許を確りと持つて走る。

「ねえ、天哉君にあそこまで言わなくても良かったんじゃないんですか？ どんなにヒーロースーツを着てもまだ学生だし、おまけにあのぐらいの時期はああしたくなるものなのは分かっているんじゃない？」

「ああ、わかつてる！俺もそうだった。初めての仕事で父の相棒になつて手柄欲しさに大事な事を忘れてボコボコに殴られた！あの時期にああなるのはわかつてるよ！」

「だつたら何で??厳しくするだけが教えるつて事じゃ無いでしょ？天哉君は真面目מידだから、あの時の説教で大丈夫だと思ふけど？」

「君の言うとおりだ！さっきの俺は明らかに言い過ぎてた！」

天晴はそう断言すると止まった。少し肩で息をしていた。

「もつと上手く行くと思つてた。俺の弟だから知つてるし、教えるのもきつと上手く行くけど、今日のアレを見て・・・ちゃんと教えてきたはずなのに全然出来なくて悔しくて・・・結果こんなんだよ。ままならねえな」

「大丈夫だつて。きつと上手くいく。なんせ、インゲンウムは良いヒーローだし、天哉君も凄く良い子だ。ボタンの掛け違いなんてゆっくり向き合えばきつと綺麗になるよ！」

「・・・ありがとうクロ・・・航一君」

天晴は航一にそう言うともう一度2人は走り始めた。それはかつて鳴羽田と一緒にジョギングしていたあの頃に戻つたような感覚を2人は味わっていた。

グラントリノはぐっすり寝たので非常に気分が良い朝を迎えていた。コスチュームがもうすでに私服と化してる彼は寝間着から着替えて一階に行く結構ポロポロになってた出久と電気がもうすでは起きて朝食を準備していた。

「おはようさん。お前らちゃんと寝たか？」

「おはようございませう！勿論寝ました！」

「今日は勝つぜ。グラントリノ！」

「まあ、年寄りを急かすな。先に食べてからだ」

朝食を食べる3人だが出久と電気は早食いでよほど昨日のリベンジに自信があるのか燃えていた。

(こいつら・・・年寄りは流石に労るよな?)

未だに自分は若々しいと内心思ってるグラントリノだが流石にこの2人のもはや清々しさも感じるほどの燃えてる心に珍しく弱気になった。

朝食を食べ終えて出久と電気はコスチュームである道着に変えると構えた。

馬鹿正直によーいドンなんて言うわけもなく、急に飛んで2人の腹を殴る。

「おいおい、敵がノンビリとよーいドンなんて言うと思つたのか？そんな気の抜けた事じゃまたやられるだけだぜ」

グラントリノは昨日と同じように周りを飛んで2人を翻弄しようとするが特に慌て

ずに冷静に2人はグラントリノを見ようとしていた。

グラントリノは思いつきり、そこに突っ込むと電気が昨日と同じように飛び上がった。上から殴ろうとする。

(昨日と同じなら進歩はねえな！)

グラントリノはまた空中で一時停止し、通り過ぎていく電気の腹に一発ぶちかまそうとしたが電気は全身から少し電気を放出して同じように空中で一瞬止まった。

そして鍛え上げられた体幹でそのまま空中で体を捻り、グラントリノの顎に一発入れて吹き飛ばした。自分は無理に捻ったせいで受け身を取れずに地面に激突した。

だがグラントリノはすぐに体制を立て直して出久に向かっていく。飛んでくるグラントリノ目掛けて出久は手刀を繰り出した。そんな分かりやすい攻撃を避けられない分けなく必要最小限、顔だけ横にずらして避けると手刀で横に向いてた掌から気が放たれた。

人が簡単に吹き飛ばされるくらいの量でグラントリノは間一髪、全身を更に浮かせて避けた。

だが、出久は放ったその気をブーストにして右足を軸に回転し、グラントリノの頭を思いつきりハイキックを叩き込んだ。

見事に蹴られたグラントリノはなんとかギリギリのところまで止まったがあまりにも

強烈だったのか鼻血を流しながら、座り込んだ。

「やべっ!」

「大丈夫ですか!」

「大丈夫なもんか、思いつきりやりやがって俺は年寄りだぞ!」

「す、すみません!」

鼻血を拭つてグラントリノはやりすぎな出久と電気に悪態をつくも笑っていた。

「だがお前ら、よくこんなに早く殻を破つたな。色々と危ないところだけだが、こつからは籠もつてやるよりも実践で体に染み込ませた方が良い。本当は明日か明後日のつもりだったが、出掛けに行くぞ・・・俺が回復したらな・・・」

「あつ、ならこれをどうぞ。体の調子が戻ります」

出久はそう言うのとグラントリノに亀仙豆を渡した。

渡されたグラントリノは訝しげに亀仙豆を見ながらも優しい目をしてくる出久と電気を信用してさつきと食べた。するとさつきまでのダメージが無くなった。まあ本物の仙豆じゃないので体力は戻らなかったがその効果に驚いた。

「こりや、たまげたわ!」

「少ししか持つてきてないですけど使えるかと思つて」

「よし、ならすぐに行くぞ。体力はそのうち戻る」

「よっしや、実践だ！」

出久と電気、グラントリノは荷物を纏めて事務所を出た。

〇〇〇

保須市にあるマニュアルのヒーロー事務所の会議室に色々な事務所のヒーロー達が集結していた。

エンデヴァー事務所からエンデヴァーと焦凍、そして相棒のバーニン。地元のマニュアル事務所からマニュアルと相棒のネイティブ。単独で行動するミルコ。そしてチームIDATENから天晴と航一、天哉。本来、明日以降の合流のはずだったがすぐに来たグラントリノ、出久、電気がその場にいた。

他にも様々な相棒がいるが会議室に入り切らなかつた。

「それでは今回の作戦のリーダーを務めるインゲニウムから作戦の概要を説明します。我々が逮捕するのはステイン。通称“ヒーロー殺し”。これまでに17名のヒーローを殺し、22名を再起不能にした男でまたステインと名乗る前はスタンダールという自警団として動いており、そこでも少なくとも8人の殺人に関与していた疑いがある男です。神出鬼没、1つの街で数度犯行をしたのち、別の街に動くタイプで個性は相手の動

きを止める厄介な物。全身にある刃物から恐らくトリガーはその人間の血液によるものと推測。また止められたら一定の時間を過ぎないと指1つ動けないほど強力です。ですので基本的にチームとして行動し、数の力を持って当たります。またGPSを内蔵した特殊なインカムをつけて常にその情報をうちのトレーラーに送り、すぐに現場に駆けつけられるように共有させます」

天晴が作戦の概要を説明するとあるヒーローから手が拳がった。それは基本的に単独行動が主体のミルコからだった。

「私は1人が性にあつてるから単独で動かせて貰うぜ」

「勿論、ただしインカムは付けてもらう」

「わかった。ならOKだ！」

単独で動けるのがわかったのかミルコは実に良い笑顔を天晴に向けて礼を言った。天晴もミルコだけでなくエンデヴァーにも協力を仰いだのはステイン対策というよりもフリーザ対策の意味合いが強かった。

「俺からも1ついいか？凶悪犯罪者を捕まえる場に呼んで貰ったのは感謝するが俺にミルコ、そして地元のマニュアル、チームID A T E Nは過剰すぎないか？」

「轟、ナチュラルに俺を省くな！」

グラントリノの批判は無視して、エンデヴァーは集まった面子を見てそういった。そ

もそも今回のその協同作戦は少し異質だった。本来なら地元のマニユアルを中心に近隣のヒーロー事務所と連携をするはずだが、今回は近隣のヒーローではなく寧ろ、すぐにも戦力として使える面子といった感じにエンデヴァーは奇妙に思えた。

天晴はエンデヴァーの疑問に対して手元にある資料の8ページを開くよう言った。

(なっ!?)

(嘘だろ!?)

(マジか・・・)

そこには監視カメラから捉えたフリーザの姿があった。出久、電気、焦凍はその事に内心冷や汗が出まくった。

「なんだコイツは?」

「今、資料を集めてる所だがフリーザと名乗る存在です。性別年齢個性のあらゆる情報が一切ないです。ステインと交戦したときに奴を勧誘していました。バックにどんな組織があるのか検討もつきませんが実際に会ってみて奴は危険です。今回の作戦でステインと同時に相手をする可能性があり、そのために呼びました」

「こんなにちっこい奴がか?」

冷や汗を流しながら言う天晴に流石のミルコも普通じゃないとは感じつつもフリーザの写真をパンパンと叩きながら言った。

「今まで凶悪犯罪者は何回も捕まえてきたがソイツはその中でもド級だ。下手に嘗めて被害を拡大するより過剰戦力でマスコミに非難される方がまだ良い」

天晴の言葉にその場にいた全員が息をのんだ。インゲニウムの人となりは多少なりとも知っているが臆病でもましてやおちやらけてるわけでもない。自分の活動方法に誇りを持つてる。そんな彼が手柄を全て横取りにされる可能性が高いこの作戦を決行した。エンデヴァー達は全員、改めて気合を入れ直した。

会議が終わり、それぞれが自分の事務所の人間と動こうとしてる中、出久、電気、天哉、焦凍は集まっていた。

「フリーザってやつも関わってるなんて」

「僕達だけじゃ戦力にもならない」

「ヒーロー殺しは奴らの仲間なのか？悟空さん達に連絡した方がいいんじゃないか？」

「悟空さん達、一応一般人の扱いだから下手にやると騒乱が起きるかも」

「今はとにかく情報がない。全員、気を引き締めて雄英の名に恥じぬように動こう！」

調子の戻ってきた天哉がそう言うのと他の3人も気を引き締め直す。そうやってると航一が4人に近づくと。

「2号。パトロールに……もしかして体育祭で1位と2位だった子達？」

「はい！自慢の学友です」

「ああ！ザ・クロウラー！！アジアで数十年ぶりに自警団からヒーローに成り上がった方でこれまでも数々の実績を積み上げ、特に最初の2年間の功績は歴代アメリカのヒーローの中でもトップクラスで最速で独立する相棒と言われていたヒーロー！！」

航一は出久と電気を見てそう言うのとヒーローオタクな出久が興奮しながら近づき、握手を求めた。そして今でも変わらないヒーローオタクな一面を持つ航一は出久にそう言われて嬉しいのか気軽に手を握った。

「うわあ、嬉しいな！こんなに熱狂的なファンがいて」

「僕も会えて嬉しいです！そのスーツってもしかしてオールマイトのヤングエイジですか？」

「そっ！よく分かったね。どうもオールマイトに似せないと勇気が出しづらくてね」

「分かります！オールマイトを真似ると凄くなんか心が落ち着くというか」

「わかる！！ねえ知ってるオールマイトのご利益って凄くてオールマイトデザインのパーカーを着れば凄く強くなるよ！」

「本当ですか!?!」

「うん、俺も浅草限定モデルと大阪限定モデルを着たときには凄く調子が良かったんだ！だから、今でも新作のオールマイトデザインは全て買ってるどころかアメリカの部屋は全てオールマイトグッズだらけだよ！」

「知ってます！キャプテン・セレブリティが以前に半ば騙すような形で世界中に中継したので」

「暫く、本気でキレたけど。今ではキャラとして受け入れて貰えてるから嬉しいよ！まあ、サー・ナイトアイと対決する事になった時は大変だったけど・・・」

「去年のやつですわね！オールマイトの相棒だったナイトアイが真のオールマイトオタクは私だと言ってグッズや功績の自慢合戦をすることになったテレビ局の質の悪い企画でしたけどお2人のオールマイト愛で神回になって僕、テレビで見てて大号泣しました！」

「やっぱりオタクってのは比べるものじゃないよね!？」

「勿論です！」

早口で話す2人はそのまま感極まったのか互いに抱きしめあった。

「君、名前は？」

「緑谷出久です！ヒーロー名はデクです！」

「ねえ、今から俺と一緒にパトロールしよう！君とはもう一緒に行動したい！」

「僕も一緒に行動したいです！」

盛り上がっているがその時、2人は脳天に思いっきり強い拳骨を受けて沈んだ。

「勝手に盛り上がるな!!」

殴つたのは電気と天晴だった。天晴は頭を抑えてる航一に近づいて胸ぐらを掴み、電気は出久の胸ぐらを掴んだ。

「何勝手な事を言ってるんだ！今は俺の相棒だろうが、しかも君が一緒じゃないと危険だつてあれほど言つただろうが！」

「いやあ、つい盛り上がつて」

「なんで盛り上がつてんだよ！俺達はグラントリノと行動するつて言われてただろうが！！」

「ごめん、感極まっちゃつて」

「はあ？盛り上がるのは良いが急にそんな事をやるんじゃねえよ！」

「ハハハ、すみません」

完全にシンクロしてる4人に周りは奇妙さを感じつつも笑つた。

○○○

それぞれのヒーローが保須を見回つてるのを見て市民の反応は様々だった。ヒーローが集結している事に興奮してる者が多数だが、その面子に何か大きな事件が起きるのではないかと言う不安が水面下で拡がっていた。

夕暮れになり、ステインの活動時間になりつつある状況で天哉は天晴や航一と共にパトロールしていた。

「ヒーロー殺しは昼よりも夜での行動が多い。改めて気を引き締めないとな」
「はい！」

天晴の言葉に天哉も航一もより集中し始める。

BOOOM!!

突然と爆発音が3人の耳に入った。

3人とも爆発音が鳴った方向を向くと火が広がったのかそこら辺の空が明るかった。

『今のはなんだ!?!』

『おい、どうなってる!?!』

『一体、何が起こった!?!』

『何だコイツラは!?!』

通信が混乱していく中で現場近くにいたエンデヴァーから映像が送られた。それは脳がむき出しになっていた敵連合の戦闘員である脳無が8体暴れていた。

雄英高校襲撃の際にフリーザは公には伏せられたが脳無や敵連合の事は報道されたので各ヒーローが脳無については存在自体は知っていた。更に問題なのが爆発音が大きかった為に自分達の近くでも野次馬が出来ていた。

「俺達も急行するぞ！」

「おう！」

「2号はこの人達を避難させろ！」

「わかりました！」

猛スピードで現場に急行していく天晴と航一を見つつも天哉は野次馬に対して避難誘導を始める。

○○○

大混乱になりつつある保須をビルの上から弔は笑いながら見ていた。

「良いね最高だよ。この感じがたまらなく好きだ」

「死柄木弔、ここからでよろしいのですか？」

「ああ、ここがいい。良いなあこのチートで全部台無しにしていくの」

弔は笑いながら混乱を見ていて黒霧は近くで同じように笑っていたフリーザ（第一形態）に近づいた。

「良いのですか？このような事をさせて」

「構いません。ドクターやキコノ曰く脳無の実験も兼ねてるので問題はないとの事です」

フリーザはそう言うのと弔達から離れて違うビルに移った。

「フッフ、良いですよ。全てを破壊する感覚に酔えば酔うほどより邪悪になる。そのために私やAFOさんは貴方を痛めつけていたのですから・・・」

フリーザはニヤニヤとしながら、自分の目的であった出久と電気がグラントリノと共に脳無に対峙しているのをビルの上から見ている。

「緑谷出久さん、貴方にはもつともつと強くなつて貰わなくては困るんですよ。そのために孫悟空をここに呼んだのですから」

○○○

出久と電気はグラントリノと共に爆発現場に向かっていると暴れてる脳無に遭遇した。しかもそれは以前、USJでオールマイトに吹き飛ばされてフリーザに回収されていた奴だ。

「コイツ、あの時の！」

「てことはこの爆発はフリーザって奴の仕業か！」

「おい、お前ら。アイツを知ってるのか!？」

「敵連合って奴らの仲間です！」

「そうか、ならばぶつ潰すに限るな！お前らはどうする？」

「勿論！」

「戦うに決まってるぜ！」

拳を構える2人にグラントリノはブチのめして止めようかと一瞬考えるが、折角の実戦を止めたくは無かった。何故なら、オールマイトから聞いた知恵の育成の為に2人の成長は必要不可欠であり、その為に自分がペナルティを喰らうのは別に良かった。

「よっしゃ、行くぞ小僧共！敵退治だ！」

「はい！」

○○○

天哉は上手く野次馬に避難するように伝えられた。それは普段から天晴の避難誘導のやり方を見て勉強し続けていた成果だった。

「よし……こら辺にはもう誰もいない！僕も現場に……」

『こちらチームIDATEN！ヒーロー殺しを発見。ネイティブが1人で交戦中です！場所は保須市2―5の路地裏です！誰か急行をお願いします！』

「2―5ってこの近くじゃないですか！」

天哉はそこまで考えて止まった。相手は凶悪敵であり自分はまだ学生の身でしかも天晴に説教されたばかり、体が硬直してしまふ。色々と最善を考えるが先程から聴こえてくる交信は全て人手不足と避難するために大声を出して誘導する声だらけ。ミルコやエンデヴァーに関しては脳無を2体ずつ相手にしている。他のヒーローも脳無と救助、防衛の為に動いていて今、ここで動けるのは現場から離れた場所で粗方の避難誘導をし終わった天哉だけだった。

天哉はそこまで考えると吹っ切れたのかヒーロー殺しの所まで走った。

(まず、ネイティブさんと共に当たれるように！大丈夫！僕だって緑谷君達と肩を並ばせないといけなんだ！)

天哉は全力で走って、目的地である路地裏まで来るとステインが頬から血を流してるネイティブの首を掴んで長剣で殺そうとしていたがステインは流石に脳無の騒動が気になってたのかそっちの方を向いていた。

「騒々しいアホが出たのか？後で始末してやる。その前に為すべき事を為す」

「くたばれクソ野郎」

「ヒーローを名乗るなら死に際の台詞は選べ」

天哉は長剣を振りかぶったステイン目掛けて蹴りを入れに行つた。しかし、ステインは長剣の腹で天哉の頭を殴り、メット弾き飛ばした。

「スーツを着た子供？何のようだ・・・正しい事の邪魔をするな」

ステインは天哉に長剣を向けながらそう吐き捨てた。

（正しい？人殺しが正しいわけがない！絶対にコイツの思い通りにさせるか！）

「・・・僕の名前はインゲニウム2号！ネイティブさんを絶対に助ける！」

「そうか・・・痛い目に合わないかわらんか・・・」

ステインはそう呟くと容赦なく長剣を天哉の胴体目掛けて突いてくる。天哉は反応に遅れてしまったが防刃対策用のスーツのお陰で傷一つ付かなかった。

「チッ！またそれか」

「気をつけろ！コイツの個性は血を舐めて発動・・・」

「黙ってろ偽物」

情報を教えるネイティブをステインは蹴り一発でのして長剣で斬りかかってくる。

天哉は両腕のアーマーでそれを受け止める。

（よし！先ずはこの長いのを・・・）

（甘い！）

ステインはすぐに長剣から手を離し、懐の短剣で斬りかかってきた。天哉は極めて冷静にそれを右腕のアーマーで防ぎ、ステインは空いてる手にも短剣を持つて天哉を左右から挟み込むように振るってきたがそれを天哉は左腕のアーマーで防いだ。

ステインは靴のスパイクで天哉の顎を蹴りに来たが天哉はそれを仰け反って避けた。

(危なかつた！悟空さん達に鍛えられてなかつたら避けられなかつた)

(この動き、接近戦をよく教え込まれてるな・・・だが！)

天哉のガラ空きの胴体に蹴りを入れて下がらせるステイン。

(まだまだ鍛え方が足りんな)

腹を抑える天哉にステインは短剣を次々と振って来る。天哉は後ろに下がりつつ、アーマーで防いでいくが段々とそれが防げなくなってきた。初の一对一での実戦と刃物という2つの精神的要因によって離れた所から強烈な蹴りを入れるといういつもの自分のスタイルを出来ないでいた。幾ら、悟空や亀仙人達に鍛えられていたとしてもそこら辺はまだまだ鍛えたりてなかつた。

そして遂に短剣が天哉の頬を掠った。天哉はそれを見て慌ててしまい、短剣を蹴り飛ばそうとしたがステインはそれを避けて天哉の腕を斬った。

「ぐあつ！」

「焦つたなインゲニウム2号・・・」

ステインは短剣に付いた血を舐めた。すると個性が発動し、天哉は地面に倒れて指一つも動けなくなつた。なんとかして動こうとするが本当に全く動けなかつた。

「己を省みず、他者を救う。お前はそれが出来ている。見所があるな・・・生かしておい

てやる。正しいことを為す」

ステインはそのまま、氣絶してるネイティブの所まで行つて長剣を刺そうとしていた。

「これ以上、人を傷つけるのは止めろ！」

天哉の叫びをステインは無視した。そしてネイティブの首を斬り捨てようと長剣を振りかぶった。

「どれだけ御託を綺麗に並べてもお前のやってることは犯罪だ!!」

「正しいことを為すには罪を犯さなければならぬ！」

ステインはまるで自分にも言い聞かせるように叫びながらネイティブの首目掛けて剣を振り下ろした。

しかし、その斬撃は横から体ごと蹴り飛ばされて止められた。

蹴り飛ばしたのは天晴だった。そして横には航一もいた。ステインはこの前、やり損なつた天晴と以前、自分の殺人を止めた航一が来たことに唸り声を上げながら立ち上がり、長剣を構えた。

「インゲニウム……クロウラー……」

「ステイン……この前の決着をつけるぞ」

「今日で必ずアンタを止める」

天晴と航一は倒れてるネイティブや天哉の前に立って構えた。
「この偽物どもかあ!!」

ステインはそんな2人に対して長剣を振るった。

ステインVSインゲンウム&ザ・クロウラー

天晴と航一がステインと戦闘を始めていた頃、出久と電気、グラントリノの3人脳無を相手に苦戦していた。オールマイトと同じくらいのパワーで作られた脳無で更にいえば衝撃吸収や超再生といった個性を幾つも入れられていて、尽く出久達の攻撃が効かなかった。

「マジでコイツ、一体何なんだ？」

「確か、脳無って・・・」

「そんな事は後にしろ！こりゃ、複数の個性を持つてるぞ!!」

グラントリノの怒号に出久と電気は構え直す。脳無は出久と電気を同時に殴りに来たが2人は避けて両腕を取って脳無を地面に押しさえつけようと力の限りを込めるがギギと脳無は2人の力を諸共もせず、立ち上がって回転し、吹き飛ばした。

グラントリノは上から脳無の背中に向かって高速で突進していくが全く効いてなかった。

「ちっ、めんどくせえな。おい小僧共！もっと火力があるのはねえか!?あるならさっさとやってくれ！長期戦は分が悪い！」

出久と電気は立ち上がって並び、両手に気を溜める。グラントリノはそれを見ながら脳無を2人の前に誘導すると上に飛んだ。

「豪龍・かめはめ波!!」

「雷豪・かめはめ波!!」

2人の極太のかめはめ波が脳無に向かって突き進んでいく。脳無は両手を前にしてかめはめ波を防ごうとするがあまりの威力に吹き飛ばされた。吹き飛ばされた脳無はどういうわけか全く動かなくなった。グラントリノは近寄って脈を測るとちゃんと動いていたので理由はわからないが死ななくて動けなくなったなら別に理由はどうでも良かった。それよりも出久達と脳無の間にある地面を抉られて出来た直線を見てグラントリノだけでなく出久達も自分の手を見ていた。2人はあくまでも人殺しをしないために抑えていた筈なのに予想外と言えるレベルで威力が出たことに驚いていた。

「な、なんでこんなに威力が・・・」

「体育祭の時とは違ってだいぶ抑えたはずなのに・・・」

2人は想像以上に威力が発揮された自分達の攻撃に少しかけ怯えながらも戦闘不能になった敵をどうするかをグラントリノから教わりに行った。

エンデヴァーとミルコはそれぞれ2体ずつ脳無と戦闘をしていたが初めて戦うのと複数の個性によつて苦戦していた。エンデヴァーは水の放出&筋肉増強を持つてるの奴とテイラノサウルスに変身&触手の放出を持つてる奴。ミルコはゴムの体に手や足先が金属になつてるの奴と翼で飛びながら火を吐いてくる奴だった。

「手強いが複数の個性持ちつて面白いな！」

「ミルコ、おかしいことに気づいてるか？」

「関連性がない個性を複数持つてることか？」

「わかつてるなら良い！さっさと終わらすぞ！」

エンデヴァーは両手に炎を溜め、ミルコは脳無に向かって駆け出した。

「赫灼!!」

ルナリング

「踵月輪!!」

エンデヴァーら超高熱閃で燃やし、ミルコは連続踵蹴りでノックアウトさせた。4体とも吹き飛ばされてピクリとも動かない。

「よし、すぐに拘束して・・・!?!」

「どうやらまだみたいだな！」

4体の内、2体。テイラノとゴム体の脳無が起き上がった。2体は叫びだした。あまりの大声と突然の行動にエンデヴァーとミルコは少し威圧された。

すると脳無の姿が変わった。

さきほどまでの体色から全身白色になり、剥き出しの脳が紫になった。

「何だありや？」

ミルコがそういった瞬間、ゴムの脳無がミルコに向かって飛んできてミルコの顔面を殴る。しかしミルコは瞬時にそれを防いだが吹き飛ばされた。

あまりの速さにエンデヴァーがそつちの方に気が向くとテイラノの脳無がエンデヴァーに向かって突進してくる。上に飛んで顔に赫灼をぶつけるが先ほどとは違って全く効果が無かった。

○○○

AFOと彼のドクターである氏子達磨、そしてキコノは白く変化した脳無をモニターで見て喜んでいた。

「やった!!成功だ!!」

「遂に成功したな!フリーザさんの細胞を移植して身体を強く変化する脳無・・・フリーザさんはあの白い完全体が本来の姿である・・・そしてこの脳無も元となった人間の生まれ持った個性しか使えないが肉体が遥かに強靱になり、それは“個性特異点”すらも耐える!そうハイエンドではなく原点にして頂点・・・名付けて“ゼロエンド”・・・新

しい脳無の誕生だ!!」

「ドクター、後はこれに複数の個性を持たせることが出来れば・・・」

「ああ、どんなヒーローにも負けない最強の存在になる!」

「あの戦闘力から考えて他の個性は弱い個性にするべきかと下手に複数の強個性を入れ
たら、いくつもの特異点に到達する可能性が高いので」

「キコノさん、そうだね。次からはそうしよう!」

実に邪悪な笑みを浮かべる3人。

フリーザの古参の部下だけあってキコノも負けず劣らず邪悪だった。

○○○

ゼロエンドとなった脳無をビルの上から見る第一形態のフリーザは笑いながら成果
を良く見ていた。

「先程まで2体ばかりでもやられていた状況から1体で相手を苦戦させる・・・成果は悪
くないですが私の細胞を肉体に1%入れてる割には弱いですね。やはり、細胞レベルで
1から新しい生命を組むか・・・いや、それより個性をより強くさせる方が1番安上が
りですね。悪くない発想だったのですが残念です」

フリーザはモニターで見て笑っていた3人とは違い、確実に運用と実戦をさせる前提で見ていたが不満があったようだ。

「……キコノの言っていたプランBに移す方が賢明ですね……となると、必要なのは『緑谷出久』」

フリーザは脳無を拘束して避難誘導を手伝っている出久を見て目を細めた。

「ああ、そういえばステインさんも死んで戴かないといけないのを忘れてました……殺るならもう少し後で楽に殺りましょうか……」

○○○

天哉は早く体を動かそうとしていたがステインの個性によって全く動けず、天晴と航一の2人相手と互角に戦ってるステインを見ていた。

天晴の個性では路地裏の狭い所では小回りが利かず、航一はスランプのせいで必殺技の空気砲KGDが出せないなので2人は分が悪いとは思いつつもステイン相手に接近戦をしていた。

流石はプロヒーローといった所で下手な敵相手なら勝てる程には強い。だが刃物を主体に現役のヒーローを殺したり、再起不能にできたステイン相手にはきつかった。

更にいうとステインは少しでも血を流させればOKで長剣と短剣の波状攻撃で距離感を混乱させながら斬ってくるのに対して遠距離武器のない上に傷一つも負えない天晴や航一は苦戦していた。

天晴がステインを転ばせようと下段蹴りをするがステインは飛んで避けて天晴の頭を蹴る。蹴り飛ばされて倒れる天晴にステインは長剣で刺そうとするが今できる最大速度で突っ込んできた航一の拳を腹に受けて吹き飛ばされる。

航一は間髪入れずにもう一度同じことをやって突っ込んで行くがステインは避けた。だが航一は個性の「斥力」を使つてビルの壁に一度張り付いて放出し、またステインに突っ込む。

ステインは今度は顔だけ避けて航一の顔面に向けて容赦なく短剣を突き刺そうとするが航一は寸前の所で避けて、地面に激突した。

地面に激突して倒れた航一はなんとか血の一滴も流さなかったが頬の薄皮一枚が切れていて危なかった。ステインは航一の頭目掛けて短剣を刺そうと飛び込んでいくが天晴によつて防がれて顔面を蹴られて吹き飛ばされた。

顔を抑えながらステインは2人を睨んでいた。

「偽物どもが!!」

そう吐き捨てるステイン。航一はそんなステインの言葉に疑問を持ったのか訝しげ

に見た。

「俺達が偽物ってどういう意味だ？」

「ふん、本物気取り共が・・・己を省みず他を救い、人々の希望となる・・・それがヒーローだ、それは決してクロウラー・・・お前のように悪を救う奴じゃない」

ステインに言われて航一は以前に殺されかけた時に今では友人である釘崎爪牙が殺されそうになっていたことを思い出した。

「当たり前だろ・・・眼の前で人が死にかけになって善人も悪人もあるかよ!?!それを見棄てて何がヒーローなんだよ!?!」

「中途半端な優しさは誰も救えない・・・優しさなど、所詮金にも仕事にも誇りにもならない物だ。必要なのは善を為す心だ。それは敵に対して圧倒的に畏怖を抱かせるオールマイトのような圧倒的な物が本物のヒーローには必要だ! 貴様が永遠に持てない物だ偽物!」

航一を指さしながら断言するステイン。

ステインの理屈は間違っている。善行とは人の優しさから来る物であり、そもそもヒーローとはそういった「余計なお世話」をするほどに優しい人間がなるものであり、航一はその点に関してはピカ一だった。

「なら、なんでインゲニウムを攻撃した!?!インゲニウムは何人もの凶悪敵を逮捕して、被

災地でもリーダーシップを張ってる程だぞ!」

「そんなの決まってる・・・お前と組んだからだ・・・」

「はっ!?!」

「浅草での高速バス・・・インゲニウムはお前と組んだ。それが何よりも許せない。完璧で模範的なヒーローのインゲニウムが汚れた・・・この穢れは落とせない・・・血の染みのように消えず、少しでもあれば全て穢れる・・・だから殺す。偽物が本物に見える内に・・・」

「そんな・・・そんな事で!!」

「そんなだど!?!ヒーローとは己の力で理不尽を壊していくもの・・・それが出来ないならいずれ死ぬだけだ。そしてそこからヒーロー不要の世論が活発になる・・・やがて来るのは混沌だ・・・そうはさせない!!俺が守る・・・オールマイトのような“本物”を!!偽物共と同一視させないためにお前らを殺す・・・それが俺だ!!」

あまりにも身勝手極まりない理屈。誰もこんな事を聴いたらキレる。怒りが抑えられなくなる。しかし、航一はこれを聴いて内心渦巻いたのは後悔だった。

(俺がインゲニウムと組んだから・・・いや、あの時は先輩を助けて・・・)

航一はバスの時を思い出しながら自分がやった事が正しいと思おうとしていたが出来ない。幾らヒーローとしてアメリカで活躍しても航一の元来の性質である自信過少

な部分、そしてニューヨークで子供との約束すら守れずいた無力な自分の2つの要素が苦しめる。

（そうだ・・・俺はいつもそうだ・・・考え無しで勝手やって人を困らせるだけの・・・）
「ふざけるな!!」

そんな航一の思考を止めたのは天晴の怒号だった。

航一やステインは声を荒げた天晴の方を向く。

「あの時の俺は無力だった!彼の力を貸して貰わないと助けられなかった。あの時、俺と一緒に居たのは大切な人を守る為に『空を飛んだ』ヒーローだ!!」

「口にするな・・・貴様らがその言葉ヒーローを口にするな!!」

「さつきから聴いていればなんだ!?ただ自分の思想を相手に押し付けてるだけじゃないか!お前のやってることは正しい事でもましてやヒーロー社会の為でもない・・・単なる自分の理想にならないから暴れて構ってほしい『承認欲求』だ・・・」

「・・・口からのうのうと・・・この偽物どもがあ!!」

「お前の言う『本物のヒーロー』なんてこっちから願ひ下げだ」

天晴はそう云うとステインに突っ込んで蹴りに行く。それを避けて左腕を短剣で刺そうとするが天晴は体を横にして避けつつ、ステインの顔面に拳をめり込ませた。ステインは体を回転させて威力を半減させてそのまま長剣を天晴の目に向かって指しに行

く。

体を仰け反らせて避ける天晴。

ステインはがら空きの胴体を短剣で斬りに行くも硬いアーマーに防がれた。

そのまま接近戦で互角の戦いを繰り広げる2人。航一はそれを見てるだけだった。動けなかった。幾ら天晴が擁護してくれても頭の中にあるのは無力な自分。

(俺は・・・やっぱり飛ぶんじゃ・・・)

「クロウラー!!昔、IDATENについて話たな?適材適所、チームの総合力で勝負つて!!今は俺とチームだ!!1人じゃ無理でも2人なら出来る!だから、**「飛べ!!!」**」

叫ぶ天晴。

ステインは太腿などアーマーのない部分を狙い、遂に長剣で太腿を斬った。

(しまっ!!)

(偽物共が、これでおしまいだ・・・)

長剣に付いた血を舐めようとするステイン。しかし、それをさせまいと突進してきた航一が腕を抑えた。

「流石、クロウラー!!」

「そこまで言われて頑張らないのは違うよね!」

「この社会の害悪があ!!」

ステインは短剣を片手に持つて航一を刺そうとするがそれを天晴に抑えられた。しかし、それでもなお垂れてくる血液を舐めようとステインは長剣へ舌を伸ばす。

「レシブロバースト!!」

だがステインの個性から解放された天哉が血の付いた長剣を蹴りでへし折り、吹き飛ばした。

(なっ!?)

「これで終わりだ!!」

その隙きを付いて天晴と航一の拳がステインの顔面にめり込み、ステインはそのまま気絶した。

○○○

エンデヴァーはティラノ姿のゼロエンドに向かって赫灼を出していたが全く効いてなかった。それどころかエンデヴァーを食おうと噛み付いてくる。なんとかジエツト噴射で飛んで避けてるが決定打に欠けていた。

「赫灼熱拳ヘルスパイダー!!」

五指から炎を糸のように細く放射して細切れにしようとしたがフリーザの細胞の影響かゼロエンドには全く効果が無く、軽く火傷をしていたくらいだった。

「厄介だな」

体からプスプスと煙を出しながらも突っ込んでくるゼロエンドにエンデヴァーは避けた。このままさらなる高火力で攻めようとするがそろそろ火が燻り始め、このままでは自分の炎で焼け死ぬ可能性も出てきた。

（なんとかしてそろそろ終わらせないと危険だ!）

エンデヴァーは決めようと火力を更に上げる。ゼロエンドはまた容赦なく突っ込んで来る。しかし、ゼロエンドは突然氷に包まれて止まった。

「焦凍?!」

それは職業体験で避難誘導を手伝っていた焦凍の氷だった。右脚から最大出力の氷がドンドンとゼロエンドを凍らせていくがゼロエンドもすぐに氷を割りながら突き進んでいく。

「プロミネンスバーン!!」

体を大の字にして全身から放つ超熱線をゼロエンドに浴びせるエンデヴァー。体育祭での急激な温度変化にエンデヴァーの高火力が加えられた事で大爆発が起きてゼロ

エンドは吹き飛ばされた。

「何故来た!? 避難誘導をしろと言った筈だ!」

「苦戦してたからに決まってるだろうが・・・」

本来（原作）だと色々あっても手助けしないもしくはする必要が無いほどエンデヴァーは強いし、焦凍もやる気はあまり無かったのだが、桃白白での死闘の経験とゼロエンド襲来によって良くも悪くも焦凍は助ける事と全力を出すことに躊躇しなくなっていた。

（くっ、まさかコイツを助ける羽目になるとは・・・悔しい!!）

そして焦凍は嫌いなエンデヴァーを助けた事に自己嫌悪を感じていた。

「まあいい・・・助かった・・・」

エンデヴァーは何気なしに焦凍の頭を撫でた。撫でられた焦凍は全身に鳥肌を立てながらすぐに払った。しかも頭をまるで削り落とすかの勢いで欠いていた。

息子からの割とキツイ仕打ちにエンデヴァーはショックを受けつつもゼロエンドへの警戒を止めなかった。

吹き飛ばされたゼロエンドは立ち上がり叫んだ。

「まだやる気か」

焦凍が立ち上がってきたゼロエンドに苛立ちつつも構えてエンデヴァーはいつでも

赫灼が撃てる準備を完了していた。

ゼロエンドはティラノの姿で全身から触手を出した。複数の個性を出してきた事にエンデヴァーと焦凍は警戒を強めるが、ゼロエンドはその瞬間、血を吐いた。

「ガアアアアアアア!!」

そして悲鳴を上げながら、ゼロエンドは倒れた。フリーザの細胞によって無理矢理元の宿主の個性を活発化させてる関係上、触手の個性に対して拒絶反応が出て倒れたのだった。

啞然となるエンデヴァーと焦凍は動かなくなった息が弱くなったゼロエンドを拘束し、エンデヴァーは指示に従わなかった焦凍に説教をしていた。焦凍はそれを完全に無視していた。

そんな様子を離れたビルの上から遠目で見てる「火傷の男」がいた。男はそれを見た瞬間に青い炎を揺らめかせながら、仲良さそうにしてる2人に憎悪の視線を向けていた。

ミルコはもう一体のゴムのゼロエンドと戦っていた。ゴムの体ゆえにミルコの攻撃が効かなかった。

「面白え、けどそんなんでも私に勝てると思うなよ！」

ゴムで腕を伸ばし、その反動で拳をブツケてくるゼロエンドの攻撃をミルコは避けていた。普段から強い敵相手をしてるミルコにとってこれくらいは朝飯前だった。ミルコはそのまま避け続けて懐に入り、ゼロエンドの顎を蹴り上げた。ゴムの体なのでゼロエンドは首を10メートルくらい伸ばして、反動で頭をミルコに叩きつけるがそんな分りやすい攻撃を受ける気もなく楽々と避けた。

「どうした？ゴムの体を持ってても攻撃が弱けりや意味ねえぞ」

ミルコはゼロエンドを挑発した。フリーザの細胞の影響なのかそれとも宿主の影響なのかはわからないがゼロエンドは手先を金属にした。

するとこのゼロエンドも血を吐き出して倒れた。

「はあっ!? フザケンナ!!」

ミルコは急に倒れた、というか自滅したゼロエンドに対して非常に消化不良を味わい、ブツクサ言いながらも拘束していた。

○○○

「意外とゴミ捨て場って縄とかあるんだね！」

近くに落ちてあつた縄で武装を解除させたステインをぐるぐる巻きにして引きずる航一。

「本当にすみませんでした。何もお役に立てず」

1人やられて気絶していたネイティブが天晴達に頭を下げるが気にしてなかった。会議で一对一で戦うのは危険というのは全員知っていた上に脳無の騒ぎでマニュアルと離れて行動した時に狙われたのだから何も言えない。寧ろ良く死なずに戦っていた事を称賛するくらいだった。

「いや、俺も1回目で危うく再起不能にされそうだったので一人でここまでつて凄いですよ」

「ネイティブさん、助けに行くのが遅れてすみませんでした」

天晴の言葉の後で天哉が遅れて来た事を頭を下げた。

「いやいやいや、無免許の学生がそこまでやらなくていいよ！情けない所を見せて申し訳ない。2号の行動には怒るのがプロとして正しいかもしれないし、褒められないから1人の救助された者として言うよ。助けてくれてありがとうございます！」

ネイティブはそう云うと天哉に頭を下げた。下げられた天哉は先に申し訳無さを感じ

じていた。折角、助けに来たのに自分は早くにステインに負けて倒れていて本当の意味で助けてくれたのは兄である天晴や航一なのに下げてくれたネイティブに申し訳無さを感じて、天哉は涙を流した。

「あ、ありがとうございます！けど、僕は何もしていません。兄であるインゲニウムやクローラーさんが助けてくれたので・・・僕には勿体ない言葉です・・・」

「天哉、悔しいか？」

「・・・はい！無力だった自分が悔しいです」

「なら、それをバネにするんだ。ヒーローってやつはそれをバネにして頑張らないといけないからな」

「・・・はい！」

天晴の優しい言葉に天哉は涙を拭いて大声で返事した。

天晴はそんな天哉を見て、頭を撫でた。撫でられた天哉は突然の行動に固まった。

「ヒーローとしてじゃなくて兄としてだけとお前が弟で俺は誇りに思う！今日のお前は最高にヒーローだった!!」

天晴は照れくさいのかメットは外さずに天哉の

頭をガシガシと撫でた。天哉は昨日の申し訳無さを省みて笑顔を天晴には向けなかった。あまりにも頬が緩みすぎて恥ずかしいのもあった。

「いやあ、良かった良かった！まさに雨降って地固まるってやつだね！」
「それって言わないほうが良いやつじゃ？」

良くなった天哉と天晴を見て航一が素で余韻を台無しにするような台詞を言い、ネイティブがそれにツッコンでると出久、電気、グラントリノの3人がやってきた。

「遅くれて悪い、援軍に来たぞ！」

グラントリノがそう言うがぐるぐる巻になったステインを見て、やって来た3人はそれを見て顔を見合わせた。

「無事にステインを捕獲しました」

天晴が笑顔でそれを言い、その場にいた全員が脳無もあらかた捕まえたのもあって安堵し始めていた。

「おやおや、まだ安心するには早いですよ」

その声を聴くまでは。

艶のかかった気味が悪い声にその場の全員が声のした方を向くと自分のサイコキネシスで今回の騒動で拘束された脳無を全て周りに浮かばせてるフリーザ（第一形態）がいた。

皆、白い完全形態は知っていたが第一形態は見るのが初めてで困惑したが声を知っている出久、電気、天哉、天晴はフリーザだと直感した。

「お前・・・フリーザか？」

「おや、以前蹴飛ばした小物が良く分かりましたね」

「声紋は前の時に取ってるんでな」

様々な機能を搭載させてる自分のメットをトントンと指で叩く天晴。フリーザの登場に天晴は臨戦態勢になった。それを見て、全員がフリーザに対して構えた。

「小物がよくもまあ、虚勢を張りますね」

フリーザはただただ笑みを浮かべながらも殺気を放った。気楽そうに軽く放っただ

けだったが、それは出久達には凄く恐ろしく感じるほどだった。

警戒を最大に強めるヒーロー達だったがフリーザにとってそれは虚勢をはる子犬のようにしか見えなかった。

虚勢をはる子犬達からフリーザはサイコキネシスでステインを自分の足元へ引つける。

「なっ!?!この!!」

縄を持つている航一が抵抗するが虚しく、ステインはフリーザの足元まで飛んでいった。

「ステインをどうするつもりだ?」

「殺すんですよ・・・それが何か?」

あっけらかんに答えるフリーザ。インゲンウムは捕まえたステインに法の裁きを受けさせようと走る姿勢になった瞬間、足元の地面にデスビームを受けた。

「おやおや、ヒーローとやら悪人を助けますか?」

「ああ、目の前で人が死にそうなのをほっとけないお人好しのバカだね」

「居るんですよねえ・・・反吐が出るんですよね」

フリーザは指を天晴に向けた。指先に紫色の光が集まる。それも巨大だった。向けられた方が一瞬で絶望するほどだった。

フリーザがそれを放とうとした瞬間、ステインが縄を隠し持ってたナイフで斬って、フリーザの目を刺しに来る。フリーザの巨大な気弾が消えて成功したかに見えたが、ナイフはフリーザの目に当たった瞬間にへし折れた。気で守ったのだ。

「フフフ、随分と無駄な事をなぜやるのです?」

「いたずらに蔓延る悪も殺す!全ては正しき世界の為に!!」

「そういう青臭いの嫌いなんですよね」

フリーザはステインを蹴飛ばした。肋骨が折れて呼吸困難になり、のたうち回るステイン。フリーザは容赦なく脳天目掛けてデスビームを放つ。猛スピードで来る紫の光にステインは死を覚悟した。

しかし、航一が「飛んで」ステインを救った。ニューヨークの1件以来、全くできなくなつた「飛ぶ」。それは今、人を救う為に再び蘇つた。

「で、出来た!!」

再び「飛べた」ことに驚きつつもすぐにフリーザを警戒する航一。助けられたステインは航一に叫んだ。

「なぜだ、なぜ助けた!?!なぜ、ヒーローが敵を助ける!?!それがヒーローのやることか!」
「だって困ってる人みたら助けるのは当たり前だろ? ヒーロー大好きなのに分かんなくなつちやつた?」

あつげらんかに答える航一はフリーザに対してKGDを撃つ体制になる。ステインはそんな航一の背中を見ていた。フリーザは実に不機嫌そうにもう一度気弾を作つて放つた。

巨大な気弾に航一は最大火力のKGDをぶつけるが全く効果がなく、ドンドンと航一やステインの方に向かっていく。天晴達が止めようとフリーザに駆けていくがフリーザは尻尾に気を溜めて軽く薙ぎ払つて彼らを吹き飛ばした。

「諦めたらどうです?」

「ヒーローが諦めたら、誰も守れなくなるでしょうが!!」

「そういうのを往生際が悪いと言うのですよ」

気弾が2人を呑みこもうとした瞬間、航一の前に大きな男が現れた。金髪でカラフルなスーツを身に纏つたヒーローであり、平和の象徴オールマイトだった。

「ヒーローつてのは、往生際悪く、余計なお節介、をするのが本質でね……TEX

AS SMASH!!」

オールマイトの全力の拳が気弾を吹き飛ばした。

吹き飛ばされたフリーザは、笑いながらオールマイトを見ていた。

「お久しぶりですね、オールマイトさん。力は上がつてるようで」

「お陰様でな……お前を捕まえる」

オールマイトがそう言いながら構えた。フリーザは脳無を空中に飛ばして黒霧に回収させると首を軽く回した。

「殺すのはAFOさんの仕事ですので、貴方は殺さずに楽しませて貰いますよ。散々、楽しんでからステインさんや他のヒーローとかを殺させていただきます」

「誰も殺させはしない」

「それは無理だと思えますよっ」

「無理じゃない。そういう不可能かも知れないことをヒーローはやるんだ。そして守るべき者の為に戦う自分を震え立たせる為にこういうのさ、私が来た“!!”」

オールマイトは拳を思いつきり引いて、笑っているフリーザに向かっていった。